

各時代の大争闘

下 卷

エレン・G・ホワイト著

清 野 喜 夫

村 上 良 夫 訳

福 音 社

THE GREAT CONTROVERSY
by
ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan

目次

第一章 最も重要な預言・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
-------------------------------	---

ウィリアム・ミラーの歩み 暗黒から光明へ ダニエル書と黙示録の研究 再臨信仰
へ 年代に関する預言の解釈 「二千三百の朝夕」の預言 預言的期間の起算点 預
言の成就 驚くべき結論 伝道への召し 再臨のメッセージに対する反響 落星――
一八三三年一月二三日 オスマン帝国の没落 一般教会の反対 ミラーの奮闘 使
命宣布と嘲笑非難 真理は人を分ける 預言書研究の重要性

第二章 暗黒を照らす真理の光・・・・・・・・・・・・・・・・	35
--------------------------------	----

神の導き 弟子たちの経験 恵みの王国と栄光の王国 必要な試練 絶望から喜びへ
再臨信徒と聖所問題 試練を乗り越えて

第三章 十九世紀の世界的再臨運動・・・・・・・・・・	49
----------------------------	----

世界的な大運動 伝道者ウォルフの少年時代 再臨の切迫とウォルフ ウォルフの世
界的宣教 世界各地の再臨運動 フランス、スイスの再臨運動 スカンジナビアにお
ける児童の説教 米国の大再臨運動 再臨運動に対する反対 再臨信仰と一般教会
再臨信徒の試練期

第二章	真理の拒否とその結果	75
-----	------------	----

再臨信徒の働き 一般キリスト教会の墮落 使命を受け入れた人々 使命を拒んだ人々
 バビロンは倒れた 新教諸派の墮落 墮落の原因 世俗化と快樂追求 バビロンより出でよ 最後の警告

第三章	預言の成就と大いなる試練	95
-----	--------------	----

一八四四年当時の再臨信徒 「十人のおとめ」のたとえ サタンの活動 誤謬の靈と真理の靈 嚴肅な運動 夜中の叫び 主に立ち返れ 再臨信徒の信仰 大失望 使命宣布の意味 ゆるがめ信仰に立つて 神の守りと信徒の希望

第三章	聖所とは何か	119
-----	--------	-----

一八四四年と聖所問題 聖所とは何か 新しい契約の聖所 天にある真の聖所 仲保者キリスト 聖所の清めとは何か 大いなる贖罪の日 型と実体 贖いの最後の働き

第四章	天の至聖所における大事件	138
-----	--------------	-----

調査審判の開始 主を迎える準備 調査審判と婚宴のたとえ 婚宴の部屋に入る者 天におけるキリストの奉仕 重大嚴肅な真理

第五章	預言に現われたアメリカ合衆国	151
-----	----------------	-----

聖所と神の律法 神の律法とその第四条 安息日の意味 獣とは何か アメリカ合衆国の出現 アメリカの変貌 政權と教權との提携 アメリカと獣の像 獣の刻印とは何か 安息日の変更 日曜休業令の本質 二種類の人々

第六章	安息日の意義とその回復	174
-----	-------------	-----

終末における改革事業 真の安息日の回復 日曜日遵守論 光を拒むことの危険 重
大な教訓 われわれの責任は何か

第二十七章 リバイバルと清め・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186

罪の自覚と悔い改め 現代のリバイバルは本物か 無力さの原因 誤った律法観 律
法と信仰との関係 清めとは何か 清めの実例 信仰と行ない 全人的な清め 清め
と日常生活 キリスト者の特権 キリストにある勝利の生活

第二十八章 天における調査審判・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 210

天の大法廷 天の書物 助け主キリスト キリストの血による勝利 調査審判と罪の
除去 さばきの厳粛さ 救いの計画に不可欠なもの 今は大いなる贖罪の日

第二十九章 罪惡の起源・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 227

罪の存在に対する疑問 宇宙の調和 罪の侵入 ルシファアの悪だくみ 欺瞞の大計
画 反逆の結果 天からの追放と地上での反逆 キリストに対するサタンの挑戦 贖
いの計画の意味 罪の根絶

第三十章 悪魔と人類の戦い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 243

サタンと人間との間の敵意 悪の勢力の猛威 情眼をむさぼるキリスト者 重大な危
険 サタンとの戦い

第三十一章 天使とは何か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251

天使の實在 神の民を保護するもの サタンの軍勢 悪霊につかれた者 サタンの巧
妙な策略

第三章	悪魔のわな	260
-----	-------	-----

サタンの妨害 兄弟を訴える者 偽教師たち 聖書を学ぶ精神 科学と啓示 真理の偽物 キリストの神性 種々の欺瞞 懷疑主義をもたらすもの 十分な証拠 疑いの□実 疑惑からの解放 主の守りの実例 勝利の秘けつ

第三章	人は死んだらどうなるか	277
-----	-------------	-----

最初の大欺瞞 失われた永遠の生命 サタンの魔手 恐るべき永遠責め苦説 普遍救済説の欺瞞 誤った聖書解釈 人は自ら運命を定める 神の正義とあわれみ 永遠の生命か、永遠の滅びか 死後の状態 復活信仰の重要性 審判はいつ行なわれるか 死は眠りである

第四章	心霊術の正体	304
-----	--------	-----

死者の霊とは何か 心霊術の正体 欺瞞の張本人 人間を破滅させるもの 悪霊の本性 心霊術の変貌 悪霊との戦い 全世界に臨む欺瞞 現代人の盲目

第五章	良心の自由の危機	318
-----	----------	-----

カトリックは変わったか 良心の自由とローマ・カトリック 法王制の本質 カトリックの欺瞞的魅力 「神の代理者」 迫害の歴史 キリストなしのキリスト教 プロテスタントの変質 アメリカにおける宗教界の傾向 日曜休業令とその影響 偽造文書による権威づけ 暗黒時代の歴史 「死ぬほどの傷」がある ローマ教会の将来 さし迫った危険

第六章	差し迫った戦い	343
-----	---------	-----

サタンの目的は何か 統治に不可欠なもの 無法をもたらすもの 墮落の原因 二大

誤謬と三重の結合 破滅への道 忠実な者が非難される 教会と国家の一致

第三十七章 ただ一つの防壁——聖書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 358

聖書に対するサタンの攻撃 すべての教理の基準 自分で調べよ 正しい道標のもと
に 聖書の学びかた み言葉をたくわえよ 懐疑論のわな 世界の運命

第三十八章 世界への最後の警告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 371

最後のメッセージ 安息日が論争点 現代のエリヤたち ふるいの時 神の民の経験
大争闘の激化 後の雨と大いなる叫び

第三十九章 大いなる悩みの時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 384

恩恵期間の終わり 憎悪と迫害 ヤコブの悩みの時 恐るべき苦悩 金は火で練られ
る われわれに必要なもの 準備するのは今 最後の大欺瞞 危機迫る 恐るべき災
い 神の保護の約束 悩みの時の信仰 天使による守り 神の民の勝利

第四十章 神の民の救出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 412

約束のにじ 大地震と特別な復活 最後の日の人々の運命 十誠が全地に示される
イエスの来臨 「御怒りの大いなる日」 悪人たちの回想と後悔 聖徒たちの復活
神の都への行進 キリストの祈りの成就 回復されたアダムの主権 モーセと小羊の
歌 賛美の大合唱 永遠のテーマ

第四十一章 千年期と地上の荒廃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 435

神の怒りの降下 真相が明らかになる日 争闘と流血 地上の荒廃とサタンの幽閉
千年期 悪人の審判

第二章 大争闘の終結

新エルサレムの降下と悪人たちの復活
 最後の戦いの準備
 キリストの戴冠式
 恐るべきパノラマ
 救われた者と滅びる者
 サタンの正体の暴露
 大争闘の最終的結論
 刑罰と滅びの時
 ただ一つのしるし
 永遠の家郷
 新しい天と新しい地
 神は愛である

各時代の斗争闘

下



ウィリアム・ミラーは、自分にはキリストの再臨を宣へ伝える義務があるという確信を、払いのけることができなかった。しかし彼が、成就しつつある預言に対する自分の信仰の理由を公に述べたのは、1831年になってからであった。

第一八章

最も重要な預言

―ウィリアム・ミラーと再臨運動の開始

ウィリアム・ミラーの歩み

聖書の権威に疑惑を抱きながらも、なお真理を知りたいと心から望んでいた、高潔で誠実な一農夫が、キリスト再臨の宣布において指導的な役割を果たすために、神によつて特に選ばれた。他の多くの宗教改革者たちと同様に、ウィリアム・ミラーは、年少のころから貧困と戦い、勤勉と自制という大きな教訓を学んでいた。彼の家族は、独立心、自由を愛する精神、忍耐力、そして熱烈な愛国心に燃えた人々であつて、彼もまた、こうした特質の人であつた。彼の父は、独立戦争当時の大尉で、あの波乱に富んだ時代の奮闘と苦難による犠牲が、ミラーの少年時代を窮乏に陥れた。

ミラーはじょうぶな体の持ち主で、幼少のころから非凡な知力を示した。そしてそれは、彼が成長するにつれ

て、ますます顕著になった。彼の知性は、活発でよく発達し、知識を渴望していた。彼は、大学教育を受けなかったけれども、研究に対する愛着や、注意深い思索と精密な批判の習慣は、彼を健全な判断と理解力に富んだ人にした。彼は、申しぶんのない道德的品性の持ち主で、評判もوراやましいほど良く、誠実、儉約、慈悲深い心などが、人々から高く評価されていた。彼は、勤勉努力の結果、早くから相当の財産を作ったが、しかし相変わらず研究の習慣を持ちつづけた。彼は、いろいろの政治的や軍事的職務について功績をあげ、富と名誉への道が、彼の前に広く開けているように思われた。

彼の母は、真に敬虔な婦人で、彼は幼少の時に、宗教的な感化を受けたのであった。しかし早くから彼は、理神論者の仲間に引き入れられた。この人々は、概して善良な市民で、人情味豊かで慈愛深い人々であったために、その影響力はいっそう強かった。彼らは、キリスト教的な制度のただ中で生活しており、彼らの品性は、ある程度まで、そうした環境に影響されていた。彼らが人々の尊敬と信頼を勝ち得たところの美点は、聖書に負つところが多かった。ところが彼らは、こうしたすぐれた賜物を悪用して、神のみ言葉に敵対する感化力を及ぼしたのである。ミラーは、こうした人々との交際によつて、彼らと同様の考えを持つようになった。当時の聖書解釈は、難解で、彼には、とうてい理解できないように思われた。しかし、彼の新しい信仰は、聖書を放棄しながらも、それに代わるさらによいものを与えなかつたので、彼にはなんの満足も得られないのであった。それでも彼は、こうした見解を約十二年の間持ち続けた。しかし、彼が三十四才の時、聖霊は、彼が罪人であるということを彼の心に印象づけた。彼は、従来の信仰によつては、墓のあなたに幸福の確証を得ることができなかった。未来は暗く陰惨であつた。後日、彼は、このときの感じを次のように言っている。

「絶滅とは、冷たく冷え冷えした思想であった。そしてわれわれは、責任を問われて、みな死滅するのであった。天は、頭上にある真ちゅうのようであり、地は、足の下にある鉄のようであった。永遠——それはなんであろうか？そして死——なぜ死ぬのであろうか？論理を進めれば進めるほど、わたしは論証から遠ざかってしまった。考えれば考えるほど、結論が出なくなってしまった。わたしは考えるのをやめようとした。だが、思いは自由にならなかった。わたしはほんとうに悲惨であった。しかし、その理由がわからなかった。わたしはつばやき、不平を言った。しかし、だれについて言っているのか知らなかった。わたしは、悪が存在していることを知っていたが、善をどこでどうして見いだすかを知らなかった。わたしはもだえ苦しみ、なんの希望も持てなかった。」

暗黒から光明へ

彼は、こうした状態で数か月間過ごした。そして、次のように言っている。「突然、救い主の品性が、わたしの心に生き生きと印象づけられた。恵みとあわれみの思いに満ち、ご自身でわれわれの罪を贖い、罪の罰である苦難からわれわれを救ってくださいるかたがあるように思えた。わたしはそのときすぐに、そのようなかたは、なにとするわしいかたであらうと考えた。そしてわたしは、そのかたの腕に自分自身を投げかけ、そのあわれみに頼ることができると想像したのである。しかし、果たして、そのようなかたがあられることを証明することができらるであらうか、という疑問が起こった。そうした救い主、あるいは来世についても、聖書を除いては、その存在の証拠を見いだすことはできなかった。…

聖書は、ちょうどわたしが必要としているような救い主を示していることがわかった。墮落した世界の必要に、このように完全に適合した原則を展開している書物が、靈感によらずに与えられるとは、わたしにはどうしても考えられなかった。わたしは、聖書が神の啓示に違いないと認めないわけにかなかった。聖書は、わたしの喜びとなった。そして、わたしは、イエスという友を見いだした。救い主は、わたしにとって、万人にめぐんでたかたとなられた。そして、不可解で矛盾していると思われた聖書が、今度は、わが足のともしび、わが道の光となったのである。わたしの心は落ち着き、満たされた。わたしは、主なる神が、人生の大海のただ中にある岩であることがわかった。今や聖書が、わたしの主要な研究書となった。そしてわたしは、自分は大きな喜びをもってそれを研究したと、心から言うことができる。わたしは、その半分も知られていなかったことがわかった。わたしは、なぜその美と栄光とを、以前には見ることでできなかったのであろうかといふかり、それをどうして拒否することができたのであろうかと驚いた。わたしは自分の心の願いがすべて啓示されているのを見いだし、心のすべての病のいやしが備えられているのを見いだした。わたしは、他の読書を全くしなくなり、神から知恵をいただくことに心を集中した。」

ミラーは、彼が軽べつしていた宗教に対する信仰を公に告白した。しかし、彼の無信仰な友人たちは、彼自身がしばしば聖書の権威に対して抱いたあらゆる議論を吹きかけてくるのに、後れをとらなかった。そのとき彼は、それらに答えることができなかったが、しかし、聖書が神の啓示であるならば、そこに矛盾はないはずであると考えた。また、聖書は人を教えるために与えられたものであるから、人間の理解にふさわしいものであるに違いないと考えた。彼は、自分で聖書を研究して、一見矛盾と思われるものを調和させることができないか、確かめ

ようと決心した。

彼は、すべての先入観を捨てようと努め、注解書を用いなくて、欄外の引照とコンコーダンス（用語索引）を参考にして、聖句と聖句とを比較した。彼は、規則正しく組織的に研究を続けた。まず創世記から、一節ずつ読んでいき、数節の意味が、なんの疑念もなくはつきり理解されるまでは先に進まなかった。何か不明瞭なところがあると、彼は、その問題点に関係があると思われる他の聖句を全部比較してみるのであった。すべての言葉は、その聖句の主題に対して適正な意味を持つものとし、もし彼の見解が、すべての関連した聖句と一致するならば、それで問題は解決するのであった。こうして彼は、理解することが困難な聖句に当面すると、聖書の他のところにその説明を見いだした。彼が神の光を求めて、熱心に祈りつつ研究していったときに、これまで不可解とかわれていたところが明らかにされた。彼は、詩篇記者の次の言葉が真実であることを経験した。「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」（詩篇一一九ノ一三〇）。

ダニエル書と黙示録の研究

彼は、非常な興味をもって、他の聖句の解釈と同様の原則を用いつつダニエル書と黙示録を研究し、預言的象徴が理解できることを発見して大いに喜んだ。彼は、その時までの預言が、文字どおりに成就したことを知った。また、さまざまな比喻、隠喩、たとえ、類似などは、みな、その前後関係で説明されるか、それとも、そこで表現された言葉が他の聖句によって定義づけられているかであることを知った。そして、このように説明されたと

き、それは文字どおりに理解すべきであった。「こうしてわたしは、聖書が、啓示された真理の体系であって、道を行く者が、たとえ愚かであっても、迷う必要がないほど、明らかに単純に与えられているのに満足した」と彼は言っている。^二 預言の大筋を一步一步たどっていったときに、真理の鎖が一つずつ明らかにされて、彼の努力は報いられた。天使が彼の心を導き、聖書を彼に理解させた。

過去において成就した預言を規準にして、将来に関する預言を判断するならば、キリストの霊的支配——すなわち、世界の終末に先だつこの世の千年期——という一般の見解は、神のみ言葉の支持を得ていないことを知って、彼は納得がいった。主がみずから再臨されるに先だつて義と平和の千年期があるというこの教義は、神の日の恐怖をはるか先へと延期するものであった。しかし、どんなに耳ざわりの良いものであっても、それは、収穫すなわち世界の終末まで、麦と毒麦とはともに生長するというキリストと使徒たちの教えに、相反するのである。

「悪人と詐欺師とは、…悪から悪へと落ちていく。」「終わりの時には、苦難の時代が来る。」そして、暗黒の王国は主の再臨まで継続し、主の口の息によって焼きつくされ、来臨の輝きによって滅ぼされる（マタイ一三ノ三〇、三八―四一、テモテ第二・三ノ一三、一、テサロニケ第二・二ノ八）。

全世界が改心しキリストの霊的支配が来るという教義は、使徒時代の教会が支持したものではなかった。それは、十八世紀の初期になって初めて、一般キリスト教会が受け入れたものであった。他のすべての誤りと同様に、その結果は有害なものであった。それは人々に、主の再臨をはるか遠い将来のことに思わせ、主が近づいておられることを告げるしに人々が注意することを妨げた。それは、根拠のない自信と安心感を与え、主に会うために必要な準備を怠らせたのである。

再臨信仰へ

ミラーは、キリストご自身が文字どおりに来られることが、聖書に明らかに教えられていることを発見した。パウロは、次のように言っている。「主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる」(テサロニケ第一・四ノ一六)。「そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。」「ちようど、いなくが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」と救い主は言われた(マタイ二四ノ三〇、二七)。彼には、天の全軍が従ってくるのである。「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来る」(マタイ二五ノ三一)。「また、彼は大きいなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、…四方からその選民を呼び集めるであろう」(マタイ二四ノ三一)。

キリストの再臨の時に、死んだ義人はよみがえらされ、生きている義人は変えられる。パウロは次のように言っている。「わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである」(コリント第一・一五ノ五一―五三)。また彼は、テサロニケ人への手紙の中で、主の再臨を描写したあとで次のように言っている。「その時、キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも

主と共にいるであろう」(テサロニケ第一・四ノ一六、一七)。

キリストがご自身で来られるまでは、神の民はみ国を受けることができないのである。救い主は言われた。「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい』」(マタイ二五ノ三一―三四)。今ここに引用した聖句によって、人の子が来るときに、死者はよみがえらせられて朽ちないものとなり、生きている者は変えられるということとをわれわれは知った。この大変化によって、彼らはみ国を受ける準備ができるのである。パウロは次のように言っている。「肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない」(コリント第一・一五ノ五〇)。人間の現在の状態は、死ぬべきものであり、朽ちるものである。しかし、神の国は、朽ちず、永遠に続くものである。それゆえに人間は、現在の状態のままでは、神のみ国に入ることはできない。しかし、イエスが来られるときに、彼はご自分の民に不死をお与えになる。そして、これまではただ相続人でしかなかった彼らに、み国を継ぐようにと言われるのである。

年代に関する預言の解釈

以上の聖句と他の聖句によって、キリスト再臨前に起こると一般に期待されていた世界的な平和の治世、地上

における神の国の樹立といったことは、再臨に続いて起こるものであることが、ミラーの心に明らかになった。さらに、すべての時のしるしと世界の状態は、最後の時代についての預言的描写と一致していた。彼は、聖書だけの研究によって、地球が現在の状態のままに継続するように定められた期間は、まさに終わろうとしているという結論に達せざるをえなかった。

ミラーは、次のように言っている。「もう一つ真にわたしの心に感動を与えた証拠は、聖書の年代であつた。…過去において成就した預言のできごとは、しばしば定められた期間内に成就したということを、わたしは見いだした。洪水までには、百二十年（創世記六ノ三）。洪水に先だつ七日間、そして、預言された雨が四十日間（同七ノ四）。アブラハムの子孫の四百年の寄留（同一五ノ一三）。給仕役の長と料理役の良の夢のなかの三日（同四〇ノ一二―二〇）。パロの夢の七年（同四一ノ二八―五四）。荒野の四十年（民数記一四ノ四三）、三年半のききん（列王紀上一七ノ一）（ルカ四ノ二五参照）、…七十年の捕囚（エレミヤ書二五ノ一）、ネブカデネザルの七つの時（ダニエル書四ノ一三―一六）、ユダヤ人のために定められた七週と六十二週と一週から成る七十週（同九ノ二四―二七）。——時に区切られたできごとは、みな、かつては預言に過ぎなかったが、その預言どおりに成就したのである。」^三

そこで彼は、聖書の研究において、さまざまの年代的期間が、彼の理解によればキリストの再臨にまで及ぶものであることを発見したとき、それらは「その時代に先だつて」神がそのしもべたちにあらわされたものであると考えないわけにいらなかった。「隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属し、」とモーセは言っている。また、主は、預言者アモスによって、主は、「そ

のしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」と言われた（申命記二九ノ二九、アモス書二ノ七）。したがって、神のみ言葉の研究者は、人類歴史における最も重大な事件が、真理のみ言葉のなかに明示されていることを、確信をもって期待することができるのである。

ミラーは次のように言っている。「わたしは、聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたものであって…有益であること（テモテ第二・三ノ一六）、また、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって書いたものであること（ペテロ第二・一ノ二一）、そして、それは『すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである』（ローマー五ノ四）ことを十分に確信したので、聖書の年代的部分も、聖書の他の部分と同様に、神の言葉の一部であり、まじめに研究すべきものであると考えざるをえなかった。そこで、わたしは、神が慈悲深くもわれわれに表わそうとされたことを理解しようと努めるにあたっては、預言の期間を見過ごしてはならないと感じた。」^四

「二千三百の朝夕」の預言

キリストの再臨の**時**を最も明らかに示していると思われる預言は、ダニエル書八ノ一四の「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という預言であった。ミラーは、聖書を聖書自身の注解書とするという彼の規則に従って、象徴的預言においては、一日が一年を表わすことを知った（民数記一四ノ三四、エゼキエル書四ノ六）。彼は、預言の二千三百日は字義的には二千三百年であって、ユダヤ時代の終結

する時をはるかに越えているから、その時代の聖所を指すものではないということを悟った。ミラーは、キリスト教時代においては、地上が聖所であるという一般の見解を受け入れた。そこで彼は、ダニエル書八ノ一四に預言されている聖所の清めとは、キリストの再臨の時に、地上が火で清められることであると理解した。したがって、二千三百日の正確な起算点を発見することができれば、キリスト再臨の時は容易に確かめることができると、彼は結論した。こうして、大いなる終結の時、すなわち現在の状態が「そのあらゆる高慢と権力、華麗と虚飾、罪悪と圧迫とともに終わり、」のろいが「地から除かれ、死が滅ぼされ、神のしもべたち、預言者や聖徒たち、また、神の名を恐れる者たちに報いが与えられ、地を滅ぼすものが、滅ぼされる」時が、明らかにされるのであった。^五

ミラーは、新たな、そしていっそうの熱心さをもって、預言の研究を続け、今や驚嘆すべき重要性和と尽きない興味にあふれていると思われる問題の研究に、日夜没頭した。彼は、二千三百日の起算点の手がかりを、ダニエル書八章には見つけることができなかった。天使ガブリエルは、幻をダニエルに理解させるように命令されていたが、彼に、部分的説明しか与えていなかった。教会にふりかかる恐ろしい迫害が、預言者の幻に展開されたときに、ダニエルは体力が衰えてしまった。彼は、もう耐えられなくなり、天使は、しばらく彼を離れた。ダニエルは、「疲れはてて、数日の間病みわずらった。」「しかし、わたしはこの幻の事を思つて驚いた。またこれを悟ることができなかった。」

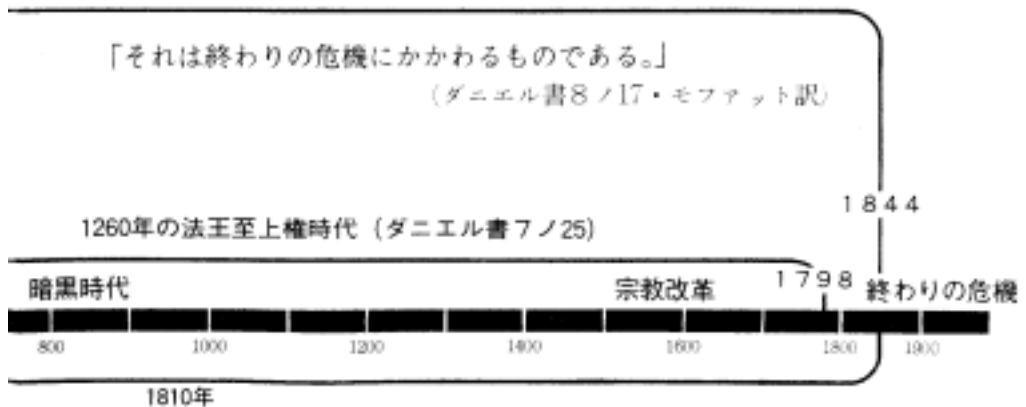
しかし神は、「この幻をその人に悟らせよ」と天使に命じておられた。この命令は遂行されねばならなかった。天使は、それに従つて、しばらくたったときに、ダニエルのところにもどつて、「わたしは今あなたに、知恵と悟りを与えるためにきました。」「ゆえに、このみ言葉を考へて、この幻を悟りなさい」と言った（ダニエル書八

ノ二七、一六、九ノ二二、二三、二四―二七)。八章の幻のなかで、重要な点が一つ説明されていなかった。それは、時、すなわち二千三百日の期間に関するものであった。それゆえに天使は、再び説明を始めるにあたって、主に時の問題に関して述べた。

預言的期間の起算点

「あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています。…それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもつて、建て直されるでしょう。その六十二週の後メシヤは断たれるでしょう。ただし自分のためではありません。…彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。」

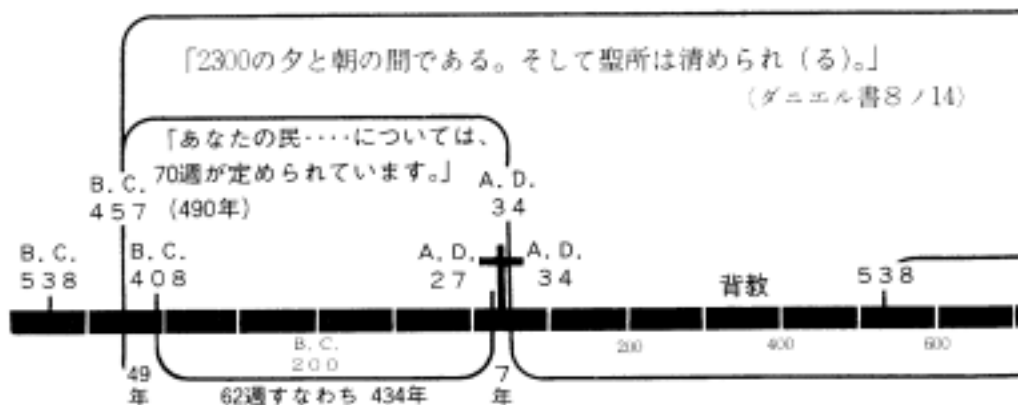
天使は、ダニエルが八章の幻のなかで理解しなかった点、すなわち、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状



第18章 最も重要な預言

態に復する」という、時に関する言葉を説明するという目的のために、特につかわされたのであった。「このみ言葉を考えて、この幻を悟りなさい」と命じたあとで、天使が最初に語った言葉は、「あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています」ということであつた。ここで「定められています」と訳された言葉は、字義的には、「切り取る」という意味である。七十週、すなわち四百九十年は、特にユダヤ人のために切り取られていると天使は宣言した。しかし、それは、何から切り取られたのであろうか。二千三百日がダニエル書八章において述べられている唯一の期間であるから、七十週が切り取られたのは、それからに違いない。したがって七十週は、二千三百日の一部であり、この二つの期間は、同時に始まるものでなければならない。七十週は、エルサレムを建て直せという命令が出た時から始まると、天使は言明した。この命令の年代を発見することができるなら、二千三百日という長い期間の起算点も確かめることができる。

この命令は、エズラ記の七章に示されている（一一―二六参照）。それは紀元前四五七年に、ペルシャ王アルタスタによって、最も完全な形で発布された。しかしエズラ記六ノ一四には、エルサレムにある主



の家が、「クロス、ダリヨスおよびペルシヤ王アルタシヤスタの命によって」建てられたと言われている。勅令を発し、確認し、完成したこれら三人の王によって、預言が二千三百年の起算点として要求していることが成し遂げられた。勅令が完全なものとされた紀元前四五七年を出発点として、七十週に関する預言はすべて成就されたことがわかった。

預言の成就

「エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週ある」――すなわち、六十九週、つまり四百八十三年ある。アルタシヤスタ王の勅令は、紀元前四五七年の秋に実施された。その時から四百八十三年がたつと、紀元二七年の秋になる（付録参照）。その時、この預言は成就した。「メシヤ」とは、「油を注がれた者」という意味である。キリストは、紀元二七年の秋、ヨハネからバプテスマを受け、聖霊の油を注がれた。使徒ペテロは、「神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました」とあかししている（使徒行伝一〇ノ三八）。そして、主ご自身も、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである」と宣言された（ルカ四ノ一八）。彼は、バプテスマの後、ガリラヤに行き、「神の福音を宣べ伝えて言われた、『時は満ちた』（マルコ一ノ一四、一五）。

「彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。」ここで言われている「一週」は、七十週の最後の週のことである。それは、ユダヤ人のために特に定められた期間の最後の七年である。紀元二七年から三四年に及ぶ

この期間内に、最初はキリストご自身によって、そしてその後は彼の弟子たちによって、福音の招きが特にユダヤ人たちに与えられたのである。使徒たちが、天国のよろこばしい福音を宣べ伝えるために出て行ったときに、救い主は「異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町にはいるな。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行け」とお命じになった（マタイ一〇ノ五、六）。

「彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう」紀元三一年、われわれの救い主は、そのバプテスマから三年半の後に十字架にかかられた。カルバリーにおいてささげられた大いなる犠牲によって、四千年の間神の小羊を指し示してきた犠牲制度は終わった。型は実体と出会い、儀式的な制度のあらゆる犠牲と供え物は、そこで終わるのであった。

ユダヤ人のために特に定められた七十週、すなわち四百九十年は、これまで見てきたように、紀元三四年で終わった。ユダヤ国民は、その時、サンヒドリンの決議によって、ステパノを殉教させ、そしてキリストの弟子たちを迫害することにより、福音の拒否を決定的なものにしてしまった。それ以後、救いのメッセージは、もはや選民に限られることなく、全世界に伝えられた。迫害のためにエルサレムを逃げなければならなくなった弟子たちは、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。」ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べはじめた。「ペテロは、神に導かれて、カイザリヤの百卒長、神を敬うコルネリオに福音を伝えた。また、キリストに対する信仰へと導かれた熱心なパウロは、「遠く異邦の民へ」福音を伝える任命を受けた（使徒行伝八ノ四、五、一二ノ一二）。ここまで、預言に指示されたことはみな、驚くばかりに成就した。そして七十週が紀元前四五七年に始まり、紀元三四年に終わることが、疑いの余地なく確定した。この年代から二千三百日の終わりを見いだすことは、難

しいことではない。七十週、すなわち四百九十日が二千三百日から切り取られると、あとに千八百十日が残る。四百九十日が終わったあとで、千八百十日もまた成就するはずであった。紀元三四年から千八百年たてば、一八四四年になる。この大なる預言の期間が終わったところで、「聖所は清められる」と神の天使はあかししたのである。こうして、聖所の清め——それはキリストの再臨の時に起こるものと、ほとんどすべての人が信じていた——の時が、はっきりと指示された。

驚くべき結論

ミラーとその仲間たちは、初め、一八四四年の**春**に二千三百日が終わると信じたが、預言では同年の**秋**になっていた。この点についての思い違いは、主の再臨の時として早いほうの時期を定めていた人々に、失望と困惑をもたらした。しかしこれは、二千三百日が一八四四年に終わって、その時聖所の清めということで表わされている大事件が起こる、という議論の確かさについては、なんの影響もなかった。

ミラーは、聖書が神の啓示であることを証明するために、聖書の研究を始めたのであって、最初、このような結論に到達することは、全く予期していなかった。彼自身、自分の研究の結果を信じていけないほどであった。しかし、聖書の証拠は、非常に明白で力強いものであったので、無視することができなかった。

彼は、二年間、聖書の研究に没頭していたが、一八一八年に、あと約二十五年でキリストが神の民を贖うたに出現される、という厳粛な確信を抱いた。ミラーは、次のように言っている。「このような喜ばしいできごとを



ミラーは、聖書を学ぶうちに、イエス・キリストの栄光に満ちた再臨と罪の支配の終わりに至る——
——彼はそうに理解し解釈したのであるが——さまざまな年代的期間と預言を見いだした。

前にしたわたしの心の喜び、また贖われた者の喜びに自分もあずかりたいというわたしの心の熱望については、語る必要がないであろう。聖書は、わたしにとって新しい書物となった。聖書は、実にすばらしい論理的な書物であった。その教えの中で、私にとってわかりにくく、神秘的であまいであったものが、今やそのページから輝く明らかな光によって、みな消えうせてしまった。そして、ああ、なんと明るく輝かしく、真理はあらわれたことであろう。わたしが前にみ言葉のなかに見いだした矛盾と不調和は消え去った。そして、十分に理解したとは思わないところも数多くあったが、しかしそれでも、聖書から多くの光が出て、かつては暗かったわたしの心を照らしたので、わたしは今まで想像することもできなかった喜びを、聖書の研究から感じたのであった。^六

「このような重大な事件に関する預言が聖書に記され、それが、短期間のうちに成就するという厳粛な確信を抱いたとき、大きな力でわたしに迫った問題は、わたし自身の心を動かした証拠を前にして、わたしが世界に対して負っている義務に関するものであった。^七」彼は、受けた光は他の人々に伝えなければならないと感じずにはおれなかった。彼は、不信仰な人々の反対を受けることは予期したが、しかしすべてのクリスチャンは、自分たちが愛すると公言している救い主に会うという希望を、喜びに違いないと彼は確信した。彼が恐れたただ一つのこととは、多くの人々が、輝かしい救済がこんなに早く完成されることを喜びのあまり、真理の表明に際し、十分に聖書を調べもせずに教理を受け入れるのではないかということであった。そこで彼は、自分が誤りに陥り、他の人々をも誤らせはしないかと恐れて、他の人々に伝えることをためらった。こうして彼は、到達した結論を支持する証拠をもう一度検討し、彼の心に浮かぶあらゆる反対意見を注意深く吟味した。ちょうど太陽の光に照らされる霧のように、反対意見は、神の言葉の光に照らされて消えるのであった。こうして五年間が経過し、彼は、

自分の見解の正確さについて十分な確信を抱いた。

伝道への召し

そして今や、聖書に明らかに教えられていると彼が信じたことを、他の人々に伝えなければならないという義務が、新たな力をもつて彼に迫った。彼は次のように言った。「わたしが自分の仕事をしようとすると、『行って、世界にその危険を告げよ』という声が、常にわたしの耳にひびいた。わたしは、いつも次の聖句を思い出した。『わたしが悪人に向かって、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言う時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかつたら、悪人は自分の罪によって死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手を求める。しかしあなたが悪人に、その道を離れるように戒めても、その悪人がその道を離れないなら、彼は自分の罪によって死ぬ。しかしあなたの命は救われる』（エゼキエル書三三ノ八、九）。悪しき人々に対して十分に警告を発するならば、多くの者は悔い改めるだろう、そして、もし警告しないならば、彼らの血がわたしの手に求められるだろう、とわたしは感じた。」^八

彼は、だれか牧師がその趣旨を認めて、宣教のために献身するように祈りながら、機会を見ては、彼の見解を個人的に語り始めた。しかし、自分で警告を発する義務があるという確信を、払いのけることはできなかった。「行って、それを世界に語れ。わたしは、彼らの血をあなたの手に求める」という言葉が、彼の心にくり返し響いた。九年間彼は待った。彼の心の重荷はなおも彼に迫り、ついに一八三一年、彼は初めて公に自分の信仰を説明した。

エリシャが、畑で牛を前に行かせて耕していたときに、外套をかけられて、預言者の職に召されたように、ウイリアム・ミラーは、鋤を捨てて、神の国の奥義を人々に説き明かすように召された。彼は、震えおののきなから、彼の働きを始め、聴衆に預言の期間を一步一步説明し、キリストの再臨にまで及んだ。彼は、自分の語った言葉が広く人々の興味をひき起こしたのを見て、努力することに、力と勇気が与えられた。

ミラーは、兄弟たちの勧誘を神の声と認めて、ついに公衆の前で彼の見解を発表することに同意した。彼はそのとき五十才で、公衆の前で話すことに慣れておらず、自分がそうした働きに不適任であることを感じて悩んだ。しかし、彼の働きは、最初から驚くべき祝福を受けて、人々を救いに導いた。彼の最初の講演の結果、信仰の覚醒が起こり、二人を除いて、十三家族の全員が悔い改めたのである。彼はすぐに、他の場所でも話すように頼まれた。そしてそのほとんどの所で、彼の働きの結果、神のみわざが再びあらわれた。罪人は悔い改め、キリスト者は献身を新たにし、理神論者や無神論者は、聖書の真理とキリスト教の信仰を認めるように導かれた。彼の働きに接した人々は、次のように証言した。「彼は、他の人々では影響を及ぼすことができないような人々の心をも動かした。」^九彼の説教は、一般の人々の心を、宗教の大いなる事柄に目ざめさせ、当時の俗化と墮落を阻止するものであった。

再臨のメッセージに対する反響

ほとんどの都市で、何十人という人々が彼の説教の結果悔い改め、あるところでは、何百人もの者が悔い改め

た。多くの所で、プロテスタント諸教会のほとんどすべての教派が彼に扉を開き、いくつもの教派の牧師たちから説教の招待が来るのが普通であった。彼は、招かれたところでだけ働くことにしていたが、まもなく、続々と来る招待の半分にも応じきれなくなった。再臨の正確な時期に関する彼の見解に同意しない人々も、キリストの再臨が確実なことであって、しかも切迫していること、そして自分たちの準備が必要なことについては、納得したものが多かった。大都市のいくつかににおいて、彼の働きは著しい影響を及ぼした。酒類の販売業者が商売をやめて、店を集会所にした。賭博場が廃止された。無神論者、理神論者、普遍救済論者たち、また、最も身持ちの悪い道楽者までが改心し、その中には、長年教会に来ていなかった者たちもいた。種々の教派が各地において、ほとんど毎時間祈禱会を持ち、実業家たちは正午に、祈りと賛美のために集まった。といっても別に、狂気じみた興奮などはなく、人々の心にあつたのは厳粛な思いであった。彼の働きは、初期の宗教改革者たちの働きのように、単に感情を動かすのではなくて理解力に訴えて良心を目ざめさせるものであった。

ミラーは、一八三三年、彼の属していたバプテスト教会から、説教をする許可証を受けた。彼の教派の多数の牧師も彼の働きを承認し、彼が働きを継続することを正式に認めたのである。彼は、その個人的活動は主としてニュー・イングランド地方と中部諸州に限られていたが、絶えず旅行しては説教した。数年間は、彼は費用を全部自弁していた。また後になっても、招かれた所への旅費を決して十分には受けなかった。こうして、彼の公の活動は、金銭上の恩恵を受けることから程遠く、彼の財産に重い負担となり、彼の生涯のこの時期にしだいに減少した。彼は大家族の父であったが、彼らはみな質素で勤勉であったので、彼の農園は、彼と彼らを十分支えることができたのである。

落星——一八三三年一月一三日

ミラーが、キリストが間もなく来られるという証拠を公に語り始めてから二年後の一八三三年に、再臨のしるしとして救い主が約束された最後のしるしが現われた。イエスは、「星は空から落ち」と言われた（マタイ二四ノ二九）。ヨハネも黙示録の中で、神の日の到来を告げる光景を幻に見て、「天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた」と言った（黙示録六ノ一二）。この預言は、一八三三年一月一三日の大流星雨によって、顕著にまた印象的に成就した。これは、有史以来の最も広範囲に及ぶ驚くべき落星の光景であつた。「その時、全米の空全体が、数時間にわたって燦然と輝いた。これは、この国に最初の植民地が設けられて以来、起こつたことのない天体の異変であつた。そして、ある人々は熱烈な賛美をもつて見る一方、他の者たちは非常な恐れと不安をもつて見ていた。」「その崇高で荘嚴な美しさは、今なお多くの人々の心から消えない。…雨も及ばないような激しさで、流星が地に降つた。東も西も、北も南もどこも同じであつた。一言で言えば、全天が活動しているように見えた。…シリマン教授の雑誌の記事によると、この現象は、北米全土で見られた。…二時から夜明けまで、空は一片の雲もなく快晴であつて、絶え間ない流星のまばゆい光が、全天を照らしていた。」。

「実に、その壮麗な光景は言葉で描写することができない。…それを見なかつた者は、その輝かしい光景がどんなものであつたかが、ほんとうにはわからない。それは、ちょうど、星が全部天頂近くの一点に集まつて、稲光りの早さで、同時に四方八方に降るように見えた。それでも星は尽きなかった——幾千の星が、この時のた

めに創造されたかのように、幾千の星にすぐ続いて降った。^二「いちじくの実が大風に揺られて振り落とされると
いう描写以上に適切な表現はなかった。」^二

一八三三年一月一四日付ニューヨーク「商業新聞」には、このふしぎな現象についての長文の記事が載った
が、そこには次のようなことが書いてあった。「昨朝のようなできごとは、どんな哲学者や学者も、語ったこと
もなければ記録したこともなかったであろう。もしわれわれが、星が落ちるということを流星と解釈するならば、
千八百年前の預言者が、それを正確に預言したのである……これ以外の言葉では表現できないような言い方で。」
こうして、イエスが弟子たちに言われた再臨に関する最後のしるしが、あらわされた。「そのように、すべて
これらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると**知りなさい**」(マタイ二四ノ三三)。これらのしる
しのあとで、ヨハネは、天は巻き物が巻かれるように消えていき、地は震い、山と島とはその場所から移され、
悪人は恐れて人の子の前から逃げるといふ、その次の大事件を見た(黙示録六ノ二―一七参照)。

落星を見た人々の多くは、これを、来たるべき審判の先ぶれ、「あの恐るべき大いなる日の型、確実な前兆、
あわれみのしるし」であるともみなした。^三こうして、人々の注目は、預言の成就にむけられ、多くの者が再臨の警
告に注意を払うようになった。

オスマン帝国の没落

一八四〇年に、預言のもう一つの顕著な成就があつて、広く一般の人々の興味をひき起こした。その二年前に、

再臨を説く有力な牧師のひとり、ジヨサイア・リッチは、黙示録九章の解説を発行し、オスマン（オットマン）帝国の滅亡を預言した。彼の計算によるならば、同帝国は、「紀元一八四〇年八月中に」倒されるのであった。そして、その預言が成就するほんの数日前に、彼は次のように書いた。「最初の期間である百五十年が、トルコの承認のもとに、デアコゼスが即位する前に正確に成就したとするならば、最初の期間終了とともに始まった三百九十一年十五日という期間は、一八四〇年八月一日に終了する。その時に、コンスタンチノーブルにあるオスマンの権力は失墜すると思われる。そしてこのことは、必ずそうなるものと私は信じる。」^{一四}

定められたまさにその時に、トルコは、大使を通じて、ヨーロッパの同盟諸国の保護を受けることを承諾し、かくて自らをキリスト教諸国家の支配下においた。この事件は、預言を正確に成就するものであった（付録参照）。このことが人々に知れわたると、多数の者が、ミラーとその同労者たちが採用している預言解釈の原則の正確さを確信し、再臨運動が一段と促進されることになった。学識や地位のある人々がミラーに協力し、彼の見解の講演や著述に加わったので、一八四〇年から一八四四年まで、働きは急速に進展した。

一般教会の反対

ウィリアム・ミラーは、思索と研究によって訓練された強固な精神力を持っていた。さらに彼は、知恵の源である神と結合することによって、天の知恵をも兼ね備えていた。高潔な品性、道德的卓越などの評価においては、彼は、人々の尊敬と敬意を集めずにはおかぬりっぱな人物であった。彼は、キリスト者の謙遜と自制力とともに、

真に親切な心の持ち主であつて、だれに対しても思いやりを持ち、優しく、喜んで他の人々の意見に耳を傾け、彼らの議論を十分に検討した。彼は感情に走つたり興奮したりせずに、すべての説や教義を神のみ言葉によって試した。そして彼は、その健全な推理力と聖書の深い知識とによつて誤りに反論し、虚偽を摘発することができた。

それにもかかわらず、彼は彼の働きを、激しい反対を受けずに遂行することはできなかった。初期の宗教改革者の場合のように、彼が伝えた真理は、一般の宗教家たちに歓迎されなかった。彼らは、聖書によつて自分たちの立場を支持することができないので、人間の教義や先祖たちの言い伝えに頼らなければならなかった。しかし、再臨の真理の説教者たちが受け入れた唯一のあかしは、神の言葉であつた。彼らの標語は、「聖書、そして、ただ聖書のみ」であつた。反対者たちは、聖書の根拠がないので、嘲笑と軽べつの態度に出た。再臨を伝える人々を中傷するために、時間と資力と才能が用いられた。しかし、彼らの唯一の違反行為というのは、彼らが、主の再臨を喜びをもって待望し、清い生活を送り、主の出現に対する準備をするよう人々に勧めているということであつたのである。

人々の心を再臨の問題から他にそらせようとする努力が熱心に行なわれた。キリストの再臨と世界の終末に関する預言を研究することは罪で、何かはずかしいことでもあるかのように扱われた。こうして一般の牧師は、神のみ言葉に対する信仰を掘り崩した。彼らの教えは、人々を無神論者にし、多くの者は、彼ら自身の不信仰な欲情のままに、ほしいままな生活をした。そうしておいて、悪の張本人たちは、それをみな再臨信徒のせいにしたのである。

知的で熱心な多数の聴衆を引きつけていたにもかかわらず、ミラーの名は、あざけりや非難の的になる以外には、宗教新聞で触れられることはほとんどなかった。宗教の教師たちをとつた態度に勢いづいた、軽薄で不信仰

な人々は、無礼なあだ名や、下品で不敬な悪口を言い、彼と彼の働きに侮辱を加えようとした。安楽な家庭を離れて、都市から都市、町から町へと自費で旅をし、切迫する審判の厳粛な警告を世界に伝えるために絶えず労している白髪のミラーは、狂信者、うそつき、山師と言われて嘲笑された。

彼に浴びせられた嘲笑、虚言、悪口には、世俗の新聞すら憤慨して抗議するに至った。「このように圧倒的な莊重さと恐るべき結果を伴う問題」を軽々しくのしることは、「ただ単に、それを宣布し擁護する者の心を愚弄するばかりでなくて、審判の日をあざ笑い、神ご自身を嘲笑し、神の審判廷の恐るべきことを軽べつするのである」と世の人々が言うほどであった。^{一五}

ミラーの奮闘

あらゆる悪の煽動者サタンは、再臨使命の影響を無に帰そうとしたばかりでなくて、使命者自身の生命を取ろうとした。ミラーは、聖書の真理を彼の聴衆の心に実際にあてはめて訴え、彼らの罪を責め、彼らの自己満足を打ち破った。そして、彼の明白で鋭い言葉は、人々の敵意を引き起こした。教会員が彼の使命に反対するのを見て、低俗な人々は、より大胆な行動へと進んだ。そして、敵たちは、彼が集会場を出ようとするときに彼を殺そうと謀った。しかし、天使たちが群衆のなかにいた。そして、人間の姿をしたひとりの天使が、主のしもべの腕をとって、怒った群衆の中を安全に連れ出した。彼の働きは、まだ終わっていないかった。そしてサタンとサタンの使者たちは、その目的を達することができなかった。

あらゆる迫害にもかかわらず、再臨運動に対する関心は高まっていった。最初は、数十、数百であった会衆が、幾千にも増していった。種々の教会に多くの信者が加えられたが、しばらくすると、こうした改心者に対してさえ反対の精神があらわれ、教会は、ミラーの見解を信じる者に対して、懲罰処置をとるようになった。こうした事態が起こったために、ミラーは、あらゆる宗派のキリスト者に対する訴えを書き、もし彼の教義が誤りであるならば、その誤りを聖書によって示してもらいたいと言った。

「われわれの信仰と行為の規準、いや、唯一の規準であるとあなたがたが認めている神の言葉が、信じよと命じていないどんなものを、われわれは信じたであろうか。われわれ（アドベンチスト（再臨信徒））は、説教壇からの、または印刷物によるこのような悪意に満ちた非難を受け、また教会の交わりから除外されねばならぬような、どんなことをしたのであるうか。」もしわれわれがまちがっているならば、何がまちがいであるかを示していただきたい。われわれの誤りを、神の言葉から示していただきたい。われわれはもう十分あざけりを受けた。あざけりは、われわれがまちがっていたことを納得させ得ない。われわれの見解を変えるのは、神の言葉だけである。われわれの結論は、聖書の証拠に基づいて、慎重な吟味と祈りによって達したものなのである。」^{一六}

使命宣布と嘲笑非難

どの時代にあっても、神がそのしもべによって世界に伝えられた警告は、疑いと不信をもって迎えられた。洪水前の人々の罪悪のゆえに、地が洪水で滅ぼされることになったとき、神は、まず彼らに悪の道を離れる機会を

与えるために、ご自分の意図をお告げになった。神の怒りによって彼らが滅ぼされないように、百二十年の間、悔い改めの警告が彼らの耳に発せられた。しかし、彼らはその警告を、たわごとと考えて信じなかった。彼らは、大胆に罪惡にふけり、神の使者を嘲笑し、その嘆願を軽んじ、彼を僭越であると考え非難した。ただひとりの人間が、地のすべての偉大な人物たちに対抗して立ちはだかるのか？もしノアの言うことが真実であれば、なぜ全世界がそれを認めて信じないのか？数千人の知恵に対抗する、ひとりの人間の主張！彼らは、警告を信じようとせず、箱舟の中に避難しようとしなかったのである。

あざける者たちは、自然の事物——相も変わらぬ季節の推移、雨を降らせたことのない青空、柔らかな夜の露に生気をとりのどした緑の野——を指さして、「彼はたえ話を語っているのではないか？」と叫んだ。彼らは、義の宣伝者を軽べつして、無謀な熱狂家と呼んだ。そして彼らは、これまで以上に快樂の追求に走り、惡の道に進んでいった。しかし、彼らの不信は、予告されだきことが起こるのを妨げはしなかった。神は、彼らの惡を長く忍ばれ、彼らに悔い改めの機会を十分にお与えになった。しかし、定められた時が来たときに、神のあわれみを拒んだ者に神の刑罰が下ったのである。

キリストは、再臨に関しても同様の不信があらわされるであろうと言われた。ノアの時代の人々が、「洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった」ように、「人の子の現れるのも、」そのようであろうと救い主は言われた（マタイ二四ノ三九）。神の民と称する人々が、世と結合し、世の人々のように生活し、禁じられた快樂を彼らとともにしているとき、世俗のぜいたくが教会のぜいたくとなり、結婚の鐘が鳴りひびき、すべての者が、世俗の繁榮が長年にわたって続くと思っているそのときに、突然、いならず者が天

からきらめくように、彼らの輝かしい幻とむなししい望みとは、消えさるのである。

神は、洪水が来ることを世界に警告するためにしもべを送られたように、最後の審判の切迫を知らせるために、使者を選んでつかわれた。そして、ノアの時代の人々が、義の宣伝者の予告を軽べつしてあざ笑ったように、ミラーの時代においても、多くの者が、いや神の民と称する人々でさえ、彼の警告の言葉をあざ笑ったのである。

真理は人を分ける

では、なぜ教会は、キリスト再臨の教義と説教を、このように歓迎しなかったのでしょうか。主の再臨は、悪人に災いと滅びをもたらすが、義人にとっては喜びと希望に満ちている。この大真理は、各時代にわたって、神の忠実な者たちの慰めであった。それがなぜ、ユダヤ人たちにとつてのイエスと同様に、神の民と称する人々にとつて「つまずきの石、さまたげの岩」となったのであろうか。「行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたをわたしのところに迎えよう」と弟子たちに約束されたのは、主ご自身であった（ヨハネ一四ノ三）。弟子たちの寂しさと悲しさ pensando、天使たちに、自分は天に昇っていったのと同じありさまでまた来るといふ保証を与えて彼らを慰めるよう命じられたのは、あわれみ深い救い主であった。弟子たちが、愛する主の最後の姿を見ようとして、天をみつめて立っていると、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」という言葉に注意をひかれた（使徒行伝一ノ一一）。弟子たちは、天使の言葉によって、新

たな希望を抱いた。彼らは、「非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた」(ルカ二四ノ五二、五三)。彼らが喜んだのは、イエスが彼らを去り、残された彼らが世の試練や誘惑と戦わねばならなくなったからではなくて、天使が彼らに、主はまた来られるという保証を与えたからであった。

今日、キリスト再臨の布告は、天使たちがベツレヘムの羊飼いたちに告げたときのように、大きな喜びの知らせでなければならない。救い主を真に愛する人々は、聖書に基づいた告知を、喜びをもって叫ばないではおられない。永遠の生命という彼らの希望の中心であられる主が、初臨の時のように嘲笑され、侮辱され、拒否されるためではなくて、力と栄光のうちに神の民を贖うために、また来られるのである。救い主を遠ざけておこうと望む者は、彼を愛さない人々である。この天からの使命にいらだちを感じ、悪意を抱くことほど、教会が神から離反したことの決定的証拠はないのである。

再臨の教義を受け入れたものは、神の前に悔い改めてへりくだることの必要を自覚した。キリストと世との間をためらっていたものが多くいたが、今こそ決心すべき時であると感じた。「彼らには、永遠に関することが、これまでになく現実のものとなった。天は近くなり、神の前に自分たちの罪深さを感じた。」^七キリスト者は、新しい霊的生命に活気づいた。彼らは、時が短いことを感じ、同胞のためになすべきことは、速やかにしなければならぬと感じた。地は、退いていき、永遠が彼らの前に開かれるように思われた。そして、魂とその永遠の運命にかかわるすべてのことが、地上のすべてのものの光をあせさせるように感じられた。神の霊が彼らに宿り、罪人に対すると同様に同信者たちに対しても、神の日の準備をするように熱心に訴える力を与えた。彼らの日ごとの生活の無言のあかしは、形式的で献身していない教会員に対する絶えざる譴責であった。この人々は、自分た

ちの快樂の追求、金もうけへの熱意、世俗の榮譽欲などが妨げられるのを望まなかった。そのために、再臨の信仰とそれを宣布する者に対して、敵意と反対が起こったのであった。

預言書研究の重要性

反対者たちは、預言の期間に関する議論にはとうてい打ち勝てないので、預言は封じられたものであると教えることによって、この問題の研究を妨げようとした。こうしてプロテスタントも、カトリック教会がしたのと同じことをしたのである。ローマ・カトリック教会は、人々に聖書を読むことを禁じたが（付録参照）、プロテスタント教会は、聖書の重要な部分——それも、われわれの時代に特に適用される真理を示している部分——を、理解することができないと主張したのである。

牧師と信徒とは、ダニエル書と黙示録の預言は、不可解な神秘であると言った。しかし、キリストは、ご自分の弟子たちの時代に起こるべきことに関する預言者ダニエルの言葉を示して、「（読者よ、悟れ）」と言われた（マタイ二四ノ一五）。また、黙示録が神秘であって理解できないという主張は、この書の表題そのものと矛盾している。「イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、…この預言の言葉を**朗読する者**と、これを**聞いて**、その中に書かれていることを**守る者**たちとは、**さいわい**である。時が近づいているからである」（黙示録一ノ一—三）。

預言者は言う、「朗読する者はさいわいである。」読もうとしない者もあるであろうが、そうした人々には祝福

は与えられない。「これを聞いて。」預言のことは何ひとつ聞こうとしない人々もいる。この人々も祝福を受けることができない。「その中に書かれていることを守る者たち。」黙示録に記されている警告や教えに注意しようとする者が多い。このような人々は、約束された祝福を受けることができない。預言の諸問題をあざ笑い、そこに厳粛に示された象徴を嘲笑する者、また、生活を改めて人の子の再臨の準備をすることを拒む者は、みな祝福を受けることができない。

このような聖書の証言がある以上、黙示録は人間の理解を超えた神秘的なものであるなどと、どうして教えることができよう。それは啓示された神秘であり、開かれた書である。黙示録の研究は、ダニエル書の預言に心を向けさせる。この両書は、世界歴史の終末に起きる諸事件について、神からの最も重大な教えを与えている。

ヨハネは、教会が経ていくさまざまな興味深い場面を見せられた。彼は、神の民の立場、危険、争闘、そして最後の救済を見た。彼は、地の収穫を实らせる最後の使命を記録している。人々は天の倉に収められる穀物になるか、それとも、滅びの火で焼かれる束になるかである。非常に重大な問題が彼に示された。それは、特に最後の教会に対するものであって、誤りを捨てて真理を信じる者に、彼らが出会う危険と闘いに関して教えるためのものであった。地上に起ころうとしている事件について、だれも無知である必要はないのである。

それでは、一般の人々はなぜ、聖書の重要な部分に対して、このように無知なのであるか。なぜ、人々は一般にその教えを研究するのをいやがるのであろうか。それは、暗黒の君が、自分の欺瞞を暴露するものを、人々から隠そうとする巧妙な策略の結果である。そのために、啓示者であられるキリストは、黙示録の研究に対する戦いを予見して、預言の言葉を読み、聞き、守るすべての者に、祝福を宣言されたのであった。

注

- 一 S. Bliss, “Memoirs of Wm. Miller,” pp. 65—67.
- 二 Bliss, p.70.
- 三 *ibid.*, pp.74, 75.
- 四 *ibid.*, p.75.
- 五 *ibid.*, p.76
- 六 *ibid.*, pp.76, 77
- 七 *ibid.*,p.81
- 八 *ibid.*,p92
- 九 *ibid.*,p.138
- 一〇 R. M. Devense, “American Progress; or, The Great Events of the Greatest Century.” ch.28, pars,1—5.
- 一一 F. Reed, in the “Christian Advocate and Journal,” Dec. 13, 1833.
- 一二 “The Old Countryman,” in Portland “Evening Advertiser,”Nov. 26, 1833.
- 一三 *ibid.*
- 一四 Josiah Litch, in “Signs of the Times, and Expositor of Prophecy,” Aug. 1, 1840
- 一五 Bliss, p.183
- 一六 *ibid.*, pp.250, 252
- 一七 *ibid.*, p.146.



イエスは復活後、エマオへの途上にあった弟子たちにお現われになり、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。」

第十九章

暗黒を照らす真理の光

神の導き

時代にわたって、地上で行なわれる神の働きには、どの大改革や宗教運動を見ても、著しい共通性がある。神が人間を扱われる原則は、常に同じである。現代の重要な運動は、過去の運動と類似しており、昔の教会の経験は、われわれの時代に対して大きな価値のある教訓を与えている。

救いの働きを前進させる大運動において、神が聖霊を送って地上にいるご自分のしもべたちを特に指導されるということほど、聖書の中で明白に教えられている真理はほかにない。人間は、神の恵みとあわれみの御目的を遂行するために用いられる、神の手中の器である。おののに、その果たすべき役割がある。おののに、神が彼に与えられた働きを成し遂げるのに十分な、そしてその時代の必要に応じた光が与えられる。しかし、

どんなに天の栄誉を受けたものでも、贖罪の大計画を知り尽くし、彼の時代に対する働きにおける神のみ心を全部悟った人はなかった。人間は、神が彼らにお与えになる働きによって何を遂行しようとしておられるか、十分に理解することはできない。彼らは、神のみ名によって語る使命をことごとく理解するのではない。

「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。」「わが思ひは、あなたがたの思ひとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思ひは、あなたがたの思ひよりも高い。」「わたしは神である、わたしと等しい者はない。わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う」(ヨブ記一一ノ七、イザヤ書五五ノ八、九、四六ノ九、一〇)。

聖霊の特別の光に浴した預言者たちでさえ、自分たちにゆだねられた啓示の意味を、完全に理解してはいなかった。その意味は、神の民が、そこに含まれている教えを必要とするにしたがつて、代々にわたって示されるのであった。

ペテロは、福音によって明らかにされた救いについて、次のように書いた。「この救いについては、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぎに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは**いつの時、どんな場合**をさしたのかを、調べたのである。そして、それらについて調べたのは**自分たち**のためではなくて、**あなたがた**のための奉仕であることを示された」(ペテロ第一・一ノ一〇—一二)。

預言者たちは、自分たちに啓示されたことを十分に理解できなかったけれども、神が彼らにあらわすことをよ

しとされた光はみな把握しようと熱心に求めた。彼らは、「たずね求め、かつ、つぶさに調べた。」「自分たちのうちにいますキリストの霊が…いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。」「こうした預言が神のしもべたちに与えられたのは、新約時代のキリスト者のためであるとは、神の民にとって、なんという教訓であるう。」「自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。」「まだ生まれてもいない後世の人々に与えられた啓示を、これら神の聖者たちが「たずね求め、かつ、つぶさに調べた」ことに注目しよう。彼らの聖なる熱心さと、後世の恵まれた人々がこの天の贈り物を扱う無気力な冷淡さを、比較してみよう。これは、預言は理解できないものであると言って満足しているような、安楽を愛し世俗を愛する無関心さに対しての、なんという譴責であろうか。

弟子たちの経験

人間の有限な心は、無限の神のご計画を十分に悟ったり、そのみ心の働きを完全に理解したりはできないけれども、しかし神のメッセージをほんのわずかし理解できないのは、彼らの側の誤りや怠慢のゆえであるという場合も、よくあるのである。一般の人々、そして神のしもべたちでさえ、人間の意見、人間の伝説や偽りの教えに目くらんで、神がみ言葉の中に啓示された事実のほんの一部しか把握できない場合がよくある。救い主がこの地上におられたときの弟子たちでさえ、そうであった。彼らは、メシヤはイスラエルを世界的王国とするこの世の王であるという一般の思想に染まっていたために、彼の苦難と死に関する預言の意味を理解することがで

きなかった。

彼らは、キリストご自身から、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」との使命を帯びてつかわされた（マルコ一五）。この使命は、ダニエル書九章の預言に基づいていた。「メシヤなるひとりの君」が来るまで、六十九週あると天使は言った。そこで、弟子たちは、大きな希望と喜ばしい期待をもって、全世界を支配するメシヤの王国がエルサレムに建設されるのを待望した。

彼らは、キリストからゆだねられた使命を宣べ伝えたのであるが、彼ら自身その意味を誤って理解していた。彼らの宣言は、ダニエル書九ノ二五に基づいていたが、彼らは、同じ章の次の聖句に、メシヤは断たれるとあるのを見なかった。彼らは、生まれたときから、地上王国の栄光を待望するようにしつけられていたので、預言の明細な点も、キリストの言葉も、理解できなかったのである。

彼らは、ユダヤの国民に恵みの招待を発して、彼らの義務を遂行した。そして、主がダビデの王位につかれると彼らが思ったそのときに、彼が罪人として捕えられ、おち打たれ、あざけられ、罪に定められ、カルバリーの十字架につけられるのを彼らは見た。主が墓の中で眠っておられる間、弟子たちは、どんなに失望し、苦悩したことである。

キリストは、預言されたとおりの時に、預言されたとおりの様子で、おいでになったのであった。聖書の証言は、彼の伝道の細かい点まで成就した。彼は、救いの使命をお伝えになった。そして、「その言葉に権威があった。」聴衆は、それが神からのものであることを証言した。み言葉も、聖霊も、み子が神の任命を受けていることをあかしした。

弟子たちは、彼らの愛する主を、なお敬愛してやまなかった。しかし、彼らの心は、不安と疑惑に閉ざされていた。彼らは、その苦悩のなかで、キリストが苦難と死について予告された言葉を思い出さなかった。もし、ナザレのイエスが真のメシヤであったならば、自分たちはこうした悲しみと失望に陥ったであろうか？ 救い主が墓に横たわっておられた、彼の死と復活の間のあの安息日の絶望的な時間の間、弟子たちはこの疑問に心を苦しめられていた。

イエスの弟子たちは、悲しみの夜に閉ざされてはいたが、捨てられてはいなかった。預言者は言っている。「たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。…主はわたしを光に導き出してください。わたしは主の正義を見るであらう。」「あなたには、やみも暗くはなく、夜も昼のように輝きます。あなたには、やみも光も異なることはありません。」神は次のように言われた。「光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる。」「わたしは目しいを彼らのまだ知らない大路に行かせ、まだ知らない道に導き、暗きをその前に光とし、高低のある所を平らにする。わたしはこれらの事をおこなって彼らを捨てない」（ミカ書七ノ八、九、詩篇一三九ノ一二、一一二ノ四、イザヤ書四二ノ一六）。

恵みの王国と栄光の王国

弟子たちが主の名によって宣べ伝えたものは、すべての点において正確で、それが指し示すできごととは、その当時でさえ起こりつつあった。「時は満ちた、神の国は近づいた」というのが、彼らのメッセージであった。「時」

——メシヤすなわち「油注がれた者」にまでおよび、ダニエル書九章の六十九週——の終了にあたって、キリストは、ヨルダン川でバプテスマのヨハネからバプテスマを受けられた後、聖霊の油をお受けになった。そして、彼らが「近づいた」と宣言した「神の国」は、キリストの死によって建設された。この王国は、彼らが信じるように教えられていた地上の帝国ではなかった。また、「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる」ときに建設される、将来の不滅の王国、「諸国の者はみな彼らに仕え、かつ従う」永遠の王国でもなかった（ダニエル書七ノ二七）。聖書でよく用いられている「神の国」という表現は、恵みの王国と栄光の王国の両方を指すのに用いられている。恵みの王国は、パウロによって、ヘブル人への手紙の中で述べられている。キリストが、「わたしたちの弱さを思いやる」ことのできる情け深い仲保者であることを指摘したあとで、使徒は、「だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵み……を受けるために、はばかりことなく**恵みの御座**に近づこうではないか」と言っている（ヘブル四ノ一五、一六）。恵みのみ座は、恵みの王国を代表している。なぜならばみ座の存在することは、王国の存在を意味しているからである。キリストは、多くのたとえのなかで、人の心に働く神の恵みの活動を指すのに、「天国」という表現を用いられた。

そのように、栄光のみ座は、栄光の王国を指すのである。救い主は、この王国について次のように言われた。「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集め」る（マタイ二五ノ三一、三二）。この王国は、まだ将来のものである。それは、キリストの再臨の時まで建設されない。

恵みの王国は、人類の墮落後直ちに、罪を犯した人類の贖罪の計画がたてられた時に、設立された。それは、

その時、神のみ心のうちに、そして神のお約束のもとに存在していた。そして、信仰によって、人々はその国民となることのできた。しかしそれは、キリストが亡くなられるまでは、実際に築かれなかった。救い主は、地上の伝道開始後においても、人類の強情さと忘恩にうみ疲れて、カルバリーの犠牲を避けることも可能であった。ゲッセマネにおいて、苦悶の杯は、彼の手の中で震えた。彼は、そのときでも、額から血の汗をめぐって、罪深い人類を、その罪惡のうちに滅びるままにしておくことがおできになった。もし彼がそうなされたならば、墮落した人類の贖罪はあり得なかったのである。しかし、救い主が、その生命をささげ、「すべてが終った」と叫んで息を引き取られた時、贖罪の計画が確保された。エデンにおいて、罪を犯した二人に対してなされた救いの約束は、批准された。これまで神の約束によって存在していた恵みの王国が、この時、設立されたのである。こうして、キリストの死、すなわち、弟子たちの希望を最終的に打ち砕いたと思われる事件そのものが、それを永遠に確かなものとした。それは、彼らにとって悲痛な失望ではあったが、彼らの信仰が正しかったという証明のクライマックスであった。彼らを悲嘆と失望に陥れた事件は、アダムの子孫に希望の扉を開くものであり、あらゆる時代の、神のすべての忠実な民に、来世と永遠の幸福をもたらす中心事件であった。

必要な試練

弟子たちは失望に陥ったけれども、神の無限の慈悲深いみ心は、成就しつつあった。彼らの心は、「これまでだれも語ったことがないように語った」彼の教えの恵みと力に捕えられていながらも、イエスに対する彼らの純

粹な愛に、世俗的誇りや利己的野心がいり混じっていた。彼らの主が、まさにゲッセマネの陰に入ろうとしておられた厳粛な時、過越の食事のための二階の広間においてさえ、「自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうか」と言つて、争論が彼らの間に、起つた（ルカ二二ノ二四）。彼らのすぐ前には、ゲッセマネの園の恥辱と苦悩、審判廷、カルバリーの十字架が待っていたのに、彼らの目は、王座と冠と栄光だけを見ていた。彼らが当時の偽りの教えに固執して、彼の国の眞の性質を示し、彼の苦難と死を予告する救い主の言葉に注意を払わなかったのは、彼らの心が高慢で、世俗の栄譽を渴望していたからであつた。こうした誤りの結果、厳しいがしかし必要な試練がやってきた。それは彼らを正すために、起こることを許された。弟子たちは、彼らのメッセージの意味を取り違え、期待したものを實現することはできなかったが、しかしそれでも、神から与えられた警告を伝えただけであつて、主は、彼らの信仰に報い、彼らの服従に栄譽を与えられるのであつた。彼らには、復活の主の輝かしい福音を全世界に伝える働きが託されるのであつた。彼らにはあまりに苛酷と思われるような経験が許されたのは、この働きに彼らを備えさせるためであつた。

復活後、イエスは、エマオ途上の弟子たちに現われ、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしてある事どもを、説きあかされた」（ルカ二四ノ二七）。弟子たちの心は感動した。信仰が燃えた。イエスがご自分を彼らに現わされる前から、彼らは、「新たに生れさせ」られ、「生ける望みをいだかせ」られた。彼らの理解を明らかにし、「確実な預言の言葉」の上に信仰を確立させることが、イエスの目的であつた。彼は、真理が、単にそれが彼ご自身のあかしによつて裏付けられたからだけでなく、型としての律法の象徴と影、そして旧約の預言によつて提示されたところの、疑う余地のない証拠のゆえに、彼らの心にしっ

かりと根をおろすよう望まれた。キリストの弟子たちは、自分たちのためばかりでなく、キリストに関する知識を世界に伝えるためにも、正しい理解に基づいた信仰を持たねばならなかった。イエスは、この知識を分け与える第一歩として、「モーセやすべての預言者」を弟子たちに示された。旧約聖書の価値と重要性について、復活の救い主がお与えになったのは、このような証言であった。

絶望から喜びへ

弟子たちが、彼らの主の愛に満ちた顔をもう一度見たときに、彼らの心には、どんな変化が起こったことであろう（ルカ二四ノ三二参照）。彼らは、これまでにない完全な意味において、「モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人」を見つけたのである。不安、苦悩、絶望が、完全な確信と曇りのない信仰にかわった。主の昇天後、彼らは「絶えず宮にいて、神をほめたたえていた」とは、なんと驚くべきことであろう。救い主の不面目な死しか知らなかった人々は、弟子たちの顔に悲しみと困惑と敗北の色を見ると思った。しかし、そこには喜びと勝利があふれていた。この弟子たちは、その前途に横たわる働きをなすために、なんとという準備を受けたことであろうか。彼らは、経験し得る最も深刻な試練を越えて、人間的見地からは全く敗北と思われる時に、神のみ言葉が勝利のうちに成し遂げられたのを見たのである。とすれば、いったい何が彼らの信仰をくじき、彼らの熱烈な愛を冷やすことができたであろうか。最も激しい悲しみのなかで、彼らは「力強い励まし」を受け、「たましいを安全にし不動にする錨」である望みを持つことができた（ヘブル六ノ一八、一九）。彼らは、

神の知恵と力とを目撃した。そして彼らは、「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すこと」ができないことを確信した。彼らは、「これらすべての事において勝ち得て余りがある」と言った（ローマ八ノ三八、三九、三七）。「主の言葉は、とこしえに残る」（ペテロ第一・一ノ二四）。「だが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、**よみがえって**、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」（ローマ八ノ三四）。

「わが民は永遠にはずかしめられることがない」と主は言われる（ヨエル書二ノ二六）。「夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る」（詩篇三〇ノ五）。これらの弟子たちは、復活の朝、救い主に会い、み言葉を聞いて心が内に燃えたとき、また、自分たちのために傷つけられた頭と手と足を見たとき、また、イエスが昇天に先立って、彼らをベタニヤまで連れ出され、手を天にあげて彼らを祝福し、「全世界に出て行って…福音を宣べ伝えよ」と命じられ、「見よ、わたしは…いつもあなたがたと共にいるのである」と付け加えられたとき（マルコ一六ノ一五、マタイ二八ノ二〇）、そして、ペンテコステの日に、約束された助け主がくだって上からの力が授けられ、信ずる者たちの魂が、昇天された主のご臨在を感じて震えたとき——そのとき彼らは、たとえ彼らの道が、主の道のように犠牲と殉教の道であっても、彼らが最初に弟子になったころ望んでいたような地上の王国の栄光よりは、主の恵みの福音の伝道に携わって、主の再臨の時に「義の冠」を受けることのほうを、選ばなかったであろうか。「わたしたちが求めまた思うところのいつさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかた」が、その苦難にあずかせてくださるとともに、彼の喜び、すなわち、「多くの子らを栄光に導

く「喜び、言葉に表わせない喜び、「永遠の重い栄光」にあずからせてくださる。それ「に比べると」、「このしばらくの軽い患難は」「言うに足りない」と、パウロは言うのである。

再臨信徒と聖所問題

キリストの初臨のときに、「天国の福音」を宣べ伝えた弟子たちの経験は、彼の再臨の使命を宣言した人々の経験とよく似ていた。弟子たちが出て行って、「時は満ちた、神の国は近づいた」と宣べ伝えたように、ミラーと彼の仲間、聖書に示されている最長にして最後の預言的期間がまさに終了しようとしていること、そして、審判の日が近づき、永遠の王国が始まるうとしていることを宣言した。時に関する弟子たちの宣教は、ダニエル書九章の七十週に基づいていた。ミラーと彼の仲間が伝えた使命は、七十週を含んだダニエル書八ノ一四の二千三百日の終結を告げるものであった。おのおのが伝えたことは、同じ大預言期間の異なった部分の成就に基づくものであった。

ウィリアム・ミラーと彼の仲間は、初期の弟子たちと同様に、自分たちが伝えているメッセージの意味を、十分に理解してはいなかった。長い間、教会内で確立されてきた誤りのために、彼らは預言の重大な部分を正しく解釈することができなかった。したがって、彼らは、世界に伝えるために神からゆだねられた使命を宣言したけれども、その意味を取り違えて、失望を味わうに至った。

ミラーは、ダニエル書八ノ一四の「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に

復する」という言葉を解釈する際、すでに述べたように、地上が聖所であるという一般の見解を採用し、聖所の清めとは、主の再臨の時に地上が火で清められることであると信じた。したがって、二千三百日の終結が明確に預言されているのを見いだしたとき、これは再臨の時を示しているものであると結論を下した。彼の誤りは、聖所とは何かということに関する一般の見解を受け入れたためであった。

キリストの犠牲と祭司職の影であった、型としての制度において、聖所の清めは、年ごとの奉仕において大祭司が行なう最後の務めであった。それは、贖罪の最後の働き、すなわち、イスラエルから罪を取り除くことであった。それは、天の記録に記されている神の民の罪を除く、あるいは消し去るという、天の大祭司の奉仕における最後の働きを予表していた。この務めには、調査の働き、審判の働きが含まれていた。そして、それは、キリストが力と大きな栄光のうちに天の雲に乗って来られる直前に起こる。なぜならば、彼が来られる時には、すべての人の運命は決定しているからである。イエスは、「報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」と言われる（黙示録二二ノ一二）。黙示録一四ノ七の「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という第一天使の使命の宣言は、再臨直前のこの審判の働きを言ったものである。

試練を乗り越えて

この警告を宣言した人々は、正しい時に正しい使命を伝えたのである。しかし、初期の弟子たちが、ダニエル書九章の預言に基づいて「時は満ちた、神の国は近づいた」と宣言したが、その同じ聖句の中にメシヤの死が預

言されているのを理解することができなかったように、ミラーと彼の仲間も、ダニエル書八ノ一四と黙示録一四ノ七に基づいた使命を伝えながら、主の再臨前に伝えなければならない他の使命が、まだ黙示録一四章に示されているのを悟ることができなかった。弟子たちが、七十週の終わりに建設される王国について誤ったように、再臨信徒たちは、二千三百日の終結に起こるべきことについて誤っていたのである。両方とも、一般の誤りを信じ、あるいはそれに固執したことが、真理に対して心を盲目にした。両者とも、神が伝えることを望まれた使命を布告して神のみ心を行なったが、その使命を誤って解釈して、失望を味わった。

しかし、神は、審判の警告をそのまま伝えることをお許しになって、ご自分の恵み深い御目的を果たされた。大いなる日が近づいていた。そして神は摂理のうちに、人々に彼らの心の状態を示すために、特定の時に関する試験をお与えになった。使命は、教会を試し、清めるためのものであった。彼らは、彼らの愛着がこの世にあるのか、それともキリストと天にあるのかを、悟らせられるのであった。彼らは救い主を愛すると言っていた。その愛を、今、証明しなければならなかった。彼らは、快く世俗の希望と野心を捨てて、主の再臨を歓迎したであろうか。この使命は、彼らの真の霊的状态を彼らに認めさせるためであった。それは、彼らが悔い改めて謙遜に主を求めるようになるために、恵みのうちに与えられたのであった。

失望は、彼らが伝えた使命を彼ら自身誤って解釈したことの結果であったが、しかしそれもまた、良いように変えられた。それは、警告を信じると言った人々の心を試すものとなった。失望に陥ったときに、彼らは、無分別に自分たちの経験を放棄し、神の言葉に対する確信を捨てるであろうか。それとも祈りと謙そんな心をもって、預言のどういふ点が理解できていなかったかを知ろうと努めるであろうか。どれくらい多くの者が、恐怖や衝動

や興奮にかられて行動していたことであろうか。どれくらい多くの者が、どっちつかずで半信半疑であったことだろうか。主の出現を喜ぶといった者は、非常に多かった。世の嘲笑と非難を受け、遅延と失望の試練に会うときに、彼らは、信仰を捨てるであろうか。彼らは、神が彼らを扱われる方法が、すぐに理解できないからといって、神の言葉の明白な証言に支持された真理を捨ててしまうであろうか。

この試練は、真の信仰をもって、み言葉と神の霊の教えであると信じている事柄に従っていた人々の、その強さを明らかにするのであった。聖書を聖書自身の注解者とせず、人間の説や解釈を信じることの危険が、この経験によって、初めて教えられるのであった。信仰の子供たちにとって、彼らの誤りからくる困惑と悲嘆は、必要な矯正を行なうのであった。彼らは、預言の言葉の、いっそう厳密な研究へと導かれるのであった。彼らは、自分たちの信仰の基礎をもっと注意深く調べ、一般に広くキリスト教界において受け入れられたものであっても、真理の聖書に基礎をおかないものは、みな拒否するように教えられるのであった。

こうした信者たちに、最初の弟子たちの場合と同様に、試練の時には理解できなかったことが、後に明らかにされるのであった。彼らが、「主が彼になされたことの結末」を見ると、彼らは、誤りの結果試練を受けたとはいえ、神の彼らに対する愛の御目的は着実に成就していたことを知るのであった。彼らは、神が「いかに慈愛とあわれみとに富」んでおられるかということ、そして「主のすべての道はその契約とあかしとを守る者にはいつくしみであり、まことである」ということを、尊い体験によって学ぶのであった。

第二〇章

十九世紀の世界的再臨運動

世界的な大運動

キリストの再臨が間近いという宣言のもとに、宗教的大覺醒運動が起こることが、黙示録一四章の第一天使の使命の預言の中に予告されている。「もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』」(六、七節)。この警告が、天使によって宣布されるといわれていることは、意義深い。神は、天使の純潔と栄光と力とによって、この使命の果たす働きの高尚な性質と、それに付随した力と栄光とを象徴することをよしとされた。天使が、「中空を飛び」、「地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に」宣布するために、「大声」

で言ったということは、この運動が急速で世界的範囲のものであることを証明している。

この運動がいつ起こるものであるかについては、メッセージ自体が明らかにしている。それは、「永遠の福音」の一部であると宣言されている。そして、審判の開始を告知している。救いのメッセージは、各時代において宣傳伝えられてきた。しかし、このメッセージは、終末時代においてのみ宣布される福音の一部分である。というのは、その時において初めて、さばきの時が**来た**ということが出来るからである。預言は、審判が始まるまでに相次いで起こる種々の事件を示している。特にダニエル書がそうである。しかし、ダニエルは、最後の時代に関する預言を、「終りの時まで」秘し、封じておくように命じられた。この時が来るまで、これらの預言の成就に基づいて審判に関するメッセージを宣布することはできなかった。しかし、終わりの時に、「多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」と預言者は言っている（ダニエル書一二ノ四）。

使徒パウロは、彼の時代にキリストが来られると期待しないようにと、教会に警告した。「まず背教のことが起り、不法の者……が現れるにちがいない」と彼は言っている（テサロニケ第二・二ノ三）。大背教が起こり、「不法の者」の長い支配期間の終わったあとで、初めてわれわれは、主の再臨を期待することができる。「不法の秘密の力」「滅びの子」とも言われている「不法の者」とは、千二百六十年の間、至上権をふるつと預言された法王権のことである。この期間は、一七九八年に終結した。キリストの再臨は、この時より前には起こり得ないのであった。パウロは、一七九八年までに及びキリスト教時代全体を、彼の警告の中に含ませている。キリスト再臨のメッセージが宣布されるのは、その時以後になるのである。

過去において、このようなメッセージは伝えられたことがない。すでに触れたように、パウロもそのことを宣

布しなかった。彼は主の来臨を、その当時よりはるかに先のこととして回信の人々に示した。マルチン・ルターは、審判を、彼の時代から約三百年後のことであるとした。しかし、一七九八年以来、ダニエル書は封を開かれ、預言の知識は増加し、審判の切迫という厳粛なメッセージを多くの者が宣言したのである。

十六世紀の大宗教改革と同様に、再臨運動は、キリスト教世界の各国で同時に起きた。ヨーロッパとアメリカの両方で、信仰と祈りの人々が、預言を学び、聖書を研究して、万物の終末が近いという確かな証拠を認めた。各地において、孤立したキリスト者の諸団体が、聖書の研究だけによって、救い主の再臨が近いと信じるに至った。

伝道者ウォルフの少年時代

ミラーが、審判の時を示す預言の解釈に到達してから三年後の一八二一年に、「世界的伝道者」ジヨセフ・ウォルフが、主の再臨の切迫を宣べ伝え始めた。ウォルフは、ドイツ生まれのユダヤ人で、彼の父はラビであった。彼は、幼少の時に、キリスト教の真理を信じた。彼は、活発で探求心の強い精神の持ち主で、毎日彼の父の家に敬虔なユダヤ人たちが集まって、ユダヤ民族の希望と期待を語りあい、来たるべきメシヤの栄光とイスラエルの回復について話すのを、熱心に聞いた。ある日、ナザレのイエスのことを聞いたので、少年は、それがだれであるかをたずねた。「それは、最も大きな才能をもったユダヤ人だ。しかし、自分がメシヤだと言ったために、ユダヤの法廷は彼に死を宣告した」というのが答えであった。「どうしてエルサレムは滅亡し、ぼくたちは、とらわれの身になっているの？」と、さらにたずねた。父は悲しげに、「それはね、ユダヤ人が預言者たちを殺した

からだよ」と答えた。少年は、すぐに考えることがあった。「イエスも預言者だったのだ。そして、ユダヤ人は、罪がないのにその人を殺したのだ。」彼はこのことを、非常に強く感じたので、キリスト教会に入ることは禁じられていたけれども、しばしば教会の外に立ち止まって、説教を聞いた。

彼は、わずか七才の時のことであるが、近所のキリスト者の老人に、やがてメシヤが出現するときのイスラエルの勝利について誇らしげに語っていた。しかしそのとき、この老人は、親切に次のように言った「坊や、ほんとうのメシヤはだれであるか、教えてあげよう。それは、ナザレのイエスだ。…そのかたを、きみたちの先祖たちが、預言者たちと同じように十字架に架けたのだ。家に帰って、イザヤ書の五三章を読んでごらん。そうすれば、イエス・キリストが神の子だということがよくわかるだろう。」彼はすぐに納得がいった。家に帰って、聖書を読み、それがナザレのイエスにおいて完全に成就しているのを見て驚いた。あのキリスト者の言葉は、ほんとうだったのだろうか。少年は、父親に預言の説明を求めたけれども、父親は厳しい顔をして何も言わなかった。二度とこの問題についてたずねなかった。しかし、このことは、キリスト教についてもっと知りたいという彼の願いを増すだけであった。

彼が知ろうとしたことは、このユダヤの家庭では、故意に彼に知らせないようにされていた。ところが彼は、まだ十一才の時に、父の家を離れて世の中に出て行き、教育を受け、また自分の宗教と一生の仕事とを選ぶことになった。彼は一時親類の家に泊まっていたが、間もなく、背教者であるというのでそこを追われて、寂しく、無一文で、見ず知らずの人々の間で生活しなければならなかった。彼は熱心に研究を続け、ヘブル語を教えて生活を支え、転々と流れ歩いた。彼は、カトリックの教師の影響を受けて、カトリック教を信じ、自国民に伝道す



ジョセフ・ウォルフ博士は主の再臨を信じ、アフリカ、近東、アジア、米国を旅して、幾千の人々に再臨のメッセージを説いた。

る宣教師になろうと考えた。数年後に彼は、この目的のもとに、さらに研究を続けるために、ローマのプロパガンダ大学へ行った。ここにおいて彼は、その独立的思想と率直な発言のために、異端者という非難を受けた。彼は公然と教会の悪弊を攻撃し、改革の必要を説いた。彼は、初めのうちはカトリック教の高位者たちから特別に扱われていたが、しばらくしてローマから退去させられた。彼は、教会の監視のもとに、各地を渡り歩いたが、とうとう、彼はローマ教の拘束に服従することができないということが明らかになった。彼は、矯正することができない者であるという宣告を受けて、どこへでも自由に行つてよいことになった。そこで彼は、英国へ行き、プロテスタントの信仰を表明して、英国国教会に加わった。彼は二か年の研究の後、一八二一年に伝道を開始した。

再臨の切迫とウォルフ

ウォルフは、「悲しみの人で、病を知っていた」人としてのキリストの初臨の大真理を受け入れるとともに、預言が同様の明快さをもって、力と栄光を伴うキリストの再臨を示していることをも悟った。彼は人々を、約束されたあかたとしてのナザレのイエスに導き、人々の罪の犠牲として身を低くして来られた初臨へと向けるとともに、王また救い主として来られる再臨のことをも人々に教えた。

彼は次のように言った。「真のメシヤ、ナザレのイエス、すなわち、手と足を裂かれ、ほふり場にひかれて行く小羊のように引いて行かれ、悲しみの人で病を知っておられ、つえがユダを離れ、立法者のつえが足の間を離れたあとで初臨なさったあかたは、天使のかしらのラツパとともに、天の雲に乗って再臨なさる。」^三「そして、オ

リブ山上に立たれる。そして、ひとたびアダムに与えられて、彼が失った世界の統治権（創世記一ノ二六、三ノ一七参照）が、イエスに与えられる。彼は全地の王となる。被造物のうめきと悲しみはやみ、賛美と感謝の声が聞こえる。……イエスが父の栄光をもって、天使たちと来られる時、……死せる信徒たちがまずよみがえる（テサロニケ第一・四ノ一六、コリント第一・一五ノ二三参照）。これは、われわれキリスト者が第一の復活と呼ぶものである。それから動物界は、その性質を変える（イザヤ書一一ノ六―九参照）。そして、イエスに従う（詩篇八篇参照）。ここに全世界の平和が訪れる。^四「主はもう一度地をぐらんになって、『それは、はなはだ良い』と言われる。」^五

ウォルフは、主の来られるのが間近いと信じ、彼の預言期間の解釈によれば、この大いなる成就の日は、ミラーが指示した時期の、まさにその数年以内におかれていた。「その日、その時は、だれも知らない」という聖句を引用して、人間は再臨の切迫について何も知るべきではないと主張する人々に対し、ウォルフは答えた。「主は、その日、その時は、**決して**わからないと言われたであろうか。いちじくの葉が出ると夏が近いことがわかるように、少なくとも彼の再臨の**接近**をわれわれが知ることができるように、時のしるしをお与えにならなかったであろうか（マタイ二四ノ三二参照）。彼ご自身が、預言者ダニエルの書を読むだけでなく、それを悟れと勧告されたのに、われわれは、その期間について、決して知るべきではないのであろうか。そして、そのダニエル書自体のなかに、この言葉は終わりの時まで封じておくように言われており（彼の時代には封じられていたわけである）、また『多くの者は、あちこちと探り調べ（時について観察し思考するというヘブルの表現）、そして**知識**（時に関する）が増すでしょう』（ダニエル書一二ノ四）と言われている。さらに、主はこれによって、時の**接近**がわからないというのではなくて、**正確な『その日その時**が、あなたがたにはわからないからである』と言われたのである。ノアが箱舟を用意し

たように、われわれに主の再臨の準備をさせるだけの十分な時のしるしが与えられると、主は言われるのである。」^六

一般に行なわれていた聖書の解釈法、あるいは誤った解釈法について、ウォルフは次のように書いた。「キリスト教会の大部分は、聖書の明白な意味からそれて、人類の将来の幸福は空中を動き回ることにあると信じる仏教徒の空想的な解釈のほうに向かい、**ユダヤ人**とあるところは**異邦人**と解釈し、**エルサレム**とあるのは**教会**と解釈している。また、**地**といえ**ば空**のことであり、**主**の来られることは**伝道団体**の発展、主の家の山にのぼるとい**えば、メソジスト信者の大会合**であると解釈している。」^七

ウォルフの世界的宣教

ウォルフは、一八二一年から一八四五年の二十四年間に、広く各地を旅行した。アフリカでは、エジプトとアビシニアを訪問した。アジアでは、パレスチナ、シリア、ペルシア、ブハラ、インドを歴訪した。また、アメリカへも行き、その途中で、セント・ヘレナ島で説教した。彼は、一八三七年八月にニューヨークに到着し、同市で説教したあとで、フィラデルフィア、ボルチモアで説教し、そして最後にワシントンに向かった。彼は言っている。「ここで、前大統領ジョン・クインシー・アダムスは、国会において動議の提出をなし、国会は満場一致で、議場をわたしの講演のために提供することを可決した。そこでわたしは、土曜日に講演を行ない、国会議員全員の出席とともに、バージニアの監督、ワシントン市の聖職者や市民などの出席を得るの光栄に浴した。ニュージャージー州、ペンシルバニア州においても、同様の光栄が議会から与えられ、その前で、わたしは、アジア

におけるわたしの研究と、イエス・キリストの個人的支配についても語った。」^八

ウォルフ博士は、ヨーロッパのいかなる権威の保護もなしに、最も未開の国々を旅行し、多くの苦難に耐え、数知れぬ危険に取りかこまれた。彼は、おち打たれ、飢えに苦しみ、奴隷として売られ、三度も死刑の宣告を受けた。盗賊に襲われたこともあり、渴きのために死になつたこともあつた。あるときには、持ち物を全部奪われて、山の中を歩いて何百マイルも旅し、激しい吹雪が顔を打ち、素足は凍つた地にふれて感覚を失つてしまつたこともあつた。

野蛮で敵意を抱いた部族の中に武装なしで行くものではないという警告に対して、彼は、自分には、「祈り、キリストに対する熱心、キリストの助けに対する確信」という「武装が備わっている」と言明した。「わたしは、神の愛と隣人愛を心に抱いており、手には聖書を持っている」とも言つた。^九彼は、どこへ行くにも、英語とヘブル語の聖書を持つて行つた。後年のある旅行について、彼は次のように言っている。「わたしは、…聖書を開いたまま手に持っていた。わたしは、聖書の中にわたしの力があり、その力がわたしを支えてくれるのを感じた。」^{一〇}

こうして彼は働き続け、審判のメッセージは、地球上人間の住んでいるところの大部分に伝えられた。ユダヤ人、トルコ人、ゾロアスター教徒、ヒンズー人、その他多くの国民や人種の間で、彼は、それらさまざまな国語で神の言葉を伝え、至るところで、メシヤの王国の接近を伝えた。

ブハラを旅行中に、彼は僻地の孤立した人々が、まもなく主が来られるという教義を信じているのを発見した。イエメンのアラブ人は、「**シーラ**」という書物を持つていて、それにキリスト再臨と彼の栄光の支配のことが書かれている。彼らは、「一八四〇年に大事件が起こると予期している」と彼は言っている。^{一一}「イエメンで、…わたし

はレカブの子孫たちと六日間過ごした。彼らは、酒を飲まず、ぶどう畑を作らず、種をまかない。彼らは天幕に住み、レカブの子、善きヨナダブ老人をおぼえている。彼らの間に、ダンの部族のイスラエルの子孫がいて、……レカブの子孫とともに、メシヤが天の雲に乗ってまもなく来られることを待望しているのを、わたしは見いだした。」^三

同様の信仰が、他の宣教師によって、タタール人たちの中にも見いだされた。タタール人の祭司が、宣教師に、キリストの再臨はいつかと質問した。宣教師が、それについては何も知らないと答えると、祭司は、聖書の教師と称する人がそのように無知であるとは、と非常に驚いた様子であった。そして、キリストは一八四四年ごろに来られるという、預言に基づいた彼自身の信仰を表明した。

世界各地の再臨運動

再臨使命は、英国においては、早くも一八二六年から伝えられ始めた。この運動は、米国のようにはっきりとした形をとらなかった。再臨の正確な時は、それほど一般には伝えられなかったが、しかしキリストが力と栄光をもってまもなく来られるという大真理は、広く宣言された。そして、これは、単に非国教徒たちの間だけではなく、英国の著作家モーラント・ブロックの言うところによれば、英国国教会の牧師約七百人が、「この、御国の福音」の宣布に従事したということである。一八四四年が主の再臨の時であるというメッセージも、英国で伝えられた。再臨に関する出版物が米国から来て広く配布された。書籍や雑誌が英国で再発行された。そして、一八四二年に、米国で再臨信仰を受け入れた英国人口バート・ウィンターが帰国して、主の来臨を宣布した。彼



1826年、イギリスのアルベリー・パークにおいて、キリスト再臨の預言を研究するための、ヨーロッパにおける最初の会議が開催された。多数の聖書研究者がここに集まって、預言の解釈に関する彼らの見解を比較し、よりいっそうの光を求めた。

の事業に協力する者が多くあらわれ、審判のメッセージは英国各地で宣布された。

未開と聖職者たちの政略とのただ中であつた南米において、スペイン人でイエズス会のラクンザは、聖書を知つて、キリストが速やかに来られるという真理を受け入れた。彼は、世に警告を発したいと思つたが、ローマの譴責を免れるために、改宗したユダヤ人をよそおつて「ラビ・ベンエブラ」という偽名で、彼の見解を発表した。ラクンザは十八世紀の人であつたが、一八二五年ごろに彼の本はロンドンに渡り、英訳された。この書物の発行は、英国においてすでに起こつていた再臨問題に関する興味を、深めることになった。

ドイツにおいてこの教義は、十八世紀に、ルーテル教会の牧師で、聖書学者・批評家として有名なベンゲルによつて唱えられた。教育を終了したベンゲルは、「神学の研究に没頭した。若い時からの教育と訓練によつて深められた、彼のまじめで宗教的な性格は、自然と彼をそのほうへ向けたのであつた。古今の思慮深い青年たちと同様に、彼も、宗教的な疑惑や困難と戦わなければならなかつた。そして彼は、『彼の哀れな心を刺し通して、彼の青春を耐え難いものにした多くの矢』について、感慨深く語っている。『ビュルテンベルクの宗教法院の一員となつてから、彼は宗教の自由を提唱した。』彼は、教会の義務と特権を維持しながらも、良心的理由のもとに教会の交わりから去らねばならないと考える者には、あらゆる正当な自由を与えるべきことを主張した。』^三この方針の好結果は、今でも彼の故郷に残っている。

降誕節の日曜日の説教を黙示録二一章から準備していたときに、キリスト再臨の光がベンゲルの心に差し込んだ。黙示録の預言が、これまでになくはつきりと理解できた。彼は、預言者に示された光景の驚くべき重要とすばらしい栄光とに圧倒されて、一時は、この問題の瞑想を差し控えなければならなかつた。彼が講壇にあつた

ときに、それが再び、そのまま生き生きと力強く彼に示された。その時以来彼は、預言、特に黙示録の預言の研究に没頭し、まもなく、預言はキリストの再臨が近いことを示しているという信仰に到達した。彼が再臨の時として定めた時は、後にミラーが定めた時と二、三年しか離れていなかった。

ベンゲルの著書は、キリスト教国に広く伝わった。預言に対する彼の見解は、彼の故郷のビュルテンベルクにおいて、一般に受け入れられ、ドイツの他の地方にもある程度波及した。この運動は彼の死後も続けられ、再臨使命は、他の国々において人々の注目をひいたのと時を同じくして、ドイツでも聞かれた。初期のころにロシアに行き、そこで植民地を開いた信者もあつた。今日においても、同国のドイツ教会では、キリストがまもなく来られるという信仰を保っている。

フランス、スイスの再臨運動

光は、フランスやスイスにも輝いた。ファールレルやカルバンが宗教改革の真理を広めたジュネーブでは、ゴーセンが再臨使命を伝えた。ゴーセンは、学生時代に、十八世紀末から十九世紀の初めにかけて全ヨーロッパに普及した合理主義の精神に出会った。そして彼は、伝道を始めたころには、真の信仰を知らなかったばかりか、懷疑的傾向を持っていた。若い時から彼は預言の研究に興味を持っていた。彼は、ローリンの著わした『古代史』を読んで、ダニエル書二章に注意を向けるようになった。そして、歴史家の記録に見るとおり、預言が驚くばかり正確に成就していることに心を打たれた。これこそ、聖書が靈感によるものであるという証拠であつた。これ

が後年、危険のただ中において彼の錨となった。彼は合理主義の教えに満足することができなかった。そこで彼は、聖書を研究し、さらに明らかな光を探究することによって、やがて積極的な信仰へと導かれた。

預言の研究をしているうちに、彼は、主の来臨は近いと確信するに至った。彼は、この大真理の厳肅さと重要性を強く感じ、それを人々に伝えたいと願った。しかし、ダニエル書の預言は神秘で理解できないという一般の見解が、彼にとって重大な障害であった。そこで彼は、ついに、ファールルがジュネーブ伝道の時にしたように、まず子供たちから始めて、彼らによって親たちの興味を起こさせようとした。

後年になって、この企ての目的について、彼は次のように言った。「このことをよく理解してもらいたい。わたしは、こうした親しみやすい方法で真理を提示したいと願い、子供たちに語ったのは、それが重要でないからではなく、かえって、それが非常に価値あるものだからなのである。わたしは聞いてもらいたかった。まず大人に話したなら、聞いてもらえないだろうと思った。」だからわたしは、いちばん小さい者のところへ行く決心をした。わたしは子供たちを集めた。もしこのグループが増加し、彼らが耳を傾けて、喜びと興味をおぼえ、問題を理解して、それを説明することができるようになれば、まもなく次の仲間ができることは確かである。そして、それに代わって今度は大人が、これは腰をすえて研究する価値があると認めるようになる。こうなったときに、目的が達成されたのである。」^{一四}

この努力は成功を収めた。彼が子供たちに語っているうちに、大人が来て耳を傾けた。彼の教会の座席は熱心な聴衆であふれた。その中には、地位や学識のある人、ジュネーブを訪問中の旅行者や外国人もいた。こうしてメッセージは、他の地方にも伝わった。

こうした成功に力を得たゴーセンは、フランス語を話す人々の教会において預言書の研究を盛んにしたいと考え、教科書を発行した。「子供たちに教えた教訓を出版することは、わかりにくいという口実のもとにこうした書物をなおざりにしがちな大人たちに対して、『あなたがたの子供たちでさえ理解できるのに、どうしてわかりにくいなどと言えるでしょうか?』と言つたためであつた」とゴーセンは語っている。彼はつけ加えて言う。「わたしは、できることならば、預言の知識を教会員に広く与えたいと熱望した。」「実際、時代の要求に答えるのに、この研究以上のものはないように思われた。」「われわれが、切迫している患難に備え、主イエス・キリストを待ち望むのは、これによつてである。」

ゴーセンは、フランス語の説教者中、最も著名で愛された人々のひとりであつたが、しばらく後に、聖職をやめさせられた。その主な理由は、教会の教理問答——積極的信仰に欠けた、単調で合理主義的な指針——を用いなくて、聖書を用いて青年を教育したからであつた。彼は後に、神学校の教師になり、また日曜日には伝道師として子供たちに話し、聖書を教え続けた。預言についての彼の著書も、非常な関心をひき起こした。彼は、教授として、また、印刷物によつて、また、子供の教師という彼が最も愛した仕事によつて、長年の間、広汎な感化を及ぼした。そして彼は、主の再臨が近いことを示す預言の研究に多くの人の注意を引く器となつた。

スカンジナビアにおける児童の説教

再臨使命は、スカンジナビアにおいても宣布され、広く人々の興味を引き起こした。多くの者は、軽率な安心

感から覺めて、罪を告白して放棄し、キリストの名による許しを求めた。しかし、国教会の聖職者たちはこの運動に反対し、そのために、使命の宣布者たちは投獄された。主の再臨の説教者たちがこうして沈黙させられた多くの場所で、神は、子供たちを用いて、奇跡的方法でメッセージをお送りになった。彼らは未青年であったから、国の法律は彼らを禁じることができず、彼らはなんの妨げもなく語ることを許された。

運動は主として下層階級の人々の間で行なわれ、人々が警告を聞くために集まったのは、労働者たちのそまつな住居においてであつた。幼い説教者自身も、たいていは貧しい家の子であつた。六才や八才の者たちもいた。彼らは、救い主を愛することをその生活にあかしし、神の聖なる要求に従つて生活しようと努めていたが、通常は同年配の子供たちの普通の知性と能力をあらわしているにすぎなかつた。しかし、彼らが人々の前に立つと、彼らの生来の能力以上の力に動かされていることは明白であつた。声も態度も一変し、嚴肅な力をもって審判の警告をなし、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という聖句を引用した。彼らは、人々の罪を譴責し、不道德と惡徳を非難するだけでなく、世俗と背教を責め、速やかに下ろうとしている怒りから逃れるように聴衆に警告した。

人々は、これを聞いて震えた。力ある神の靈が、彼らの心に語りかけた。多くの者は、新たに深い興味をもつて、聖書の研究をするようになり、不節制で不道德な者は生活を改革し、不正行為を改める者もあつた。このように著しい結果を見て、国教会の牧師でさえ、この運動に神の手を認めないわけにはいかなかつた。

救い主來臨の知らせがスカンジナビア諸国に伝えられることは、神のみ心であつた。そして、神のしもべたちの声が沈黙させられたときに、神は、働きを成し遂げるために、子供たちに聖靈を注がれた。イエスが喜びに満

ちた群衆を従えて、エルサレムに近づかれたとき、彼らは勝利の叫びをあげ、しゅろの枝を打ち振って、イエスをダビデの子と宣言した。それを聞いたしつと深いパリサイ人たちは、彼らを黙らせるようにイエスに求めた。しかしイエスは、こうしたことはみな預言の成就であって、もし彼らが黙っているならば、石が叫ぶであろうと言われた。人々は、祭司や司たちにおどされて、エルサレムの門に入ると喜びの叫びをやめた。しかし、神殿の庭の子供たちは、その後でまた歌い出し、しゅろの枝を振って、「ダビデの子に、ホサナ」と叫んだ（マタイ二一ノ八一―六参照）。パリサイ人が、ひどくきげんを損じて、「あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか」とイエスに言ったとき、イエスは答えて、「そつだ、聞いている。あなたがたは『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』とあるのを読んだことがないのか」と言われた。神は、キリストの初臨の時に子供たちによって働かれたように、再臨使命の宣布も彼らによってなされたのである。救い主の再臨は、すべての民族、言語、国民に宣べ伝えられるという神の言葉は、成就されなければならない。

米国の大再臨運動

ウィリアム・ミラーと彼の仲間に、米国に警告を発する務めが与えられた。米国は、大再臨運動の中心となった。第一天使の使命が最も直接的に成就したのは米国であった。ミラーと彼の仲間の著書は、遠くの地方まで広まった。世界じゅうで宣教師が行っているところはどこでも、キリストがまもなく来られるという喜びの知らせが伝えられた。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という永遠の福音の使命

は、遠く広く伝えられた。

一八四四年の春にキリストの再臨があると指示するように思われる預言のあかしは、人々の心を強くとらえた。州から州へと使命が伝わるにつれて、至るところで広く人々の興味をわき立たせた。多くの者は預言の期間に関する議論の正しいことを認め、自分たちの意見を捨てて、喜んで真理を受け入れた。ある牧師たちは、教派的見解や感情を捨て、給料や教会も捨てて、イエスの再臨を宣言することに参加した。しかし、この使命を信じる牧師は、比較的少なかった。したがって、それは、質朴な一般信徒たちに大部分ゆだねられた。農夫は畑を離れ、職工は道具を、商人は商品を、知的職業の者はその地位を捨てた。しかし、働き人の数は、成し遂げるべき働きに比して少なかった。神を敬わない教会や罪悪の中にある世界の状態は、真の見張人たちの心を悩ました。そして彼らは、人々を悔い改めと救いに導くために、喜んで労苦と窮乏と苦難に耐えた。働きは、サタンの攻撃に会いながらも、徐々に進展し、幾千の者が再臨の真理を信じるようになった。

至るところで、人々の心を打つあかしが発せられ、世俗の人々も教会員も、罪人はともに来たるべき怒りから逃れるよう警告が発せられた。キリストの先駆者、バプテスマのヨハネのように、説教者たちは、木の根元におの置き、悔い改めにふさわしい実を結ぶようにとすべての者に訴えた。彼らの感動的な訴えは、一般の説教壇から聞かれる平和と無事の保証とは著しく異なっていた。そして、使命が伝えられたところではどこでも、人の心を動かした。聖書からの単純で直接的な証言が、聖霊の力によって心に印象づけられたときに、その強い確信を拒みきれぬものはなかった。信仰を表明していた者たちも、自分たちが危険を知らずに安心していただけに気づいた。彼らは、自分たちの背教、世俗、不信、誇り、利己心に気づいた。多くの者が悔い改めて、謙そん

に主を求めた。長い間地上の事物に執着していた愛情が、今や天に向けられた。神の霊が彼らの上に宿った。そして彼らの心は和らげられ、静められて、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という叫びに参加した。

罪人は、泣いて、「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」とたずねた。不正直であつた者は、なんとかして賠償しようとした。キリストのうちに平和を見いだした者はみな、その祝福を人々に分かちたいと願つた。親の心は子に向けられ、子の心は親に向けられた。誇りと疎遠の壁は払いのけられた。心からの告白がなされ、家族の者たちは、最も近く最も愛する者の救いのために働いた。熱心なとりなしの祈りの声が、しばしば聞かれた。どこでも、苦悩にあえぐ魂が、神に嘆願していた。自分自身の罪の許しの確証を得るために、あるいは親族や隣人の改心のために、一晩じゅう熱心に祈る者も多かつた。

あらゆる階級の人々が、再臨信徒の集會に群がり集まつた。金持ちも貧者も、地位の高い者も低い者も、さまざまな理由から、再臨の教義を自分で聞きたいと願つた。主は、主のしもべたちがその信仰の理由を説明するあいだ、反対の精神を阻止された。

時には、器が弱いこともあつた。しかし、神の霊が、ご自身の真理に力を与えた。これらの集會では、天使がその場にいることが感じられ、日ごとに多くの者が信者の群れに加えられた。キリスト再臨切迫の証拠がくり返されるとき、大群衆はかたずをのんで、厳肅な言葉に聞き入った。天と地は、互いに接近したように思われた。神の力が、老いた者にも若い者にも、中年の者にも感じられた。人々は、□々に賛美を歌いながら家に帰り、喜ばしい歌声が、静かな夜空に響いた。こうした集會に出席した者は、その感銘深い光景を忘れることができなかった。

再臨運動に対する反対

キリスト再臨の時として特定の時を宣言したことは、あらゆる階級の多くの者、すなわち、説教壇に立つ牧師から神を恐れぬ無暴な罪人に至るまでの、大反対を受けた。これは、預言の言葉の成就であつた。「終りの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、『主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであつて、変つてはいない』と云うであろう」(ペテロ第二・三ノ三、四)。救い主を愛すると公言する多くの者は、自分たちは再臨の教義に反対しているのではない、ただ日を定めることに反対なのだと言つた。しかし、すべてを見られる神は、彼らの心を読まれた。彼らは、キリストが義をもって世界をさばくために来られるということを聞くことを好まなかつた。彼らは、不忠実なしもべたちであつた。彼らのわざは、心を探られる神の審査に耐えられなかつたので、彼らは主に会つことを恐れた。キリスト初臨の際のユダヤ人たちのように、彼らはイエスを迎える準備がなかつた。彼らは、聖書からの明白な議論に耳を傾けることを拒んだだけでなく、主を待望している人々を嘲笑した。サタンと彼の天使たちは喜んだ。そして、主の民と称する人々でさえ、主に対する愛に欠け、主の再臨を望んでいないと言つて、キリストと天使たちの前で嘲笑した。

再臨の信仰に反対する人々が、最もひんぱんに持ち出した議論は、「その日、その時はだれも知らない」とい

うことであった。聖書にも、「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも……知らない、ただ父だけが知ってられる」とある（マタイ二四ノ三六）。この聖句を明快に矛盾なく説明したのは、主を待望する人々であって、これを誤って解釈していたのは反対者であったことが、明らかに示された。この言葉は、キリストが神殿に最後の別れを告げて出られた後、オリブ山上での弟子たちとの記念すべき談話の中で言われたものである。弟子たちは、「あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」とたずねた。イエスは、彼らにしるしを与えて、そして言われた。「そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」（同二四ノ三、三三）。救い主の一つの言葉をもって、他の言葉が無意味にしてはならない。彼が来られる**その日**、**その時**はだれも知らないが、われわれは、それが近づく時について教えられており、また、それを知るように求められている。さらにまた、神の警告を無視し、主の再臨が近いことを知ることを拒み、またおろそかにすることは、ノアの時代の人々が洪水の来るのを知らなかったのと同様に、われわれにとっても致命的であることが教えられている。また、同じ章のたとえば、忠実なしもべと不忠実なしもべが対比され、「自分の主人は帰りがおそい」と心の中で思つ者の運命が示されて、キリストは、何によつて、目をさましてキリストの再臨を教える者と、それを拒否する者を見分けられ、報われるかが教えられている。「だから、目をさましていなさい。」「主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである」（同二四ノ四二、四六）。「もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない」と主は言われる（黙示録三ノ三）。

再臨信仰と一般教会

パウロは、主の再臨が不意に来ることになる人々のことについて語っている。「主の日は盗人が夜くるように来る。人々が平和だ無事だと言っているその矢先に……突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それらのがれることは決してできない。」しかし、救い主の警告に心をとめた人々について、次のようにつけ加えている。「しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない」（テサロニケ第一・五ノ二―五）。

こうして、聖書は人々が、キリストの再臨の切迫について何も知らずにいてよいとは認めていないことが明らかにされた。しかし、真理を拒否する口実だけを求めていた人々は、この説明に耳を閉ざし、大胆にあざける者たちや、またキリストの牧師と称する人々さえも、「その日、その時は、だれも知らない」という言葉を叫び続けた。人々が目をさまして、救いの道を求め始めると、宗教の教師たちは、彼らと真理の間に介入し、神の言葉を曲解することによって彼らの恐れをしずめようとした。不忠実な見張人たちは、一致して大欺瞞者の働きをなし、神が平和を語られないのに、平和だ無事だと叫んだ。キリスト時代のパリサイ人のように、多くの者は、自分自身天国に入ることを拒み、それに入ろうとする者を妨げたのであった。この人々の血の責任は、彼らの手に

求められるのである。

たいていの場合、教会内の最も謙遜で献身した人々が、最初にメッセージを受け入れた。聖書を自分で研究した人々は、預言に関する一般の見解が非聖書的であることを見ないわけにはいかなかった。そして、人々が牧師たちの支配下にないところでは、また人々が自分たちで聖書を研究したところでは、どこでも、再臨の教義が神の権威に基づくということは、ただ聖書と比較するだけで明らかとなった。

多くの者は、不信仰な信者仲間たちから迫害された。教会での地位を保つために、その希望について沈黙を守ることに同意した者もあった。しかし、神に忠実であれば神がゆだねられた真理を隠すことはできないと感ずる者もあった。キリスト再臨の信仰を表明しただけで教会から除名された者も、少なくなかった。信仰のこつした試練に耐えた者にとって、「あなたがたの兄弟たちはあなたがたを憎み、あなたがたをわが名のために追い出して言った、『願わくは主がその栄光をあらわして、われわれにあなたがたの喜びを見させよ』と。しかし彼らは恥を受ける」という預言者の言葉は、ほんとうに貴いものであった（イザヤ書六六ノ五）。

神の天使たちは、警告の結果を非常な興味をもって見守っていた。教会が全般的に使命を拒否すると、天使たちは悲しみながら去って行った。しかし、再臨の真理について、まだ試みられていない人々が多くいた。夫、妻、両親、子供たちなどに迷わされて、再臨信徒が説く異端は、聞くだけでも罪であると思った者が多くいた。天使たちは、このような人々をよく見守るように命じられた。なぜならば、もう一つの光が、神のみ座から彼らの上に輝くことになっていたのである。

再臨信徒の試練期

使命を信じた人々は、言うに言われぬ希望に満たされて、救い主の来られるのを待った。彼らが主に会うことを予期した時は切迫した。彼らは、冷静な厳粛さをもってこの時を待った。彼らは、神との親しい交わりの中で安んじていた。これは、輝かしい来世において与えられる平和の先ぶれであった。この希望と信頼を経験したものは、あの待望の貴重な時のことを忘れることはできない。この時の数週間前に、世俗の業務の大部分は片づけてしまった。まじめな信者たちは、あたかも死の床にあつて、あと数時間で地上に別れを告げるかのように、心の思いと感情を注意深く吟味した。だれも「昇天衣」など作らなかつた（付録参照）。しかし、すべての者は、救い主を迎える準備ができたという内的証拠の必要を感じた。彼らの白衣は、魂のきよめ、キリストの贖罪の血によつて罪からきよめられた品性であつた。今でも神の民と称する人々の間に、これと同じ自分を吟味する精神、同じ熱誠と断固とした信仰がほしいものである。もしも彼らが、こうして主の前に心を低くし、恵みの座において、彼らの嘆願を訴え続けたならば、彼らは、今よりははるかに豊かな経験を与えられたことであらう。祈りがあまりにも少なく、罪に対する真の自覚があまりにも少ない。そして、生きた信仰がないために、多くの者は、贖い主が豊かに与えようとしておられる恵みを受けていないのである。

神はご自分の民を試みようとした。神のみ手は、預言の期間の計算上の誤りを覆い隠された。再臨信徒は、誤りを見つげなかつた。また、彼らの反对者の中の最も博学な人々も、それを発見しなかつた。学者たちは言っ

た。「あなたがたの預言期間の計算は正しい。何か大事件が起ころうとしている。しかし、それは、ミラー氏の予言するものではない。それは世界の改心である。キリストの再臨ではない」（付録参照）。

期待した時は過ぎた。しかし、キリストは、民を救うためにおいてはならなかった。真実の愛と信仰をもって救い主を待望していた人々は、苦い失望を味わった。しかし、神のみ心は、なされつつあったのである。神は、主の再臨を待つと言っていた人々の心を試しておられた。彼らの中には、ただ恐怖にかられていた者が多かった。彼らの信仰の表明は、その心や生活に影響を及ぼしていなかった。期待したできごとが起こらなかったときに、この人々は、自分たちは何も失望していないと言った。彼らは、キリストが来られるとは信じていなかった。真の信者の悲しみをあざけりしたのは、彼らであった。

しかし、イエスと天の全軍は、試練を受け、忠実でありながらも失望に陥っている人々を、愛と同情をもって見つめていた。もし、見える世界と見えない世界を隔てる幕が取り除かれたならば、天使たちがこれらのしつかりした魂に近づき、彼らをサタンの矢から守っているのが見えたことであろう。

注

- 一 “Travels and Adventures of the Rev. Joseph Wolff,” vol. 1, p. 6.
- 二 Ibid., vol. 1, p. 7.
- 三 Joseph Wolff, “Researches and Missionary Labors,” p. 62.
- 四 “Journal of the Rev. Joseph Wolff,” pp. 378, 379.
- 五 Ibid., p. 294.
- 六 Wolff, “Researches and Missionary Labors,” pp. 404, 405.

- 七 “Journal of the Rev. Joseph Wolff,” p.96.
- 八 Ibid., pp. 398, 399.
- 九 W. H. D. Adams, “In Perils Oft,” p.192.
- 一〇 Ibid., p. 201.
- 一 “Journal of the Rev. Joseph Wolff,” p.377.
- 二 Ibid., p. 389.
- 三 “Encyclopedia Britannica,” 9th ed., art. “Bengel.”
- 四 L. Gausson “Daniel the Prophet,” vol. 2, Preface.

第二章

真理の拒否とその結果

再臨信徒の働き

ウィリアム・ミラーと彼の仲間たちは、キリスト再臨の教義の宣布を通して、審判に対する準備を人々に促すというただ一つの目的のために働いた。彼らは、宗教を信じると公言する者たちに、教会の真の希望と、より深いキリスト者の経験の必要とを自覚させようとした。彼らはまた、悔い改めていない人々に、直ちに悔い改めて神に帰る義務があることを自覚させようとした。「彼らは、宗教上の一派や一団体に人々を改宗させようとはしなかった。それで彼らは、それぞれの組織や規則に干渉することなく、あらゆる団体や教派の中で働いた。」

ミラーは、次のように言った。「わたしは、自分のあらゆる活動において、今ある教派を離れて別の派を作ろうとか、あるいは、他を犠牲にしてだれかに利益を与えようとか、そんなことは願いも思いもしなかった。わた

しは、すべての人の利益を考えた。キリスト者ならだれでも、キリストの再臨を喜んで期待し、わたしと同じように考えない人でも、この教理を信じる人々を同様に愛するものと考えたので、別の集会を開く必要を感じなかった。わたしの目的とするところは、人々を神に立ち帰らせ、来たるべき審判のことを世界に知らせ、安らかに神にお目にかかる準備をするように、同胞に訴えることであつた。わたしの働きによって悔い改めた者の大部分は、既存の種々の教会に加わつた。」

彼の働きは、教会を盛んにするものであつたから、しばらくの間は喜んで迎へられた。しかし、牧師や教会の指導者たちが、再臨の教義に反対することを決めて、その問題に関するいっさいの運動を圧迫するようになると、彼らは説教壇から反対するばかりでなく、教会員が再臨に関する説教を聞くことや、教会の集会においてその希望を語ることも拒否した。こうして信徒たちは、非常な試練と苦しい立場に立たされた。彼らは自分たちの教会を愛しており、それから離れることをきらつたが、神の言葉のあかしが圧迫され、預言を研究する権利が拒否されるのを見たときに、神に忠誠を尽くそうとすれば、服従することはできなかつた。彼らは、神の言葉のあかしを閉め出すとする人々を、キリストの教会を構成するもの、「真理の柱であり基礎」をなすものと見なすことはできなかつた。そこで彼らは、従来との関係から分離することが正しいと考えた。一八四四年の夏、約五万人が教会から脱会した。

一般キリスト教会の墮落

このころ、米国全体のほとんどの教会に、著しい変化があらわれた。長年にわたつて、世俗の風俗習慣への適

合が、徐々にしかし着実に増大し、真の靈的生活は衰退する一方であつた。しかし、この年は、全国のほとんどすべての教会において、この衰退が急激で著しかった。だれもその原因を明らかにし得るものはなかったが、この事実そのものは、広く一般の認めるところで、新聞も説教壇もそれについて語った。

フィラデルフィアの長老教会の集会において、広く用いられていた注解書の著者であり、同市の主要教会の牧師であつたバーンズは、「自分は二十年間、牧師の働きをしてきたが、この前までの聖餐式においては、式を行なうことに必ず、多少にかかわらず教会に加わる人があつた。しかし、今や、**なんの覚醒もなく、悔い改めもない**。信者は恵みにおける成長がなく、魂の救いについて語るために私の書斎に来るものもない。商売が盛んになり、商業と工業が隆盛になるにつれて、世俗の精神が旺盛になつた。**こうして、すべての教派がそうなんだ**のだ、と述べた。」

同年二月に、オベリン大学のフィニー教授は次のように言つた。「わが国のプロテスタント教会は、一般に、現代の道德的改革のほとんどすべてに對して、無関心であるか、さもなければ敵対心を抱いているように見受けられる。一部の例外はあるが、一般的傾向を覆すほどに十分なものではない。われわれは、もう一つ確かな事実を知っている。教会内には、ほとんど全般的にリバイバルの精神が欠けている。靈的無関心がほとんどすべてを覆い、恐ろしいまでに深刻である。全国の宗教雑誌が、そう証言している。…流行の追求が広く教会員の間に行なわれ、歡樂のパーティーやダンスやお祭り騒ぎなどで、神を敬わない人々と手を握っている。…しかし、このような痛ましい問題を詳しく言う必要はない。**教会が一般に悲しむべき墮落に陥りつつある**ことを示す証拠は、われわれの回りに山積していることだけで十分である。教会は主から遠く離れ、そして主は教会から退去された。」

『宗教展望』誌の一筆者は、次のように証言した。「われわれは、現在ほど宗教が一般に低下したのを見たこ

とがない。真に、教会はめざめて、この悲しむべき状態の原因をつきとめなければならない。なぜなら、シオンを愛するすべての者が、現状をまことに悲しむべき状態と見ているに相違ないからである。真に悔い改める者の数が、いかに『少なく、まれ』であるかを考え、また、罪人がかつてなかったほどに神を恐れずたくなであることを思うときに、われわれは、『神は恵み深くあることを忘れられたのか。あるいは、恵みの戸は閉じられたのか』と、思わず叫ばずにはおられない。」

このような状態は、教会自身に原因がなくして起こるものではない。国家、教会、また個人が陥る霊的暗黒は、神の側で独断的に恵みの助けを取り除かれるのではなくて、人間の側で、神からの光をないがしろにしたり、拒否したりすることによるのである。この事実の著しい例は、キリストの時代のユダヤ人の歴史に示されている。彼らは、世俗に従い、神と神の言葉を忘れたために、彼らの理解力は暗くなり、彼らの心は、この世的で肉欲的になった。こうして彼らは、メシヤの来臨を知らず、誇りと不信によって、贖い主を拒否した。それでも神は、ユダヤ民族が救いの祝福を知って、それにあずかることから除外されなかった。しかし、真理を拒否したものは、天の賜物を得たいという願いを全く失ってしまった。彼らは、「悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい、」ついに、彼らのうちにあつた光も暗くなった。そして、その暗黒は、なんと大きかったことであろう。

使命を受け入れた人々

きわめて重要な敬虔の精神さえ欠けていれば、人間が宗教の形式を保つことは、サタンの策略には都合がいい

のである。ユダヤ人は、福音を拒否した後も、相変わらず熱心に昔からの儀式を守り、厳格に国家的排他主義を保ってきたが、その反面、自分たちの間に神の臨在がもはや現われていないことを認めないわけにいかなかった。ダニエルの預言は、メシヤの来臨の時を明白に示し、彼の死をはっきりと預言していたので、彼らは、その研究をやめさせ、ついにラビたちは、時を計算しようとするすべての者に、のろいを宣言するに至った。イスラエルの人々は、盲目と頑迷のうちに、その後の歳月を送ってきた。彼らは、救いの恵み深い招待に無関心であった。また、福音の祝福と、天からの光を拒むことについての厳粛で恐ろしい警告とに、心をとめなかった。

原因のあるところには、必ずその結果が伴う。義務であるが知らず知らずのうちに、それが自分の好みに合わないからと言って、故意にその信念をもみ消すものは、ついに、真理と誤りの区別をする能力を失ってしまう。理解力にはびり、良心は無感覚になり、心はかたくなになり、魂は神から離れてしまう。神からの真理のメッセージが、拒絶または軽視されるときに、教会は暗黒に覆われる。信仰と愛は冷え、離反と分離が起こる。教会員は、世俗の追求に興味と精力を集中し、罪人は心をかたくなにして悔い改めないのである。

神のさばきの時を知らせ、神をおそれ礼拝するよう人々に呼びかけた、黙示録一四章の第一天使の使命は、神の民と称する人々を世俗の悪影響から引き離し、世俗化と背信という彼らの真の状態を認めさせるためのものであった。この使命によって、神は教会に一つの警告をお与えになった。もし彼らが、それを受け入れていたならば、彼らを神から閉め出していた害悪を正すことができたのであった。もしも彼らが、天からの使命を受け入れ、主の前に心を低くして、み前に立つ準備を真心から求めていたならば、聖霊と神の力が、彼らの間にあらわされていたことであろう。教会は再び使徒時代の時のような、一致と信仰と愛の幸福な状態に到達していたことであ

ろう。使徒時代には信者たちは、「心を一つにし思いを一つにして」、「大胆に神の言を語り」、「主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」（使徒行伝四ノ三二、三一、二ノ四七）。

もし神の民と称する人々が、み言葉から輝く光を受け入れるならば、彼らは、キリストが祈られた一致に到達することであろう。それは、使徒が「平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を」と言ったところのものである。「からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」と彼は言っている（エペソ四ノ三一五）。

再臨使命を受け入れた人々は、このような幸福を経験した。彼らは、さまざまの異なつた教派から来ていたが、そうした教派的障害は打ち碎かれた。相いれない信条は、こなごなに碎かれた。この世の至福千年期という非聖書的な希望は、放棄された。キリスト再臨に関する誤つた見解は正された。誇りと世俗との妥協は一掃された。悪は正された。人々の心は親しい交わりを結び、愛と喜びがみなぎつた。もしこの教義が、これを信じた少数の者に、このようにしたのであれば、すべての者が受け入れていたなら、すべての者に同じような影響を及ぼしたはずであつた。

使命を拒んだ人々

しかし、一般の教会は、警告を受け入れなかつた。「イスラエルの家」を見守る者として、まず最初にイエスの再臨のしるしを認めるはずであつた牧師たちは、預言のあかしからも、時のしるしからも、真理を学ぶことができなかった。彼らの心は、世俗的な望みと野心に満ち、神に対する愛と神の言葉に対する信仰は、冷たくなつて

いた。そして、再臨の教義が示されたときに、それはただ偏見と不信をかきたてるだけであった。この使命が、だいたいにおいて一般信徒によって説教されたことが、それに反対する理由としてあげられた、昔のように、神の言葉の明白なあかしは、「役人たちやパリサイ人たちの中で、ひとりでも信じた者があつただろうか」と問われるのであつた。そして、預言的期間に基づく議論に反論することは非常に困難であるのに気づいた多くの者は、預言の書は封じられたものであつて理解できないと教えて、預言の研究を思いとどませた。多くの者は、牧師を絶対的に信頼して、警告に耳を傾けることを拒んだ。ほかの者たちは、真理であると自覚はしても、「会堂から追い出」されることを恐れて、信仰を告白しなかった。神が教会を試み、清めるために送られた使命は、キリストよりはこの世を愛する人々の数がどんなに多いかということをし、あまりにも明白に示した。彼らを地に結びつけるぎすなは、彼らを天にひきつけるものより強力であつた。彼らは、世俗の知恵の声に耳を傾けることを選び、心をさぐる真理の使命に背を向けたのである。

彼らは、第一天使の使命を拒否することにより、神が彼らの回復のために備えられた手段を拒絶した。彼らは、彼らを神から隔てている悪を矯正したはずの恵みの使者をはねつけ、ますます熱心に世との交わりを求めた。一八四四年の教会内における、世俗化、背教、霊的死という恐るべき状態の原因は、実にこれであつた。

バビロンは倒れた

黙示録一四章において、第一天使に続いて、第二天使が、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行

に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」と宣言している（黙示録一四ノ八）。「バビロン」という言葉は、「バベル」からきたもので、混乱を意味している。この言葉は、聖書では、種々の形をとった偽りの、あるいは背教的な宗教を指すのに用いられている。黙示録一七章には、バビロンは女であるといわれている。女は、聖書では教会の象徴として用いられている。純潔な女は、純潔な教会であり、汚れた女は、背教した教会を表わしている。

聖書では、キリストとキリストの教会との間の神聖で永続的な関係を、結婚の契りで表わしている。主は、厳粛な契約によって、ご自分の民をご自分に結びつけられ、ご自分が彼らの神になることを約束された。そして彼らは、自分たちが神のものとなり、神だけのものになることを誓ったのである。神はこう言われる。「わたしは永遠にあなたとちぎりを結ぶ。すなわち正義と、公平と、いつくしみと、あわれみとをもってちぎりを結ぶ」（ホセア書二ノ一九）。そしてまた、「わたしはあなたがたの夫だからである」と言っておられる（エレミヤ書三ノ一四）。パウロも新約聖書において、同じ象徴を用いて、「あなたがたを、きよいおとめとして、ただひとりの男子キリストにささげるために、婚約させたのである」と言っている（コリント第二・一一ノ二）。

教会がキリストに不忠実であって、キリストに対する信頼と愛情を失い、世俗の事物に対する愛を心に抱くことは、結婚の誓いを破ることにたとえられている。主を離れたイスラエルの罪が、この象徴によって語られている。そして彼らが軽んじた、神の驚くべき愛が、次のように感動的に描かれている。「わたしは…あなたに誓い、あなたと契約を結んだ。そしてあなたはわたしのものとなったと、主なる神は言われる。」「あなたは非常に美しくなって王の地位に進み、あなたの美しさのために、あなたの名声は国々に広まった。これはわたしが、あ

あなたに施した飾りによって全うされたからである。…ところが、あなたは自分の美しさをたのみ、自分の名声によって姦淫を行」った。『イスラエルの家よ、背信の妻が夫のもとを去るように、たしかに、あなたがたはわたしにそむいた』と主は言われる。」「自分の夫に替えて他人と通じる姦婦よ」（エゼキエル書一六ノ八、一三一―五、三二、エレミヤ書三ノ二〇）。

新約聖書にも、神の恵みより世俗の交わりを求める自称キリスト者たちに、これと同様の言葉が語られている。使徒ヤコブは次のように言っている。「不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである」（ヤコブ四ノ四）。

黙示録一七章の女（バビロン）は、次のように描写されている。「この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと…汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、その額には、一つの名がしるされていた。それは**奥義**であって、『**大いなるバビロン、淫婦どもの母**』というのであった。」「わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た」と預言者は言っている。バビロンは、さらに、「地の王たちを支配する大いなる都のことである」と言われている（黙示録一七ノ四―六、一八）。幾世紀にもわたって、キリスト教国の君主たちの上に独裁的支配を維持した権力は、ローマである。紫と赤、金と宝石と真珠は、華麗な王権にまさる豪華さを誇ったローマ法王権を鮮やかに描写している。また、キリストに従う者を残酷に迫害したこの教会ほど、「イエスの証人の血に酔いしれている」ということが当てはまる権力はほかにない。またバビロンは、「地の王たち」と非合法的関係を結んだと非難されている。ユダヤの教会が淫婦になったのは、主を離れ、異邦人と同盟を結んだためであったが、ローマも同様に、俗権の支持を求めて墮落し、同様の非難を受

けている。

新教諸派の墮落

バビロンは、「淫婦どもの母」であると言われている。その**娘たち**とは、彼女の教義と言い伝えを重んじてその例にならない、世との不法な同盟を結ぶために、真理と神の是認とを犠牲にする諸教会の象徴でなければならぬ。バビロンが**倒れた**ことを宣言する黙示録一四章のメッセージは、かつては純潔であつたが腐敗するに至つた宗教団体に適用されねばならない。このメッセージは審判の警告に続くものであるから、最後の時代に発せられるものでなければならぬ。したがって、これは、ローマ・カトリック教会だけに当てはまるものではない。なぜならば、この教会は、幾世紀にわたって倒れた状態にあつたからである。さらに、黙示録一八章では、神の民はバビロンから離れ去れと呼びかけられている。この聖句によれば、多くの神の民がまだバビロンにいないければならない。今、キリストに従うものの大部分は、どの宗教団体に属しているであろうか。言うまでもなく、プロテスタント各派の諸教会である。これらの諸教会は、その出現の当初にあつては神と真理のために崇高な態度をとり、神の祝福にあずかつた。不信仰な世の人々でさえ、福音の原則を信じることに伴う恵みを認めずにはおられなかった。預言者はイスラエルに次のように言った。「あなたの美しさのために、あなたの名声は国々に広まった。これはわたしが、あなたに施した飾りによつて全うされたからであると、主なる神は言われる。」しかし、彼らも、イスラエルののろいであり滅びであつたのと同じ欲望——神を信じない人々の習慣に習い、彼らとの交

わりを求めようとする欲望——によって墮落した。「あなたは自分の美しさをたのみ、自分の名声によって姦淫を行」なった（エゼキエル書一六ノ一四、一五）。

プロテスタント教会の多くは、ローマの例にならって「地の王たち」と不法な関係を結んでいる。国教会は俗権と提携することによって。また他の教派は、世俗の歡心を求めることによって。そこで、この「バビロン」（混乱）という言葉は、それぞれ自分たちの教義は聖書に基づいたものであるといいながら、ほとんど無数の教派に分かれ、互いに衝突する信条と理論をもったこれらの諸団体に、まことによく当てはまるのである。

諸教会は、ローマから分離していながら、世俗との罪深い結合のほかにも、ローマの他の特質をあらわしている。ローマ・カトリックの一著書に、次のようにある。「もしローマの教会が、諸聖人に関して偶像礼拝の罪があるとするならば、その娘である英国国教会も同罪である。英国では、キリストにささげられた教会一つに対して、マリヤにささげられた教会が十ある。」^三

また、ホプキンス博士は、『千年期に関する論文』の中で次のように言っている。「反キリスト教的精神と習慣が、今、ローマ教会と呼ばれているものに限られていると見なす理由はない。プロテスタント諸教会も、その中に多くの反キリスト的なものを持っており、腐敗と罪惡……から全くぬけ切ったとは、とうてい言えない。」^四

長老教会がローマから分離したことに關して、ガスリー博士は次のように書いている。「今から三百年前、わが教会は、開かれた聖書を旗印とし、『聖書を調べよ』をその標語として、ローマの門から進み出た。」そして彼は、次のような意味深長な質問を発するのである。「果たして彼らは、**完全に**バビロンから出たであろうか？」^五

また、スポルジンは言っている。「英国国教会は、徹頭徹尾、秘蹟重視主義に陥っているように思われる。」

しかし、非国教徒も同様に、はなはだしく哲学的不信に打ち負かされているように思われる。われわれが望みをかけていた者たちが、ひとりまたひとりと、信仰の根本から離れ去っていく。わたしは、今や英国の心臓部そのものが、のろべき無神思想に食いつくされていると思う。それは、おくめんもなくなお説教壇に上がって自らをキリスト教と称しているのだ。」

墮落の原因

この大背教の原因は、いったいなんであつたであろうか。教会はどのようにして、福音の単純さから離れたのであろうか。それはキリスト教が、異教徒に受け入れられやすいようにと、多神教の習慣に順応したからであつた。使徒パウロは、彼の時代においてさえ、「不法の秘密の力が、すでに働いているのである」と言つた（テサロニケ第二・二ノ七）。使徒たちの生きている間は、教会は、比較的純潔を保つていた。しかし、「二世紀の終わりごろに、たいていの教会は、新しい形式を取り入れた。最初の単純さは消えた。そして、徐々に、年若い弟子たちが墓に入るにつれて、彼らの子供たちが、新しい改心者たちとともに……登場し、運動の形態を新たなものにした。」^六改宗者を得るために、キリスト教の高い標準は下げられ、その結果、「多神教が洪水のように教会内に流れ込み、その習慣、風俗、偶像を持ち込んだ。」^七キリスト教が、世俗の支配者たちの愛顧と支持を受けるにつれて、一般大衆も名目上はキリスト教を信じるようになった。しかし、キリスト者らしく見えても、多くの者は「実質上は多神教であつて、特に、隠れて彼らの偶像を礼拝していた。」^八

プロテスタントであると称するたいの教会は、これと同様の過程を経たのではなからうか。真の改革の精神をもっていた創立者たちが死ぬと、その子孫たちが登場して「運動の形態を新たなものにする。」改革者の子孫たちは、父祖たちの信条に盲目的に固執して、彼らが認めたこと以上の真理を受け入れようとはせず、その一方では、父祖たちの謙遜、自己犠牲、世俗の放棄などの模範から、遠く離れていった。こうして、「最初の単純さは消える。」世俗の洪水が教会に流れ込んで、「その習慣、風俗、偶像」を持ち込んだ。

ああ、「神への敵対」である世を友とする精神が、今日、キリストの弟子であると称する人々の間に、なんと恐ろしいばかりに、広く行きわたっていることであろう。キリスト教国の一般の教会は、謙遜、自己犠牲、単純、敬虔といった聖書の標準から、なんと遠くかけ離れてしまったことであろう。ジョン・ウエスレーは、金銭の正しい用い方について、次のように語った。「このように貴重なタレントは、不必要で高価な衣服や、あるいは不
用な飾りなど、単に目の欲を満足させるものに、少しでも浪費してはならない。自分の家を妙に飾り立てるために浪費してはならない。不必要な、または、高価な家具、ぜいたくな絵画、飾り物のために浪費してはならない。……持ち物の誇りを満足させ、人間の賞賛を得るために金を使ってはならない。……『みずから幸いな時に、人
人から賞賛』される。あなたが『紫の布や細布を着て、『毎日ぜいたくに』遊び暮らしているならば、確かに多
くの者は、あなたの趣味の高尚なことで、あなたの気前よさと、歓待ぶりを賞賛するであろう。しかし、そのよ
うに高価な賞賛を買ってはならない。それよりも、神から受ける栄誉に満足すべきである。」^九ところが、われわれ
の時代の多くの教会は、こうした教えを無視している。

世俗化と快樂追求

宗教を告白することは、世の人々に歓迎されるようになった。為政者、政治家、弁護士、医師、実業家などは、社会の尊敬と信頼を確保し、自分たちの世俗的な利益を増進するために、教会に加わる。こうして彼らは、キリスト教を公言しながら、そのかげであらゆる不正な取引を行なおうとする。こうして教会に加わった世俗の人々の、富と影響力によって補強された種々の宗教団体は、なおいつそう、世の人気と愛顧を得ようと努力する。ぜいを尽くした教会堂が、繁華な通りに建設され、礼拝者たちは、高価な流行の衣服をまとっている。人々を喜ばせ引きつける才能ある牧師に、高給が支払われる。彼の説教は、人々の罪にふれてはならず、上流社会の人々の耳に楽しい快いものでなければならぬ。こうして、上流社会の罪人たちが教会の名簿にのせられ、社交界の罪が信心深い装いのかげに隠されている。

現代の自称キリスト者たちの世俗に対する態度について、ある有力な一般雑誌は次のように言っている。「教会は、知らず知らずのうちに、時代の精神に順応し、その礼拝の形式も、現代の要求に適應させてしまった。」「実際、教会は、今や宗教を魅力的にするのに役立つものならんでも、その手段として用いている。」「また、ニューヨークの『インディペンデント』誌の筆者は、メソジスト教会について、次のように言っている。「信心深い者と宗教的でない者との区別は、あいまいになり、双方の側の熱心な人々は、彼らの行動や楽しみの差異を全部取り去ろうと努力している。」宗教を信じることが一般に歓迎されるようになると、その義務を十分に果たすこと

をせずしてその恩恵にあずかろうとする者が、はなはだしく増加するようになる。」

ハワード・クロスビーは、次のように言っている。「キリスト教会が、主の意図されることをほとんど果たしていない状態は、まことに憂慮すべきことである。ちょうど昔のユダヤ人たちが、偶像国民と親しく交わって、その心を神から奪い去られたように、…イエスの教会は今、不信仰な世界と不実の提携をして、神から与えられた真の生活の指針を放棄し、キリストを信じない社会の、もっともらしいが危険な習慣に順応し、神の啓示とは無関係で、恵みにおけるあらゆる成長とは全く反対の議論を行なっては、そうした結論に達している。」¹⁰

この世俗化と快楽追求の潮流の中で、キリストのための克己と自己犠牲とは、ほとんど全面的に忘れ去られている。「今、教会で活動している男女のあるものは、子供の時に、キリストのために何かをささげるか、または何かを行なうために、犠牲を払うようにと教えられたのである。」しかし「今、資金が欠乏していても、…ささげるようにとの呼びかけはだれにもなされない。それよりも、慈善市、演劇、模擬裁判、古物収集夕食会、あるいは何かの会食など——人々を楽しませることを行なおうとする。」

ウィスコンシン州のウォシユバーン知事は、一八七三年一月九日の年頭報告の中で次のように言った。「ばかり打ちが出てくるような学校を閉鎖する法律が必要であるように思われる。そういう学校が至るところにある。教会でさえ（疑いもなく、知らずにではあるが）、悪魔の仕事をしていることがある。時には宗教的または慈善の目的で開かれる景品付き音楽会や景品付き売り出し、富くじなどは、しばしば、福引きや懸賞袋など低級な目的のためにも開かれており、これらはみな、射幸心をそそる手段である。特に青年たちにとって、労せずして金や物を手に入れることほど、心を墮落させ、まひさせるものはない。りっぱな人々が、こうした投機的な催しに

たずさわり、その金銭はよい目的のために使われるのだと考えて安心している間に、州の青年たちがかけごとに熱中する習慣に陥ってしまっても、不思議ではない。」

世俗との妥協の精神が、キリスト教国の至るところの教会に侵入しつつある。ロバート・アトキンスは、ロンドンでの説教の中で、英国に広く行きわたっている霊的墮落の暗い絵を描いて次のように言っている。「真に正しい人々は、地上から減りつつある。そしてだれもそのことを気にかけない。今日、各教会における信者たちは、世俗を愛し、世俗と妥協し、肉体的な楽しみを愛し、そして人々の尊敬を得たいとあこがれている。彼らは、キリストとともに苦しむように召されているのに、非難を受けることさえ恐れている。…**背教、背教、背教**が、各教会の真正面に刻印されている。もし彼らがそれを知り、それを感じるならば、望みがあるう。ところが、悲しいことに彼らは、『自分は富んでいる、豊かになった。なんの不自由もない』と叫ぶ。」

バビロンより出でよ

バビロンに対して宣告された大罪は、「その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた」ことである。バビロンが世界に提供するこの杯は、バビロンが地上の勢力者たちと不法な関係を結んだ結果受け入れた、偽りの教義を表わしている。世を友とすることは、その信仰を腐敗させる。そして一方バビロンのほうは、聖書の明白な言葉に反対する教義を教えて、世に腐敗的影響を及ぼすのである。

ローマは、人々から聖書を取り上げて、そのかわりにローマの教えを受け入れるよう、すべての者に要求した。

神の言葉を人々に取りもどすことが、宗教改革の働きであった。しかし、今日の教会においては、聖書よりはむしろ教会の信条や教義を信じるように人々に教えているのが、かくれもない事実ではなからうか。チャールズ・ビーチャーは、プロテスタント教会についてこう語った。「かつて父祖たちが、自分たちが助長していたところの聖人や殉教者たちへの崇敬の念の高まりに対して、それを非難する言葉を注意深く避けたように、今日の新教教会は、信条を非難するような言葉をも、注意深く避けている。…プロテスタントの福音諸教派は、自分の教派はもちろんのこと、他の教派とも非常に堅く互いに手を握り合っているために、聖書以外に何かの書を受け入れるのであれば、だれも絶対に牧師になることができない。…昔、ローマが聖書を禁じたと同様に、今や信条の力が、より隠微な方法によってではあるが、聖書を禁じ始めていると言っても、決して単なる想像ではないのである。」^三

忠実な教師が、神の言葉を説明すると、学者や、自分は聖書を理解していると主張する牧師たちが現われて、健全な教理を異端であると非難し、こうして真理の探究者を追い返すのである。世界がバビロンの酒に酔いつぶれていさえしなければ、多くの者は、神の言葉の明白で鋭い真理によって心を打たれ、改心することであろう。しかし、宗教的信条が非常に混乱し矛盾しているように思えるので、人々は何を真理として信じてよいのかわからずにいる。世界が悔い改めないのは、教会の責任である。

最後の警告

黙示録一四章の第二天使の使命は、最初、一八四四年の夏、宣べ伝えられた。そして、それは当時の米国の諸

教会に直接当てはまるものであった。米国においては、審判の警告が最も広く宣言されたにもかかわらず、大部分の教会はそれを拒否して、急速に墮落してしまった。しかし、第二天使の使命は、一八四四年に完全な成就を見たのではなかった。その時、教会は、再臨使命の光を拒否したために、道徳的墮落を経験したのであったが、しかしその墮落は、全面的なものではなかった。諸教会は現代に対する特別な真理を拒否しつづけてきたために、ますますひどく墮落してしまった。しかし、「バビロンは倒れた。…その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、**あらゆる国民**に飲ませた者」と言うまでには、まだなっていない。彼女はまだあらゆる国民に飲ませてはいない。世俗と妥協する精神と、われわれの運命を決定する現代の真理に対する無関心とが、すべてのキリスト教国のプロテスタント諸教会内で力を得ている。こうした教会も、第二天使の厳粛で恐るべき告発のなかに含まれる。しかし、背教の活動は、まだその頂点に達していない。

聖書は、主の再臨の前に、サタンが「**あらゆる**偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを」もって働き、「自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれ」ない者は、「偽りを信じるように、迷わす力」を受けるに至る、と言っている（テサロニケ第二・二ノ九―一一）。こうした状態になって、教会と世俗との結合がキリスト教国全体において完全に行なわれるときに、初めてバビロンの墮落は完全なものとなる。この変化は徐々に行なわれる。黙示録一四ノ八の全面的成就是、まだ将来のことである。

バビロンを構成する諸教会は、霊的暗黒と神からの離反に陥っているにもかかわらず、その中にはまだ、真のキリスト者が数多くいる。この時代のための特別な使命をまだ悟っていない人々が多くいる。自分たちの現状に満足せず、もっと明らかな光を待ち望んでいる者が、少なくない。彼らは自分たちの所属する教会の中に、キリス

トの姿を見ようとしても見るできない。こうした諸教会が、真理からますます遠く離れ、世俗といっそう密接に結合するにつれて、二つのグループの人々の相違は大きくなり、ついには分離しなければならなくなる。この上なく神を愛する人々は、「神よりも快楽を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者」たちとは、もはや関係を保つことができなくなる時が来る。

黙示録一八章は、教会が、黙示録一四ノ六一二の三重の使命を拒否した結果、第二天使の使命が預言した状態に完全に陥り、そして、まだバビロンにいる神の民が、その中から出るようにと求められる時を示している。これは、世界に発せられる最後の器である。そしてそれは、その働きを成し遂げる。「真理を信じないで議を喜んでいた」人々は、偽りを信じ、迷わす力に陥るままにされる（テサロニケ第二・二ノ一二）。そのとき真理の光は、それを受けようと心を開くすべての人の上に輝き、バビロンに残っている主の子供たちはみな、「わたしの民よ。彼女から離れ去」れという招きの声に耳を傾けるのである（黙示録一八ノ四）。

注

- 一 Bliss, p.328
- 二 “Congregational Journal,” May 23, 1844.
- 三 Richard Challoner, “The Catholic Christian Instructed,” Preface, pp. 21, 22.
- 四 Samuel Hopkins, “Works,” vol. 2, p.328.
- 五 Thomas Guthrie, “The Gospel in Ezekiel,” p.237.
- 六 Robert Robinson, “Ecclesiastical Researches,” ch.6, par.17, p.51.
- 七 Gavazzi, “Lectures,” p.278.

- 八 九 *Ibid.*
- 〇 Wesley, "Works," Sermon 50, "The Use of Money."
- 一 "The Healthy Christian: An Appeal to the Church," pp. 141, 142.
- 一 Second Advent Library, tract No. 39.
- 二 Sermon on "The Bible a Sufficient Creed," delivered at Fort Wayne, Indiana, Feb. 22, 1846.

第二章

預言の成就と大いなる試練

一八四四年当時の再臨信徒

主の再臨を最初に期待していた時——すなわち一八四四年の春——が過ぎたとき、主の出現を信仰をもって待望していた人々は、しばらくの間、疑惑と不安に閉ざされた。世は、彼らが全く敗北し、妄想にとりつかれていたことを証明したと考えたが、しかし彼らの慰めの源は、なお神の言葉であった。多くの者は、聖書の研究を続け、自分たちの信仰の証拠を改めて吟味し、注意深く預言を学んで、もっと光を受けようとした。彼らのとった立場を支持する聖書の証言は、明白で決定的であった。まちがう余地のないいくつかのしるしが、キリストの再臨の近いことを示していた。罪人の悔い改めとキリスト者の霊的生命のリバイバルという両面における主の特別な祝福は、その使命が神からのものであることをあかししていた。そして信徒たちは、自分たちの失望を説明す

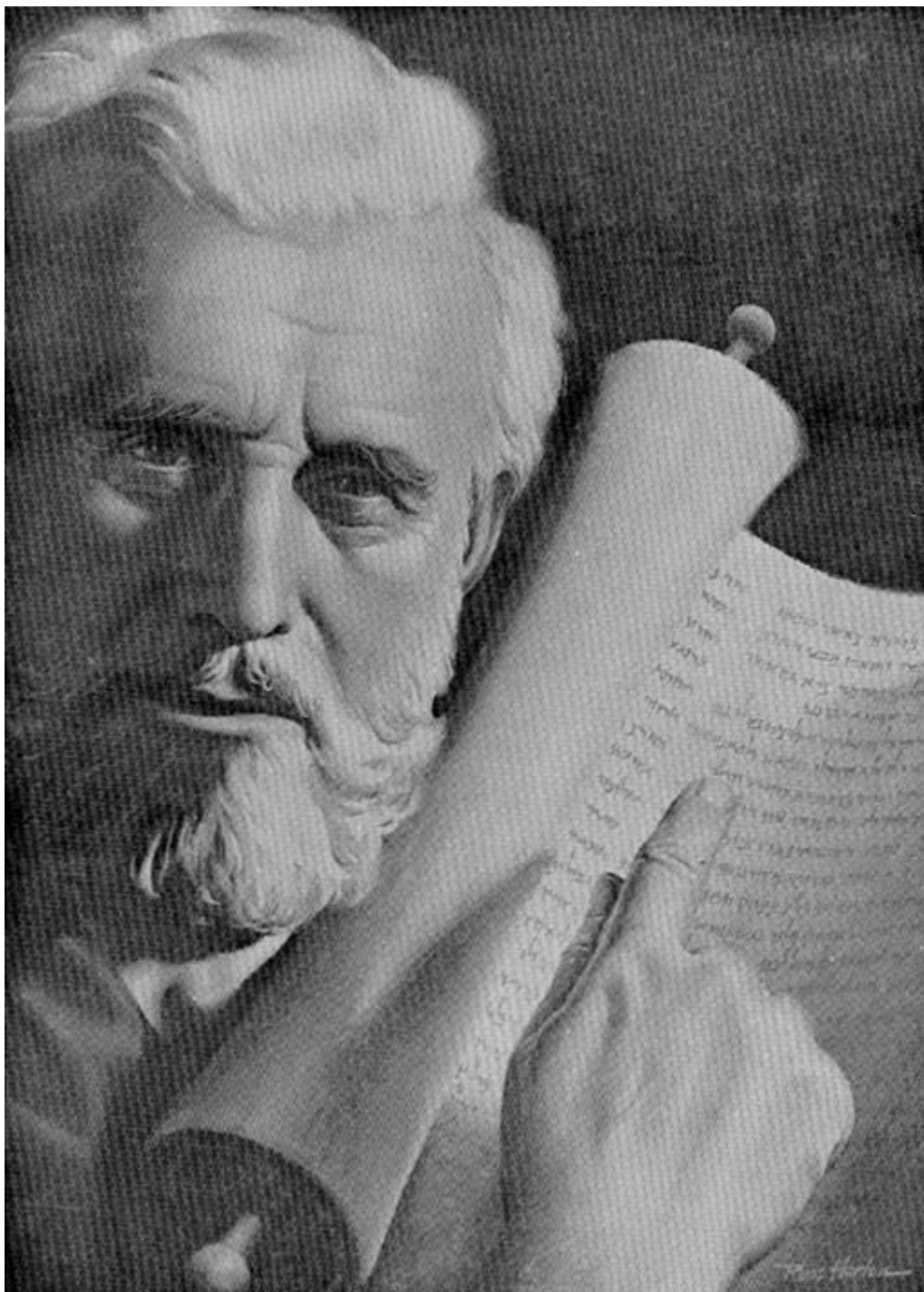
ることはできなかったけれども、これまでの経験において神の導きがあったことを確信した。

彼らが再臨の時にあてはまると考えた預言の中には、彼らの不安と気がかりな状態に対して特にあてはまる教訓があった。そしてそれは、今はわからないことでも、やがて明らかにされるという信仰をもって耐え忍んで待つようにと、彼らを励ますものであった。

これらの預言の中に、ハバクク書二ノ一—四の預言があった。「わたしはわたしの見張所に立ち、物見やぐらに身を置き、望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見、またわたしの訴えについてわたし自らなんと答えたらよかるうかを見よう。主はわたしに答えて言われた、『この幻を書き、これを板の上に明らかにし、走りながらも、これを読みうるようにせよ。この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。見よ、その魂の正しくない者は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる。』」

「この幻を書き、これを板の上に明らかにし、走りながらも、これを読みうるようにせよ」というこの預言の指示は、早くも一八四二年に、ダニエル書と黙示録の幻を説明する図表の作製をチャールズ・フィッチに思いつかせていた。この図表の発表は、ハバククによって与えられた命令の実現であると考えられた。しかし、幻の成就には一見遅延——時期が遅れること——があるということが同じ預言の中に示されていることに、そのときだれも気づかなかつた。失望後、この聖句は非常に意味深く思われた。「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。…」

義人はその**信仰**によって生きる。」



使徒ペテロは、キリストの働きと世の終わりを示すできごとに関する「預言の確実な言葉」に注意を払うことのたいせつさをわれわれに厳粛に警告している。

また、エゼキエルの預言の一部が信徒にとって力と慰めの源となった。「主の言葉がわたしに臨んだ、『人の子よ、イスラエルの地について、あなたがたが「日は延び、すべての幻はおなくなつた」という、このことわざはなんであるか。それゆえ、彼らに言え、「主なる神はこう言われる、…日とすべての幻の実現とは近づいた」と。…わたしは、わが語るべきことを語り、それは必ず成就する。決して延びることはない。』」「イスラエルの家は言う、『彼の見る幻は、なお多くの日の後の事である。彼が預言することは遠い後の時のことである』と。それゆえ、彼らに言え、主なる神はこう言われる、わたしの言葉はもはや延びない。わたしの語る言葉は成就すると、主なる神は言われる」（エゼキエル書一二ノ二一―二五、二七、二八）。

待っていた人々は、初めから終わりのことを知っておられるかたが、各時代を見通し、彼らの失望を予見して、勇氣と希望の言葉を与えておられたことを信じて、喜んだ。忍耐して待ち、神の言葉を堅く信じることを教えるこうした聖書の言葉がなかったならば、彼らの信仰は、この試練の時にくじけてしまったことであろう。

「十人のおとめ」のたとえ

マタイによる福音書二五章の、十人のおとめのたとえも、再臨信徒の経験を説明している。マタイによる福音書二四章において、キリストは、再臨と世の終わりにについての弟子たちの質問に答えて、彼の初臨から再臨までの間の世界と教会の歴史における重要なできごとをいくつか指摘された。すなわち、それらは、エルサレムの滅亡、異教および法王権の迫害による教会の大患難、日と月が暗くなること、落星などであった。この後で、彼は、ご

自分がみ国の力をもって来ることを語られ、彼の出現を待つ二種類のしもべたちについてのたとえを話された。二五章は、「**そこで**天国は、十人のおとめ…に似ている」という言葉で始まっている。ここに、二四章の終わりに示されていると同様の、終末時代に存在する教会が描かれている。このたとえにおいて、彼らの経験は、東洋の婚礼というできごとによって説明されている。

「そこで天国は、十人のおとめがそれぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出て行くのに似ている。その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。」

第一天使の使命が布告したキリストの再臨は、花婿が来ることによって表示されていると理解された。キリストの再臨が近いという布告を聞いて広く改革が行なわれたことは、おとめたちが出迎えたことに相当するものであった。マタイによる福音書二四章と同じく、このたとえにおいても、二種類の人々が表わされている。すべての者が、あかりである聖書を手にし、その光によって花婿を出迎えようとした。ところが、「思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。」「思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。」思慮深い者たちは、神の恵み、すなわち、神の言葉を足のともしび、また道の光とするところの、聖霊の再生と啓発の力を受けていた。彼らは神を恐れ敬い、真理を学ぶために聖書を研究し、心と生活の清めを熱心に求めていた。この人々は、自分自身の体験を持ち、神とみ言葉に対する信仰を持ってい

だから、失望や遅延にもくじけることはなかった。他の者たちは、「あかりは持っていたが、油を用意していなかった。」彼らは、衝動に動かされたのであった。彼らは、厳粛な使命を聞いて恐れを感じはしたものの、同信の友だちの信仰にたよって、真理の十分な理解を持たず、また心に恵みの真の働きを経験せずに、良き感情という危げな光に満足していた。彼らは、すぐに報いが与えられるものと期待して、主を迎えに出た。しかし彼らには、遅延や失望に対する用意がなかった。試練が来たときに、彼らの信仰はくじけ、彼らの光は消えそうになった。

「花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをし」た。花婿の遅延は、主が来られると期待した際の時の経過と、失望と、そして一見遅延と思われたことを表わしていた。この不安な時において、表面的で半信半疑の人々の興味はすぐに動揺し始め、その努力はゆるみ始めた。しかし、自分で得た聖書の知識に信仰の基礎を置いた人々は、失望の波に洗い去られることのない岩の上に立っていた。「みな居眠りをして、寝てしまった。」一方の人々は自分たちの信仰を平然と放棄して、そしてもう一方の人々は、より明らかな光が与えられるまで忍耐して待ちながら。しかし、試練の夜、後者は彼らの熱心と献身をいくぶんか失うかにみえた。不熱心で表面的な人々は、もはや同信の友だちの信仰に頼ることができなかった。各自が、自分で立つか、倒れるかしなければならなかった。

サタンの活動

ちょうどこのころ、狂信が現われ始めた。これまで使命を熱心に信じていた人々が、誤りのない手引

きとしての神の言葉を拒否して、自分は聖霊に導かれていると称し、彼ら自身の感情、印象、想像に身をゆだねた。ある者たちは、盲目的で頑迷な熱心さをあらわして、自分たちの行動を認めない者をみな非難した。彼らの狂信的な考えと行動は、再臨信徒の大部分の者の共感を得られなかったが、しかし、こうした者たちのために、真理の運動そのものが非難を受けたりした。

サタンは、こうした方法で神の働きに反対し、それを打ちこわそうとしていた。人々は、再臨運動によって非常な感銘を受け、遅延の期間中でさえ、幾千の罪人が悔い改め、忠実な人々が真理の宣布のために献身していた。悪の君は、彼の部下たちを失いつつあった。そこで彼は、神の働きに恥辱をもたらすために、信仰を表明している人々のある者たちを欺いて、極端に走らせようとした。そうしておいて、彼の部下たちは、すぐにその誤りや失敗や見苦しい行為をみな取り上げて、それをはなはだしく誇張して人々に示し、再臨信徒とその信仰を憎むべきものであると思わせようとした。こうして、再臨信仰を公言していても心がサタンの力に支配されている者が多ければ多いほど、彼らを信者全体の代表であるとして人々の注目を引くことによつて、サタンはますます有利になるのである。

サタンは、「われらの兄弟らを訴える者」である。そして、人々に主の民の誤りや欠点を見つけさせ、それを注目的にする一方、彼らの善行は何も言わずに見過ごしてしまわせることが、サタンの精神である。サタンは、神が救霊のために活動されるときは、いつも活躍する。神の子供たちが主の前に現われるとき、サタンも彼らの中にいる。すべてのリバイバル集会において、彼は、心が清められず、精神の不健全な者を参加させようとしている。この人々が、真理のいくぶんかを信じて、信者の仲間に入ると、サタンは、彼らを通して、軽率な人々を欺く説を持ち込んでくる。神の子供たちの仲間に入り、礼拝の家において、主の聖餐にあずかるからといって、そ

の人が真のキリスト者であるとはかぎらない。サタンはしばしば、彼が用いることのできる者の姿をかりて、最も厳粛な集会に連なっている。

誤謬の霊と真理の霊

悪の君は、神の民が天の都に向かって進む旅のその一歩ごとに妨害をする。教会の全歴史において、改革が行なわれるときには必ず重大な障害があつた。パウロの時代においてもそうであつた。彼が教会を起こしたところではどこでも、信じると言いながら異端をもたらす者たちがあつた。そして、もしそれを信じるならば、ついには真理に対する愛が失われてしまふのであつた。ルターもまた、直接神の言葉に接したと主張して自分の考えや意見を聖書の証言以上に重要視する狂信的な人々に、非常に悩まされ苦しめられた。信仰と経験に欠けていながら、相当のうぬぼれを持ち、新奇なことを聞いたり話したりすることが好きな多くの人々は、このような新しい教師の主張に欺かれ、神ガルターを動かして打ちたてようとなさつたことを破壊するサタンの働きの、その手先となつた。また、ウエスレー兄弟や、またその感化力と信仰とによつて世界に祝福をもたらした他の人々も、過激で不健全で清められていない人々をあらゆる種類の狂信に陥れるサタンの策略に、終始悩まされたのである。ウィリアム・ミラーは、そうした狂信的傾向への動きには共鳴しなかった。彼は、ルターと同様に、すべての霊は神の言葉によつて試されるべきであると断言した。ミラーは言った。「悪魔は、今日、ある人々の心に大きな勢力を持っている。われわれは、彼らがどのような霊を持っているかを、どうやって知ることができるのである

うか。聖書は、『あなたがたは、その実によつて彼らを見わけるであろう』と答えている。…さまざまの霊が世に現われてきている。そしてわれわれは、霊を試すように命じられている。この世の中にあって、われわれを落ち着いて正しく信仰深く生きるようにさせない霊は、キリストの霊ではない。このような熱狂的運動は、サタンによるところ大であるとの確信を、わたしはますます強くしている。…われわれの中には、全く清められたいと主張する者が多くあるが、彼らは、人間の言い伝えに従っているものであって、真理を信じることを表明しない他の人々と同様に、真理のことは何も知らないように思われる。」「誤りの霊は、われわれを真理から離れさせる。そして、神の霊は、われわれを真理に導くのである。しかし、あなたがたは言うであろう。人は誤りの中にいながら自分は真理を持っていると考えるときがある。その場合はどうなのか、と。われわれはこう答える。霊と言葉とは一致する、と。もし人が、神の言葉によつて自分を判断し、神の言葉全体と完全に調和していることがわかれれば、そのときには自分は真理を持っていると信じなければならない。しかし、もし自分を導いている霊が、神の律法や聖書の全体の主旨と調和しないならば、悪魔のわなに捕えられることのないように、注意して歩かなければならない。」「わたしは、しばしば、キリスト教国全体の雑音の中よりは、輝く目、涙にぬれたほお、とだえがちな言葉の中に、内的敬虔さの証拠をより多く見つけるのであった。」^三

厳 粛 な 運 動

宗教改革の時代に、改革の敵たちは、狂信の害悪をすべて、最も熱心に狂信に反対して働いていた人々自身の

せいにした。同様のことが、再臨運動の反对者たちによって行なわれた。極端な人々や狂信的な人々の誤りを、偽り誇張して伝えるだけでは満足せずに、なんの根拠もない悪評を言いふらした。これらの人々は、偏見と憎しみに動かされていた。彼らは、キリストが門口に來られたという宣言を聞いて心の平和を破られた。彼らは、それが真実かもしれないと恐れながら、そうでないことを望んだ。彼らが再臨信徒とその信仰に戦いをいどんだ秘密はこれであつた。

パウロやルターの時代に、教会に狂信者や欺瞞者がいたからといって、彼らの働きを非難する理由にはならないのと同様に、再臨信徒の中に少数の狂信者がいたからといって、それが神の運動でなかつたと決める理由にはならない。神の民が、眠りからさめて、悔い改めと改革の業に熱心に取りかかるなら、また、イエスにある真理を学ぶために、聖書を探るなら、そして、神に対して全的な献身をするなら、そのときには、サタンが今なお抜け目なく活動しているということが、よくわかるであろう。サタンは、できるかぎりの欺瞞を働かせ、彼の支配下のすべての墮落天使を動員して、彼の力をあらわすであろう。

再臨の宣布が、狂信と分裂を引き起こしたのではなかつた。これらのことは、再臨信徒たちが、自分たちの真の立場について疑惑と困惑の状態にあつた一八四四年の夏に、起きたのである。第一天使の使命と「夜中の叫び」は、直接、狂信と分裂をしずめるのに役立った。この厳肅な運動に参加した人々は一致していた。彼らの心は、お互いに対する愛と、まもなくお目にかかると待望していたイエスに対する愛に満ちていた。一つの信仰、一つの祝福された望みが、彼らを高めて、どんな人間的影響にも左右されぬようにし、サタンの攻撃から彼らを守つたのである。

「花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた」(マタイ二五ノ五一七)。最初、二千三百日が終わると考えられた時と、後に、それが延長していると考えられた同年の秋との、その中間の一八四四年の夏に、ちょうど聖書の言葉どおり、「さあ花婿だ、迎えに出なさい」という使命が伝えられた。

夜中の叫び

この運動が起きたのは、二千三百日の起算点であるところの、エルサレムを建て直せというアルタシヤスタ王の勅令は、紀元前四五七年の秋に効力を発したのであって、以前に信じられていたように、その年の初めではなかったということが、発見されたからであった。四五七年の秋から数えれば、二千三百年は、一八四四年の秋に完了する(付録参照)。

また、旧約聖書の型から見ても、「聖所の清め」によつて表わされている事件が起こるのは、秋であることが示されていた。これは、キリストの初臨に関する型が成就した方法に注目したとき、非常に明瞭となった。

過越の小羊をほふることは、キリストの死の型であった。パウロは次のように言っている。「わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ」(コリント第一・五ノ七)。過越の祭りのときに主の前で揺り動かす初穂の束は、キリストの復活の典型であった。パウロは、主と主のすべての民との復活について、こう

述べている。「最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち」（コリント第一・一五ノ二三）。収穫に先だつて最初に実つた穀物が揺祭としてささげられたように、キリストは、将来復活の時に神の倉に収められる贖われた人々の、永遠の収穫の初穂である。

こうした型は、そのできごとだけでなく、その時に關しても成就した。ユダヤ暦の一月一四日、すなわち千五百年という長期にわたつて過越の小羊がほふられてきたその月その日に、キリストは、弟子たちと過越の食事をともにし、「世の罪を取り除く神の小羊」としてのご自身の死を記念する式典を制定された。その夜、彼は悪人たちの手に捕えられ、そして十字架にかけられて殺されることになつた。そして、われわれの主は、揺祭の束の実体として、三日めに死からよみがえり、「眠っている者の初穂」となり、贖われたすべての者の「卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変え」ることを実証された（同一五ノ二〇、ピリピ三ノ二一）。

これと同様に、再臨に關連した型も、象徴的奉仕のなかで指示されたその時期に成就しなければならない。モーセの律法において、聖所の清め、すなわち、大いなる贖罪の日は、ユダヤ暦の七月一〇日に行なわれた（レビ記一六ノ二九―三四）。その日に、大祭司は、全イスラエル人の罪の贖いをなし、彼らの罪を聖所から除き、出て来て、民を祝福した。そのように、われわれの大祭司キリストが現われて、罪と罪人を滅ぼし、地を清め、待望していた神の民に永遠の生命を与えるものと、人々は信じた。聖所の清めの時である大いなる贖罪の日の七月一〇日は、一八四四年の一〇月二二日にあたり、その日が主の再臨の時であると考えられた。これは、二千三百日が秋に終結するという前記の証拠とも一致し、この結論は反論できないと思われた。

マタイによる福音書二五章のたとえでは、待機と眠りのあとに花婿が来ることになっている。これは、預言と

型との両面から提示された今の議論とも一致していた。彼らは、それらが真実であることを堅く信じた。そして、「夜中の叫び」が、幾千の信徒たちによって叫ばれた。

主に立ち返れ

この運動は、潮流のように全土を覆った。町々、村々、そして僻地にまで伝えられて、待望していた神の民は、完全にめざめるに至った。狂信は、昇る太陽の前の朝霜のように、この宣言の前に消えていった。信徒たちは、自分たちの疑いと困惑とが取り除かれたことを知り、希望と勇気が彼らの心を活気づけた。この運動には、人間的興奮だけで神の言葉と霊に支配されていないときに常にあらわれるところの極端さがなかった。それは、古代のイスラエルが、神のしもべたちからの譴責のメッセージを受けて、心を低くし、主に立ち返るときの様子に似ていた。それは、各時代における神の働きのしるしであるところの特徴を帯びていた。彼らは無我夢中で喜ぶということはせず、深く心を探り、罪を告白し、世俗を捨てるのであった。主に会う準備をするということが、苦悶する魂の、心の重荷であった。彼らは、ためまず祈るとともに、神に全的に献身した。

ミラーは、その働きを次のように述べている。「大きな喜びの表現などはない。それは、天と地のすべてが、言葉に尽くせない輝きに満ちた喜びをもつとともに喜び将来の時まで、抑えておくもののように思われた。大声で叫ぶこともない。それもまた、天からの叫びがあるまで取っておかれる。歌う者たちもだまっている。彼らは、天使たち、天からの聖歌隊に加わるのを待っている。…感情の衝突はない。すべての者は、心を一つにし、思

いをつにしている。」^四

この運動に参加した他の者は、次のように証言した。「この運動は、至るところで、人々に深く心を探らせ、天の神の前に心を低くさせた。それは、この世の事物に対する愛着を捨てさせ、争いと敵意を和解させ、罪の告白と神の前での屈伏を行なわせ、悔いなくおれて神に許しと嘉納を求めさせた。それは、これまでわれわれが目撃したことがなかったほど、人々の心を神の前に低くし、ひれ伏させた。神がヨエルによって命じられたように、神の大きい日が近づいたとき、人々は、衣服ではなく心を裂いて、断食と嘆きと悲しみをもって主に帰った。また、神がゼカリヤによって言われたように、神の子供たちに、恵みと祈りの霊とが注がれた。彼らは自分たちが刺した主を見、全地に大きな悲しみが起きた。…そして、主を待ち望んでいた者たちは、そのみ前で心を悩ました。」^五

使徒時代以来のすべての大宗教運動の中で、一八四四年秋の運動ほど、人間の不完全さとサタンの策略に妨げられなかったものはない。それから長年経過した今でさえ、その運動に参加し、堅く真理に立った者はみな、今なおあの祝福された事業の神聖な力を感じ、それが神からのものであったことを証言するのである。

再臨信徒の信仰

「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がして、待っていた者たちは「起きて、それぞれあかりを整えた。」彼らは、これまでになかったほどの非常な興味をもって、神の言葉を研究した。失望しているものを奮起させて、

使命を受け入れるようにさせるために、天からみ使いたちが送られた。働きは、人間の知恵や学識によるものではなくて、神の力によるものであった。まず最初に召しを聞いて従ったものは、最も学識のある人々ではなくて、最も謙遜で献身的な人々であった。農夫は畑に作物を刈り残したままで、そして、職人は道具を捨てて、涙と喜びをもって、警告を伝えるために出て行つた。以前、運動の指導者であつた人々は、この運動では、いちばん最後になつてから加わつた。一般の教会は、この使命に対して戸を閉ざした。そして、この使命を信じた多くの人は、教会から脱会した。この宣言は、神の摂理のもとに第二天使の使命と合流し、その運動に力をそえた。

「さあ、花婿だ」というメッセージは、聖書の証拠が明確で決定的ではあつたが、その議論が重要なものではなかつた。それには、人の心を動かさずにはおかぬ力が伴つていた。それには疑惑も疑問もなかつた。キリストがエルサレムに勝利の入場をなさつたとき、過越の祭りを祝うために各地から集まつて来た人々が、オリブ山に集まつた。そして、彼らがイエスに従つていた群衆に加わつたとき、彼らはその場の靈感に打たれて、「主の御名によつてきたる者に、祝福あれ」という叫びに加わつた（マタイ二一ノ九）。そのように、再臨信徒の集会に集まつた未信者たちも、ある者は好奇心から、ある者はただ嘲笑するために来ていたが、「さあ、花婿だ」というメッセージには、彼らの心に強く迫るものがあつた。

当時、人々は、祈りが答えられずにはいないような信仰、すなわち、報いが与えられることを心にとめるところの信仰を持っていた。乾いた土に雨が降るように、恵みの靈は、熱心に求める者の上にくだつた。まもなく顔と顔を合わせて贖い主に会うことを期待した人々は、言葉では表現できない厳肅な喜びを感じた。忠実な信徒たちの上に、神の祝福があふれるばかりに注がれて、人々の心は、聖靈の和らげ静める力にかされた。

メッセージを信じた人々は、注意深く厳肅に、主に会うと期待しているその時を待った。彼らは、毎朝、自分たちが神に受け入れられているという確証を得ることを第一の義務と感じた。彼らの心は堅く結ばれ、ともに、そしてお互いのために、祈り合った。彼らはしばしば、人里離れたところに集まって、神と交わり、とりなしの声は野や林から天にのぼった。彼らにとつて、救い主に受け入れられたという確信は、日ごとの糧よりも必要なものであった。もし心に曇りが生じた場合には、それが払いのけられるまでは安んじなかった。彼らは、許されたとという恵みの証拠を感じたときに、彼らが心から愛している主を仰ぎ見たいと熱望したのである。

大 失 望

しかし、彼らは、再び失望を味わわなければならなかった。期待した時は過ぎ、救い主はおいでにならなかった。彼らは、ゆるぐことのない確信をもって、主の来られるのを待望したのであったが、しかし今は、マリヤが救い主の墓に来て、それがからになっているのを見つけ、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と泣いて叫んだのと同じように彼らは感じた（ヨハネ二〇ノ一三）。

使命が真実かもしれないという恐怖心が、しばらくの間、不信の世を抑制していた。時が過ぎ去っても、これは、すぐには消え去らなかった。最初、彼らは、失望した人々に勝ち誇ることはなかった。しかし、神の怒りのあるしが現われないので、彼らは恐怖心から立ち直り、ふたたび非難と嘲笑を始めた。主の再臨が間近いことを信じると公言していた多くの者が、信仰を捨てた。非常な確信を持っていた人々の中には、自尊心を深く傷つけ

られて、世から逃れたいと思う者もあった。彼らは、ヨナのように神につぶやき、生きるよりは死ぬことを願った。神の言葉でなくて、他人の意見に信仰の基礎をおいていた人々は、今や、再び自分たちの見解を変えようとしていた。嘲笑者たちは、弱くおくびょうな者たちを自分たちの側に引き入れた。そしてこのような人々はみな、もはや恐怖も期待もあり得ないのだと、口をそろえて宣言した。時は過ぎ、主は来られなかった。そして、世界は幾千年もこのまま続くように思われた。

熱心で誠実な信徒たちは、キリストのためにすべてをささげ、これまでになく彼の臨在を感じていたのであった。彼らは、自分たちの信じたとおり、最後の警告を世界に伝えた。そして、まもなく彼らの主と天使たちとの交わりに入れられるものと期待していたので、使命を受け入れない人々との交わりはほとんどしていなかった。彼らは、切なる願望をもって、「主イエスよ、来たりませ。すぐ来たりませ」と祈っていた。しかし、彼は来られなかった。そして、今再び人生の心労と労苦の重荷を負い、あざ笑う世ののしりと冷笑に耐えることは、信仰と忍耐の恐ろしい試練であった。

使命宣布の意味

しかし、この失望は、キリスト初臨の時の弟子たちの失望ほど大きいものではなかった。イエスが、エルサレムに勝利の入城をなさったとき、彼の弟子たちは、彼が今にもダビデの位について、圧迫者からイスラエルを救済されるものと信じた。大きな希望と喜ばしい期待をもって、彼らは競って彼らの王に敬意を表した。多くの者



熱心な祈りをもって、再臨信徒たちは聖書の預言の教えを再検討し、自分たちの誤りを発見するために聖書を研究した。彼らが探り調べたときに、神は光をお与えになった。

は、自分たちの上衣を彼の道に敷き物として敷いたり、しゅろの枝を彼の前にまき散らしたりした。熱狂的な喜びのうちに、彼らは、「ダビデの子に、ホサナ」といつせいに歓呼の声をあげた。パリサイ人がこの喜びの叫びを聞いて、きげんを損ね、怒って、イエスに弟子たちをしかるように願ったとき、彼は、「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」と答えられた（ルカ一九ノ四〇）。預言は成就しなければならなかった。弟子たちは、神のみこころを成し遂げつつあった。そして彼らは、苦い失望に陥ることになっていた。ほんの数日のうちに、彼らは、救い主の苦難の死と葬りとを見なければならなかった。彼らの期待は、何一つ成就せず、彼らの希望もイエスとともに消え失せた。主が勝利のうちに墓から出て来られるまで、彼らは、すべてのことが預言されていたのだということ、そして「キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中からよみがえるべきこと」を、悟ることができなかった（使徒行伝一七ノ三）。

主は、五百年前、預言者ゼカリヤによって次のように宣言しておられた。「シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る」（ゼカリヤ書九ノ九）。もし弟子たちが、キリストは審判と死に向かって進んでおられるのだと知っていたならば、彼らは、この預言を成就することはできなかったであらう。

同様に、ミラーと彼の仲間たちは、靈感が世界に伝えるべきであると預言したところの使命を伝えて、預言を成就したのである。しかし、もし彼らが、自分たちの失望を指し示し、主の再臨前にもう一つの使命が全世界に伝えられるべきことを示しているところの、いくつかの預言を完全に知っていたならば、彼らは、あの使命を宣

布することはできなかったであろう。第一と第二天使の使命は、正しい時に宣布されて、神がそれらによってなそうと計画されたその働きを成し遂げた。

ゆるがぬ信仰に立つて

その時が過ぎてキリストが現われないなら、再臨運動全体が放棄されるであろうと期待しながら、世の人々は見守っていた。しかし、激しい試練のもとにあつて、信仰を捨てたものも多かったが、堅く立った者もいくらかあつた。再臨運動の実であるところのもの、すなわち、その働きに伴つたところの、謙遜と自己吟味の精神、世俗を捨てて生活の改革を行なう精神は、それが神によるものであることを証明していた。彼らは、再臨の宣布に對して聖霊の力のおかげがあつたことを否定できなかった。また、自分たちの預言の期間の計算にまちがいを見いだすことができなかった。最も有能な反対者でさえ、彼らの預言の解釈法を覆すことができなかった。彼らは、神の聖霊に照らされた精神とその生きた力に燃やされた心とが、熱心な祈りをもって聖書を研究して得た結論を、聖書の証拠がないかぎり、放棄することはできなかった。一般の宗教家や世の知者たちの激烈な批評に耐え、学識と雄弁による攻撃にも、上層下層の人々ののしりと冷笑にも堅く立つてきた結論を、放棄することはできなかった。

たしかに、期待したできごとについてまちがいはあつたが、それでさえ、神の言葉に對する彼らの信仰をゆるがすことはできなかった。ヨナが、二ネベの町で、四十日のうちに町が滅ぼされると宣言したとき、主は二ネベ

の住民の悔い改めを受け入れて、彼らの恩恵期間を延長された。しかし、ヨナのメッセージは、神から送られたものであった。そして、二ネベは、神のみこころに従って、試みられたのである。同様に神は、再臨信徒を導いて、審判の警告を宣布させられたのであると、彼らは信じた。彼らはこう言った。「それは、それを聞いたすべての者の心を試し、主の出現を愛する心を起こさせるか、それとも再臨に対する嫌悪——程度の差はあるが、しかし神はごぞんじである——を起こさせるかした。それは、一線を画した。…自分の心を吟味する者は、主がその時来られたならば、自分たちはどちらの側にいたか——『見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる』と叫んだか、それとも山と岩とに向かって、われわれを覆って、み座にいますかたのみ顔と小羊の怒りとからかくまってくれと叫んだか——を知ることができる。こうして、神は、ご自分の民を試み、彼らの信仰をためして、彼らが試練の時に、神が彼らを置こうとされたその場所からしりごみするかどうか、そして彼らがこの世を捨てて、神の言葉を絶対的確信をもって信じるかどうかを、見られたのであるとわれわれは信じる」。^六

過去の経験において神の導きがあったことをなお信じた人々の気持ち、ウィリアム・ミラーの次の言葉に表現されている。「あの時と同じ証拠が与えられて、もう一度生活をし、神と人に対して正直であろうとすれば、わたしは、わたしがしたとおりのことをするであろう」。「わたしは、自分の衣には人々の魂の血がついていないことを望む。わたしは、自分のなしかぎりにおいて、人々の罪の宣告に関し責任を問われるものではないと感じる」。「わたしは二度失望したけれども、落胆や絶望はしていない。…キリストの再臨に対するわたしの希望は、これまでと同様に強い。わたしは、長年まじめに研究したあとで、自分の厳粛な義務と感じたことを行な

ったにすぎない。もしわたしがまちがっていたとしても、それは、同胞を愛し、神への義務を堅く信じてのことであつた。」「わたしが知っているただ一つのは、わたしは自分の信じたこと以外は何も説教しなかつたということである。そして、神はわたしとともにあられた。神の力が働きの中にあらわれ、多くのよい結果が生じた。」「再臨の時期についての説教の結果、幾千のものが、聖書を研究するようになった。そしてそれによって彼らは、信仰とキリストの血の注ぎによって、神と和らいだ。」「わたしは、高慢な人の好意を求めず、世の非難にもおじけなかつた。わたしは今、彼らにへつらつて好意を得ようとも、分を越えて彼らの憎しみを買おうとも思わない。わたしは、彼らに命乞いしようなどとは決して思わないし、また、もし神のみこころであるならば、生命を失うこともあえて恐れてはいないつもりである。」「^ハ

神の守りと信徒の希望

神は、ご自分の民を見捨てられなかつた。神の霊は、自分たちが受け入れていた光を軽々しく否定せず再臨運動を放棄しなかつた人々と、なおともにあられた。ヘブル人への手紙の中に、この危機において試みられていたところの待望者たちに対する励ましの言葉が記されている。「だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない。』しか

しわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である」(ヘブル10ノ三五―三九)。

この勧告が最後の時代の教会にあてられていることは、主の再臨が近いことを指示している言葉を見ても明らかである。「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。」そして、見たところ遅延があり、主のこられるのが遅れるように見えることが、明らかに示されている。ここに与えられている教訓は、特にこの時の再臨信徒の経験に当てはまる。ここで語りかけられている人々は、信仰の破船となるおそれがあった。彼らは、聖霊と神の言葉の指導に従って、神のみこころを行なった。しかし、彼らは、過去の経験における神のみこころを理解することができず、また、彼らの前にある道を見ることもできなかった。そして彼らは、神がほんとうに自分たちを導いておられるのかどうか疑うように誘惑された。この時に、「わが義人は、信仰によつて生きる、」という言葉が当てはまった。「夜中の叫び」という輝かしい光が彼らの道を照らし、預言の封が開かれ、キリストの再臨が近いことを告げるしるしが急速に成就するのを見たとき、彼らは、いわば目で見つ歩いたのであった。ところが今、失望に打ちひしがれて、彼らは神とみ言葉に対する信仰によってのみ立つことができた。世の嘲笑者たちは、「あなたがたは欺かれたのだ。信仰を捨て、再臨運動はサタンのものであったと言いなさい」と言っていた。しかし、神の言葉は、「もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」と宣言していた。今、彼らの信仰を捨て、使命に伴っていた聖霊の力を拒否することは、滅びに向かって後退することであった。彼らは、「あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。」「あなたがたに必要なのは、忍耐である。」「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない」というパ

ウ〇の言葉によって堅く立つように励まされた。彼らにとって唯一の安全な道は、すでに神から受けた光をたいせつにし、神の約束を堅く信じ、聖書を探りつけ、さらにそれ以上の光が与えられるのを忍耐して待ち、見守ることであった。

注

- 一 Bliss, pp.236, 237.
- 二 “The Advent Herald and Signs of the Times Reporter,” vol.8, No.23 (Jan. 15, 1845).
- 三 Bliss, p.282.
- 四 Ibid., pp.270, 271.
- 五 Bliss, in “Advent Shield and Ryeview,” vol. 1, p.271 (January 1845).
- 六 “The Advent Herald and Signs of the Times Reporter,” vol.8, No.14 (Nov. 13, 1844).
- 七 Bliss, pp.256, 255, 277, 280, 281.
- 八 J. White, “Life of Wm. Miller,” p.315.

第二章

聖所とは何か

一八四四年と聖所問題

聖書の中で、他のどの聖句よりも、再臨信仰の基礎であり、中心的な柱であったものは、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という宣言であった（ダニエル書八ノ一四）。この聖句は、主がまもなく来られることを信じたすべての信徒がよく知っていた言葉であった。この預言は、信仰の合い言葉として、幾千もの人々のくちびるによってくりかえされた。すべての者は、ここに預言された事件に、彼らの最も輝かしい期待と大事な希望とがかけられているのを感じた。この預言の期間は、一八四四年の秋に終わることが示されていた。当時再臨信徒たちは、キリスト教界の他の人々と同様に、地上、あるいはその一部が、聖所であると思っていた。そして聖所の清めとは、最後の太いなる日の火によって地が清められることであり、

これはキリストの再臨の時に起こると、彼らは理解していた。そこで、一八四四年にキリストが地上に帰られると結論したのであった。

しかし、定められた時は過ぎ、主は来られなかった。信徒たちは、神の言葉に誤りがないことを知っていた。自分たちの預言の解釈にまちがいがあったに違いない。しかし、それではどこがまちがっていたのであろうか。多くの者は、軽率にも、二千三百日が一八四四年に終わることを否定することによって、難問を解決しようとした。期待した時にキリストが来られなかったからという以外に、そうする理由は何もなかった。もし預言の期間が一八四四年に終わったならば、キリストは、火をもって地上を清めることによって聖所を清めるために、帰って来られなくては、ところが彼は来られなかったのだから、期間はまだ終わっていないのだ、と彼らは主張した。

このような結論を受け入れることは、預言的期間のこれまでの計算法を放棄することであった。二千三百日は、紀元前四五七年の秋に、エルサレムを建て直せというアルタシャスタの命令が実施された時に始まることになっていた。これを起算点にすれば、ダニエル書九ノ二五―二七にある、この期間についての説明の中で預言されたすべての事件の適用が、完全に調和する。六十九週、すなわち、二千三百年の最初の四百八十三年がたと、油を注がれた者、メシヤが現われる。そして、キリストは、紀元二七年バプテスマを受け聖霊の油を注がれて、この預言は正確に成就した。七十週めの半ばにメシヤは絶たれるのであった。キリストは、バプテスマから三年半の後、紀元三年の春に、十字架につけられた。七十週、すなわち四百九十年は、特にユダヤ人にかかわるものであった。この期間の終了後、ユダヤ人は、キリストの弟子たちを迫害することによって、キリストを決定的に

拒否し、使徒たちは、紀元三四年、異邦人へと向かった。こうして二千三百年の最初の四百九十年が終わり、あと千八百年が残る。紀元三四年から千八百年たつと、一八四四年である。「そして聖所は清められて正しい状態に復する」と天使は言った。これまで預言に指定されていたことは、みな、定められた時に、まちがいに成就した。

この計算に関しては、一八四四年に聖所の清めに符合するどんなできごとが起きたかがわからないということを除けば、すべては明瞭で調和していた。この期間がこの時に終了したということを否定することは、問題全体を混乱に陥れることであり、預言の疑う余地のない成就によって確立されたところの見解を、放棄することであった。

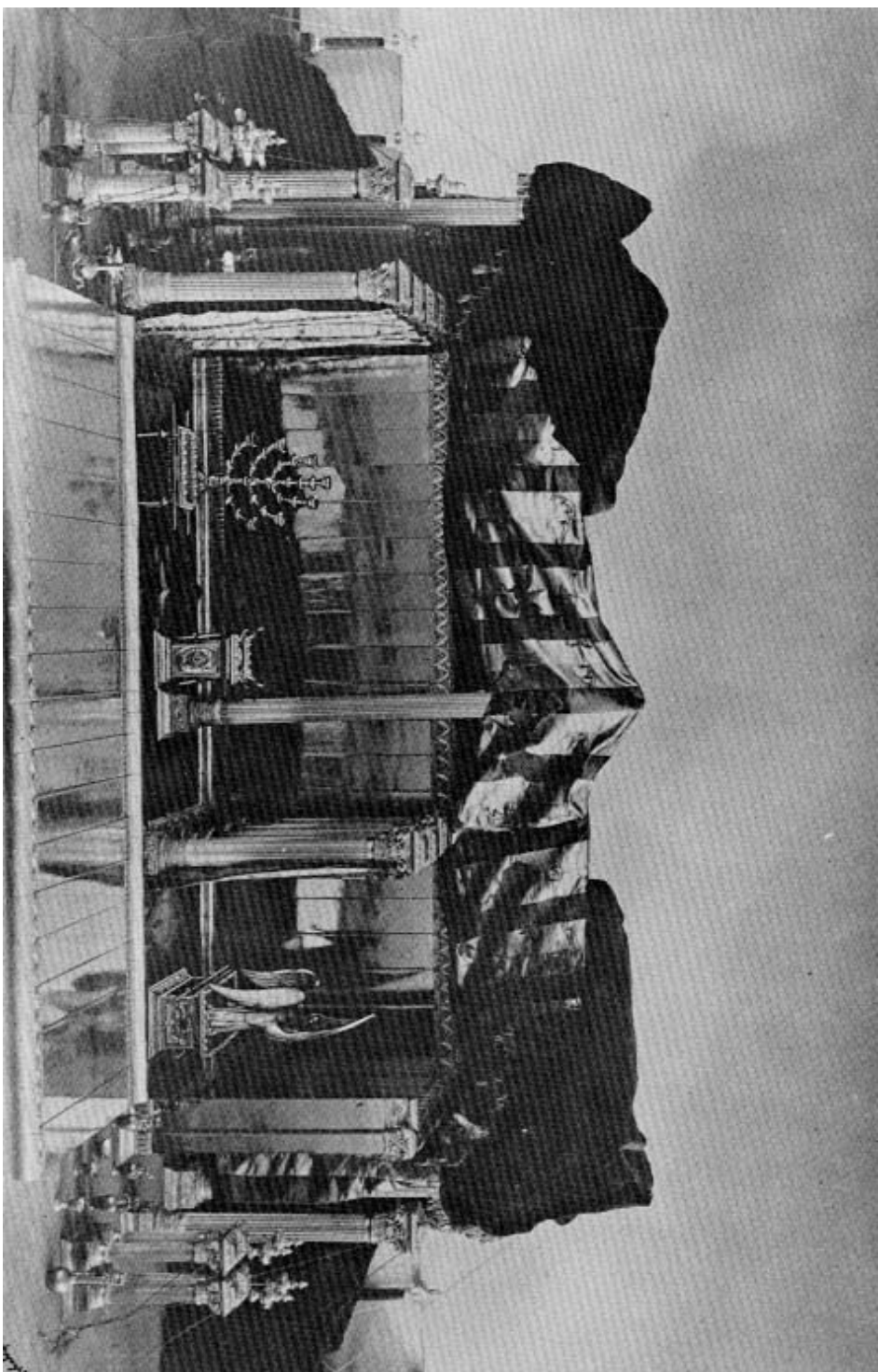
聖所とは何か

しかし、神は、この大再臨運動において、ご自分の民を導いて来られた。神の力と栄光とが、この働きに伴っていた。神は、それが暗黒と失望に終わることを、誤った狂信的な騒ぎであると非難されることを、許してはおかれなかった。神は、ご自分の言葉を、疑いと不確かさのなかにあるままにしてはおかれなかった。多くの者が、預言の期間に関するこれまでの計算法を捨て、それに根拠を置いていた運動の正しさを否定したが、なかには、聖書と神の霊のあかしとに支持された信仰と経験とを放棄しようとしない人々もいた。彼らは、自分たちの預言研究の解釈の原則は正しかったことを信じ、すでに得た真理を堅く保って、同じ聖書研究を続けることが自分た

ちの義務であると信じた。熱心な祈りをもって、彼らは自分たちの立場を再検討し、誤りを発見するために聖書を研究した。彼らは、預言の期間の計算に誤りを見つけることができなかったので、聖所の問題をもっと綿密に吟味するようになった。

研究の結果、彼らは、地上が聖所であるという一般の見解を支持する証拠が、聖書にないことを知った。しかし、聖書には、聖所とその本質、場所、奉仕などの問題が十分に説明されているのを彼らは見いだした。このことについての聖書記者たちの証言は、疑問の余地がないほど明瞭で十分なものであった。使徒パウロは、ヘブル人への手紙の中で、次のように言っている。「さて、初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた」（ヘブル九ノ一―五）。

パウロがここで言及している聖所は、いと高きおかたの地上の住居として、モーセが神の命令によって造った幕屋のことであった。モーセは、神とともに山にいたときに、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしは彼らのうちに住むためである」という命令を受けた（出エジプト記二五ノ八）。イスラエル人は荒野の旅をしていたので、幕屋は、移動できるように組み立てられていた。しかしそれにしても、それは非常に壮麗な建造物であった。その壁は、金で覆った板で造られ、銀の座にはめられていた。屋根は、数枚の幕から成り、外側は



パウロが言及している地上の聖所は、神の命令によってモーセが建てた幕屋であった。それは「会見の幕屋」であり、荒野の放浪の間、またカナンにはいつて後、主がご自分の民に会われた場所であった。

皮で、いちばん内側は、ケルビムの姿を美しく織り出した亜麻布であった。燔祭の壇は外庭にあったが、幕屋そのものは、聖所、至聖所と呼ばれる二つの部屋から成り、壮麗な幕でへだてられていた。また、同様の幕が第一の部屋の入り口にもかけられていた。

聖所には、南側に燭台があつて、その七つのともし火が、昼も夜も聖所を照らしていた。北側には供えのパンの机があつた。そして聖所と至聖所をへだてる幕の前に、金の香壇があつて、そこから香の煙がイスラエルの祈りとともに、毎日神の前にのぼっていった。

至聖所には、貴い木で造られ、金で覆われた箱があつて、その中に、神によつて刻まれた十戒の二枚の石の板が入れてあつた。この神聖な箱の上にあつて、そのふたの役目を果たしているのが、贖罪所であつた。これは、実に巧みに仕上げられたりっぱなもので、その両端にケルビムが置かれ、全部純金で造られていた。この部屋において、神の臨在が、ケルビムの間の栄光の雲の中にあらわされたのであつた。

新しい契約の聖所

ヘブル人がカナンに定住してから、幕屋はソロモンの神殿に代わり、規模は大きく、建築も永久的なものとなつたけれども、同様の比率で造られ、同じような器具が備えつけられていた。こうして、聖所は、ダニエルの時代に荒廢に帰した時を別として、紀元七〇年にエルサレムがローマに滅ぼされるまで存在していた。

これが地上に存在した唯一の聖所で、聖書が記録しているものである。パウロはこれを、初めの契約の聖所と

言った。しかし、新しい契約に、聖所はないのであろうか。

真理の探究者たちは、再びヘブル人への手紙にもどって、第二の、すなわち新しい契約の聖所の存在が、すでに引用した「初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった」というパウロの言葉に暗示されていることを発見した。そして、「も」という言葉が用いられていることは、パウロが前にこの聖所について述べたということを暗示している。彼らは、その前の章にもどって、次のところを読んだ。「以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである」(ヘブル八ノ一、二)。

ここに、新しい契約の聖所が明らかにされている。初めの契約の聖所は、人によって張られ、モーセによって建てられたが、これは、人間によらず主によって張られている。初めの聖所では、地上の祭司たちが務めを行なったが、こちらの聖所では、われわれの大祭司、キリストが、神の右で仕えておられる。一方の聖所は地上にあったが、もう一方は天にあるのである。

さらに、モーセが建てた幕屋は、ひな型に従って造られた。主は、次のように指示された。「すべてあなたに示す幕屋の型および、そのもろもろの器の型に従って、これを造らなければならない。」「また、次の命令が与えられた。」「そしてあなたが山で示された型に従い、注意してこれを造らなければならない」(出エジプト記二五ノ九、四〇)。パウロは、最初の幕屋は、「その当時のための象徴であり、そこで供え物やいけにえがさげられた」(英語訳)と言っている。続いて彼は、その聖所は「天にあるもののひな型」であり、律法に従って供え物をささげる祭司たちは、「天にある聖所のひな型と影とに仕えている者」であり、「キリストは、ほんとうのものの

模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないうで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである」と言っている（ヘブル九ノ九、二三、八ノ五、九ノ二四）。

天にある真の聖所

イエスがわれわれのために仕えておられる天の聖所は、大いなる原型であつて、モーセが建てた聖所は、その写しであつた。神は、地上の聖所の建設者たちに、神の霊をお与えになつた。その建設に当たつてあらわされた芸術的技量は、神の知恵を表示していた。壁は、全体が巨大な金塊のように見え、金の燭台の七つのともし火の光が、四方に反射していた。供えのパンの机と香壇は、よくみがいた金のように輝いていた。天井になっていた華麗な幕には、青、紫、緋色で天使が織り出されて、いっそうの美しさを添えた。そして、第二の幕の向こうには、神の栄光の目に見える現われである聖なるシエキーナーがあり、大祭司以外のだれひとり、その前に立つて生き得る者はいなかった。

地上の聖所の比類のない壮麗さは、われわれのさきがけであられるキリストが神のみ座の前で仕えておられる天の宮の栄光を、人間の目に映すものであつた。王の王の住居において、彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々（ダニエル書七ノ一〇参照）。輝く守護セラピムが、崇敬のうちに顔を覆うところの、永遠のみ座の栄光に輝く宮に比べるならば、人間の手で造られた建造物は、たとえどんなにりっぱであつても、その壮大さと栄光のかすかな反映にすぎない。しかし、そうはいつても、天の聖所に関する重大な真理と、人間の贖罪のために行

なわれた偉大な働きとは、地上の聖所とその奉仕によって教えられたのであった。

天の聖所の聖所と至聖所は、地上の聖所の二つの部屋によって表わされている。使徒ヨハネは、幻のなかで、天にある神の宮を見ることを許されたとき、「七つのともし火が、御座の前で燃えてい」るのを見た（黙示録四ノ五）。彼は、一人の天使が、「金の香炉を手にとって祭壇の前に立った。たくさん香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった」のを見た（黙示録八ノ三）。ここで、預言者は、天の聖所の第一の部屋を見ることを許された。そして、そこに、地上の聖所の金の燭台と香壇によって表わされていたところの、「七つのともし火」と「金の祭壇」を見た。再び、「天にある神の聖所が開けて」（黙示録一一ノ一九）、彼は、奥の幕の中の、至聖所を見た。彼はここで、「契約の箱」を見た。それは、神の律法を入れるためにモーセが作った聖なる箱によって表わされていたものであった。

こうして、この問題を研究していた人々は、天に聖所があるという疑う余地のない証拠をつかんだ。モーセは、示された型に従って、地上の聖所を造った。パウロはその型となった天の聖所が、真の聖所であると教えている。そしてヨハネは、それを天に見たと証言している。

神の住居である天の宮において、そのみ座は、義と公正に基づいている。至聖所には、正義の規準である神の律法があつて、全人類がそれによって審査されるのである。律法の板を入れた箱は、贖罪所で覆われていて、その前でキリストは、ご自分の血によって罪人のためにとりなしをなさる。こうして、人類の贖いの計画における、義といつくしみの結合が表わされている。この結合は、無限の知恵のおかたのみが考案し、無限の力のおかたのみが成し遂げることができた。この結合は、全天を、驚異と賛美で満たすものである。うやうやしく贖罪所を見

おろしている、地上の聖所のケルビムは、贖罪の業に対する天の軍勢の深い関心を表わしている。これは、天使たちもうかがい見たいと願っている、あわれみの神秘である。すなわち、悔い改めた罪人を義とし、墮落した人類との交わりを回復するとともに、神自らが義となれること、また、キリストが、ご自分の身を低めて、無数の群衆を滅びの淵から引き上げ、彼ご自身の義の汚れない衣を着せて、彼らを墮落しなかった天使たちとの交わりに入れ、神の前に永遠に住まわせられること、このことである。

仲保者キリスト

人類の仲保者としてのキリストの働きは、「その名を枝という人」に関するゼカリヤの美しい預言のなかに示されている。預言者は、次のように言っている。「彼は主の宮を建て、王としての栄光を帯び、その位（天父の）に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間に**平和の一致**がある」（ゼカリヤ書六ノ一二、一三）。

「彼は主の宮を建て」る。キリストは、彼の犠牲と仲保とによって、神の教会の基礎であり、またその建設者でもあられる。使徒パウロは、彼を指して、「隅のかしら石である」と言っている。「このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである」（エペソ二ノ二〇―二二）。

「彼は…王としての栄光を帯び。」墮落した人類のための贖いの栄光は、キリストにのみ帰せられる。贖われ

たものは、永遠にわたって「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し……て下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように」と歌う（黙示録一ノ五、六）。

「その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がい」る。彼は今「その栄光の座に」おられるのではない。栄光の王国は、まだ始まってはいない。仲保者としての彼の働きが終わらなければ、神は、「彼に父ダビデの王座を」、「限りなく続く」その支配を、「お与えにな」らない（ルカーノ三三、三三）。キリストは今、祭司として、父とともにみ座についておられる（黙示録三ノ二一参照）。永遠の、自存なさるおかたとともに、「われわれの病を負い、われわれの悲しみをになった」かた、「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」、「試練の中にある者たちを助けることができる」かたが、おられるのである。「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主……がおられる」（イザヤ書五三ノ四、ヘブル四ノ一五、二ノ一八、ヨハネ第一・二ノ一）。彼の仲保は、刺され砕かれた体による仲保、罪のない生涯による仲保である。傷ついた手、刺されたわき、傷ついた足が、罪に陥った人類のために嘆願しておられる。人間の贖罪のためには、このように無限の価が払われたのである。

「このふたりの間に平和の一致がある」。み子の愛に劣ることのない天父の愛が、失われた人類に対する救いの基礎である。イエスは、去る前に弟子たちに次のように言われた。「わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようと言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」（ヨハネ一六ノ二六、二七）。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られた（コリント第二・五ノ一九）。そして、天の聖所の奉仕において、「このふたりの間に平和の一致がある」。「神はそのひとり子を賜わった**ほどに**、この世を**愛して下さった**」。

それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三ノ一六)。

聖所の清めとは何か

聖所とは何かという質問に対して、聖書ははっきりと解答を与えている。聖書に用いられている「聖所」という言葉は、まず第一に、天にあるもののひな型としてモーセが建てた幕屋をさし、そして第二に、地上の聖所が指し示していたところの、天にある「真の幕屋」をさしている。キリストの死によって、型としての奉仕は終わった。天にある「真の幕屋」は、新しい契約の聖所である。そして、ダニエル書八ノ一四の預言は、この時代に成就されるのであるから、ここで言う聖所は、新しい契約の聖所であるに違いない。二千三百日が一八四四年に終結したときに、この地上には幾世紀もの間、聖所はなかった。こうして、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という預言は、疑いもなく天の聖所をさすのである。

しかし、聖所の清めとは何かという、最も重要な問題が、未解決のまま残っている。地上の聖所に関連してこつした儀式があったことは、旧約聖書に記されている。しかし、天において、清められねばならないものが、あるのであろうか。ヘブル人への手紙九章には、地上と天の両方の聖所の清めが明らかに教えられている。「こつして、ほとんどすべての物が、律法に従い、血によってきよめられたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない。このように、天にあるもののひな型は、これらのもの「動物の血」できよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすべたいけにえて、きよめられねばならない」(ヘブル九ノ二二・二

三)。それは、キリストの尊い血である。

この清めは、型としての儀式においても実際の儀式においても、血によって成し遂げられなければならない。前者は、動物の血によって行なわれ、後者は、キリストの血によって行なわれる。パウロは、なぜこの清めが血によって行なわれなければならないかというこの理由として、血を流すことなしには、罪の**ゆるし**がないからであると述べている。ゆるし、すなわち罪の除去という働きが、成し遂げられなければならない。しかし、罪は、天や地上の聖所とどのような関係にあるのであろうか。このことは、象徴的儀式を調べることによって学ぶことができる。なぜなら、地上で奉仕した祭司は、「天にある聖所のひな型と影とに」仕えていたからである（ヘブル八ノ五）。

地上の聖所の務めは、二つの部分から成っていた。すなわち、祭司たちは毎日聖所で務めを行っていたが、大祭司は一年に一度、聖所を清めるために、至聖所において贖いの特別な働きを行なった。毎日、悔い改めた罪人が幕屋の入り口に供え物を持って来て、手を犠牲の頭において自分の罪を告白し、こうして自分の罪を象徴的に自分自身から罪のない犠牲へと移した。それから動物はほふられた。「血を流すことなしには」罪のゆるしはあり得ない、と使徒は言っている。「肉の命は血にあるからである」（レビ記一七ノ一）。破られた神の律法は、罪人の生命を要求した。罪人の失われた生命を表わす血、すなわち犠牲が彼の罪を負って流したものが、祭司によって聖所の中に運ばれ、幕の前に注がれた。幕の後ろには、罪人が犯したその律法を入れた箱があった。この儀式において、罪は、血によって、象徴的に聖所に移された。ある場合には、血を聖所に持って入らず、モーセがアロンの子らに命じて「あなたがたが会衆の罪を負（う）…：ため、あなたがたに賜わった物である」と言った

ように、祭司は、そこで肉を食べなければならなかった（レビ記一〇ノ一七）。どちらの儀式も同様に、悔い改めた者から聖所へと、罪が移されることを象徴していた。

大いなる贖罪の日

こうした務めが毎日、一年じゅうを通じて行なわれた。イスラエルの罪がこうして聖所に移され、そして、それを取り除くために特別の務めが必要であつた。そこで、神は、聖所の各部屋のために贖いをすることをお命じになつた。「イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所のためにはないをしなければならない。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなければならない。」また、贖罪は、祭壇にも行なわれるべきで、「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない」（レビ記一六ノ一六、一九）。

一年に一度、大いなる贖罪の日に、大祭司は聖所を清めるために至聖所に入った。そこで行なわれた務めによつて、一年間の務めが完了した。贖罪の日に、二頭のやぎが幕屋の入り口に連れてこられ、くじが引かれた。「一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのため」（同一六ノ八）。主のためのくじに当たったやぎは、民のための罪祭としてほふられた。そして、大祭司は、その血を幕の中に携えていき、贖罪所の上と贖罪所の前に注がなければならなかった。血は、幕の前の香壇にも注がなければならなかった。

「そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手を置き、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろの



地上の聖所の第一の部屋で、1年を通して行なわれた祭司の務めは、われわれの偉大な大祭司イエス・キリストが、天父のもとに昇天なさってから始められた、天の聖所での祭司としてのお働きを表わしていた。

とが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう」(同二六ノ二二、二二三)。アザゼルのやぎは、もはやイスラエルの宿営に帰っては来なかった。そして、やぎを連れ出した人々は、宿営に帰る前に、水で身をすすぎ、衣服を洗わなければならなかった。

この儀式全体は、神が聖であられて、罪をいみきらわれることを、イスラエルの人々に深く感じさせるよう意図されていた。そして、さらに、罪に触れるならば必ず汚れることを、彼らに示すものであった。贖罪の業が行っている間、すべての者は、身を悩まさなければならなかった。仕事をすべてやめて、イスラエルの全会衆は、厳粛に神の前にへりくだり、祈り、断食し、心を深く探って一日を過ごさなければならなかった。

型と実体

贖罪に関する重要な真理が、型としての儀式によって教えられている。罪人の代わりに、その身代わりとなるものが受け入れられた。しかし、犠牲の血によって罪が取り消されたわけではなかった。こうした方法によって、罪が聖所に移されたのであった。罪人は、血のささげ物によって、律法の権威を認め、犯した罪を告白し、来たるべき贖い主を信じる信仰によって許しを願っていることを表明した。しかし彼は、律法の宣告から全く解放されたのではなかった。大祭司は、贖罪の日に、会衆からのささげ物をとって、その血をたずさえて至聖所に入り、律法の真上にある贖罪所の上にそれを注いで、律法の要求を満たした。それから彼は、仲保者として、罪を自ら

負って、聖所から持ち出した。彼は、アザゼルのやぎの頭に手を置いて、すべての罪を告白し、こうして、象徴的に、自分からアザゼルのやぎへと罪を移した。それからやぎは、罪を背負って去り、そして罪は永遠に民から切り離されたものと見なされた。

これが、「天にある聖所のひな型と影」に従って行なわれた儀式であった。そして、地上の聖所の務めにおいて、型として行なわれたことが、天の聖所の務めにおいて、現実に行なわれるのである。われわれの救い主は、昇天ののち、われわれの大祭司としての働きを始められた。パウロは次のように言っている。「ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである」(ヘブル九ノ二四)。

戸口であり、聖所を中庭から区別するものであった「幕の内」において、すなわち、聖所の第一の部屋において一年を通じて行なわれる祭司の務めは、キリストが昇天の時に始められた務めを表わしている。神の前に罪祭の血をささげ、イスラエルの祈りとともにたちのぼる香をたぐことが、日ごとの務めにおける祭司の働きであった。同様にキリストは、罪人のためにご自分の血をもって天父に嘆願なさり、そのみ前に、ご自身の義の尊い香とともに、悔い改めた信者の祈りを差し出された。これが、天の聖所の第一の部屋における務めであった。

キリストが弟子たちを離れて昇天されたとき、弟子たちは、信仰によってここまで彼についていった。ここに彼らの希望は集中した。パウロは次のように言った。「この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ『幕の内』にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠に…大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。」かつ、やぎと子牛との血に

よらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられそれによって永遠のあがないを全うされたのである」
(ヘブル六ノ一九、二〇、九ノ一二)。

贖いの最後の働き

千八百年にわたって、聖所の第一の部屋において、この務めが続けられた。キリストの血は、悔い改めた信者のために嘆願し、彼らがゆるされ天父に受け入れられるようにしてきたが、しかし彼らの罪は、まだ記録の書に残っていた。型としての儀式において、一年の終わりに贖罪の働きがあつたように、人類の贖いのためのキリストの働きが終わる前に、聖所から罪を取り除く贖罪の働きが行なわれるのである。これが、二千三百日が終了した時に始まった務めであつた。その時に、預言者ダニエルが預言したとおり、われわれの大祭司は、彼の厳粛な働きの最後の部分を行なうために、すなわち聖所を清めるために、至聖所に入られたのであつた。

古代において、民の罪が、信仰によって罪祭の上におかれ、そしてその血によって、象徴的に地上の聖所に移されたように、新しい契約においては、悔い改めた者の罪は、信仰によってキリストの上におかれ、そして実際に天の聖所に移されるのである。そして、地上の聖所の型としての清めが、それを汚してきた罪を取り除くことによって成し遂げられたように、天の聖所の実際の清めも、そこに記録されている罪を取り除くことによって、すなわち消し去ることによって、成し遂げられねばならない。しかし、これを完成するためには、だれが罪の悔い改めとキリストを信じる信仰によって、贖いの恵みを受ける資格があるかを決定するために、記録の書の調査

がなされねばならない。したがって、聖所の清めには、調査の働き、すなわち審判の働きが含まれるのである。この働きは、キリストがご自分の民を贖うために来られる前に行なわれねばならない。なぜなら、彼が来られる時には、彼はすべての者に、それぞれの行為に応じて報いを与えられるからである（黙示録二二ノ一二参照）。こうして、預言の言葉の光に従った者たちは、キリストは、二千三百日が一八四四年に終了した時に、この地上に来られるのではなくて、再臨に備えて贖いの最後の働きをするために、天の聖所の至聖所に入られたのだということを知った。

また、罪祭が犠牲としてのキリストをさし、大祭司が仲保者としてのキリストを表わす一方、アザゼルのやぎは罪の張本人であるサタンを象徴していて、彼の上に、真に悔い改めた者たちの罪が最終的に置かれるのだ、ということもわかった。大祭司は、罪祭の血によって、聖所から罪を除去したときに、それをアザゼルのやぎの上においた。キリストが、彼の務めの最後に、ご自身の血によって、天の聖所からご自分の民の罪を除去されるとき、彼はそれをサタンの上におかれる。サタンは、審判の執行において、最終的な刑罰を負わねばならない。アザゼルのやぎは、人里離れた地へと追ひ払われ、イスラエルの宿営には二度と帰って来なかった。そのように、サタンは、神と神の民の前から永遠に追放される。そして、罪と罪人の最終的な滅亡の時に消し去られるのである。

第二四章

天の至聖所における大事件

調査審判の開始

聖所問題が、一八四四年の失望の秘密を解くかぎであつた。それは、互いに関連し調和する真理の全体系を明らかにし、神のみ手が大再臨運動を導いてきたことを示し、そして、神の民の立場と働きとをはっきりさせて、今なすべきことを明らかにした。イエスの弟子たちが、苦悩と失望の恐ろしい夜を過ごした後で、「主を見て喜んだ」ように、信仰をもつて主の再臨を待ち望んでいた人々は、今喜びに満たされた。彼らは、主が、しもべたちに報いを与えるために、栄光のうちに出現なさるものと期待していたのであつた。その望みが失望に終わったとき、彼らはイエスを見失い、墓のそばのマリヤとともに、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と叫んだのであつた。今彼らは、至聖所の中に、再び主を見た。それは、

彼らのあわれみに満ちた大祭司であり、まもなく彼らの王として、救出者として来られるかたであった。聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。彼らは、神が、誤ることのない摂理によって自分たちを導いてくれたことを知った。彼らは、最初の弟子たちと同様に、自分たちが伝えた使命を理解できなかったのであったが、しかしその使命は、あらゆる点において、正しかったのであった。それを宣言することにおいて、彼らは神の心を成し遂げたのであって、彼らの労苦は主にあつておだではなかった。彼らは、新たに生まれて、「生ける望みをいだかせ」られ、「言葉につくせない、輝きにみちた喜びに」あふれたのである。

「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」というダニエル書八ノ一四の預言と、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という第一天使の使命とは、ともに、至聖所におけるキリストの務め、すなわち調査審判をさすもので、神の民の救いと悪人の絶滅のためにキリストが来られることをさすものではなかった。まちがいは、預言期間の計算にではなくて、二千三百日の終わりに起きる**事件**にあつた。このまちがいのために、信徒たちは失望に陥つたのであったが、しかし預言の中で予告されたすべてのこと、また、聖書に起こると保証されたできごとは、みな成就した。彼らが、自分たちの希望がかなえられなかったことを嘆いていた、まさにその時に、使命によって予告されたこと、そして、主がしもべたちに報いを与えるために現われる前に成就されねばならないことが、起きたのであった。

キリストは、彼らが期待していた地上ではなくて、型において予表されていたように、天にある神の宮の至聖所に来られたのであった。預言者ダニエルは、キリストはこの時、日の老いたる者のもとに來ると表現している。「わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、」地上ではな

くて、「日の老いたる者のもとに來ると、その前に導かれた」(ダニエル書七ノ一三)。

この來られることについては預言者マラキも預言している。「あなたがたが求める所の主は、たちまち〔突然——英語訳〕その宮に來る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が來ると、万軍の主が言われる」(マラキ書三ノ一)。主がその宮に來られたのは突然で、彼の民は預期していなかった。彼らは、主が、**そこに**來られるとは考えていなかった。彼らは、主が、「災の中で…神を認めない者たちや、…福音に聞き従わない者たちに報復」するために、地上に來られるものと預期していた(テサロニケ第二・一ノ七、八)。

主を迎える準備

しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

預言者は語っている。「その來る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわけける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」(マラキ書三ノ二、三)。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、

仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録一四章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」（マラキ書三ノ四）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、…栄光の姿の教会」である（エペソ五ノ二七）。また、その教会は、「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」である（雅歌六ノ一〇）。

調査審判と婚宴のたとえ

マラキは、主がその宮に来られるということのほか、主の再臨、すなわち、主がさばきを実行するために来られることについても、次のように預言している。「そしてわたしはあなたがたに近づいて、さばきをなし、占いや、姦淫を行う者、偽りの誓いをなす者におかき、雇人の賃銀をかすめ、やめめと、みなしごとをしえただけ、寄留の他国人を押しつけ、わたしを恐れない者どもにおかき、すみやかにあかしを立てると、万軍の主は言わ

れる」(マラキ書三ノ五)。ユダは、この同じ光景について、次のように言っている。「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためであり、また、不信心な者が、信仰を無視して犯したすべての不信心なしわざ…を責めるためである」(ユダ一四、一五節)。この来臨と、主が主の宮に来られることは、全く別のできごとである。

ダニエル書八ノ一四に示されているところの、キリストがわれわれの大祭司として、聖所を清めるために至聖所に来られるということ、ダニエル書七ノ一三に提示されている、人の子が日の老いたる者のもとに来ること、そしてマラキが預言した主がその宮に来られるということ、これらはみな、同じできごとの描写である。そして、これはまた、キリストがマタイによる福音書二五章の十人のおとめのたとえの中で語られた、婚宴の席への花婿の到着ということによっても表わされている。

一八四四年の夏から秋にかけて、「さあ、花婿だ」という宣言が発せられた。その時に、思慮深いおとめたちと思慮の浅いおとめたちによって表わされている二種類の人々が現われた。すなわち、主の出現を喜んで待ち、主に会う準備にいそしんだ人々と、恐怖にかられて衝動的に行動し、真理の理論だけに満足して、神の恵みに欠けていた人々とであった。たとえの中では、花婿が来たときに「用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはい」った。ここで示されている、花婿の到着は、婚宴の前に起こる。婚宴は、キリストがみ国をお受けになることを意味している。み国の首都でありその代表である聖なる都、新エルサレムは、「小羊の妻なる花嫁」と呼ばれている。天使は、ヨハネに言った。「さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう。」「この御使は、わたしを御霊に感じたまま、…連れて行き、聖都エルサレムが…神のみもとを出て天から下って来るのを見

せてくれた」とヨハネは言っている（黙示録二一ノ九、一〇）。したがって、明らかに、花嫁は聖都を表わし、花婿を迎えに出るおとめたちは、教会の象徴である。黙示録によれば、神の民は、婚宴に招かれた客であると言われている（黙示録一九ノ九参照）。もし彼らが客であれば、**花嫁**をも代表することはできない。キリストは、預言者ダニエルが言っているように、天の日の老いたる者から、「主権と光栄と国」とを賜わるのである。彼は、「夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえ」たみ国の首都、新しいエルサレムをお受けになる（ダニエル書七ノ一四、黙示録二一ノ二）。み国を受けたのちに、彼はご自分の民を救うために、王の王、主の主として栄光のうちに来られる。そして彼らは、天国で「アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に」つき、小羊の婚宴にあずかるのである（マタイ八ノ一一、ルカ二二ノ三〇参照）。

婚宴の部屋に入るもの

一八四四年の夏の「さあ、花婿だ」という宣言は、多くの者に、主の再臨はすぐだと期待させた。その指定された時に、花婿は、人々が期待したように地上にはなくて、婚宴のために、すなわちみ国を受けるために、天の日の老いたる者のもとに来たのである。「用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。」彼らは、婚宴の席に列することはできなかった。なぜなら、これは天において起こり、彼らは地上にいるからである。キリストの弟子たちは、「主人が婚宴から帰って」くるのを「待つて」いなければならぬ（ルカ一二ノ三六）。しかし、彼らは、主の働きをよく理解し、彼が神の前に出られるのに信仰によって



キリストは、われわれのための犠牲であるだけでなく、神の御前においてわれわれのために恵みの奉仕をしておられる大祭司でもある、と保証されていることは、罪の重荷を負うすべての魂にとって慰めとなる。

従っていかなばならない。この意味において、彼らは、婚宴のへやに入ったと言われているのである。

たとえによると、婚宴のへやに入ったのは、あかりとともに器に油を持っていた者たちであった。聖書から真理の知識を得るとともに、聖霊と神の恵みとを持っていた人々、厳しい試練の夜も、忍耐して待ち、より明らかな光を求めて聖書を研究した人々、——これらの人々は、天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって、天の聖所における彼の働きに従っていった。そして、聖書のかしをとおして同じ真理を受けいれ、キリストが仲保の最後の働きを行なうために、そしてその最後にはみ国を受けるために、神の前に出られるのに信仰によって従っていく者たちは、すべて、婚宴のへやにはいるものとして表わされているのである。

マタイによる福音書二二章のたとえにおいて、同じ婚宴の象徴が用いられ、婚宴に先だって調査審判が行なわれることが明示されている。婚宴に先だって、王は、すべての客が、礼服、すなわち、小羊の血で洗って白くしたしみのない品性の衣を着ているかを見るために入ってくる（マタイ二二ノ一、黙示録七ノ一四参照）。欠けていることを発見された者は、追い出されるが、調査の上で礼服を着ていることが認められたすべての者は、神に受け入れられ、み国にはいつて神のみ座のもとに座るに足る者と見なされるのである。品性を調査し、だれが神の国に入る準備をしたかを決定するこの働きが、調査審判の働きであり、天の聖所における最後の働きなのである。

調査の働きが終わり、各時代においてキリストに従う者であると称してきた人々の調査と決定がなされた時、そのとき初めて、恩恵期間が終わり、恵みの扉が閉じられる。このように、「用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸が閉められた」という短い一節の中に、救い主の最後の務めが終わって、人間の救いの大事業が完成される時までが、示されている。

天におけるキリストの奉仕

すでに見たように天の聖所の型である地上の聖所の務めにおいては、贖罪の日は大祭司が聖所の至聖所に入った時に、第一室における務めはやんだのである。神は、次のように命じられた。「彼が聖所であがないをするために、はいった時は、…出るまで、だれも会見の幕屋の内にはならない」(レビ記一六ノ一七)。そのように、キリストが、贖罪の最後の務めを行なうために至聖所に入られた時、彼は、第一室の務めを終えられた。しかし、第一室の務めが終わった時に、第二室の務めが始まった。型としての奉仕において、贖罪の日は大祭司は、聖所を去って、神の前に出て、真に罪を悔いるすべてのイスラエル人のために罪祭の血をささげた。そのようにキリストは、仲保者としての働きの一部を終えて、そのみ業のもう一つの部分を開始され、そして、なお天父の前で、ご自分の血によって罪人のために嘆願なさるのであった。

一八四四年には、再臨信徒はこの問題を理解していなかった。救い主が来られると期待していたその時が過ぎたあとも、なお彼らは、再臨は近いと信じていた。彼らは、今や重大危機にさしかかったと考え、神の前における仲保者としてのキリストの働きは終わったと考えた。人類の恩恵期間は、主が天の雲に乗って実際に来られる少し前に終わると聖書に教えられているように、彼らには思われた。このことは、人々が恵みの扉の前で求め、たたき、叫ぶけれども開かれないという時を示す聖句から見て、明白なように思われた。そして、彼らがキリストの再臨を待望していたその期日が、キリスト再臨直前のこの期間の開始を意味するものなのかどうかというこ

とが、彼らにとっての疑問であった。審判の切迫の警告を発した彼らは、世界に対する彼らの務めをなし終えたと感じ、罪人の救いに関する魂の重荷を感じなくなった。他方、神を敬わない人々の、大胆で冒瀆的な嘲笑は、神の恵みを拒んだ人々から神の霊が取り去られたことを示す、もう一つの証拠であるように思われた。こうしたことはみな、恩恵期間は終わった、すなわち、彼らの表現によれば、「恵みの扉は閉ざされた」と、彼らに堅く信じさせたのであった。

しかし、聖所の問題を研究するにつれて、より明白な光が与えられた。今や彼らは、二千三百日が終わる一八四四年は、重大な危機を画するものであると信じたことが正しかったことを知った。しかし、人々が千八百年にわたって神に近づく道を見いだしてきたところの、望みとあわれみの扉が閉じられたことは事実であったが、もう一つの扉が開かれて、至聖所におけるキリストの仲保によって、人々に罪のゆるしが与えられるのであった。彼の務めの一部は終わったが、それは、それに代わってもう一つの働きが行なわれるためにほかならなかった。依然として天の聖所には「開いた門」があり、そこでキリストは、罪人のために奉仕しておられるのであった。まさにこの時代の教会にあてられた、黙示録の中のキリストの言葉の適用が、今わかってきた。「聖なる者、まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」(黙示録三ノ七、八)。

イエスの仲保による祝福にあずかる者は、贖罪の大事業をなさるイエスに、信仰によって従っていく人々である。一方、この働きに関する光を拒む者は、その祝福にあずかることができない。キリストの初臨の時に与えら

れた光を拒み、彼を世の救い主として信じなかったユダヤ人たちは、彼によるゆるしを受けることができなかった。イエスが昇天して、ご自分の血によって天の聖所に入り、弟子たちにご自分の仲保による祝福を注ぐとされたとき、ユダヤ人たちは全くの暗黒の中に取り残されて、彼らの無益な犠牲と供え物を続けたのであった。型と影の奉仕は終わっていた。これまで人が神に近づいていた扉は、もはや開かれてはいなかった。ユダヤ人は、彼を見いだし得る唯一の道、すなわち、天の聖所における奉仕を通して彼を求めることを、拒んだのであった。したがって彼らは、神との交わりを見いだすことができなかった。彼らに対して、扉は閉められた。彼らは、キリストが真の犠牲であり、神の前の唯一の仲保者であることを知らなかった。そのために彼らは、彼の仲保の祝福にあずかることができなかった。

重大厳粛な真理

不信のユダヤ人たちの状態は、キリスト者と称しながら恵み深い大祭司の働きを故意に知らずにいる、軽率で不信の人々の状態を例示するものである。型としての奉仕において、大祭司が至聖所に入ったとき、全イスラエルは聖所のまわりに集まり、罪のゆるしを受けて、会衆の中から絶たれることがないようにと、この上なく厳粛な態度で、神の前に心を低くしなければならなかった。贖罪の日の実体である今日、われわれが、われわれの大祭司の働きを理解し、どのような義務がわれわれに要求されているかを知ることが、どんなにか重要なことである。

人間は、神があわれみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない。ノアの時代に天からの使命が世に送られた。そして、彼らの救いは、彼らがその使命をどう受けるかにかかっていた。彼らが警告を拒否したために、神の霊は罪深い人類から退き、彼らは洪水によって滅びた。アブラハムの時代に、恵みは、ソドムの邪悪な住民に訴えることをやめた。そして、ロトと彼の妻と二人の娘のほかは、みな、天から降った火で焼き尽くされた。キリストの時代でもそうであった。神のみ子は、その時代の不信なユダヤ人に、「おまえたちの家は見捨てられてしまう」と言われた（マタイ二三ノ三八）。同じ無限の力のおかたは、最後の時代をながめて、「自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった」者について、「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである」と宣言しておられる（テサロニケ第二・二ノ一〇―一二）。彼らが神の言葉の教えを拒否するときに、神はみ霊を取り去って、彼らを、彼らが好む惑わしのなかに捨てておかれる。

しかし、キリストは、なおも、人類のためにとりなしておられ、求める者には光が与えられる。このことは、初め再臨信徒には理解されなかったが、彼らの真の立場を確定する聖句が示されるにつれて、後には明瞭になった。

一八四四年の時が過ぎて、その次に、まだ再臨の信仰を持っている人々には、大きな試練の時期が来た。彼らの真の立場を確かめることについて唯一のたのみは、天の聖所に彼らの心を向けた光であった。預言の期間に関するこれまでの計算に対しての信仰を放棄し、再臨運動に伴った聖霊の強力な力を、人間やサタンの力によるものであるとした人々もあった。また、過去の経験は主の導きによるものであると、堅く信じた人々もあった。そして、彼らが、神のみ心を知ろうとして、待ち、見守り、祈ったときに、彼らは、彼らの大祭司が、奉仕のもう

一つの業を始められたのを知った。そして彼らは、信仰によつて彼に従つていき、教会の最後の働きをも知るに至った。彼らは、第一と第二天使の使命を、いっそう明瞭に理解した。そして、黙示録一四章の第三天使の厳粛な警告を受けて、それを世に伝えるよう準備させられた。

第二十五章

預言に現われたアメリカ合衆国

聖所と神の律法

「そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた」(黙示録一一ノ一九)。神の契約の箱は、聖所の第二の部屋、至聖所にある。「天にある聖所のひな型と影」であつた地上の幕屋の奉仕においては、この部屋は、大いなる贖罪の日に聖所の清めのために開かれるだけであつた。したがつて、天にある聖所が開かれて、契約の箱が見えたという告知は、一八四四年に天の至聖所が開かれて、キリストが贖罪の最後の働きをするためにそこに入られたことを示している。至聖所において奉仕を始められた大祭司に、信仰によって従つていった人は、彼の契約の箱を見た。彼らは、聖所の問題を研究して、救い主の奉仕が変わつたことを理解するようになっていた。そして彼らは、彼が今、神の箱の前で務めをなし、ご自分の血によって罪人のために嘆願しておられ

るのを見たのであった。

地上の幕屋の箱には、神の律法が刻まれた二枚の石の板が入っていた。箱は、ただ律法の板の容器にすぎなかったが、神の律法が入っていたために、それに価値と神聖さがあったのであった。天にある神の聖所が開かれたとき、契約の箱が見えた。天の聖所の至聖所の中に、神の律法がたいせつに安置されている。それは、神ご自身がシナイの雷鳴の中で語り、ご自分の手で石の板に書かれた律法であった。

天の聖所にある神の律法は、大いなる実体であって、石の板に刻まれ、モーセによって五書の中に記録された戒めは、その正確な写しである。この重要な点を理解するに至った人々は、こうして、神の律法の神聖さと不変性を知るようになった。彼らは、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」という救い主の言葉の力を、これまでになく悟った（マタイ五ノ一八）。神の律法は、神のみこころの啓示であり、神の品性の写しであるから、「天における忠実な証人のように」（英語訳）永遠に続かなければならない。一つとして廃された戒めはない。一点、一画も変更されてはいない。「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり、」「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立ち、」と詩篇記者は言っている（詩篇一一九ノ八九、一一一ノ七、八）。

神の律法とその第四条

最初に布告されたときと同様に、第四条は、十戒の中心の位置を占めている。「安息日を覚えて、これを聖と

せよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記二〇ノ八――)。

神の霊が、これらみ言葉の研究者たちの心に感動を与えた。彼らは、自分たちが創造主の休みの日を無視して、知らずにこの戒めを犯していたことを悟らせられた。彼らは、神が清められた日の代わりに週の第一日を守るその理由を調べ始めた。彼らは、第四条が廃されたとか、安息日が変更されたとかいう証拠を、聖書の中に見つけることができなかった。最初に七日目を聖別した祝福は、取り除かれてはいなかった。彼らは真心から、神のみこころを知り実行しようとしていた。そして今、彼らは、自分たちが神の律法の違反者であることを知って、深く悲しんだ。そして、神の安息日を清く守ることによって、神への忠誠を表わした。

彼らの信仰を覆そうとして、さまざまの熱心な働きかけがなされた。地上の聖所が、天の聖所の象徴であり、ひな型であるならば、地上の箱の中の律法は、天の箱の中の律法の正確な写しであるということとは、だれの目にも明白なことであった。そして、天の聖所に関する真理を信じることは、神の律法の要求を認め、第四条の安息日の義務を認めることを必然的に伴う、ということも明白である。ここに、天の聖所におけるキリストの奉仕を明らかにする、調和のとれた聖書解釈法に対して、きびしく断固たる反対が起こる原因があった。人々は、神が開かれた門を閉ざし、神が閉じられた門を開けようとした。しかし、「開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者」が、「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない

門を開いておいた」と宣言しておられた（黙示録三ノ七、八）。キリストは、至聖所の門を、つまり、その務めを、お開きになった。そして、光が、天の聖所のその開かれた門から輝いていた。そして、そこに置かれた律法の中に第四条の戒めが含まれていることが示された。神が確立されたものを、だれも覆すことはできなかった。

キリストの仲保と神の律法の永遠性に関する光を受け入れた人々は、これらが黙示録一四章に示された真理であることを見いだした。この章のメッセージは、主の再臨のために地上の住民に準備をさせる三重の警告から成っている（付録参照）。「神のさばきの時がきた」という告知は、人類の救いのためのキリストの務めの最後の働きを指している。それは、救い主のとりなしが終わり、彼がご自分の民を迎えるために地上に帰られるまで宣布しなければならぬ真理を伝えるものである。一八四四年に始まった審判の働きは、生きている者も死んだ者も、すべての者の運命が決定されるまで継続しなければならない。したがって、これは、人類の恩恵期間の終わりまで続くのである。人々に審判に立つ準備をさせるために、メッセージは、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。」「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」と彼らに命じている。これらのメッセージを受け入れる結果は、「ここに神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつつける聖徒の忍耐がある」という言葉で表わされている。審判に対する備えをするためには、人は神の律法を守らなければならない。その律法が、審判の時の品性の規準となるのである。使徒パウロは、次のように言明している。「律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。…神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらをさばかれるその日に、」また、彼は「律法を行う者が、義とされる」と言っている（ローマ二ノ二一―二六）。神の律法を守るためには、信仰が不可欠である。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。」「すべて信仰によらないことは、罪である」（ヘブル一ノ六、ローマ一四ノ二三）。

安息日の意味

第一天使は、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」、神を天地の創造主として礼拝せよと、人々に呼びかけている。そうするためには、神の律法に従わなければならない。賢者は、「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」と言っている（伝道の書二二ノ一二）。神の戒めに対する服従がないならば、どんな礼拝も神に喜ばれることはできない。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。」「耳をそおけて律法を聞かない者は、その祈りさえも憎まれる」（ヨハネ第一・五ノ三、箴言二八ノ九）。

神を礼拝する義務は、神が創造主であり、他のすべてのものはその存在を神に依存している、という事実に基づいている。そして、聖書の中で、異教の神々にまさって神が崇敬と礼拝を受けるべきであると示されているときは、常に、神の創造の力がその実証としてあげられている。「もろもろの民のすべての神はむなしい。しかし主はもろもろの天を造られた」（詩篇九六ノ五）。「聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか。』目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。」「天を創造された主、すなわち神であって、……地を……造られた主はこう言われる、『わたしは主である、わたしのほかには神はない。』（イザヤ書四〇ノ二五、二六、四五ノ一八）。詩篇記者も言っている。「主こそ神であることを知れ、われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。」「さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみ前にひざまずこう」（詩篇一〇〇ノ三、九五ノ六）。また、天において神を礼拝する聖者た

ちは、神をあがめるべきその理由として、「あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました」と述べている（黙示録四ノ一一）。

黙示録一四章には、創造主を礼拝するようにという呼びかけが人々に対してなされている。そして、三重の使命の結果として、神の戒めを守る一団の人々が起こることを、預言は示している。これらの戒めの一つは、神が創造主であることを直接指示している。第四条は、次のように宣言している。「七日目にはあなたの神、主の安息である。…主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」（出エジプト記二〇ノ一〇、一一）。安息日について、主は、さらに、それが「しるしとなって、主なるわたしがあなたに神であることを、あなたがたに知らせるためである」と言われる（エゼキエル書二〇ノ二〇）。そしてその理由は、「それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである」と言われているのである（出エジプト記三一ノ一七）。

「創造の記念としての安息日の重要さは、われわれがなぜ神を礼拝すべきであるかという真の理由を常に考えさせるところにある。」すなわち、神は創造主であって、われわれは神に造られたものだからである。「それゆえに、安息日は、礼拝の根底そのものである。というのは、安息日が、他のどんな制度よりも、最も感銘深い方法で、この大真理を教えているからである。七日目における礼拝だけでなく、すべての礼拝の真の根拠は、創造主と造られたものとの区別にある。この大事实は、決して廃することのできるものではなく、また決して忘れてはならないものである。」神がエデンで安息日を制定されたのは、この真理を常に人々の心に留めておくためであった。そして神がわれわれの創造主であるという事実が、神を礼拝する理由として存続するかぎり、安息日は、そのしる

し、また記念として、存続するのである。安息日がすべての人に守られ、人間の思いと愛情が、崇敬と礼拝の対象としての創造主に向けられていたならば、偶像礼拝者や無神論者や不信心者は決してでてこなかったことであろう。安息日を守ることは、「天と地と海と水の源とを造られた」真の神に対する忠誠のしるしである。それゆえに、神を礼拝し神の戒めを守ることを命じるメッセージは、特に第四条の戒めを守るよう人々に呼びかけるのである。

獣とは何か

第三天使は、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける者とは対照的に、別の一団を指摘している。そして彼らの誤りに対して、厳粛で恐ろしい警告が発せられている。「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、…神の激しい怒りのぶどう酒を飲」む（黙示録一四ノ九、一〇）。このメッセージを理解するには、ここに用いられている象徴を正しく解釈することが必要である。獣、像、刻印とは、いったい何を表わしているのであるのか。

これらの象徴が用いられている一連の預言は、黙示録一二章から、キリストを誕生の時に滅ぼそうとした龍から、始まっている。龍は、サタンであると言われている（同一二ノ九）。救い主を殺すためにヘ□デを動かしたのは、サタンであった。しかし、キリスト教時代の初期において、キリストと彼の民に戦いをいどんだサタンの主力は、ローマ帝国であり、そこにおいて最も有力な宗教は、異教であった。こうして、龍は、第一義的にはサタンを表わすが、第二義的には異教ローマの象徴である。

第三章（一一〇節）にはもう一つの獣が描かれていて、それは「ひょうに似ており、」龍は、「自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。」この象徴は、たいていのプロテストントが信じてきたように、かつて古代ローマ帝国が握っていた力と位と権威とを継承した法王権を表わしている。ひょうに似た獣について、次のように言われている。「この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、…そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」ダニエル書七章の小さい角の描写とほとんど同じであるこの預言は、疑いもなく法王権を指している。

「四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。」そして、「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた」と預言者は言っている。また、「とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない」とある。四十二か月は、ダニエル書七章の「ひと時と、ふた時と、半時の間」、つまり三年半、すなわち千二百六十日と同じで、その期間のあいだ、法王権は神の民を圧迫するのであった。この期間は、すでに述べたように、法王権が至上権を握った紀元五三八年に始まり、一七九八年に終わった。この時、法王はフランス軍の捕虜になり、法王権は致命的な傷を受けた。「とりこになるべき者は、とりこになっていく。」

アメリカ合衆国の出現

ここで、もう一つの象徴が紹介される。預言者は、次のように言っている。「わたしはまた、ほかの獣が地か

ら上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあつた(一一節)。この獣の外見と出現の模様はともに、それが表わしている国家が、それに先だつてさまざまな象徴のもとに表わされた国々とは異なっているということを示している。世界を支配してきた強国は、「天の四方からの風が大海をかきたて」たときに現われた猛獣として、ダニエルに示された(ダニエル書七ノ三)。黙示録一七章では、天使が、水は「あらゆる民族、群衆、国民、国語」を表わしていると説明した(一五節)。風は、争鬭を象徴している。天の四方からの風が大海をかきたてるとは、諸国が権力を握るために起こした征服と革命の恐るべき光景を表わしている。

しかし、小羊のような角をもった獣は、「地から上って来る」のが見えたのであつた。このように表わされる国は、自国を確立するために他の諸国を覆すのではなくて、まだだれにも占有されていない領土に起こり、徐々にまた平和のうちに成長する国でなければならない。したがって、旧世界の込み合つた争い合う国々の中、すなわち、あの「民族、群衆、国民、国語」の荒海の中からは起こり得ないのである。それは、西半球の大陸に求められねばならない。

一七九八年に、新世界のどんな国が、勢力を伸ばし、将来強大な国家になる可能性を示して、世界の注目を集めていたであろうか。この象徴が、どの国に適用されるかは、実に明白である。この預言の指示するところに合致する国は、ただ一つしかない。それは、疑いもなく、アメリカ合衆国を指している。弁論家や歴史家は、この国の起源と成長を描写するのに、無意識のうちに、聖書記者の思想を、またほとんど同じ言葉を、くり返し用いてきた。獣は、「地から上って来る」のが見えた。そして、翻訳者たちによれば、ここで「上って来る」と訳されている言葉は、字義どおりには、「植物のように成長する、または、生える」という意味である。そして、す

でに見たように、その国は、どの国にも占有されていない領土に起こらなければならない。ある有名な著者は、米国の出現を描写して、「**その空虚からの出現の神秘**」について語り、「**黙した種子**」のように、われわれは成長して帝国になった」と述べている。^二一八五〇年にヨーロッパのある雑誌は、米国のことを、「現われ出て」、「**地の沈黙の中で**」日ごとにその権力と誇りを増しつつある」不思議な帝国、と述べた。^三また、エドワード・エベレストは、同国の建設者である清教徒たちについての演説の中で、「彼らは、ライデンの小さな教会が良心の自由を享受することができるところを、人跡まれで、人目につかず、安全な遠隔の地に求めたのであろうか。彼らが、**平和的征服**のうちに、…十字架の旗をかかげた…**巨大な地域**を見よ！」^四と言った。

アメリカの変貌

「それには小羊のような角が二つあつた。小羊のような角は、若々しさと無垢と温順さを示すもので、一七九八年に「上つて来る」のを預言者が見たときの米国の性格をよく表わしている。最初、米国に逃れ、王の圧迫と司祭たちの迫害からの避難所を求めた亡命キリスト者たちの中には、政治的自由と宗教的自由の広い基盤の上に政府を樹立しようと決意したものが多くあつた。彼らの意見は、独立宣言の中に織り込まれ、「すべての人は平等に造られ」、「生命、自由、および幸福の追求」という奪うことのできない権利を与えられている、という偉大な真理の表明となっている。そして、憲法は、国民に自治権を保証し、一般投票によって選ばれた代議員が法律の制定と執行にあたるべきことを規定している。宗教の自由も保証され、すべての人は良心の命じるところ

に従って神を礼拝することが許されている。共和主義とプロテスタント主義が、国家の根本原則となった。これらの原則が、その権力と繁栄の秘けつである。全キリスト教国の、圧迫され踏みにじられた人々が、関心と希望を抱いてこの国に目を向けた。幾百万という人々がその岸辺にやって来て、米国は、世界で最も強い国の一つに数えられるまでになった。

しかし、小羊のような角をもった獣は、「龍のように物を言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。…地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた」(黙示録一三ノ一一―一四)。

この象徴の持つ、小羊のような角と龍のような声は、ここで表わされている国家の宣言と実行との著しい矛盾を示すものである。国家が「物を言う」とは、その立法および司法権の活動のことである。米国は、そのような行為によって、国家の方針の基礎として宣言した自由と平和の原則を裏切るのである。それが「龍のように」語り、「先の獣の持つすべての権力」を働かせるという預言は、明らかに、それが、龍やひょうに似た獣によって象徴される国々が表わした狭量と迫害の精神を持つようになるということを予告している。そして、二つの角を持った獣が「地と地に住む人々に、…先の獣を拝ませ」という言葉は、この国が権力を行使して、法王権に対する礼拝行為となるような何かの遵守を強要することを示している。

このような行動は、この政府の原則、自由制度の精神、独立宣言の率直厳肅な言明、そして憲法に、全く相反するものである。米国の建国に当たった人々は、世俗の権力が教会のことに用いられて、その当然の結果として

狭量と迫害が起ることを避けようと、賢明にも努めた。憲法には、「国会は、宗教の設立に関する、もしくはその自由な活動を禁ずる法律を制定してはならない」、また、「合衆国のいかなる公職につくに当たっても、その資格として、宗教的条件を課してはならない」とある。国民の自由を擁護するこれらの条項にはなほだしく違反することなしには、国権は、どんな宗教的法令も施行することはできない。しかし、そのような矛盾した行動をとることは、象徴に示されているとおりである。小羊のような角を持った獣は、純潔柔和で悪意のないことを公言しながら、龍のように物を言うのである。

「地に住む人々を惑わし……(彼らに)獣の像を造ることを……命じた。」ここに、立法権が国民にある政体が明示されている。これは、合衆国が預言に示された国であるというきわめて顕著な証拠である。

政権と教権との提携

しかし、この「獣の像」とは何であろうか。そして、それは、どのようにして造られるものであるか。この像は、二本の角をもった獣によって造られるものであり、先の獣に**模した像**である。それは、また、獣の像とも呼ばれている。したがって、像が何であり、どのようにして造られるかを知るためには、獣そのもの、すなわち法王権の特徴を研究しなければならない。

初代教会は、福音の単純さを離れて墮落し、異教の儀式と習慣を受け入れたときに、聖霊と神の力を失った。そして、人々の良心を支配するために、世俗の権力の援助を求めた。その結果が、法王権であって、それは、国

家の権力を支配し、それを教会自身の目的、特に「異端」の処罰のために用いた教会であった。米国が獣の像を造るためには、宗教的権力が政府を支配し、教会が、教会自身の目的を遂行するために、国家の権力を用いるようにしなければならない。

教会が世俗の権力を握った場合は常に、教会はそれを自分の教義に反対する者を罰するために用いてきた。世俗の権力と提携することによってローマの範に従ったプロテスタント諸教会も、良心の自由を束縛しようとする同様の欲望を表わした。英国の国教会が、長年にわたって反対者を迫害したことは、そのよい例である。十六世紀と十七世紀にわたって、幾千という非国教徒の牧師たちが、教会を去らなければならなかった。そして、牧師も信徒も、多くの者が罰金、投獄、拷問、殉教の憂き目にあつたのである。

初代教会が政府の支持を求めるようになったのは、背教のためであった。そして、これが、法王権——獣——の発展する道を開いた。「まず背教のことが起り、不法の者……が現れる」とパウロは言った（テサロニケ第二・二ノ三）。そのように、教会内の背教が、獣の像を造る道を開くのである。

アメリカと獣の像

聖書は、主の再臨に先だって、初期の時代の状態に似た宗教的墮落の状態が起こるといつている。「終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は**自分を愛する者**、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者、そしめる者、無節制な者、粗暴

な者、**善を好まない者**、裏切り者、乱暴者、高言をする者、**神よりも快樂を愛する者**、**信心深い様子をしながら**その実を捨てる者となるであろう」(テモテ第二・三ノ一―五)。「しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに氣をとられて、信仰から離れ去るであろう」(テモテ第一・四ノ一)。サタンは、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを」もって働く。そして、「自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれな」い者はみな、「彼らが偽りを信じるように、迷わす力」に陥ってしまうのである(テサロニケ第二・二ノ九―一一)。こうした不信の状態に達したときに、初期の時代におけると同様の結果が生じるのである。

プロテスタント教会内の大きな信仰の差異は、どんなに努力しても一致を図ることはできないということの決定的証拠であると考える人が多い。しかし、ここ数年にわたって、プロテスタントの諸教会内において共通の教義を土台として合同しようとする氣運が強く動き出している。このような合同を達成するためには、たとえ聖書の見地からどんなに重要なものであっても、すべての者が一致しない問題点は、必然的に放棄されねばならなくなる。

一八四六年、チャールズ・ビーチャーは、ある説教の中で次のように言明した。「福音主義のプロテスタント諸派の牧師たちは、単なる人間的恐怖にはなはだしく打ちひしがれているだけでなく、根本的に腐敗した状態のもとに生き、動き、呼吸している。そして、常に、自分たちの性質のあらゆる卑しい要素に訴えて、真理については沈黙し、背教の勢力にはひびをかがめている。これは、ローマが行なったことではなかったか。われわれもまた、同じことをしているのではなからうか。そして、われわれは、前途に何を見るであろうか。それは、もう

一つの全体会議、世界大会、伝道同盟、そして共通の信条ということである。^五これが達成されるならば、そのときには、完全な合同を確保するには、ただ一歩進んで暴力に訴えればよいのである。

米国の主要な教会が、その共通の教理において合同し、国家を動かして教会の法令を施行させ、教会の制度を支持させるようになるそのときに、プロテスタント・アメリカは、ローマ法王制の像を造り、その必然の結果として、反对者たちに法律上の刑罰を加えることになるのである。

獣の刻印とは何か

二つの角を持った獣は、「また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買つことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである」(黙示録一三ノ一六、一七)。第三天使の警告は、「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯……を飲」むと告げている。このメッセージの中にあげられている「獣」、それを礼拝するようにと二つの角を持った獣が強制するところの獣は、黙示録一三章の最初の獣、すなわちひょうに似た獣——法王制——のことである。「獣の像」は、プロテスタント諸教会が自分たちの教義を強制するために公権力の助けを求めるときに起てくるところの、そつした背教のプロテスタント教会を表わしている。ここで、さらに、「獣の刻印」が明らかにされなければならない。

預言は、獣とその像とを拝することについて警告したあとで、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒……がある」と宣言する。神の戒めを守る人々が、獣とその像とを拝み、その刻印を受ける者たちと、このように対照されていることから見ると、神を拝む者と獣を拝む者との間の区別は、一方は神の戒めを守り、他方はそれを犯すことにあるとわかる。

獣の特徴、したがって、その像の特徴は、神の戒めを破ることである。ダニエルは、小さい角、すなわち法王制について、次のように言っている。「彼はまた時と律法とを変えようと望む」（ダニエル書七ノ二五）。そして、パウロは、この同じ権力を、神よりも自分を高める「不法の者」と呼んだ。一つの預言は他の預言を補足する。法王制は、神の律法を変更することによってのみ、自らを神よりも高くすることができたのである。だれであっても、こうして変更された律法を、それと知りつつ守るならば、律法を変更した権力に最高の栄誉を帰していることになる。法王制の律法に従うこのような行為は、神のかわりに法王に忠誠を誓うしとなるのである。

法王制は、神の律法を変更しようとした。偶像礼拝を禁じる第二条を律法から除去し、第四条は、七日目のかわりに第一日を安息日として守ることを公認するように変更された。しかし、法王側の人々は、第二条を除去したことを、それは第一条に含まれているから不必要であり、われわれは神がわれわれに理解させたいと望んでおられるとありに律法を与えたのであると主張する。これは、預言者が預言したところの変更ではない。預言されたその変更は、計画的で故意の変更である。すなわち「彼はまた時と律法とを変えようと望む。」第四条の変更こそ、まさしくこの預言の成就である。これに関して主張できる権威は、ただ教会の権威のみである。ここにおいて、法王権は、公然と自らを神よりも高めているのである。

聖書の十誡

出エジプト記 20：3-7

I

あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

II

あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。

III

あなたは、あなたの神、主のみ名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。

IV

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

V

あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。

VI

あなたは殺してはならない。

VII

あなたは姦淫してはならない。

VIII

あなたは盗んではならない。

IX

あなたは隣人について、偽証してはならない。

X

あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。

ローマ・カトリックの十誡

『カトリック要理』より

I

われはなんじの主なり、われのほか何者をも神となすべからず。

II

なんじ、神の名をみだりに呼ぶなかれ。

III

なんじ、安息日を聖とすべきことを覚ゆべし。

IV

なんじ、父母をうやまうべし。

V

なんじ、殺すなかれ。

VI

なんじ、かんいんするなかれ。

VII

なんじ盗むなかれ。

VIII

なんじ、偽証するなかれ。

IX

なんじ、人の妻を盗むなかれ。

X

なんじ人の持ち物をみだりに望むなかれ。

安息日の変更

神を拝む者たちが、第四条を尊重することによって特に目だつ——なぜならこれは、神の創造の力のしるしであり、神が人間に崇敬と服従を要求なさるその証拠だからである——のに対し、獣を拝む人々は、創造主の記念を踏みにじり、ローマの制度を高めようと努めることによって目だつものとなる。法王制が最初にその高慢な主張をしたのは、日曜日のためであつた（付録参照）。そして、最初に国家の権力の助けを求めたのは、日曜日を「主の日」として守ることを強制するためであつた。しかし聖書は、主の日として、第一日ではなくて七日目をさしている。キリストは、「人の子は、安息日にもまた主なのである」と言われた。第四条の戒めには、「七日目はあなたの神、主の安息である」と言われている。そして、主は、預言者イザヤによって、その日を「わが聖日」と呼ばれた（マルコ二ノ二八、イザヤ書五八ノ一三）。

安息日を変更したのはキリストであると言われるが、キリストご自身の言葉が、そうでないことを証明している。彼は、山上の垂訓の中で次のように言われた。「わたしは律法や預言者を廃するためには、と欲してはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの最も小さいいまいしめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであらう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであらう」（マタイ五ノ一七—一九）。

安息日の変更について聖書的根拠がないことは、プロテスタントが一般に認めている事実である。これは、米国トラクト協会と米国日曜学校同盟が発行した出版物の中に明らかに記されている。これらの書物の一つは、「安息日（週の第一日、日曜日）」に関して、新約聖書には、なんら明白な命令もなければ、その遵守に関する明確な規則も記されていない」と認めている。^六

他の者は次のように言っている。「キリストが死なれるまで、日の変更はなかった。」そして「記録によるかぎり、彼ら「使徒たち」は、…七日目の安息日を廃止して週の第一日を守るようにさせるような、どんな明白な命令をも与えてはいない。」^七

ローマ・カトリック教徒は、彼らの教会が安息日を変更したことを認め、プロテスタントが日曜日を守るのはカトリック教会の権威を認めることであるという。カトリック教会の教理問答には、第四条の戒めに従って守るべき日についての質問の答えとして、次のように書いてある。「古い律法の時代には、土曜日が聖日であった。しかし、**教会**は、イエス・キリストの教えと神の霊の指導の下に、日曜日を土曜日の代わりにした。それゆえに今、われわれは、七日目でなくて、第一日を聖なる日とする。日曜日が、今では、主の日である。」

カトリックの著者たちも、カトリック教会の権威のしるしとして、「安息日を日曜日に変更したという、まさにその行為」を挙げ、それは「プロテスタントも承認している。…彼らは日曜日を守ることによって、祝祭日を制定し人々を罪に定める教会の権威を、認めているのである」と言っている。^八とするならば、安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし、あるいは刻印、すなわち「獣の刻印」でなくて何であろうか。

日曜休業令の本質

ローマ教会は、その至上権の主張を撤回してはいない。そして、世界とプロテスタント諸教会は、聖書の安息日を拒否して、ローマ教会が造った安息日を受け入れるときに、事実上この主張を認めるのである。彼らは、その変更は伝承や教父たちの権威によるものであると主張するかもしれない。しかし、そうすることによって、彼らは、「聖書、しかも聖書のみが、プロテスタントの宗教である」という、彼らをローマから隔てている原則そのものを無視するのである。法王教徒は、彼らがこの事実^九に故意に目を閉じて、自分たちを欺いているのを見ることが出来る。日曜休業運動が世に迎えられるにつれて、法王教徒は、やがては全プロテスタント世界がローマの旗の下にくだることを確信して喜ぶのである。

ローマ教徒は、「プロテスタントの日曜日遵守は、彼らが、それとは気づかずに、〔カトリック〕教会の権威に従っているのである」と宣言している。プロテスタント諸教会が、日曜日遵守を強要することは、法王制、すなわち獣を拝むことを強要することである。第四条の要求を知りながら、真の安息日の代わりに偽物を守ることを選ぶ者は、そうすることによって、それを命じた唯一の権威に敬意を表しているのである。しかし、宗教的義務を世俗の権力によって強制するという行為そのものによって、教会自身が獣の像を作るに至る。それゆえに、米国における日曜日遵守の強制は、獣とその像の礼拝の強制となるのである。

しかし、過去においては、聖書の安息日を守っていると信じて、日曜日を守ってきたキリスト者たちがいた。

また、日曜日には神が定められた安息日であると心から信じている真のキリスト者たちが、今も各教会にあり、ローマ・カトリック教会も例外ではない。神は彼らの真剣な心と神の前での誠実さを受け入れられる。しかし、日曜日遵守が法律によって強いられ、真の安息日を守るべきことが世界に明らかにされるその時に、神の戒めを破って、単にローマの権威によるものにすぎないところの戒めに従う者は、それによって、神よりも法王教をあがめるのである。そのような人は、ローマに敬意を払い、ローマが定めた制度を強制する権力に敬意を払っている。彼は、獣とその像を拜んでいる。こうして、神がご自分の権威のしるしであると宣言された制度を拒んで、その代わりに、ローマがその至上権のしるしとして選んだものを尊重するときに、人々は、それによって、ローマに対する忠誠のしるし、すなわち「獣の刻印」を受けるのである。こうして、この問題が人々の前に明らかに示されて、神の戒めと人間の戒めのどちらかを選ばねばならなくなったとき、それでも神の戒めを犯し続ける人々が、「獣の刻印」を受けるのである。

二種類の人々

これまで人類に与えられたことのない恐ろしい威嚇の言葉が、第三天使の使命の中に含まれている。あわれみを混じえない神の怒りをひき起こすものは、恐ろしい罪に違いない。この重大なことについて、人々は、無知のままであってはならない。この罪に対する警告は、神の罰が下る前に世界に伝えられなければならない。それはすべての者が、罰を受ける理由を知り、それを逃れる機会が与えられるためである。預言は、第一天使が「あら

ゆる国民、部族、国語、民族」に布告すると言っている。同じ三重の使命の一部である第三天使の警告は、同じ範囲に及ぶのである。預言の中で、それは、中空を飛ぶ天使によって大声で宣言されるものとして表わされている。そして、それは世界の注目をひくのである。

この争いの結果、全キリスト教世界は二種類の人々に分けられる。すなわち、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持つ者と、獣とその像とを拝み、その刻印を受ける者である。教会と国家とが力を合わせて、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に」「獣の刻印」を受けるように強制しても（黙示録一三ノ一六）、神の民は、それを受けない。パトモスの預言者は、「このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立って」「モーセの歌と小羊の歌とを歌って」いるのを見るのである（黙示録一五ノ二、三）。

注

- 一 J. N. Andrews, "History of Sabbath," ch.27.
- 二 G. A. Townsend, "The New World Compared With the Old," p.462.
- 三 The "Dublin Nation."
- 四 Speech delivered at Plymouth, Massachusetts, Dec. 22, 1824, p.11.
- 五 Sermon on "The Bible a Sufficient Creed," delivered at Fort Wayne, Indiana, Feb. 22, 1846.
- 六 George Elliott, "The Abiding Sabbath," p.184.
- 七 A. E. Waffle, "The Lord's Day," pp.186—188.

八 Henry Tuberville, "An Abridgement of the Christian Doctrine," p.58.
九 Mgr. Segur, "Plain Talk About the Protestantism of Today," p.213.

第二十六章

安息日の意義とその回復

終末における改革事業

最後の時代に安息日の改革の働きが完成されることが、イザヤの預言の中に予告されている。「主はこう言われる、『あなたがたは公平を守って正義を行え。わが救の来るのは近く、わが助けのあらわれるのが近いからだ。安息日を守って、これを汚さず、その手をおさえて、悪しき事をせず、このように行う人、これを堅く守る人の子はさいわいである。』」「また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は——わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで樂しませる」(イザヤ書五六ノ一、二、六、七)。

この聖句が、キリスト教時代にあてはまることは、その前後関係から見て明らかである。「イスラエルの追ひ

やられた者を集められる主なる神はこう言われる、『わたしはさらに人を集めて、すでに集められた者に加えよう』と」（同八節）。ここに、福音によって異邦人が集められることが予告されている。そして、そのとき安息日を尊ぶ者たちに、祝福が宣言されている。こうして、第四条を守る義務は、キリストの十字架と復活と昇天を越えて、彼のしもべたちが福音の使命をすべての国民に宣べ伝える時にまで及ぶのである。

主は、同じ預言者によって、「あかしをたばねよ。律法をわが弟子たちのうちに印せよ」と命じておられる（イザヤ書八ノ一六英語訳）。神の律法の印は、第四条の戒めの中に見いだされる。十誡の中で、第四条だけが、律法を与えたかたの名と称号とを二つとも明らかにしている。それは、彼が、天と地の創造者であることを宣言し、したがって、他のすべてにまさって崇敬と礼拝を受くべきかたであることを示している。この戒めを除いては、だれの権威によって律法が与えられたかを示すものは、十誡の中に何もない。法王権が安息日を変更したとき、律法から印が取り除かれた。イエスの弟子たちは、第四条の安息日を、創造主の記念と彼の権威のしるしとしての正当な位置に高めることによって、それを回復するように求められている。

「ただ律法と証とを求むべし。」種々の矛盾した教義や意見が盛んに唱えられているが、神の律法は、あらゆる意見、教義、説などを吟味する誤つことのない唯一の規準である。「彼らのいうところ、この言葉にかなわずば、しのめあらじ」（同二〇節文語訳）。

また、次のような命令が与えられている。「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラツパのようにあげ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ。」罪の譴責を受けなければならない者は、邪悪な世ではなくて、主が「わが民」と呼ばれる人々である。主は、さらにこう言われる。「彼らは日々わたしを尋ね

求め、義を行い、神のおきてを捨てない国民のように、わが道を知ることを喜ぶ」(イザヤ書五八ノ一、二)。ここには、自分たちを義とし、神の奉仕に非常な関心を示すかのように思われる一団の人々が示されている。しかし、人の心を見通されるおかたの、手きびしい厳粛な譴責は、彼らが神の律法を踏みにじっているということを証明している。

こうして預言者は、見捨てられていた戒めを指摘する。「あなたは代々やぶれた基を立て、人はあなたを『破れを繕う者』と呼び、『市街を繕って住むべき所となす者』と呼ぶようになる。もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、おなししい言葉を語らないならば、その時あなたは主によって喜びを得」(同一二―四節)。この預言もまた、われわれの時代に当てはまる。ローマの権力によって安息日が変更されたとき、神の律法に破れができた。しかし、神の制度が回復される時が来た。破れは修繕され、代々の基は立てられなければならない。

真の安息日の回復

創造主の休息と祝福によって聖別された安息日は、罪を犯さないアダムが聖なるエデンにおいて守ったものであり、また、墮落したが悔い改めたアダムが、楽園を追放された後も守ったものであった。安息日は、アベルから義人ノア、アブラハム、ヤコブに至るすべての家長たちが守った。選民がエジプトに奴隷になったとき、多

くの者は、広く行き渡っていた偶像礼拝のただ中で、神の律法の知識を忘れた。しかし、主は、イスラエルを救い出された時、集まった群衆に、大いなる威光の中で、ご自分の律法を宣言された。それは彼らが神のみこころを知り、永遠に神を畏れ神に従うためであった。

その時から現在に至るまで、神の律法に関する知識は地上で保たれ、第四条の安息日は守られてきた。「不法の者」が、神の聖日を踏みじりはしたが、その至上権時代にあっても、ひそかなところに隠れて、忠実な人々が安息日を尊んでいた。宗教改革以後、いつの時代においても、だれかが安息日を守り続けていた。しばしば非難と迫害のただ中にあっても、神の律法の不変性と、創造の安息日を聖く守るべきことが、絶えずあかしされてきた。

これらの真理は、黙示録一四章において「永遠の福音」と関連して示されているように、再臨の時のキリストの教会の特徴である。なぜなら、三重の使命が伝えられる結果として、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」と言われているからである。そして、この使命は、主の再臨に先だつて伝えられる最後のものである。これが宣布されたあと、直ちに、人の子が地の収穫を刈るために栄光のうちに来られるのを、預言者は見たのである。

聖所と神の律法の不変性についての光を受けた人々は、彼らが理解した真理の体系の美と調和を見て、喜びと驚きに満たされた。彼らは、非常に貴重なものに思われたその光を、すべてのキリスト者たちに伝えたいと願った。そして、それが喜んで迎えられるものと信じて疑わなかった。しかし、人々をして世と異なったものにする真理は、キリストの弟子であると称する多くの者に、歓迎されなかった。第四条への服従は犠牲を要求するも

のであり、大部分の者はこれに背を向けたのであった。

日曜日遵守論

安息日の義務が示されたとき、多くの者は、世俗の立場から考えて、次のように言うのであった。「われわれは、これまで常に日曜日を守ってきた。われわれの先祖たちも守った。そして、多くの善良で敬虔な人々が、日曜日を守って幸福に死んだ。もし彼らが正しかったのであれば、われわれも正しい。この新しい安息日を守れば、世との調和から外れ、彼らに感化を及ぼすことができない。七日目を守る小さな団体が、日曜日を守る全世界に對抗して、いったい何を成し遂げようというのか？」ユダヤ人が、キリストを拒んだことを正当化しようとしたのは、同様の議論によってであった。われわれの先祖たちは、犠牲をささげることによって神に受け入れられてきたのだから、その子孫であるわれわれも、同様の方法で救いを受けることのできないはずがあるつか、というのであった。同様に、ルターの時代において、法王教徒たちは、真のキリスト者たちはカトリックの信仰をもつて死んだ、それゆえにこの信仰は、救いを受けるのに十分である、と論じた。しかし、このような論理は、宗教的信仰や行為のあらゆる発達を、はなはだしく阻害するものである。

日曜日遵守は確立された教義で、幾世紀にもわたって広く行なわれてきた教会の慣習である、と論じる者が多い。このような議論に対し、安息日とその遵守は、もっと古くもっと広範囲のもの、創世以来のものであり、神と天使たちとの認めるものであることが示された。地の基がすえられ、明けの星が相共に歌い、神の子たちがみ

な喜び呼ばわったその時、安息日の基礎が置かれたのである（創世記二ノ一三、ヨブ記三八ノ六、七参照）。この制度がわれわれの崇敬を要求するのは当然である。それは、人間の権威によって命じられたものでも、人間の伝承によるものでもない。それは、日の老いたる者によって制定され、その永遠の言葉によって命じられたものである。

安息日改革の問題に人々の注意が喚起されると、一般の牧師たちは、神の言葉を曲げて、人々の探究心を巧みにしずめるような解釈をほどこした。そして、自分で聖書を探究しない人々は、自分たちの欲求に合った結論を受け入れて満足した。議論、詭弁、教父たちの伝承、また教会の権威などによって、真理を覆そうとした者が多くいた。真理の擁護者たちは、自分たちの聖書を頼りにして、第四条の戒めの正当性を擁護した。真理の言葉だけで武装した謙遜な人々が、学者たちの攻撃に対抗した。学者たちは、自分たちの巧みな詭弁が、難解な学問よりも聖書によく通じた人々の、単純で率直な論理に対してなんの力もないのを知って、驚き怒った。

多くの者は、自分たちに有利な聖書の証言がないために、同じ論法がキリストと彼の使徒たちに反対して用いられたことを忘れて、頑固に次のように主張した。「われわれの偉大な人々がこの安息日問題を理解しないのはどういうわけか。あなたがたのように信じている者はほんのわずかである。あなたがたが正しくて、世の中の学者たちがみなまちがっている、などということはあり得ない。」

このような議論に反論するには、ただ聖書の教えと、各時代において主がご自分の民を扱われた歴史とを引用すればよかった。神は、神の声を聞いて従う者、必要ならば俗受けのしない真理を語る者、広く行なわれている罪を譴責することを恐れない者を用いて働かれる。神が、学者や高い地位にある人々を選んで改革運動の指導者

になさらないのは、彼らが、自分たちの信条、理論、神学体系などに頼って、神に教えられることの必要を感じないからである。知恵の根源である神と個人的につながっている者だけが、聖書を理解し説明することができる。学校教育をわずかしか受けていない人々が、真理を宣言するために召されることがあるが、それは彼らが無学であるためではなくて、自分に頼らずに神から教えを受けるからである。彼らは、キリストの学校で学び、その謙遜と服従が、彼らを偉大にするのである。神は彼らに、神の真理の知識をゆだねて、彼らに栄誉をお与えになる。それに比べるならば、地上の栄誉や人間的偉大さは、とるに足りないものである。

光を拒むことの危険

再臨信徒の大部分は、聖所と神の律法に関する真理を拒否した。そして、多くの者は、再臨運動に関する信仰をも放棄して、この働きに適用された預言について、不健全で矛盾した意見を取り入れた。ある人々は、キリスト再臨のはっきりした時日を何度も定めるといふ誤りに陥った。今や、聖所問題の上に輝いている光は、どんな預言的期間も再臨までは及んでいないこと、そして、この事件の正確な時は預言されていないことを、彼らに示したはずであった。しかし彼らは、光から顔をそむけて、主の来られる日を定め続け、そのたびに失望に陥っていた。

テサロニケ教会が、キリストの再臨に関して誤った見解を抱いたとき、使徒パウロは、彼らの希望と期待とを注意深く神の言葉によって吟味するように、彼らに勧告した。彼は、キリスト再臨の前に起こる事件を示してい

る預言を引用して、彼らの時代にキリストがおいでになると期待する根拠がないことを彼らに示した。「だれがどんな事をしても、それにだまされてはならない」と彼は警告している（テサロニケ第二・二ノ三）。もしも彼らが、聖書の承認しない期待を抱くならば、誤った行動に走り、失望の結果不信心な者たちの笑いものになり、落胆して、自分たちの救いに不可欠な真理を疑うような誘惑に陥ってしまったであろう。テサロニケ人への使徒の勧告は、終末時代に生きている者たちに対しての、重大な教訓を含んでいる。主の再臨の明確な時日の上に信仰を置くことができないなら、熱心に準備にいそむことができないと感じている再臨信徒が多い。しかし、彼らの希望が、何度も何度も燃え上がっては崩れ去るうちに、彼らの信仰は打撃を受けて、預言の大真理をほとんど感じる事ができなくなってしまうのである。

最初の使命宣布に当たって、審判の明確な時を伝えることは、神の命令であった。この使命の根拠をなす預言期間の計算が、二千三百日の終わりを一八四四年の秋であると定めたことは、非難の余地がない。預言期間の始まりと終わりの新しい年代を発見しようとしてくり返し努力し、そうした主張を支持するのに必要な不健全な推論をすることは、人々の心を現代の真理から引き離すだけでなく、預言の解説に対するあらゆる努力を軽べつするものである。再臨の明確な時が、何度も定められれば定められるほど、そしてそれが広く伝えられれば伝えられるほど、それだけいっそうサタンの目的にかなうのである。時が過ぎ去ると、サタンはその支持者たちをあざけり軽べつして、一八四三年と一八四四年の大再臨運動をも非難するのである。このような誤りを犯し続ける者は、ついにはキリストの再臨をはるか遠い将来に定めるようになる。こうして彼らは、誤った安心感を抱くに至り、多くの者がその惑わしに気づいたときには、すでにおそすぎるのである。

重 大 な 教 訓

おかしのイスラエルの歴史は、再臨信徒の団体の過去の経験の、顕著な実例である。神は、イスラエルの人々をエジプトから導き出されたように、ご自分の民を再臨運動において導かれた。大失望のときに、彼らの信仰は、ヘブル人が紅海で試みられたような試練を受けた。もしも彼らが、過去の経験において彼らとともにあった神の導きの手に、なおも信頼していたならば、彼らは神の救いを見たことであろう。もしも、一八四四年の運動に一致して働いた者がみな、第三天使の使命を受け入れ、聖霊の力によつてそれを宣布していたならば、主は彼らの努力とともに力強く働かれたことであろう。輝かしい光が、洪水のように世界を覆ったことであろう。何年も前に、地の住民に警告は発せられ、最後の働きが完結して、キリストはご自分の民を救うためにおいでになつていたのであろう。

イスラエル人が荒野を四十年もさまようことは、神のみこころではなかった。神は、彼らをまっすぐにカナンの地に導いて、彼らをそこで、聖く幸福な国民として定住させようとしておられた。しかし、「彼らがいいることのできなかったのは、不信仰のゆえで」あつた（ヘブル三ノ一九）。墮落と背信のために彼らは荒野で滅び、他の者たちが約束の国に入るために起こされた。同じように、キリストの再臨がこのように遅れ、神の民がこのように長く、罪と悲しみのこの世にとどまることは、神のみこころではなかった。しかし、不信が、彼らを神から引き離れた。彼らが神に命じられた働きをすることを拒んだときに、使命を宣言するために他の者たちが起こさ

れた。イエスは、世界をあわれんで、彼の再臨を延ばしておられる。それは、罪人に警告を聞く機会を与え、神の怒りが注がれる前に、主のうちに避難させるためである。

昔と同様に今日においても、時代の罪と誤りを指摘する真理を伝えることは、反対を引き起こす。「悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない」(ヨハネ三ノ二〇)。人々は、自分たちの立場を聖書によって支持することができないのがわかると、多くの者はなんとかしてそれを支持しようと決意し、一般受けのしない真理を擁護して立つ者たちの品性や動機を、悪意をもって攻撃するのである。各時代においてとられてきたのは、この同じ方針であつた。エリヤはイスラエルを悩ます者と言われ、エレミヤは裏切者と言われ、パウロは神殿を汚す者と言われた。その当時から今日に至るまで、真理に忠誠を尽くそうとする者は、治安を妨害する者、異端者、分離者と非難されてきた。預言の確実な言葉をなかなか信じようとしない群衆は、その時代の罪を大胆に譴責する者への非難を、なんの疑いもなく受け入れる。この精神は、ますます増大している。そして聖書は、国家の法律が神の律法と激しく衝突するために、神のすべての戒めに従おうとする者は悪事を行なう者として非難され罰せられるようになる、という時が近づきつつあることをはつきりと教えている。

われわれの責任は何か

こうしたことを考えるとき、真理の使者の義務は何であろうか。真理を伝えても、人々はその主張を避けるか、

または反抗するに至るだけの場合がよくあるから、真理は伝えるべきではないと結論すべきであろうか。そうではない。反対を引き起こすからと言って、神の言葉のあかしをさしひかえる理由は、初期の改革者たちに無かったと同様に今もないのである。聖徒や殉教者たちの行なった信仰の告白は、後の時代のために記録された。これらの人々の聖潔とゆるがぬ誠実の生きた模範は、今日神のための証人として立つように召された者たちを励ますために、語りつがれてきた。彼らが恵みと真理を受けたのは、自分たちのためだけでなく、彼らを通して、神の知識が地を輝かすためであった。神は、この時代の神のしもべたちに、光を与えておられるであろうか。それならば、彼らは世界にそれを輝かさなければならぬ。

主は、昔、主の名によって語った者に次のように言われた。「イスラエルの家はあなたに聞くのを好まない。彼らはわたしに聞くのを好まないからである。」にもかかわらず、主はこう言われた。「彼らが聞いても、拒んでも、あなたはただわたしの言葉を彼らに語らなければならない」（エゼキエル書三三七、一三七）。現代の神のしもべには、「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をツッパのようにあげ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ」という命令が与えられている（イザヤ書五八ノ一）。

真理の光を受けた者はみな、機会があるかぎり、イスラエルの預言者と同様に厳粛で恐るべき責任を負わせられている。主は預言者に次のように言われた。「それゆえ、人の子よ、わたしはあなたを立てて、イスラエルの家を見守る者とする。あなたはわたしの口から言葉を聞き、わたしに代って彼らを戒めよ。わたしが悪人に向かって、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言う時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかつたら、悪人は自分の罪によって死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手に求める。しかしあなたが悪人に、そ

の道を離れるように戒めても、その悪人がその道を離れないなら、彼は自分の罪によって死ぬ。しかしあなたの命は救われる」（エゼキエル書三三ノ七―九）。

真理を受け入れ、それを伝えるにあたっての大きな障害は、そこに不都合と恥辱が含まれていることである。これは、真理の擁護者たちが反論できなかった唯一の真理反対論である。しかし、このことも、キリストの真の弟子たちを思いとどまらせはしない。彼らは、真理の受けがよくなるまで待ったりなどしない。彼らは、自分たちの義務を確信して、進んで十字架を負い、使徒パウロとともに、「このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させる」と見なし、古代の聖徒とともに、「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考え」るのである（コリント第二・四ノ一七、ヘブル一ノ二六）。

□では何を言っているようにとも、宗教的な事柄において、原則によらないで策を弄して行動する者は、内心で世俗に仕えているものにほかならない。われわれは、正しいことを、それが正しいことであるがゆえに選び、結果は神にゆだねなければならない。世界の大改革は、原則と信仰と勇氣の人々によって行なわれたのである。そのような人々によって、この時代の改革も推進されなければならない。

主は、こう言われる。「義を知る者よ、心のうちにわが律法をたもつ者よ、わたしに聞け。人のそしりを恐れてはならない、彼らのもののしりに驚いてはならない。彼らは衣のように、しみに食われ、羊の毛のように虫に食われるからだ。しかし、わが義はとこしえにながらえ、わが救はよるず代に及ぶ」（イザヤ書五一ノ七、八）。



ニコデモは、救いの道を求めて、イエスのもとにきた。真に改心したすべての魂にとって神の愛と聖霊の交わりとが、人生の最高の関心事でなければならない。

第二十七章

リバイバルと清め

罪の自覚と悔い改め

神の言葉が忠実に説かれたところではどこでも、それが神から出たものであることを証明する結果が伴った。神の霊が、神のしもべたちのメッセージに伴い、その言葉には力があつた。罪人は、良心が目ざめるのを感じた。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。」その光が、彼らの心の密室を照らし、隠された暗黒のことをあらわした。彼らの心は、深い感動を受けた。彼らは、罪と義と、来たるべきさばきとについて、目を開かれた。彼らは、主の義を認め、自分たちの罪と汚れのまま、心をさぐられるかたの前に出ることを恐れた。彼らは、苦悶の声をあげて、「だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫んだ。人間の罪のため無限の犠牲が払われたカルバリーの十字架が示されたとき、彼らは、自分たちの罪を贖い得るものは、キリ

ストの功績以外にないことを悟った。ただこれだけが、人間を神に和解させることができるのであった。信仰をもつて謙遜に、彼らは世の罪を取り除く神の小羊を受け入れた。イエスの血によって、彼らは、「今までに犯した罪のゆるし」を得た。

この人々は、悔い改めにふさわしい実を結んだ。彼らは信じてバプテスマを受け、キリスト・イエスにあって新しく造られた者として、新しい生活を始めた。彼らは以前の欲に従うことなく、神のみ子を信じる信仰によって、み足の跡に従い、主の品性を反映し、主が清くあられるように自分たちも清くなろうとした。彼らは、かつて憎んだものを愛し、愛したものを憎むようになった。高慢で自負心の強い者は、柔和で謙遜になった。虚栄心があつておうへいな者は、まじめでひかえ目になった。低俗な者は敬虔に、酒のみは謹直に、そして放蕩者は純潔になった。世俗のおなしの流行は、放棄された。キリスト者は、「髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾り」を求めた。「これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである」(ペテロ第一・三ノ三、四)。

リバイバル(信仰復興)は、深い内省と謙遜をもたらした。罪人に対しては厳肅熱心に訴え、キリストの血による贖いに対してはあわれみを求めるのが、リバイバルの特徴であつた。男も女も、魂の救いのために、神に祈り神と格闘した。こうしたリバイバルの結果、克己と犠牲をもちとわず、むしろキリストのためにそしりと試練を受けるに足る者とされたことを喜ぶ者たちが現われた。人々は、イエスの名を告白する者たちの生活が変化したことを認めた。社会は、彼らの感化によって益を受けた。彼らは、キリストとともに集め、永遠の生命を刈り取るために霊にまいいた。

彼らについては、「悲しんで悔い改めるに至った」と言うことができる。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(コリント第二・七ノ九—一一)。

これは、神の霊の働きの結果である。改革が行なわれないようなら、真の悔い改めとは言えない。もし罪人が、質物を返し、奪った物をもどし、罪を告白し、神と同胞を愛するならば、彼が神と和らいだことは確かである。昔は、宗教的覚醒が起きたときには、それに伴って、このような結果が生じた。そうした実から判断して、それらは、人々の救いと人類の向上のために神の祝福を受けたものであることが明らかになった。

現代のリバイバルは本物か

ところが、現代のリバイバルの多くは、初期の時代において神のしもべたちの働きに伴った神の恵みのあらわれと、著しく異なっている。たしかに、広く人々の関心をあおり、多くの者が自分たちは改心したと言い、教会に多数の信者が加わっている。しかし、それに伴って真の霊的生命が向上したということを保証するような結果は、あらわれていない。一時燃え立った火は、すぐに消えて、暗黒は前よりもいっそう深刻になる。

一般のリバイバルは、ともすれば、想像に訴え、感情を刺激し、新奇なことに対する愛好心を満足させるよう

なやりかたで行なわれている。こうして得た改心者は、聖書の真理を聞くことを望まず、預言者や使徒たちのあかしに興味を示さない。集会も何か感情をそそるようなものが無いが、彼らをひきつけることができない。冷静な理性に訴えるメッセージは、なんの反応も起こさない。彼らの永遠の幸福に直接関係のある、神の言葉の明白な警告も、注意を払われないのである。

真に改心したすべての魂にとって、神と永遠の事物とに対する関係は、人生の大問題である。しかし今日、一般の教会のどこに、神への献身の精神があるであろうか。改心者たちは、誇りと世俗を愛する心を捨てていない。彼らが、自己を否定し、十字架を取り上げて、柔和で謙遜なイエスに従っていかうとしないのは、改心前と全く同様である。宗教は、多くの者が、その名をとねえながらその原則に無知であるために、無神論者や懷疑論者の物笑いとなってきた。敬虔さの持つ力は、多くの教会からほとんど姿を消している。行楽・演劇・バザー、りっぱな建物、信徒の華美な装いなどが、神の思いを遠ざけてしまっている。土地、財産、世俗の職業が心を奪い、永遠のことに気を配るものはほとんどいない。

しかし、信仰と敬虔さが一般に衰微したとはいっても、これらの教会の中に、キリストの真の弟子たちがいるのである。地上に神の最後のさばきが下るに先だって、主の民の間に、使徒時代以来かつて見られなかったような初代の敬虔のリバイバルが起きる。神の霊と力が神の子供たちの上に注がれる。その時、多くの者が、神と神の言葉の代わりにこの世を愛してきた諸教会から離れる。牧師も信徒も、多くの者が、主の再臨に民を備えさせるために神が今宣布させておられるこれらの大真理を、喜んで受け入れる。魂の敵は、この働きを妨害しようとする。そして、こうした運動が起こる前に、偽物を提示することによってそれを妨害しようとする。彼は、自分

の欺瞞の力のもとに置くことのできる諸教会において、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかける。大いなる宗教的関心と思われるものが現われる。多くの人々は、神が彼らのために驚くべきことをしてあられると喜ぶが、それは、別の霊の働きなのである。宗教的装いのもとに、サタンは、キリスト教世界に自分の勢力を広げようとする。

過去半世紀の間に起こったリバイバルの多くには、将来大規模にあらわれるのと同じ勢力が、多少とも働いていた。そこには感情の興奮と、真理と虚偽の混合が見られ、それは人を欺くのに好適なのである。しかし、だれも欺かれる必要はない。神の言葉に照らしてみるならば、これらの運動の本質を見定めることは、おずかしいことではない。人々が聖書の証言をおろそかにし、克己と世俗の放棄とを要求する明快で人の心を試す真理から顔をそむけるならば、神の祝福を受けることができないのは確かである。そして、「その実によつて彼らを見わけるであろう」という、キリストご自身がお与えになった規準によつて、これらの運動は神の霊の働きではないことが明らかなのである（マタイ七ノ一六）。

無力さの原因

神は、み言葉の真理の中で、ご自身についての啓示を人間にお与えになった。そして、真理を受け入れるすべての者にとって、真理は、サタンの欺瞞から彼らを守るたてである。今日、宗教界に広く行きわたっている害悪に戸を開いたものは、これらの真理の軽視である。神の律法の性質と重要性が、ほとんど見失われている。神の

律法の性格、永続性、義務についての誤った觀念が、改心と清めについての誤りを引き起こし、その結果教会内の敬虔さの標準を低下させるに至っている。ここに、今日のリバイバルにおいて神の霊と力が欠けている理由を見いだすのである。

さまざまな教派の信仰深い人々が、この事実を認めて嘆いている。エドワード・A・パーク教授は、現代の宗教的危機を指摘して、次のように言っている。「危険の原因の一つは、説教壇から神の律法を強く主張しないことにある。かつては説教壇は、良心の声が響くところであった。…われわれの最も著名な説教者たちは、主の模範にならって、律法の戒めと警告とを強調することによって、彼らの説教を驚くほど威厳のあるものにした。彼らは、律法は神の完全の写しであって、律法を愛さない者は福音を愛していないという、二大真理をくり返した。なぜなら律法は、福音と同様に、神の真の品性を反映する鏡だからである。この危険は、さらに次へと発展して、罪の害悪とその範囲、その恐ろしさなどを過小評価させるに至る。戒めが義であればあるほど、それに服従しないことははなはだしい悪なのである。…

上述の危険と密接に関係しているのが、神の義を軽視する危険である。現代の説教の傾向は、神の義を神の慈愛から引き離して、慈愛を原則として高めるよりむしろ一つの感情に低下させている。新たな神学は、神が結合されたものを分裂させた。神の律法は善か悪か。善である。それならば正義は善である。なぜなら、正義は律法を実施するものだからである。人間は、神の律法と正義を軽視し、人間の不服従の程度と恐ろしさを軽視する習慣から、罪の贖いのために備えられた恵みを過小評価する習慣に陥りやすい。」こうして人々は、福音の価値と重要性を忘れ、そしてまもなく、実質的に聖書そのものを放棄するようになる。

誤った律法観

多くの宗教教師たちは、キリストはご自分の死によって律法を廃された、それゆえに人はその要求から解放されている、と主張する。なかには、律法を重苦しいくびきであると言い、律法の束縛とは対照的に、福音の下において自由が享受できると主張する人々もいる。

しかし、預言者や使徒たちは、神の聖なる律法をそのようには見なさなかった。「わたしはあなたのさとしを求めたので、自由に歩むことができます」(詩篇一一九ノ四五)。キリストの死後に書いた使徒やコブは、十誠を「尊い律法」「完全な自由の律法」と言っている(ヤコブ二ノ八、一ノ二五)。そして、十字架から、半世紀の後に、ヨハネは、「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとあつて都にはいるために、神の律法を行なう者」はさいわいであると言明している(黙示録二二ノ一四英語訳)。

キリストがその死によって天父の律法を廃したという主張には、なんの根拠もない。もしも律法を変えたり、廃止したりすることができるのであれば、人間を罪の刑罰から救うためにキリストが死なれる必要はなかった。キリストの死は、律法を廃止するどころか、それが不変のものだということを証明しているのである。神のみ子は、「律法を大いなるものとし、かつ光栄あるものとする」ために来られた(イザヤ書四二ノ二一英語訳)。「わたくしが律法や預言者を廃するためにきた、と思つてはならない。」「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたすることはな」いと彼は言われた(マタイ五ノ一七、一八)。また、ご自身について、「わが神よ、わたしはみこころ

を行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と宣言しておられる（詩篇四〇ノ八）。神の律法は、その性質そのものから考えても、不変のものである。それは、その制定者の意志と品性の啓示である。神は愛である。そして、神の律法は愛である。その二大原則は、神に対する愛と人間に対する愛である。「愛は律法を完成するものである」（ローマ一三ノ一〇）。神の品性は、義と真理である。神の律法の性質もそうである。詩篇記者は言っている。「あなたのおきてはまことです。」「あなたのすべての戒めは正しい」（詩篇一一九ノ一四二、一七二）。そして、使徒パウロは、「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」と宣言している（ローマ七ノ一二）。神の心と意志の表現であるこのような律法は、その制定者と同様に永続的なものでなければならない。

律法と信仰との関係

人間を神の律法の原則に調和させることによって神と和解させるのは、改心と清めの働きである。初めに、人間は神のかたちに創造された。人間は、神の性質と神の律法とに完全に調和していた。義の原則が、彼の心に書かれていた。しかし、罪が、彼を創造主から引き離れた。彼は、もはや、神のかたちを反映しなくなった。彼の心は、神の律法の原則と争うようになった。「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」（ローマ八ノ七）。しかし、神は、人間が神と和解することができるように、「そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。」人間は、キリストの功績によって、創造主との調

和を回復することができるのである。彼の心は、神の恵みによって新しくされなければならない。彼は、上からの新しい生命を受けなければならない。この変化が新生であって、これがなければ「神の国を見ることはできない」とイエスは言われるのである。

神と和解する第一歩は、罪を認めることである。「罪は不法である。」「律法によつては、罪の自覚が生じるのみである」(ヨハネ第一・三ノ四、ローマ三ノ二〇)。自分の罪を悟るためには、罪人は自分の品性を、神の義の偉大な標準によつて吟味しなければならない。それは、正しい品性の完全さを示して、罪人に自分の品性の欠陥を発見させる鏡である。

律法は、人間に罪を示すが、救いは与えない。律法は、服従する者には生命を約束するが、犯す者には死を宣告する。人間を罪の宣告や罪の汚れから解放することができるのは、キリストの福音だけである。人間は、神の律法を犯したのであるから、神に向かつて悔い改めなければならない。そして、キリストに対しては信じてその贖いの犠牲を受け入れなければならない。こうして人間は、「今までに犯した罪のゆるし」を受け、神の性質にあずかる者となる。彼は、子たる身分の霊を授けられた神の子であるから、「アバ、父よ」と呼ぶのである。

さて、このような人は、自由に神の律法を犯してもよいであろうか。パウロは、次のように言っている。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。」そしてヨハネは宣言する。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむしろかしいものではない」(ローマ三ノ三一、六ノ二、ヨハネ第一・五ノ三)。人の心は、新しく生まれることにより、神の

律法と一致するとともに、神と調和するようになる。この大きな変化が罪人の中に起きたとき、彼は、死から生命へ、罪から聖潔へ、違犯と反逆から服従と忠誠へと移ったのである。神から離反していた古い生活は終わった。和解の生活、信仰と愛の新しい生活が始まった。こうして、「律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされる」のである（ローマ八ノ四）。そのとき、「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」という魂の言葉が発せられるのである（詩篇一一九ノ九七）。

「主のおきては完全であつて、魂を生きかえらせ」る（詩篇一九ノ七）。人間は、律法がなければ、神の純潔と神聖さ、あるいは自分自身の罪と汚れについて、正しい考えを持つことができない。罪についての真の自覚もなく、悔い改めの必要も感じない。自分たちが神の律法の違反者であるという失われた状態を悟らず、キリストの贖罪の血の必要を自覚しないのである。心の根本的变化も生活の改変もなしに、救いの希望を受け入れる。このような表面的改心が広く行なわれていて、キリストと結合したことのない多くの者が教会に加えられているのである。

清めとは何か

また、神の律法の軽視や拒否から生じるところの、誤った聖化論が、今日の宗教運動において顕著な位置を占めている。これらの理論は、教義的に偽りであり、実際の結果においても危険である。そして、それらの説が一般に歓迎されているという事実を見ると、この点についての聖書の教えをすべての者がはっきり理解することが、なおいっそう必要となる。

真の清め（聖化）は、聖書が教えている教義である。使徒パウロは、テサロニケ教会への手紙の中で次のように言っている。「神のみこころは、あなたがたが清くなることである。」そして、「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全きよめて下さるように」と祈っている（テサロニケ第一・四ノ三、五ノ二三）。聖書は、清めとは何であって、どのようにしてそれに到達できるかを、はっきりと教えている。救い主は、弟子たちのために祈って、「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」と言われた（ヨハネ一七ノ一七、一九参照）。使徒パウロは、信者たちに、「聖霊によってきよめられ」るようにと教えた（ローマ一五ノ一六）。聖霊の働きは、何であろうか。イエスは、弟子たちに次のように言われた。「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」（ヨハネ一六ノ一三）。詩篇記者も、「あなたのおきてはまことです」と言っている。神の言葉と聖霊によって、神の律法の中に現われている義の大原則が、人間に示される。そして、神の律法は、「聖であって、正しく、かつ善なるものであり、神の完全の写しであるから、その律法に従って形造られる品性も、清いものとなる。キリストは、このような品性の完全な模範である。「わたし（は）わたしの父のいましめを守った。」「わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしている」と主は言われる（ヨハネ一五ノ一〇、八ノ二九）。キリストの弟子たちは、彼のようにならなければならない。神の恵みによって、神の聖なる律法の原則に調和した品性を形成しなければならない。これが聖書のいう清めである。

この働きは、キリストを信じる信仰によってのみ達成されるもので、神の霊の内住の力によるのである。パウロは、信者たちに次のように勧告している。「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだから

である」(ピリピニノ一二、一三)。キリスト者も罪の誘惑は感じるが、しかし常にそれと戦い続ける。ここにおいて、キリストの援助が必要になる。人間の弱さが神の力と結合する。そして信仰は、「感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである」と叫ぶのである(コリント第一・一五ノ五七)。

聖書は、清めの働きが、漸進的なものであることをはっきりと示している。罪人が悔い改めて、贖罪の血によって神と和解するとき、キリスト者の生活ははじまったばかりである。彼は、「完全を目ざして進」み、「キリストの満ちみちた徳の高さにまで」成長しなければならない。使徒パウロは言っている。「ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かつてからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(ピリピ三ノ一三、一四)。ペテロは、聖書が教える清めへと到達するための段階を、われわれに提示している。「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。…：そうすれば、決してあやまちに陥ることはない」(ペテロ第二・一ノ五―一〇)。

清めの実例

聖書のいう清めを経験する者は、謙遜の精神をあらわす。彼らは、モーセのように、聖なるおかたのおそる

べき威光をながめ、無限のおかたの純潔と崇高な完全さと比べて自分たちの無価値なことを認めるのである。

預言者ダニエルは、真の清めの実例である。彼の長い一生は、主のための気高い奉仕に満ちていた。彼は、神に「大いに愛せられる人」であつた（ダニエル書一〇ノ一一）。この榮譽にあずかつた預言者は、しかし自分の純潔と清さを主張しないで、自分を真に罪深いイスラエルのひとりとみなし、自国民のために神の前で懇願した。「われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大いなるあわれみによるのです。」「われわれは罪を犯し、よこしまなるまいをしました。」「ダニエルは「こう言つて祈り、かつわが罪とわが民の罪をさんげ」したのである。そして、後に、神のみ子が現われて、彼に教えをさずけられたとき、「わが顔の輝きは恐ろしく変つて、全く力がなくなつた」とダニエルは言っている（ダニエル書九ノ一八、一五、二〇、一〇ノ八）。

ヨブは、つむじ風の中から主の声を聞いたときに、「それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」と叫んだ（ヨブ記四二ノ六）。イザヤは、主の栄光を見、ケルビムが「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と呼ばれるのを聞いて、「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ」と叫んだ（イザヤ書六ノ三、五）。パウロは、第三の天にまで引き上げられ、人間には語ることでできない言葉を聞いた後、自分のことを、「聖徒たちのうちで最も小さい者である」と言っている（コリント第二・一二ノ二―四参照。エペソ三ノ八）。また、かつてはイエスの胸よりかかった愛弟子ヨハネは、主の栄光に接したとき、その足もとに倒れて死人のようになつた（黙示録一ノ一七参照）。

カルバリーの十字架の影を歩くものには、自分を高めたり、自分はもはや罪を犯さないなどと誇ったりするこ

とはあり得ない。彼らは、自分たちの罪が、神のみ子の心臓を破裂させるほどの苦悩を引き起こしたことを感じる。そしてこの思いが、彼らをへりくだらせる。イエスに最も近く生活する者が、人間の弱さと罪深さを最もはつきりと認める。そして自分たちの唯一の希望を、十字架につけられ復活された救い主の功績に置くのである。現在、宗教界において注目を集めている清めには、自己賞揚の精神と神の律法の無視とが伴っており、このことは、それが聖書の宗教とは異なったものであることを示している。その主唱者たちは、清めは瞬間的な業で、信仰だけによって、完全な清めに到達すると教えるのである。彼らは、「ただ信じなさい。そうすれば、祝福が与えられる」と言う。これを受ける者はなんの努力もしないでよいと思っている。それとともに、彼らは、神の律法の権威を拒否し、自分たちは戒めを守る義務から解放されたと主張する。しかし、神の性質とみ旨の表現であり、何が神のみこころにかなうかを示している原則に調和せずして、人間は、神のみこころと品性とに一致して清くなることができであろうか。

信仰と行ない

なんの努力も克己も、世俗の愚かさからの分離をも要求しない安易な宗教を望む心が、ただ信じさえすればよいという一般向けのする信仰の教義をつくり上げた。使徒やコブは、次のように言っている。「わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。…ああ、愚かな人よ。行いを伴わない信仰のおなししいことを知りたいのか。わたした

ちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたのではなかったか。あなたが知っているとおり、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ……たのである。これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない」(ヤコブ二ノ一四―二四)。

神の言葉の証言は、この、行ないを伴わない信仰という人を惑わす教義に反対している。あわれみを受ける条件に従わずに神の恵みを受けることができると主張することは、信仰ではなくて、臆断である。なぜなら、真の信仰は、聖書の約束と規定とに基づくものだからである。

神の要求を一つでも故意に犯していながら、清くなれると信じて、自分を欺いてはならない。罪と知りながらそれを犯すことは、聖霊のあかしの声を沈黙させ、魂を神から引き離すものである。「罪は不法である。」そして、「すべて罪を犯す者〔律法を犯す者〕は、彼を見たこともなく、知ったこともない者である」(ヨハネ第一・三ノ六)。ヨハネは彼の手紙の中で、愛についてくわしく述べたのであるが、しかしまた、神の律法を犯す生活をしながら清められたと主張している人々の正体を、摘発することを躊躇しなかった。「『彼を知っている』と言いな

がら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」(ヨハネ第一・二ノ四、五)。ここに、すべての人の信仰の告白を試みる試金石がある。天においても地においても、清めに関する神の唯一の標準によって量るのでなければ、だれひとり、清い人であるとはいえない。もし人々が、道徳律を重んじず、神の教えを軽んじ無視し、これらの最も小さい戒めの一つを破り、またそうするように人に教えるならば、そのような人々は、神の目からは

評価されない。そしてわれわれは、彼らの主張することにはなんの根拠もないことを知ることができるのである。

また、自分には罪がないと主張する者は、そう主張すること自体が、清めから程遠い証拠である。そのような主張は、彼が、神の無限の純潔と神聖さとを真に認識していないためである。あるいは、神の品性と調和するためにはどのようなならなければならないかを、悟らないためである。イエスの純潔と気高い美しさを知らず、罪の邪悪さと害悪を真に理解しないために、人は自分を清いものと考えてるのである。自分とキリストの間の距離が、遠ければ遠いほど、また、神の品性と要求に対する見解が不十分であればあるほど、人間は、自分自身の目に正しく思われるのである。

全人的な清め

聖書に示されている清めとは、全存在——霊と魂と体——を含むものである。パウロは、神がテサロニケの人の「霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるよう」と祈った（テサロニケ第一・五ノ二三）。また、信者たちに、「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」と彼は書いた（ローマ二ノ一）。昔のイスラエルの時代において、神に犠牲として献げられるものは、みな、注意深く調べられた。その動物にもし一つでも欠陥があれば、それは拒否された。なぜなら、神は、供え物は「傷のないもの」でなければならないと命じられたからである。そのように、キリス

ト者は、自分たちのからだを、「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として」ささげるように命じられている。そうするためには、彼らのすべての能力を、なしうる最上の状態に保たなければならない。肉体的、または知的能力を弱める習慣はすべて、人間を創造主に奉仕するのにふさわしくない者にする。神は、われわれが、自分たちのささげうる最上のものより劣るものをささげるとき、喜ばれるであろうか。キリストは、「心をつくし……て、主なるあなたの神を愛せよ」と言われた。心をつくして神を愛する者は、その生涯をもって最上の奉仕をすることを望み、神のみこころを行なう能力を増進させる法則に、心身のすべての能力を調和させようと常に努力する。彼らは、食欲や情欲をほしいままにして、彼らの天の父にささげる供え物を弱めたり汚したりしないのである。

ペテロは、「たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい」と言っている（ペテロ第一・二ノ一一）。すべての罪深い満足は、機能をまひさせ、知的靈的知覺力を鈍らせる。そして、神の言葉や聖霊も、心になんの印象も与えることができなくなるのである。パウロは、コリント人に次のように書いている。「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか」（コリント第二・七ノ一）。そして彼は、「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和」などみ霊の実に「自制」も加えている（ガラテヤ五ノ二二、二三）。このような靈感の言葉があるにもかかわらず、利益や流行を追ってその能力を弱めている自称キリスト者たちが、なんと多いことであろう。また、暴食、飲酒、放蕩などによって、神のかたちである人性を墮落させているものが、なんと多いことであろう。しかも教会は、これを譴責するどころか、かえって食欲に訴え、物欲や快楽を愛する心に訴えることによって、こうした害悪を助長し、キリストに対する愛が弱いために供給できない教会の資金を、補充しようとするのである。もしキリストが、今日の教会に入ってこられ、宗教の名のもとに行なわ

れている飲食と汚れた取り引きを見られるならば、昔、神殿から兩替人たちを追い出されたように、これらの神を汚す人々をも追い出されないであろうか。

清めと日常生活

使徒ヤコブは、上からの知恵は、「第一に清く」と言っている。もしも彼が、たばこで汚れたくちびるでイエスの尊い御名を唱える人々、その息も体も悪臭に染まった人々、そして、大気を汚染して回りのすべての者に毒を吸わせる人々に出会ったならば、すなわち、もし使徒が、福音の純潔とは全く逆の習慣と接触したならば、彼はそれを、「地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なもの」と非難しないであろうか。たばこの奴隷になっている人々は、自分たちは全き清めの祝福にあずかっていると主張して、天国への望みについて語る。しかし、神の言葉は、「汚れた者……は、その中に決してはいれない」と言明しているのである（黙示録二二ノ二七）。

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」（コリント第一・六ノ一九、二〇）。自分の体が聖霊の宮であるものは、有害な習慣の奴隷にはならない。彼の能力は、血の代価をもって彼を買い取られたキリストに属している。彼の持ち物は主のものである。この託された資本を浪費するならば、どうして罪を免れることができようか。自称キリスト者たちが、毎年、無用で有害な道楽のために莫大な額を消費している一方で、魂は生命

の言葉が与えられずに滅びている。彼らは、什一や献金において神のものを盗み、貧しい人々の救援や福音の支持に与えるよりもっと多くのものを、破滅的な欲望の祭壇で焼き尽くしている。もしも、キリストの弟子であると公言する者がみな、真に清められるならば、彼らの財産は、無用で有害な道楽のために費やされるかわりに、主の金庫におさめられ、キリスト者は、節制と克己と自己犠牲の模範となるであろう。そのとき彼らは、世の光となるのである。

世界は、あげて放縦に陥っている。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」が大多数の人々を支配している。しかし、キリストの弟子たちは、より聖なる召しを受けている。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。」神の言葉に照らしてみても、邪悪な習慣や世俗の欲望の満足を全く放棄しない清めは真実のものでないという、われわれの主張は正しい。

「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、…そして、汚れたものに触れてはならない」という条件に従うものに、神は、「わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」と約束なさるのである（コリント第二・六ノ一七、一八）。神の事柄において豊富な体験を持つことは、すべてのキリスト者の特権であり義務である。「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」とイエスは言われた（ヨハネ八ノ一二）。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」（箴言四ノ一八）。信仰と服従は、一歩ごとに、「少しの暗いところもない」世の光に、魂を密接に結びつける。

義の太陽の輝く光線が、神のしもべたちの上に照り輝く。そして彼らは、その光を反射しなければならない。ち

ようと天空の星が、天には大いなる光があつて、その栄光によつて自分たちは輝いているのだということを、われわれに告げているように、キリスト者は、自分たちが賛美し、倣うべき品性をお持ちの神が、宇宙の王座におられるということを、あらわさなければならぬ。神の霊の恵み、神の品性の純潔と聖潔とが、神の証人たちによつてあらわされるのである。

キリスト者の特権

パウロは、コロサイ人への手紙の中で、神の子供たちに与えられる豊かな祝福について述べている。彼は言う。わたしたちが「絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもつて、神の御旨を深く知り、主のみこころにかなつた生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行つて実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがつて賜わるすべての力によつて強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍（ぶ）ことである」（コロサイ一ノ九――一）。

また彼は、エペソの兄弟たちが、キリスト者の特権の高さを理解するに至ることを望むと書いている。彼は、至高者のおすこ、おすめとして彼らが持つことのできる驚くべき力と知識を、非常に意味深い言葉で示している。彼らは、「御霊により、力をもつて……内なる人」が強くされ、「愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリスト

の愛を知」ることが出来る。しかし、使徒が、「神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように」と祈るときに、この特権は最高潮に達するのである（エペソ三ノ一六―一九）。

ここに、われわれが神の要求に応じるときに、われわれの天の父の約束を信じる信仰によって到達することのできる最高点が示されている。われわれは、キリストの功績によって、無限の力を持たれるおかたのみ座に近づくのである。「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあるうか」（ローマ八ノ三二）。父なる神は、み子に聖霊をあふれるばかりにお与えになった。そして、われわれもまた、霊に満たされることが出来るのである。イエスは言われる。「このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあるうか」（ルカ一ノ一三）。「何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。」「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」（ヨハネ一四ノ一四、一六ノ二四）。

キリストにある勝利の生活

キリスト者の生涯は、謙遜がその特徴であるが、悲しみや自己を卑下する気持ちがあつてはならない。神に受け入れられ祝福されるような生活することは、すべての者の特権である。われわれが、常に罪の宣告と暗黒のもとにあることは、われわれの天の父のみこころではない。頭をうなだれて、自分のことばかりを考えているの

は、真の謙遜の証拠ではない。われわれは、イエスのところへ行つて、清められ、律法の前にはばかることなく立つことができるのである。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」(ローマ八ノ一)。

イエスによつて、墮落したアダムの子供たちは、「神の子」となる。「実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない」(ヘブル二ノ一一)。キリスト者の生活は、信仰と、勝利と、神にある喜びとの生活でなければならぬ。「なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」(ヨハネ第一・五ノ四)。神のしもべ、ネヘミヤが、「主を**喜ぶ**ことはあなたがたの力です」と言ったのは至言である(ネヘミヤ記八ノ一〇)。パウロも言っている。「あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあつて、神があなたがたに求めておられることである」(ピリピ四ノ四、テサロニケ第一・五ノ一六―一八)。

これが、聖書のいう悔い改めと清めの実である。しかし、神の律法に示された義の大原則が、キリスト教界において冷淡に扱われているために、こうした実はほとんど見ることができない。これが、かつてのリバイバルにあらわれたような神の霊の深い永続的な働きが、ほとんど見られない理由である。

われわれが変化するのは、ながめることによつてである。神がご自分の品性の完全さと神聖さを示されたこれらの聖なる戒めを、人々がなおざりにし、人間の教えや理論に心をひかれるならば、教会内で生きた敬虔の念が

低下しても少しも不思議ではないのである。主は言われる。彼らは、「生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った、それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ」(エレミヤ書二ノ一二)。

「悪しき者のはかりごとに歩ま…ぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよるこび、昼も夜もそのおきてを思う。このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると実を結び、その葉もしばまないように、そのなすところは皆栄える」(詩篇一一ノ一二)。神の律法が、その正当な位置に回復されて初めて、神の民と称する人々の間に、初代の信仰と敬虔のリバイバルが起こり得るのである。「主はこう言われる、『あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ』」(エレミヤ書六ノ一六)。

第二十八章

天における調査審判

天の大法廷

預言者ダニエルは次のように言っている。「わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであつた。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であつた。彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千、彼の前にはべる者は万々、審判を行つ者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた」（ダニエル書七ノ九、一〇）。

こうして、人々の品性と生活が、全地の裁判官であられる神の前で調査され、各人が「そのしわざに応じ」て報いられる重大で厳粛な日が、預言者の幻に示された。日の老いたる者とは、父なる神のことである。詩篇記者

は、「山がまだ生れず、あなたがまだ地と世界とを造られなかったとき、とこしえからとこしえまで、あなたは神でいらせられる」と言っている（詩篇九〇ノ二）。万物の根源であり、すべての律法の源であられるおかたが、審判をつかさどられる。そして、「万の幾万倍、千の幾千倍」の聖天使たちが、仕える者、また証人として、この大法廷に列席するのである。

「わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない」（ダニエル書七ノ一三、一四）。ここに描かれているキリストの来臨は、キリストが地上に再臨されることではない。キリストは、天において日の老いたる者のもとに来られるのであって、それは、彼の仲保者としての働きが終わるときに与えられる「主権と光栄と国」とをお受けになるためである。二千三百日の終わりである一八四四年に起こると預言されたのは、この来臨のことであって、キリストが地上に再臨されることではなかった。われわれの大祭司は、天使たちを従えて、至聖所に入り、神のみ前で、人類のための彼の最後の務めをなさる。それは、調査審判の働きであり、贖罪の恵みにあずかる資格があることを示したすべての人のために贖いをなさることである。

象徴的儀式においては、告白と悔い改めによって神の前に出て、その罪が罪祭の血によって聖所に移された者だけが、贖罪の日の儀式にあずかることができた。そのように、最終的な贖罪と調査審判の大いなる日に、審査されるのは、神の民と称する人々だけである。悪人の審判は、これとは全く別の働きで、もっとあとで行なわれる。「さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に

従わない人々の行く末は、どんなであろうか」（ペテロ第一・四ノ一七）。

天の書物

天には、人々の名と行為を記録した書物があって、審判の決定は、それによってなされる。預言者ダニエルは、「審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた」と言っている。ヨハネも、この同じ光景を描写して、「かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた」と言っている（黙示録二〇ノ一二）。

いのちの書には、神の働きをしたすべての人の名が記されている。イエスは、弟子たちに「あなたがたの名が天にしろされていることを喜びなさい」と言われた（ルカ一〇ノ二〇）。パウロは、忠実な同労者の名が『いのちの書』に「書きとめられている」と言っている（ピリピ四ノ三）。ダニエルは、「かつてなかったほどの悩みの時」を予見して、「あの書に名をしろされた」すべての神の民は救われると言っている。また、ヨハネは、神の都に「はいれる者は、小羊のいのちの書に名をしろされている者だけである」と言っている（ダニエル書一二ノ一、黙示録二一ノ二七）。

神の前に、「覚えの書」が記されているが、それには、「主を恐れる者、およびその名を心に留めている者の善行が記録されている（マラキ書三ノ一六）。彼らの信仰の言葉、彼らの愛の行為は、天に記録されている。ネヘミヤは、このことについて、次のように言っている。「わが神よ、……わたしを覚えてください。……神の宮

…のためにわたしが行った良きわざをぬぐい去らないでください」(ネヘミヤ記一三ノ一四)。神の覚えの書には、すべての正しい行為が永久に記されている。誘惑を退けたこと、悪に打ち勝ったこと、あわれみの言葉をかけたことなどが、忠実に記録されている。また、すべての犠牲の行為、キリストのために耐えたすべての苦しみや悲しみが記録されている。「あなたはわたしのさすらいを数えられました。わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください。これは皆あなたの書にしるされているではありませんか」と詩篇記者は言っている(詩篇五六ノ八)。

また、人々の罪の記録もある。「神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」(伝道の書一一ノ一四)。救い主は次のように言われた。「審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである」(マタイ一一ノ三六、三七)。隠れた目的や動機もまちがいに記録される。

「主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう」(コリント第一・四ノ五)。「見よ、この事はわが前にしるされた、…『彼らの不義と、彼らの先祖たちの不義とを共に報い返す』と主は言われる」(イザヤ書六五ノ六、七)。

すべての人の行為は、神の前で調査され、忠実であったか不忠実であったかが記録されている。天の書物の中の各自の名の向かい側には、恐るべき正確さで、すべての悪い言葉、利己的な行為、義務の怠慢、隠れた罪、巧妙な偽善行為などが記入されている。天からの警告や譴責をなおざりにしたこと、時間を浪費し、機会を活用しなかったこと、善きにつけ悪しきにつけ、及ぼした感化とその広範囲にわたる結果などがみな、記録天使によって記録されている。

助け主キリスト

神の律法が、審判の時に人々の品性と生活を吟味する基準である。賢者は「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである」と言っている（伝道の書二二ノ一三、一四）。使徒ヤコブは、兄弟たちに、「だから、自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい」と勧告している（ヤコブ二ノ一二）。

審判において、「あずかるにふさわしい」とされた者は、義人の復活にあずかる。「かの世にはいつて死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、…天使に等しいものであり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ない」とイエスは言われた（ルカ二〇ノ三五、三六）。彼は、また、「善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえ」って出てくると宣言しておられる（ヨハネ五ノ二九）。つまり、死んだ義人は、審判がすみ「生命を受けるためによみがえ」るにふさわしい者とされるまでは、復活することはない。したがって、彼らの記録が調査され、運命が決定されるときに、彼ら自身はその法廷にはいないのである。

イエスは彼らの助け主として、神の前で、彼らのためにとりなしをなさる。「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがあられる」（ヨハネ第一・二ノ一）。「ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないうで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである。」「そこでまた、彼は、いつも生きてい

て彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル九ノ二四、七ノ二五)。

審判において、記録の書が開かれるときに、イエスを信じたすべての人の生涯が神の前で調べられる。われわれの助け主であられるイエスは、この地上に最初に生存した人々から始めて、各時代の人々のためにとりなし、現在生きている人々で終わられる。すべての名があげられ、すべての人の事情が詳しく調査される。受け入れられる名もあれば、拒まれる名もある。もしだれかが、罪を悔い改めず、許されないまま、記録の書に残しておくならば、彼らの名は、いのちの書から消されて、彼らの善行の記録も神の覚えの書から消される。「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう」と主はモーセに言われた(出エジプト記三二ノ三三)。また預言者エゼキエルも言っている。「しかし義人がもしその義をはなれて悪を行い、悪人のなすもるもるの憎むべき事を行つならば、生きるであろうか。彼が行ったもるもるの正しい事は覚えられない」(エゼキエル書一八ノ二四)。

キリストの血による勝利

真に罪を悔い改め、キリストの血が自分たちの贖いの犠牲であることを信じたものは、みな、天の書物の彼らの名のところに、罪の許しが書き込まれる。彼らは、キリストの義にあずかる者となり、彼らの品性は、神の律法にかなったものとなったので、彼らの罪は、ぬぐい去られ、彼ら自身は、永遠の生命にあずかるにふさわしい

ものとされるのである。主は、預言者イザヤによって、こう宣言しておられる。「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」(イザヤ書四三ノ二五)。イエスは、次のように言われた。「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう。」「だから人の前でわたしを受けいれる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受けいれるであろう。しかし、人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう」(黙示録三ノ五、マタイ一〇ノ三二、三三)。

人々は、地上の法廷の判決に深い関心を示すのであるが、しかしそれも、いのちの書にその名を記された人々が、全地の審判者の前で調査される時の天の法廷における関心とは、とうてい比較にならない。仲保者イエスは、彼の血を信じる信仰によって勝利したものがみな、その罪を許され、再びエデンの家郷にもどって「以前の主権」を彼とともに継ぐ者となるように、嘆願されるのである(ミカ書四ノ八)。サタンは、人類をあざむき、誘惑することによって、人類創造における神のご計画を挫折させようと考えた。しかし、キリストは今、人間が墮落しなかつたかのように、この計画の実行を求められるのである。キリストは、ご自分の民のために、完全で十分な許しと義認だけでなく、彼らが、ご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくことを求められるのである。

イエスが、彼の恵みに浴する人々のために嘆願される一方において、サタンは、彼らを罪人として神の前に告訴する。大欺瞞者サタンは、彼らに疑惑を抱かせ、神に対する信頼を失わせ、神の愛から彼らを引き離し、神の律法を犯させようとしてきた。そして今度は、サタンは、彼らの生涯の記録を指摘し、品性の欠陥、贖い主のみ

栄えを汚したところの、キリストに似ていない点、そして、彼が誘惑して彼らに犯させたすべての罪を指摘して、これらのことのゆえに彼らは自分の臣下であると主張するのである。

イエスは、彼らの罪の弁解はなさらないが、彼らの悔い改めと信仰を示して、彼らの許しを主張なさり、天父と天使たちの前で、ご自分の傷ついた両手をあげ、わたしは彼らの名を知っている、わたしは彼らを、わたしのたなごころに彫り刻んだ、と言われるのである。「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません」(詩篇五一ノ一七)。そして、ご自分の民を訴える者にむかつて、「サタンよ主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか」と宣言される(ゼカリヤ書三ノ二)。キリストは、忠実な人々に、ご自分の義の衣を着せて、父なる神の前に「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会」として立たせてくださる(エペソ五ノ二七)。彼らの名は、いのちの書に書きとめられる。そして彼らについて、「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である」と記されているのである(黙示録三ノ四)。

こうして、新しい契約が完全に成就する。「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない。」「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない」(エゼキヤ書三一ノ三四、五〇ノ二〇)。「その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また光栄となる。そして…シオンに残るもの、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあつて、生命の書に記入された者は聖なる者となえられる」(イザヤ書四ノ二、三)。

調査審判と罪の除去

調査審判と罪をぬぐい去る働きは、主の再臨の前に完了しなければならない。死者は、書物に記録されたことによって裁かれるのであるから、彼らが調査されるその審判が終わるまでは、彼らの罪はぬぐい去られることはできない。しかし、使徒ペテロは、はっきりと、信者の罪は、「主のみ前から慰め〔原文では *refreshing*（活気づけ、回復の意）の時が〕くるときにぬぐい去られる。そして、「キリストなるイエスを、神がつかわして下さる」と言っている（使徒行伝三ノ一九参照。同二〇節）。調査審判が終わると、キリストは来られる。そして、たずさえて来た報いを、それぞれの人の行ないにしたがってお与えになるのである。

型としての奉仕において、大祭司は、イスラエルのために贖罪をなし終えると、外に出て来て、会衆を祝福した。そのように、キリストも、仲保者としての働きを終えられると、「罪を負うためではなしに……救いを与える」ために来られて、彼を待っている人々に永遠の生命をお与えになる（ヘブル九ノ二八）。祭司が聖所から罪を除去したときに、アザゼルの山羊の上にそれを告白したように、キリストは、罪の創始者であり煽動者であるサタンの上に、これらの罪をすべて置かれるのである。アザゼルの山羊は、イスラエルの罪を負って、「人里離れた地」に送られた（レビ記一六ノ二二）。そのように、サタンは、自分が神の民に犯させたすべての罪を背負って、千年の間、この地上に監禁される。地上はその時、荒れ果てて住む者もない。そして彼は、ついに、すべての悪人を滅ぼす火の中で、罪の刑罰を余さず受ける。こうして、罪は最終的に除去され、進んで悪を捨て去った人がすべて救われて、贖いの大計画は完成するのである。

審判が指定されていた時、すなわち、二千三百日の終わる一八四四年に、調査と罪の除去の働きが始まった。これまでにキリストの名をとなえたことのある者はすべて、この厳密な審査を受けなければならない。生きている者も死んだ者ともに「そのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって」裁かれる。

悔い改めず棄て去っていない罪は、許されず、記録の書からぬぐい去られない。それは、神の大いなる日に、罪人に不利な証言をする。その悪行は、昼の明るみで行なわれたものかもしれないし、あるいは夜の暗やみの中で行なわれたものかもしれない。しかし、いずれにしてもそれらは、われわれが申し開きをしなければならぬ神の前には、そのままはっきりとあらわれていた。神の天使たちが、ひとつひとつの罪を目撃し、それを誤りなく記録した。罪は、父母や妻子、そして同僚たちからは、隠し、否定し、秘密にしておくことができるかもしれない。罪を犯した者たち以外は、だれもその罪悪を疑ったりなどしないかもしれない。しかし、天の知的存在者たちの前には、それはあらわにされている。どんなに暗い夜の暗黒も、極秘の欺瞞的手段も、永遠の神から一つの思いすら隠すものとはならないのである。神は、すべての不正な計算、不正な取り引きを、正確に記録しておられる。神は、信心深い様子に欺かれることはない。神は品性の評価において、決して誤られることはない。人間は、心の汚れた人々に欺かれるかもしれないが、神は、すべての見せかけを見破り、内的生活を読みとられる。

さばきの厳粛さ

これは、なんと厳粛な思想であろう。毎日毎日が永遠の中に過ぎ去り、その日のことが天の書に記録される。

一度口に出した言葉、一度行なった行為は、二度と取り返すことができない。天使は、善悪ともに記録しているのである。この世のどんなに偉大な征服者でも、ただ一日の記録さえ取り消すことはできない。われわれの行動、言葉、そして極秘の動機でさえも、みな、われわれの運命を禍福いずれかに決定する重要な役割を持っている。たとえわれわれが忘れていても、それらは、義とするかそれとも罪に定めるかの、証言を立てるのである。

芸術家のよく磨かれた金属板に、人間の顔かたちが正確に反映されるように、人の品性も天の書物に、そのまま描写されている。にもかかわらず人々は、天の存在者たちに見られねばならないその記録について、憂慮することのなんと少ないことであろう。もし、見える世界と見えない世界とをへだてている幕が取り除かれて、人々が、審判において再び直面しなければならぬすべての言行を、天使たちが記録しているのを見ることができれば、日ごとに語られるどれだけ多くの言葉が、語られずにすみ、どれだけ多くの行為が、なされずにすむことであろう。

審判の時には、すべての才能の用途がくわしく調べられる。われわれは、天から貸し与えられた資本をどのようにつぎこんでいるか。主は、来られるときに、ご自分のものを利子とともにお受けになるであろうか。われわれは、肉体的、精神的、知的に託された力を活用して、神に栄光を帰し、世界に祝福をもたらしたのであるか。われわれは、時間、筆、声、金銭、影響力などを、どのように使ったであろうか。貧しい人、苦しんでいる人、孤児や寡婦を助けて、キリストのために何をしてきたであろうか。神はわれわれを、神のみ言葉の保管者となさした。そしてわれわれは、救いに至る知識を人々に伝えるために、われわれに与えられた光と真理を、どのようにしてきたであろうか。キリストを信じるとただ表明するだけではなんの価値もない。行為にあらわされた愛だ

けが、本物とみなされる。神の目の前で、行為を価値あるものにするのは、愛だけである。愛によって行なわれたことは、人間がどんなに低く評価しようとも、神に受け入れられ、報われるのである。

人々の隠れた利己心が、天の書の中であらわにされている。同胞に対して義務を怠ったことが記録され、救い主の要求を忘れたことが記録されている。キリストに属する時間、思想、能力を、なんとたびたびサタンに与えたかを、彼らはそこに見るのである。天使が天にたずさえて行く記録は、実に悲しいものである。キリストの弟子であると称する英知ある人間が、世的財産の蓄積や、地上の快樂の追求に没頭している。金銭、時間、能力は、虚飾と放縱の犠牲になっている。しかし、祈りや聖書研究にあてられる時間、魂のへりくだりと罪の告白にあてられる時間は、ほとんどないのである。

サタンは、数えきれないほどの多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならぬ働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである。

救いの計画に不可欠なもの

救い主の仲保の恵みにあずかりたいと思うものは、神を畏れつつ聖潔を完成していくというその義務を、何ものにも妨げられてはならない。貴重な時間は、快樂や虚飾、または利益の追求に費やすのではなくて、真理の言

葉を熱心に、祈りとともに研究するために用いなければならない。聖所と調査審判の問題は、神の民によってはつきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあつて必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる。ひとりびとりの魂は、救われるか、滅びるか、そのどちらかなのである。各自は、今、神に裁かれようとしている。各自は大いなる審判者と顔を合わせなければならない。とするならば、審判が始まり、かずかずの書物が開かれる厳粛な時のことを、ダニエルとともに、定められた日の終わりに立って、自分たちの分を受けねばならない厳粛な時のことを、たびたび瞑想することは、すべての者にとってどんなにか重要なことであろう。

こうした問題について光を受けた者はみな、神が彼らにゆだねられた大いなる真理について証言しなければならない。天の聖所は、人類のためのキリストのお働きの中心そのものである。それは、地上に生存するすべての者に関係している。それは、贖罪の計画を明らかにし、われわれをまさに時の終わりへと至らせて、義と罪との戦いの最後の勝利を示してくれる。すべての者が、これらの問題を徹底的に研究し、彼らのうちにある望みについて説明を求める人に答えることができるようにすることは、何よりも重要なことである。

天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとつて欠くことのできないものである。キリストは、ご自分の死によって開始された働きを、復活後、天において完成するために昇天されたのである。われわれは、信仰によって、「わたしたちのためにさきがけとなって、はいられた」幕の内に入らなければならない（ヘブル六ノ二〇）。そこには、カルバリーの十字架からの光が反映し

ている。そこにおいて、われわれは、贖罪の奥義について、もっとはっきりした理解を持つことができる。人間の救済は、天が無限の価を払うことによって達成された。払われた犠牲は、破られた神の律法の最大限の要求に相当するものである。イエスは、父なる神のみ座への道を開かれた。そして、信仰によって彼に来るすべての者の心からの願いは、彼のとりなしによって、神の前にささげられるのである。

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみを受ける」(箴言二八ノ一三)。自分たちの過ちを隠し、言いわけをする人々が、もし、サタンが彼らのことでどんなに喜び、そつした彼らの行為のゆえにキリストと聖天使たちをどんなに嘲笑するかを見ることができれば、彼らは、急いでその罪を告白し、捨て去ることであろう。品性の欠陥を通して、サタンはその人の心全体を支配しようと働きかける。彼は、人がこれらの欠陥に固執するならば、自分が成功を収めることを知っている。それだから彼は、欠陥に打ち勝つことは不可能であるという致命的な詭弁をもって、キリストに従う人々を欺こうと、いつもけんめいになっている。しかしイエスは、彼の傷ついた手と砕かれた体をもって、彼らのために嘆願される。そして、彼に従ってくるすべての者に「わたしの恵みはあなたに対して十分である」と宣言されるのである(コリント第二・一二ノ九)。「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(マタイ一ノ二九、三〇)。それだから、だれでも、自分たちの欠陥は不治のものであると思っ

てはならない。神は、それらに打ち勝つ信仰と恵みをお与えになるのである。

今は大いなる贖罪の日

われわれは、今、大いなる贖罪の日に生存している。型としての儀式においては、大祭司がイスラエルのために贖罪をなしている間、すべての者は、主の前に罪を悔い改め、心を低くすることによって、身を悩まさなければならなかった。もしそうしなければ、彼らは、民の中から絶たれるのであった。それと同様に、自分たちの名がいのちの書にとどめられることを願うものはみな、今、残り少ない恩恵期間のうちに、罪を悲しみ、真に悔い改めて、神の前に身を悩まさなければならぬ。われわれは、心を深く忠実に探らなければならぬ。多くの自称キリスト者がいんでいる軽薄な精神は、捨て去らねばならぬ。われわれを打ち負かそうとする悪癖に勝利しようとする者は、みな、はげしく戦わなければならぬ。準備は、一人一人がしなければならぬ。われわれは、団体として救われるのではない。一人の者の純潔と献身は、これらの資格を欠く他の人の埋め合わせにはならない。すべての国民が神の前で審判を受けるのであるが、しかし神は、あたかもこの地上にその人一人しかないかのように、厳密に一人一人を審査されるのである。すべての者が調べられねばならない。そして、しみもしもそのたぐいのものがいっさいあつてはならないのである。

贖罪の働きが終結しようとするときの光景は、実に厳粛である。そこには、実に重大な意義が含まれている。審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。間もなく——その時がいつかはだれも知らないが——生きている人々の番になる。神のおそるべき御前で、われわれの生涯が調査され

ねばならない。今は、他のどんな時にもまさって、すべての者が救い主の勧告に心をとめるべき時である。「氣をつけて、目をさましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたにはわからないからである」(マルコ一三ノ三三)。「もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない」(黙示録三ノ三)。

調査審判の働きが終わるとき、すべての人の運命は、生か死かに決定されてしまっている。恩恵期間は、主が天の雲に乗って来られる少し前に終了する。キリストは、その時を予見して、黙示録の中で次のように宣言しておられる。「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ。見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」(黙示録二ノ一、一二)。

その時が来ても、義人と悪人は、その死ぬべき肉体のままで、地上で生活をしている。天の聖所では、最終的に取り消すことのできない決定が宣告されたことも知らずに、人々は、植えたり、建てたり、飲んだり、食べたりしている。洪水の前に、ノアが箱舟に入ったあとで、神は彼を舟の中に閉じ込め、神を恐れない人々を外に閉め出されたのである。しかし、人々は、七日の間、彼らの運命が決定されたことも知らずに、不注意な放縱の生活が続け、差し迫った審判の警告をあざけたのであった。「人の子の現れるのも、そのようであろう」と救い主は言われる(マタイ二四ノ三九)。真夜中の盗人のように静かに、人に気づかれずに、すべての人の運命が定まる決定的な時、罪人に対する恵みの招きが最終的に取り去られる時がやって来る。

「だから、目をさましていなさい。…あるいは急に帰ってきて、あなたがたの眠っているところを見つける

かもしれない」(マルコ一三ノ三五、三六)。目をさまして待つことにうみ疲れ、世俗の魅力に心を向ける人々の状態は、実に危険である。実業家が利益の追求に心を奪われ、快楽の愛好家が楽しみにふけり、流行を追う女性が身を飾っているそのときに、全地の審判者が、「あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれた」という宣言をなさるかもしれないのである(ダニエル書五ノ二七)。

第二十九章

罪惡の起源

罪の存在に対する疑問

どうして罪というものが起こったのか、なぜ罪があるのかということは、多くの人々の心を苦しめる問題である。人々は、惡の働き、その恐るべき結果である不幸と悲しみを見て、いったいなぜ限らない知恵と力と愛であられる神の主権の下にこうしたすべてのことが存在するのかと疑問をいだく。人間の説明できない神秘がここにある。人々は、半信半疑でいるために、神のみ言葉の中にはっきりあらわされていて救いに不可欠な真理を、悟ることができないのである。なぜ罪というものがあるのかということ調べるために、神が啓示されたことのない点まで追求する人たちがいる。そのため彼らは、この困難な問題を解決することができない。疑ったり、あらさがしをしたりするような気持ちに動かされる人は、これを口実にして聖書のみ言葉を拒否してしまう。なかに

はまた、言い伝えや誤った解釈のために、神のご品性、神の統治の性質、罪に対する神の取り扱いの原則などについての聖書の教えに暗くなり、悪という大問題について満足な理解を得ることができない者もある。

罪の存在を理由づけようとして罪の起源を説明することは、不可能である。しかし、罪の起源についてもその処分についても、悪に対する神のすべての取り扱いの中に、神の公義とあわれみが完全にあらわされているということに關しては、十分に理解できるのである。聖書の中に何よりもはっきり教えられていることは、罪が入ってきたことに対して神にはなんの責任もないということ、すなわち神の恵みが独断的にとり去られたり、神の統治に欠陥があったりしてそれが反逆の発生のきっかけになったのではないということである。罪は侵入者であって、その存在については理由をあげることができない。それは神秘的であり、不可解であって、その言いわけをすることは、それを弁護することになる。もし罪の言いわけがあったり、その存在の原因を示すことができれば、それはもはや罪ではなくなる。罪についての唯一の定義は、神のみ言葉のうちに与えられている定義である。それは「罪は不法である」ということである。すなわち罪は、神の統治の基礎である愛という大法則と戦っている原則が、外にあらわれた結果である。

宇宙の調和

悪が入る前には、全宇宙には平和と喜びがあった。すべては創造主のみこころと完全に調和していた。神に対する愛が最高の位置を占め、お互いの間の愛はかたよっていなかった。神の独り子で、言葉であられるキリスト

は、永遠の父と一つであられた。すなわち、その性質において、品性において、目的において一つであり、この宇宙全体で、神の計画と相談にあずかることのできるただひとりのおかたであつた。天の父は、キリストによって、天の全住民を創造する働きをされた。「万物は、天にあるものも地にあるものも…位も主權も、支配も權威も、みな御子にあつて造られた」（コロサイーノ一六）。こうして全天は、キリストに対して、天父に対するのと同じ忠順をあらわした。

愛の律法は神の統治の基礎であるから、すべての被造物の幸福は、この偉大な義の原則に完全に一致することにあつた。神は、すべての被造物の愛の奉仕、すなわち、神のご品性に対する賢明な理解から生ずる尊敬をお望みになる。神は、強制的な忠誠をお喜びにならないで、だれでも神に自発的な奉仕をささげるように、すべてのものに意志の自由を与えておられる。

罪の侵入

しかし、この自由を悪用した者があつた。キリストに次いで最も神から榮譽を受け、天の住民の中で最高の權威と栄光を与えられていた者から罪が始まつた。ルシファ―は、墮落する前は、清く汚れない、おおうことをなすケルビムの中の第一位の者であつた。「主なる神はこう言われる、あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。あなたは神の園エデンにあつて、もろもろの宝石が、あなたをおおっていた。…わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造ら

れた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であった」（エゼキエル書二八ノ一二―一五）。

ルシファ―は、神の恵みのうちにとどまって、全天使の愛と尊敬を受け、ほかの者たちの祝福となり創造主の栄えをあらわすために、その高貴な能力を働かせることができたのである。しかし預言者は、「あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚した」と言っている（エゼキエル書二八ノ一七）。しだいにルシファ―は、自分を高めたいという思いをほしいままにするようになった。「あなたは自分を神のように賢いと思っている」（同二八ノ六）。「あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』（イザヤ書一四ノ一三、一四）。ルシファ―は、被造物の最高の愛情と忠誠心を神にささげさせようとしないうで、彼らの奉仕と服従とを自分に向けさせようと努力した。この天使たちの君は、無限なるおかたであられる神がみ子にお与えになっていた栄誉をほしがって、キリストだけがお用いになれる大権である権力にあこがれた。

全天は、創造主の栄光を反映し、神を賛美することを喜びとしていた。そして神がこのようにあがめられている間は、すべては平和であり、喜びであつた。しかしいま、不協和音が天のハーモニーをそこなつた。創造主のご計画とは逆の、自分に仕え自分を高める思いが、神の栄光を第一としていた者たちの心に、悪の予感を感じさせた。天の会議は、ルシファ―に嘆願した。神のみ子は、創造主が偉大であられ、恵み深く、公義の神であられること、そして神の律法は聖にして不変の性質のものであることを、彼に示された。神ご自身が天の秩序をお定めになつたのであるから、ルシファ―がそれを無視することは、創造主のみ名をけがし、自分自身を破滅させる

ことになるのであった。しかし、無限の愛とあわれみをもって与えられた警告は、反抗の精神をひき起こしたただけであった。ルシファアはキリストに対するしつとの念にかられ、ますます決意を固めた。

自分自身の栄光に対する誇りは、主権を求める欲望を助長した。ルシファアは自分に与えられた高い榮譽を神の賜物として認めず、創造主に対して感謝の念を起こさなかった。彼は自分の聡明さと高い地位を誇り、神と同等になることを熱望した。彼は天の住民から愛され、尊敬されていた。天使たちは彼の命令を実行することを喜び、彼はすべての天使たちにまさる知恵と栄光を身につけていた。しかし神のみ子は、天の君主として、すなわち天の父と同じ権力と権威をもっておられるおかたとして認められていた。キリストは、神のすべての相談に参加しておられたが、ルシファアはキリストのように神の目的を知ることを許されていなかった。「なぜキリストが主権をもっておられるのか。なぜキリストがこのようにルシファアよりもあがめられるのか」と、この強力な天使は疑った。

ルシファアの悪だくみ

ルシファアは、神のみ座のすぐ近くにある自分の座を離れて、天使たちの間に不満の精神をひろめるために出て行った。彼は神秘的な秘密をもって働き、一時は神に対する尊敬をよそおって自分の真意をかくし、天の住民を支配している律法によって不必要な束縛が加えられているとほめかしながら、律法に対する不満の念を引き起こそうと努力した。天使たちの性質は聖なのだから、彼らは自分自身の意志の命令に従うべきであると彼は説

いた。神がキリストに最高の榮譽をお与えになったことは、自分に対する不当な待遇であると言って、彼は自身に対する同情を引き起こそうと努めた。彼は、自分もっと大きな権力と榮譽とを求めるのは、決して自分を高めるためではなく、天のすべての住民のために自由を確保するためであって、こうすることによって彼らはもっと高い身分になれるのだと主張した。

神は、大いなるあわれみをもって、長い間ルシファーに対して忍耐された。彼は、最初不満の念にかられたときも、あるいは忠誠な天使たちの前で虚偽の主張をしはじめたときでさえ、その高い地位からすぐに追い出されるようなことはなかった。彼は長い間天にとどまっていた。何度も何度も彼には、悔い改めと服従の条件のもとに許しが提供された。彼にそのまちがいを自覚させるために、無限の愛と知恵であられる神だけが考えだすことがおできになるような努力が払われた。不満の精神というものは、それまで天で見られたことがなかった。ルシファー自身も、最初は、自分がどちらへ押し流されているのかわからず、自分の感情のほんとうの姿がわかっていなかった。しかしルシファーは、自分の不満が理由のないものであることがわかると、彼は、自分が誤っていたこと、神の主張が正当であること、また事実を全天の前に明らかにすべきであることを自覚した。もし彼がそうしていたら、彼は自分自身と多くの天使たちとを救っていたかもしれない。このとき、彼は、神に対する忠誠を完全に放棄していたわけではなかった。彼は守護のケルブとしての地位を捨てたけれども、もし彼が創造主の知恵を認めて自分から進んで神のみもとに帰り、神の大いなるご計画のうちに定められた地位を占めることに満足したら、彼はその地位に復帰させられていたのである。しかし高慢心に妨げられて、彼は服従しようとしなかった。彼はあくまでも自分の行動を弁護し、悔い改めの必要はないと言い張り、創造主に対する大争闘に

完全に身を投じてしまった。

欺瞞の大計画

今や彼は、部下の天使たちの同情を得るために、その偉大な知能の全能力をもって欺瞞の業に打ち込んだ。キリストが彼に警告と勧告をお与えになったことさえ曲解されて、彼の反逆的な計画に利用された。彼は自分を親しく信頼し、かたく結び合っていた者たちに向かって、自分は神からまちがった判断をされている、自分の地位は尊敬してもらえない、また自分の自由は制限されようとしていると語った。彼はキリストの言葉をまちがったふうに伝えただけでなく、キリストは天の住民の前で彼に屈辱を与えようとしていると言って、ごまかしと露骨な虚偽をもって神のみ子を非難した。彼はまた、自分と忠実な天使たちとの間に、ありもしない問題を引き起こそうとした。彼は、忠誠心を失わせて自分の側に完全に引き入れることのできなかった者たちに向かって、天の住民の利益に対して冷淡であると言って非難した。彼は自分自身のしている行為を、神に忠誠を保っている者たちのせいにした。また彼は、神が自分に対して不公正であるという彼の非難を裏づけるために、創造主のみ言葉と行為をまちがったふうに伝えるという手を用いた。神の御目的について巧妙な議論をすることによって天使たちを困惑させるのが、彼の政策であった。彼は単純なことの一つ一つに神秘の衣を着せ、また巧妙に曲解して、神の最も明白な言葉に対して疑いを投げかけた。彼は神の統治と密接に関連した高い地位を占めていたので、彼の言うことにはいっそう大きな力が加わり、多くの者が引きずられて彼に加担し、神の権威に対する反逆に加

わった。

賢明な神は、このような不満の精神が積極的な反乱に発展するまで、サタンがその行為を進めるのをゆるされた。すべての者が、サタンの計画の真相と傾向とを知るようになるためには、彼の計画を十分に発展させる必要があった。ルシファーは油をそがれたケルブとして、非常にあがめられていた。彼は天の住民から非常に愛されていたので、彼らに対する影響力は大きかった。神の統治には天の住民だけでなく、神がお造りになったすべての世界が含まれていたので、サタンは、天使たちを反逆に加わらせることができるならば、他世界もまきこむことができると考えた。サタンは、自分の目的を達するために、詭弁と虚偽とを用いて、巧妙に彼の疑問点もちだした。彼の欺瞞の能力は大したものであり、また虚偽の仮面で変装することによって、彼は有利な立場を得ていた。忠誠な天使たちでさえ、彼の本性を十分に見分けたり、また彼の行為がどこに向けられているかを見たりすることができなかった。

サタンはもともと非常な栄誉を受けていたのであり、またその行為のいっさいが神秘に包まれていたので、彼の行為の真相を天使たちの前にあばくことは困難であつた。罪は、完全に姿を現わすまでは、それがどんなに邪悪なものであるかがわからない。それまで神の宇宙には罪というものがなかったので、天の住民は罪の性質と邪悪さについてなんの概念も持っていなかった。彼らは、神の律法を無視することから生じる恐るべき結果を、見分けることができなかった。サタンは、最初は神に対する忠誠をもっともらしく告白することによって、自分の行為をかくしていた。彼は、神のみ栄え、神の統治の安定、天の全住民の幸福を増進しようとしているのだと主張した。部下の天使たちの心に不満を吹き込みながら、彼は、不満を取り除こうとしているかのようにたくみに

見せかけた。彼が神の統治の秩序と律法の変更を強調したときも、天の調和を保つためにはそうすることが必要であるというふうに見せかけた。

反逆の結果

罪を取り扱われるにあたって、神は義と真実だけをお用いになることができた。サタンは、神がお用いになることのできないもの、すなわち追従と欺瞞とを用いることができた。彼は神のみ言葉を偽り、神の統治の計画を天使たちの前にまちがって伝え、神が天の住民のために律法と規則を定められたのは正しくない、また神が被造物から服従と従順とを要求されるのは、ただ神がご自身を高めるためであると主張した。そこで、すべての世界の住民はもちろん、天の住民の前に、神の統治が正しく、神の律法が完全であることが実証されねばならなかった。サタンは、自分こそ宇宙の幸福を増進しようとしているのだと見せかけていた。この横領者の本性、彼の真の目的を、すべての者にわからせねばならなかった。彼がその邪惡な業によって本性を暴露するまで、時間を与えねばならなかった。

サタンは、彼自身が天に引き起こした不和を、神の律法と統治のせいにした。すべての惡は、神の政治の結果であると彼は断言した。彼は、神の法令を改正するのが自分の目的であると主張した。そこで彼に、自分の主張の内容を証明させ、彼がもくろんでいる神の律法の変更の結果がどうなるかを示さる必要があった。彼自身の行為が彼を罪に定めるのでなければならなかった。サタンは初めから、自分は反逆しているのではないと主張し

ていた。全宇宙はこの欺瞞者の仮面がはがれるのを見なければならぬのであった。

サタンをこれ以上天にとどめておくべきではないと決定されたときでさえ、無限の知恵にいます神は、サタンを滅ぼされなかった。ただ愛の奉仕だけが神に受け入れられるのであるから、神に対する被造物の忠誠は、神の公義と慈愛とに対する確信に基づかなければならない。天と他世界の住民たちは、まだ罪の本性とその結果を理解する用意ができていなかったので、サタンを滅ぼしてしまったら、神の正義とあわれみとを認めることができなかったであろう。もしサタンの存在がたちまち抹殺されてしまったら、彼らは愛よりもむしろ恐怖から神に仕えたであろう。欺瞞者の感化を完全に滅ぼすことも、反逆の精神を根絶することもできなかったであろう。悪は十分に成熟させねばならなかった。永遠にわたる全宇宙の幸福のために、サタンの原則を十分に發揮させてみる必要があった。それは、すべての被造物が、神の統治に対するサタンの非難の真相を知り、神の公義とあわれみ、また神の律法の不変性が、永遠に疑問の余地なきものとなるためであった。

サタンの反逆は、きたるべきすべての時代にわたって、全宇宙にとって一つの教訓、すなわち罪の本性とその恐ろしい結果についての永久的なあかしとなるのであった。サタンの支配がもたらすもの、人と天使たちに及ぼすその影響は、神の権威を無視することがどんな結果になるかを示すのであった。それはまた、神のお造りになったすべての被造物の幸福は、神の統治及びその律法の存在と切っても切れない関係にあるということを証明するのであった。このようにして、この恐るべき反逆の実験の歴史は、すべての聖なる知者たちにとっての永久的な保障となり、彼らが不法の性質についてだまされることがないようにし、彼らが罪を犯してその刑罰を受けるようなことがないようにするのであった。

天からの追放と地上での反逆

天における争闘が終わるそのまぎわまで、この横領者サタンは、自分が正しいと主張し続けた。この反逆の指導者は、すべての共鳴者たちとともに幸福な住み家から追放されなければならないことが布告されたとき、大胆にも創造主の律法に対する軽べつを口に出した。彼は、天使たちは支配される必要はなく、自分自身の意志に従うべきで、この意志こそ、いつでも彼らを正しく導くものであるという主張をくり返した。彼は、神の律法は彼らの自由を束縛するものであると言って攻撃し、このような律法を廃止することが自分の目的である、天の万軍はこの束縛から解放されて、もっと高貴なものとすばらしい身分になるのだと断言した。

サタンとその軍勢は、口をそろえて、自分たちの反逆のとがをすべてキリストのせいにし、もし自分たちが譴責されなかったら反逆はしなかったのだと声明した。このようにして反逆のかしらサタンとそのすべての共鳴者たちは、神の統治を倒そうとむだな努力をし、しかも、自分たちは圧制的な権力の、罪のない犠牲者であると言いつ張って、かたくなに、大胆に不服従を続けたため、ついに天から追放された。

天で反逆を起こしたのと同じ精神が、今もなお地上で反逆を起こさせている。サタンは天使たちに対して用いたのと同じ政策を、人類に対して用いてきた。彼の精神は、今、不従順の子らを支配している。サタンと同じように、彼らは神の律法の拘束を打破しようとし、律法に違反することによって人々に自由を約束する。罪に対する譴責は、依然として憎悪と抵抗の精神を呼び起こす。神の警告の言葉が良心に訴えられると、サタンは、人々に自分は正しいのだと思わせ、彼らの罪の行為に他人の共鳴を求めさせる。彼らは自分の誤りを直さないで、か

えって譴責者が問題の唯一の原因でもあるかのように、その譴責者に対して憤慨する。これが義人アベルの時代から今日に至るまで、罪をあえて責める者に対して示されてきた精神である。

サタンは、天において行なったように、神のご品性をまちがって伝えることによって、神を苛酷で圧制的なおかたであると思わせ、人類を罪にさそった。そしてそれが成功すると、サタンは、神の不当な束縛が、彼自身の反逆を引き起こしたように、人類の墮落を引き起こしたのだと宣言した。

しかし永遠なる神は、ご自分の品性について自らこう宣言しておられる。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず」(出エジプト記三四ノ六、七)。

神は、サタンを天から追放することによって、ご自分の公義を宣言し、み座の栄えを保たれた。しかし、人類がこの背信的な精神の欺瞞に負けて罪を犯したとき、神は墮落した人類のためにご自分の独り子を死なせることによって、神の愛の証拠をお与えになった。この贖罪のうちに、神のご品性があらわされている。十字架という力強い証拠は、ルシファーが選んだ罪の道は決して神の統治の責任ではないことを、全宇宙に証明している。

キリストに対するサタンの挑戦

救い主の地上でのご生涯の間、キリスト対サタンの戦いにおいて、この大欺瞞者の品性が暴露された。世の救い主に対するサタンの残酷な戦いほど、サタンに対する天使たちと忠実な全宇宙との同情を失わせるのに効果の

あったものはなかった。キリストに対して屈服を要求したあの大胆な冒瀆、キリストを山の頂きと宮の頂上に連れて行った彼の僭越な大胆さ、目がくらむような高い所から身を投げるようキリストにすすめることによって暴露された悪意ある計画、あちらからこちらへとキリストを追い回した絶えざる敵意、祭司や民たちの心をあおりたててキリストの愛を拒否させ、ついには「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と叫ばせたことなど——こつしたすべてのことが全宇宙を驚かせ、憤慨させた。

世の人々をしてキリストを拒むようにさせたのは、サタンであった。悪の君はイエスを滅ぼすために、彼のあらゆる力と悪知恵を傾けた。というのは彼は、救い主のあわれみと愛、同情とやさしさが、神のご品性を世の人にあらわしているのを見たからであつた。サタンは神のみ子が口にされる一つ一つの主張と論争し、人間を手先に使つて救い主の生涯を苦しみと悲しみで満たした。イエスの働きを妨げようとして彼が用いた詭弁と虚偽、不従順の子らによつてあらわされた憎悪、比類のない善良な一生を送られた神のみ子に対するサタンの残忍な非難、こつしたことはすべて根深い報復の念から出たのであつた。閉じ込められていたしつと、うらみ、憎悪、ふくしゅうの炎は、神のみ子に対してカルバリーで爆発し、一方全天は恐怖のうちに沈黙してこの光景を見つめた。

大いなる犠牲が完結されたとき、キリストは昇天されたが、彼は「父よ、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」との懇願をささげるまでは、天使たちの賛美を受けようとされなかつた（ヨハネ一七ノ二四）。そのとき天の父のみ座から、言い表わしようのない愛と力とをもって、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」との答えが与えられた（ヘブル一ノ六）。イエスには少しの汚れもなかった。イエスの屈辱は終わり、その犠牲は完結し、すべての名にまさる名がイエスに与えられた。

今やサタンの不義は言いわけの余地がなくなった。彼は、偽り者、人殺しとしての彼の本性を暴露してしまった。もしサタンが天の住民を支配することを許されたら、自分の権力の下にあった人の子らを支配したのと同じ精神で支配しただろうということが、明らかにになった。彼は神の律法を破ることによって自由と高い身分が得られると主張していたが、その結果は束縛と墮落であることが明らかになった。

贖いの計画の意味

神のご品性とその統治に対するサタンの偽りの攻撃は、その真相をさらけ出した。彼は、神が被造物に服従を要求されるのは、ただ神ご自身を高めるためにすぎないと非難し、創造主はすべての者に自己犠牲を強制しながらご自分は克己も犠牲もしておられないと主張してきた。今や、墮落した罪深い人類の救いのために、宇宙の支配者であられる神が、その愛によってのみなし得られる最大の犠牲をお払いになったことが明らかになった。なぜなら「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られたからである（コリント第二・五ノ一九）。また、ルシファーは栄誉と主権とを望んだために罪の門戸を開いたが、一方キリストは罪を滅ぼすために身をいやすくして死に至るまで従順であられたことが明らかになった。

神は反逆の原則に嫌悪を示しておられた。全天は、サタンが罪に定められたことにも、人類が贖われたことにも、神の公義があらわされたのを見た。ルシファーは、神の律法が不変なものであり、その刑罰は免れることができないものであるならば、これを犯す者はみな永久に創造主の恩恵から除外されると言明していた。彼は、罪

深い人類は贖われる見込みがなく、したがって彼の当然のえじきであると言っていた。ところがキリストの死は、人類のための覆すことのできない証拠であった。律法の刑罰は、神と等しいおかたであられるキリストに負わされた。そして人は、自由にキリストの義を受け入れることができ、謙遜と悔い改めの生活を送ることによって、神のみ子が勝利されたように、サタンの力に勝利することができるのであった。このように、神は正しいおかたであって、しかも、イエスを信じるすべての者を義とされるおかたなのである。

しかし、キリストが地上にくだって苦難と死を受けられたのは、ただ人類の贖いを成し遂げるためだけではない。キリストは「律法を大いなるものとし」（英語訳）これを「光栄あるものとする」ために来られたのである。この世界の住民が律法を正しく認識するようにするだけでなく、神の律法が不変なものであることを、宇宙の全世界に対して証明するためであった。律法の要求が廃止できるものであったら、神のみ子は罪を贖うためにご自分の生命をささげられる必要はなかったのである。キリストの死は、律法が不変であることを証明している。罪人を救うために、父とみ子が限らない愛に迫られて払われた犠牲——この贖いの計画以外に方法はなかった——は、公義とあわれみが神の律法と統治の基礎であることを全宇宙の前に証明している。

罪の根絶

審判が最終的に執行されるとき、罪の理由は存在しないことが明らかになる。全地の審判者が、サタンに向かって「あなたはなぜわたしにそむき、わたしの国の民を奪ったのか」と聞きただされるとき、悪の創始者である

サタンはなんの言いわけもできない。どの口も閉じられ、反逆者の全軍は言葉もないのである。

カルバリーの十字架は、律法が不変なものであることを宣言しているとともに、罪の価は死であることを宇宙に宣言している。「すべてが終わった」との救い主の臨終の叫びによって、サタンに対するとむらいの鐘が鳴らされた。長い間継続されてきた犬争闘はここに決定し、悪の最終的な根絶が確実となった。神のみ子は、「死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼすため、自ら墓の門をくぐられた（ヘブル二ノ一四）。ルシファーは自分が高い地位にのほりたいとの望みから、「わたしは天にのほり、わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう」と言ったのであったが、神はこう宣言しておられる。「わたしは……あなたを地の上の灰とした。……あなたは……永遠にうせはてる。」「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」（イザヤ書一四ノ一三、一四、エゼキエル書二八ノ一八、一九、マラキ書四ノ一）。

全宇宙は、罪の性質とその結果について証人となるであろう。罪を徹底的に根絶することは、世の初めだったら天使を恐れさせ、神の栄えを汚したであろうが、いまでは、神のみこころを行なうことを喜び、心のうちに神のおきてをもっている宇宙の全住民の前に、神の愛を立証し、そのみ栄えを確立するものとなる。もはや悪は再び現われてこない。「患難かさねて起ころじ」と聖書には言われている（ナホム書一ノ九文語訳）。サタンが束縛のくびきであると非難してきた神の律法は、自由の律法として尊ばれる。試練を通り越してきた被造物は、はかりしれない愛と限りない知恵のおかたとしてそのご品性が自分たちの前に十分にあらわされた神に対し、忠誠をひるがえすようなことはもはや二度となないのである。

第三〇章

悪魔と人類の戦い

サタンと人間との間の敵意

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」（創世記三ノ一五）。人類の墮落後、サタンに対して下された神の宣告は、終末に至るまでの各時代にわたる預言でもあった。そしてそれは、地上に生存するすべての人類が参加する大争闘を予表していた。

神は、「わたしは恨み（敵意——英語訳）をおく」と宣言された。この恨みは、人間が生まれながらに持っているものではない。人間は、神の律法を犯したときに、その性質は邪悪となり、サタンに敵対するのではなく、協調するようになった。罪人と罪の張本人との間には、当然、なんの恨み（敵意）もない。両方とも、背信によっ

て、邪悪になった。背信者は、他の人々を自分の模範に従うよう勧誘して、同情と支持を得るまでは安んじない。こういうわけで、墮落した天使たちと悪人たちとは、絶望的なつながりで結ばれた。もしも神が特別に介入されなかったならば、サタンと人間は、天に対抗して同盟を結んだことであろう。そして、人類家族全体は、サタンに恨みをいだくのではなくて、彼と結束して神に反抗したことであろう。

サタンは、天使たちを反逆させたように、人間を罪に誘惑し、こうして、天に対する彼の戦いにおける協力を得ようとした。キリストを憎むことに関しては、サタンと墮落した天使たちとの間に意見の相違はなかった。その他のあらゆる点に関しては、一致がなかったが、宇宙の支配者の権威に反対することについては、固く結束していた。しかし、サタンは、彼と女とのあいだ、彼のすえと女のすえとの間に恨みが存在するという宣言を聞いたとき、人間の性質を墮落させようとする彼の努力が阻止されることを知った。また、人間はなんらかの方法によって、彼の力に抵抗することができるようになることを知った。

人類が、キリストを通して、神の愛とあわれみの対象となっているために、人類に対するサタンの敵意が燃え上がっている。彼は、人類を贖おうとする神の計画を妨害しようとする望み、神のみ手のわざを傷つけ汚すことによって、神のみ栄えを汚そうと望んでいる。彼は、天を悲しませ、地を苦悩と荒廃で満たそうと望んでいるのである。そして彼は、こうした害悪はみな、神が人間を創造したために起こったと指摘する。

人間のうちに、サタンに対する敵意を起こさせるのは、キリストが心の中に植え付けられる恵みである。この改変の恵みと更生の力がなければ、人間は引き続きサタンの捕虜であり、常に彼の命令に従うしもべであるしかない。しかし、心の中の新しい原則が、これまで平和であったところに争闘を起こすのである。キリストがお

与えになる力によって、人間は、暴君であり、横領者であるサタンに抵抗する力を得る。だれでも、罪を愛するかわりに罪を憎み、これまで心の中を支配していた欲望に抵抗して、それに打ち勝つならば、それは、全く上からの原則が働いていることを示している。

悪の勢力の猛威

キリストの精神とサタンの精神との間の敵意は、世がイエスをどのように受け入れたかということにおいて、最も著しくあらわされた。イエスが世の富や華麗さ、威光を持って来られなかったためにユダヤ人が彼を拒んだというのではなかった。彼らは、イエスが、こつした外面的利点の不足を補って余りある力を持っておられるのを見た。しかし、キリストの純潔と聖潔が、不信心な人々の彼に対する憎しみを引き起こした。彼の、克己と罪なき献身の生涯は、高慢で肉欲をほしいままにする人々への、絶えざる譴責であった。神のみ子に対する敵意を引き起こしたのは、これであつた。サタンと悪天使たちが悪人たちに加わつた。背信の全勢力が、真理の君を倒そうと謀つたのであつた。

キリストの弟子たちには、彼らの主にあらわされたのと同じ敵意があらわされる。罪のいとわしい性質を認めて、上からの力によって誘惑に抵抗するものはだれでも、必ずサタンとその部下たちの激怒を引き起こす。真理の純潔な原則への憎しみと、その擁護者たちに対する非難と迫害は、罪と罪人が存在するかぎり続くのである。キリストに従う者たちとサタンのしもべたちは、一致することができない。十字架のつまずきは、なくなつては

いない。「いったい、キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」(テモテ第二・三ノ一二)。

サタンの部下たちは、彼の指揮のもとに常に活動して、彼の権威を確立し、神の政府に対抗して彼の王国を建設しようとしている。このために、彼らは、キリストに従う人々を欺き、その忠誠を失わせようと誘惑する。彼らは、指導者サタンと同様に、目的を達成するためには聖書を誤解し曲解する。サタンが神を非難しようとしたように、その手下たちも神の民を中傷しようとする。キリストを死刑に処した精神が、悪人たちを動かして、彼に従う人々を滅ぼそうとする。このことは、すべて、「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に」というあの最初の預言に、予表されている。そして、これは終末まで続くのである。

惰眠をむさぼるキリスト者

サタンは、彼の全軍を動員して、戦闘に全力を傾けている。彼が、大きな抵抗に会わないのは、なぜであろうか。キリストの兵卒たちが、このように眠りをむさぼり、冷淡なのは、なぜであろうか。それは彼らが、キリストとの真のつながりをほとんど持っていないからである。キリストの霊に欠けているからである。彼らの主にとって、罪はいまわしく嫌悪すべきものであったが、彼らにとってはそうではないのである。彼らは、それに対して、キリストのように決然と抵抗をしない。彼らは、罪のはなはだしい邪悪さといまわしさを悟っていない。そして、暗黒の君の性質についても権力についても、盲目である。彼らには、サタンとその働きに対する敵意はな

い。というのは、彼の権力と悪意、また、キリストとその教会に対する彼の広範囲に及ぶ戦闘について、彼らはきわめて無知だからである。多くの人々はここで欺かれる。彼らは、自分たちの敵が、悪天使たちの心を支配する大指揮官であって、よく練った計画と巧妙な活動をもってキリストに対抗して戦い、魂の救いを妨害しようとしていることを知らない。キリスト者と称する人々、いや牧師たちの間でさえ、サタンについて語るのは、講壇から何かのついでに触れるくらいのもので、非常にまれである。彼らは、サタンの絶えざる活動と成功の証拠を見落としている。彼らは、サタンの狡猾さについてたびたび警告を受けるが、それに気をとめない。彼らは、サタンの存在そのものを無視しているように見える。

人々が彼の策略を知らずにいる間に、この油断のない敵は、彼らのあとを絶えずねらっている。彼は、家の中のすべてのところ、われわれの都市のすべての通り、教会の中、議会の中、裁判所の中などに入り込み、人を惑わし、欺き、だまし、至るところで、老若男女を問わずその心と体を破滅させ、家庭を破壊し、憎しみや競争、争闘や暴動や殺人の種をまき散らす。そして、キリスト教界一般は、こうしたことを、あたかも神が定められたもので、当然存在するものであるかのように思っているのである。

サタンは、神の民と世俗とをへだてている壁を取りこわすことによつて、神の民に打ち勝とうと絶えず努めている。古代イスラエル人は、禁じられていた異邦人との交際に足を踏み入れたときに、罪に誘惑された。同じようにして現代のイスラエルも道から外れて行く。「この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである」(コリント第二・四ノ四)。断固としてキリストに従う決心をしていないものは、サタンのしもべである。生まれ変わっていない者の心には、罪を愛する思

いがあり、罪を抱いてその言いわけをする傾向がある。生まれ変わった心には、罪に対する憎しみと、それに対する断固とした抵抗がある。キリスト者が、神を恐れない信仰仰な人々と交わることは、誘惑に身をさらすことである。サタンは姿をかくして、ひそかに彼らの目に、彼の欺瞞のおおいをかける。彼らは、このような連れがいて彼らに害を与えようとしているとは気づかず、品性、言葉、行動において、常に世俗に同化していき、ますます盲目になってしまうのである。

重大な危険

世俗の習慣に従うならば、教会が世俗化する。それは決して世俗をキリストに改宗させることにはならない。罪になれてくると、必然的に、それがいとわしくなくなってくる。サタンのしもべたちと交わるものは、やがて、彼らの主人をも恐れなくなる。宮廷におけるダニエルのように、われわれも、義務を遂行するにあたって試練に会うときには、神の保護を受けることを確信してよいのであるが、しかし自分で誘惑に身をさらすならば、おそかれ早かれ、倒れることになるのである。

サタンはしばしば、われわれが、彼の支配下にある人物だとは思えないような人々を用いて、実に巧妙に働きかける。才能や教育がある人々は、神を恐れる心がなくても、これらの特質がそれを補い、神の恵みに浴させるかのように、賞賛され、栄誉を帰せられている。才能と教養は、それ自体、神の賜物である。しかしそれらが、信心の代用にされるならば、そして、魂を神に近づけるかわりに神から引き離すならば、そのときそれらは

のろいとなり、わなとなるのである。礼儀正しく見えることや洗練された感じを与えることはみな、何かの意味でキリストに関係するものである、と考えている人が多い。しかし、これほど大きなまちがいはない。こうした特質は、真の宗教のために強力な影響を及ぼすものであるから、すべてのキリスト者の品性の美点でなければならぬ。しかし、それらは、神にささげられねばならない。さもないと、それらもまた、悪のための力となってしまふ。一般に不道徳と見なされている行為はあえてしないところの、知的で教養があり、礼儀正しい人が多くいるが、このような人々は、サタンの手にある洗練された器にすぎない。彼の狡猾で欺瞞的な影響と模範は、キリストの働きにとって、無知で教養のない人々よりはるかに危険である。

ソロモンは、熱心な祈りと神への依存によって、世界の驚きと賞賛を引き起こしたところの知恵の持ち主になった。ところが、彼が力の源である神から離れて、自分の力に頼って進んだときに、彼は誘惑のとりことなった。そのとき、この最も賢い王に授けられていた驚くべき能力は、彼を、魂の敵サタンの最も強力な手先としたにすぎなかった。

サタンとの戦い

サタンは、この事実に対して人々の心を盲目にしようと常に努めている。そこでキリスト者は、自分たちの戦いは、「血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦い」であることを、決して忘れてはならない（エペソ六ノ一二）。靈感による次のような警告が、幾世紀

の昔からわれわれの時代にまで鳴りひびいている。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」(ペテロ第一・五ノ八)。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」(エペソ六ノ一)。

われわれの大いなる敵サタンは、アダム時代から今日に至るまで、圧迫と破壊のために力をふるってきた。そして今、彼は、教会に対する最後の戦闘の準備をしている。イエスに従おうとする者はみな、この残忍な敵と戦わねばならない。キリスト者が、模範であられるイエスにならねばならうほど、サタンの攻撃的になることは確実である。神の事業に活発に従事し、悪魔の欺瞞をあばき、人々の前にキリストを紹介しようとする者はみな、パウロと同じあかし——謙遜の限りを尽くし、多くの涙と数々の試練の中であって、主に仕えてきたというあかし——をすることができるのである。

サタンは、最も激烈で狡猾な誘惑をもつてキリストを攻撃したが、そのたびに撃退された。それらの戦いは、われわれのための戦いであつた。そしてそれらの勝利は、われわれにも勝利を得させるのである。キリストは、求めるすべての者に力をお与えになる。だれでも、自分が同意せずサタンに敗北することはない。誘惑者サタンは、人の意志を支配したり、強制して罪を犯させたりすることはできない。彼は、われわれを悩ますことはできないが、汚すことはできない。苦悩を与えることはできても、汚辱することはできないのである。キリストが勝利されたという事実は、彼に従う者たちに、罪とサタンに対して雄々しく戦う勇気を与えるものである。

天使とは何か

天使の實在

目に見える世界と目に見えない世界との関係、神の天使の奉仕、そして悪霊の働きなどは、聖書の中にはつきりと示されており、人類歴史と不可分に織り混ざっている。一般に、悪霊の存在に関しては、信じない傾向が強まっており、他方、「救を受け継ぐべき人々に奉仕する」聖天使たちは、死者の霊であると考えている人が多い（ヘブル一四）。しかし、聖書は、善天使と悪天使は両方とも存在することを教えているばかりでなく、これらは肉体を離れた死者の霊ではないという、疑うことのできない証拠を提示している。

人類が創造される前に、天使は存在していた。それは、地の基がえられた時、「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」とあることからわかる（ヨブ記三八ノ七）。また、人類の墮落後、命の木を守るために天使が送られたが、この時には、まだだれも人間は死んではいなかった。天使は、人間よりは優れた性

質のもので、人は、「ただ少しく天使よりも低く」造られたと、詩篇記者は言っている（詩篇八ノ五英語訳）。

聖書には、天の存在者の数、またその力と栄光が書かれている。また、彼らと神の統治との関係、そして贖罪の働きとの関連についても記されている。「主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはすべての物を統べ治める。」「御座…のまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた」と預言者は言っている。彼らは、王の王の面前にはべる「勇士たち」、「そのみこころを行うしもべたち」、「そのみ言葉の声を聞く」「使たち」である（詩篇一〇三ノ一九―二一、黙示録五ノ一）。預言者ダニエルは、千々、万々の天使たちを見た。使徒パウロは、「無数の天使の祝会」と言った（ダニエル書七ノ一〇参照、ヘブル二ノ一二）。彼らは、神の使者として、「いなずまのひらめきのように速く」行き来する（エゼキエル書一ノ一四）。栄光に輝き、迅速に飛ぶ。救い主の墓に現われた天使の姿は、「いなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であつた」ので、見張りたちは恐ろしさのあまり震えあがつて、「死人のようになった」（マタイ二八ノ三、四）。高慢なアッスリヤ人、セナケリブが、神をののしり、冒瀆したとき、「その夜、主の使が出て、アッスリヤの陣営で十八万五千人を撃ち殺した。」セナケリブの軍隊の「すべての大勇士と将官、軍長ら」が滅ぼされた。「それで王は赤面して自分の国に帰つた」（列王紀下一九ノ三五、歴代志下三二ノ二一）。

神の民を保護するもの

天使たちは、神の子供たちに恵みを与えるために遣わされる。アブラハムには、祝福の約束を伝えるため、ソ

ドムの門には、火の破壊から義人□トを救い出すため、また、荒野で疲労と飢えのために死ぬばかりになっていったエリヤを救うため、敵軍に包囲された小さい町のまわりに火の馬と火の戦車を送ってエリシヤを救うため、異教の王の宮廷で神の知恵を求め、また、ししの穴にえじきとして投げ込まれたダニエルを救うため、ヘ□デの牢獄で死の宣告を受けたペテ□を救うため、ピリピの牢獄の囚人たちを救うため、夜、海上で暴風に会ったパウ□とその仲間を救うため、福音を信じるようにコルネリオの心を開くため、そして、この未知の異邦人に救いの使命を伝えるにペテ□を送るため、——こうしたことのために天使たちは、各時代において、神の民のために奉仕してきたのである。

キリストに従うすべての者に保護天使がつけられている。これら天からの守護者が、悪い者の力から義人を守るのである。このことは、サタン自身も認めて、「ヨブはいたずらに神を恐れましようか。あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか」と言った（ヨブ記一ノ九、一〇）。神がご自分の民を守られる方法について、詩篇記者は、「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」と言っている（詩篇三四ノ七）。救い主は、彼を信じる者たちについて、「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あなたがたに言うが、彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである」と言われた（マタイ一八ノ一〇）。神の子供たちに奉仕することを命じられた天使たちは、常に神のみ前に行くことができるのである。

こうして神の民は、暗黒の君の欺瞞の力と絶え間ない悪意にさらされ、悪のあらゆる勢力と戦うときにも天使たちの絶えざる保護が保証されている。必要がなければ、このような保証は与えられはしない。神がご自分の

子供たちに、恵みと保護の約束をお与えになったということは、当面すべき強力な悪の勢力——無数の、断固たる、疲れを知らぬ勢力であって、その悪意と力について無知であつたり無関心でいては、だれひとり安全ではありえない——があるからである。

サタンの軍勢

悪霊たちは、最初、罪のないものとして創造され、その性質と力と栄光において、今神の使いをしている聖なる存在者たちと同等であつた。しかし、罪のために墮落して、彼らは、神のみ名を汚し人間を破壊させるために団結しているのである。彼らはサタンの反逆に加担し、彼とともに天から追放され、各時代を通じて、彼と協力して神の権威に逆らつて戦つてきた。聖書には、彼らの同盟と政府、種々の階級、その知性と陰険さ、人間の平和と幸福を破壊しようとする悪だくみのことが記されている。

旧約歴史にも、彼らの存在と活動についての言及が時々見られる。しかし、悪霊がその力を最も著しくあらわしたのは、キリストがこの地上におられた時であつた。キリストは、人間を贖うために考え出された計画を実行するために来られた。そしてサタンは、世界の支配権は自分にあるということを断固として主張することに決めた。彼は、パレスチナを除く全地に、偶像礼拝を確立することに成功していた。キリストは、誘惑者の支配に完全には服していない唯一の国に、天の光を人々の上に輝かすために来られた。ここで、二つの対立した勢力が、覇権を争うことになった。イエスは、彼の愛の手を広げて、彼から許しと平和を受けるようと、すべての者を

招かれた。暗黒の軍勢は、自分たちの支配には限度があることを認め、もしキリストの任務が成功するならば、すぐに自分たちの支配は終わることを知った。そこでサタンは、鎖につながれたしのように、ほえたけり、人びとの心にも体にも、猛然と力をふるった。

人間が悪霊につかれるということは、新約聖書の中にはっきりと述べられている。これに悩まされた人々は、ただ単に普通の原因で起きる病気に苦しんでいたのではなかった。キリストは、ご自分が扱っておられる事態を完全に理解し、そこに悪霊が実際に存在し働いていることを認めておられた。

彼らの数と力と凶悪さの顕著な実例、そして同時にキリストの力と恵みの顕著な実例は、ガダラでの、悪霊につかれた人々のいやしに関する聖書の記録に示されている。悪霊につかれたこれらの哀れな人々は、あらゆる鎖を絶ち切って、もがき苦しみ、あわをふいて、怒り狂い、大声で叫びながら、自分たちの身を傷つけ、近づいてくる人にはだれにでも飛びかかりそうであった。彼らの傷ついた血みどろの体と錯乱した精神は、暗黒の君が喜ぶ光景であった。彼らにとりついていた悪霊のひとりには、「レギオンと言います。大ぜいなのですから」と言った（マルコ五ノ九）。ローマの軍隊では、レギオンというのは、三千から五千の人員で構成されていた。サタンの軍勢もまた、隊を組んで進軍し、これらの悪霊の属していた一隊は、レギオンほどの大きなものであった。

悪霊につかれた者

イエスのご命令によって、悪霊は今までとりついていた人々から離れ、彼らは平静と知性と温順さを取りもと

して、救い主の足もとに静かに座っていた。しかし、悪霊たちは、豚の一群を海へと駆け下らせることを許された。そして、ガダラの住民たちは、キリストがお与えになった祝福よりこの損失のほうが重大だったので、天来の医師に退去することを願った。これは、サタンが引き起こそうと企てたことであつた。彼らの損失をイエスのせいにして、人々に利己的恐怖心を起こさせ、彼の言葉を聞かせまいとしたのである。サタンは、損失や不幸や苦難を、自分と自分の手下たちで引き起こしておきながら、その当然の責めを負わず、常にそれをキリスト者のせいにして非難するのである。

しかし、キリストの目的は妨害されなかつた。彼は、利益のためにこれらの汚れた獣を飼育していたユダヤ人達への譴責として、悪霊が豚の群れを滅ぼすことを許された。もしキリストが、悪霊を抑制されなかつたならば、彼らは、豚ばかりでなく、飼い主たちや持ち主たちをも海に投げこんだことであろう。飼い主たちと持ち主たちとがともに保護されたことは、キリストの力が彼らの救いのために、恵みのうちに働いたからにほかならなかつた。さらに、この事件は、人間と動物の両方に対するサタンの残酷な力を弟子たちに目撃させるために、起こることを許されたのであつた。救い主は、彼の弟子たちが、彼らの当面しなければならぬ敵をよく知って、その悪だくみに欺かれたり、敗北したりすることがないようにと望まれた。それとともに、その地方の人々が、サタンの束縛を砕いてその捕虜を解放なさるキリストの力を見ることが、彼のみこころであつた。そして、イエスご自身は去られたけれども、驚くべき救いにあづかつた人々に残り、彼らに恵みをほどこされたイエスのあわれみを宣べ伝えたのである。

同様の例が、ほかに聖書に記されている。スロ・フェニキヤの女の娘は、悪霊につかれて非常に苦しんでい

だが、イエスはみ言葉によって悪霊を追いつかれた（マルコ七ノ二六―三〇参照）。「悪霊につかれた盲人のおし」（マタイ二ノ一二）。たびたび「火の中、水の中に投げ入れて、殺そうと」するおしの霊につかれた子供（マルコ九ノ一七―二七）。安息日にカペナウムの会堂の静けさを破った「汚れた悪霊につかれた人」（ルカ四ノ三三―三六）。これらの人はみな、あわれみ深い救い主にいやされたのである。ほとんどすべての場合、キリストは、一個の知性をもった実在としての悪霊に語りかけて、とりついている人から出て、今後苦しめないようにと命じられたのである。カペナウムで礼拝していた人々は、彼の偉大な力を見て、「驚いて、互に語り合って言った、『これは、いったい、なんという言葉だろう。権威と力をもつて汚れた霊に命じられると、彼らは出て行くのだ』（ルカ四ノ三六）。

普通、悪霊につかれた者は非常に苦しむものとされているが、その例外もあった。超自然の力を得るために、サタンの影響力を歓迎するものがある。このような人々には、悪霊との戦いはもちろんない。この種の人々に、占いの霊につかれた者たち、すなわち、魔術師シモンや魔術師エルマ、また、ピリピでパウロとシラスのあとを追ってきた娘などがある。

サタンの巧妙な策略

聖書に直接的な多数の証拠があるにもかかわらず、悪魔と悪天使たちの存在と働きを否定する人々ほど、悪霊の力に動かされる大きな危険の中にある人達はいない。われわれが彼らの策略に無知であるかぎり、彼らは、

われわれには想像もつかないほど優位にある。多くの者は、彼らの暗示に耳をかし、それでいて、自分自身の知恵の命じるところに従っていると考え。このために、サタンは、人々を欺き滅ぼすために全力で働く世の終末が近づくにつれて、サタンは存在しないという考えを至る所に広めるのである。自分と自分のやりかたを隠すのが、サタンの手である。

この大欺瞞者が最も恐れていることは、われわれが彼の策略を見破ることである。彼は自分の正体と目的を巧みに隠すために、嘲笑、あるいは軽べつぐらいはよいが、それ以上の激しい感情を人々に抱かせないように、自分を描写させている。彼は自分が、こっけいな、あるいは胸の悪くなるようなもの、ぶかっこうな半獣人として描かれることを好む。またサタンは、知力と世知にたけていると自認する人々が彼の名を嘲笑し冷やかすのを聞いて、喜ぶのである。

「そんなものが実際にいるのか」という疑問が広く発せられるのは、サタンが非常に巧みな仮面をかぶってきたためである。また、宗教界においても、聖書の明白な証言に矛盾する説が一般に受け入れられていることは、彼の成功を証拠だてている。そして神のみ言葉が、彼の悪意に満ちた働きの例を多数挙げて、彼のかくれた力を暴露し、その攻撃に対してわれわれに警戒させているのは、サタンの力を知らない者の心は実にたやすくサタンに支配されるからである。

もしわれわれが、サタン以上の贖い主の力のうちに、かくれがと救いを得ていないならば、サタンとその軍勢の力と悪意とに恐怖を抱くのは当然であろう。われわれは、錠をかけて家の戸締まりをよくし、生命と財産を悪人の手から守ろうと気をつける。しかしわれわれは、常にわれわれに近づこうとしている悪天使のことは、ほと

んど考えない。われわれはその攻撃に対して、自分では防御する方法がないのである。もし許されるならば、彼らはわれわれの心を狂わせ、体に変調を起こさせて苦しめ、財産を破壊し生命を奪うのである。彼らの唯一の喜びは、悲惨と破壊である。神の要求を拒み、サタンの誘惑に負ける者の状態は、実に恐ろしく、神もついには彼らを、悪霊の支配にわたされるようになるのである。しかし、キリストに従う者は、常に彼の保護のもとにあつて安全である。力強い天使が天から送られて彼らを守る。悪人たちは、神が神の民の回りに配置された警護を破ることができないのである。

第三二章

悪魔のわな

サタンの妨害

約六千年近くも続けられてきたキリストとサタンとの間の大争闘は、まもなく終わる。そこでサタンは、キリストが人間のためにしておられる働きを妨げる努力を倍加し、魂を彼のわなの中に捕えておこうとする。救い主の仲保のお働きが終わり、もはや罪のための犠牲がなくなってしまうその時まで、人々を悔い改めさせず、暗黒の中に閉じこめておくことが、サタンのめざすところである。

サタンの権力に抵抗しようとする特別の努力もなく、教会と世の中に無関心の状態がみなぎっていれば、サタンは別に気にとめないのである。というのは、彼は自分がその意のままに捕えている者たちを失う危険がないからである。ところが、人の心が永遠の事柄に向けられ、「わたしは、救われるために、何をすべきでしょうか」と魂が叫ぶとき、サタンはキリストの力に抵抗し、聖霊の感化を妨害しようと動き始める。

あるとき、神の天使たちが主のみ前に立ったとき、サタンもその中に現われたと聖書に記されている（ヨブ記一ノ六参照）。それは、永遠の神のみ前にひざまずくためではなく、義人に対する悪意あるたくらみを進めるためであった。同じ目的をもってサタンは、人々が神の礼拝のために集まるときにその場に現われるのである。目にこそ見えないが、サタンは礼拝者たちの心を支配するため、いっしょけんめいに働いている。サタンは、老練な將軍のように、前もって計画をたてる。神の使命者が聖書を調べているのを見ると、どのような使命が人々に語られるかに注意する。そして、その点について彼が欺いている人々に、その使命を聞かせないように、あらゆる巧妙な策略を用いて、事情を支配しようとする。ぜひともその警告を聞かねばならない人々が、何かの重要な商用のために出向かなければならないようにしたり、あるいは、何かほかの方法で、いのちからのちに至らせるかおりとなるみ言葉を聞くのを妨げるのである。

またサタンは、神のしもべたちが人々の霊的暗黒に心を悩ましているのを見る。そして彼らが、冷淡、不注意、怠惰などの魔力から逃れられるように、神の恵みと力とを熱心に祈り求めているのを聞く。すると彼は、熱心さをもりかえして策動する。すなわち、人々に食欲をほしいままにさせたり、または、何かほかのことで放縱な生活をさせたりして知覚をまひさせ、彼らが最も学ばなければならないことを聞かせないようにしてしまうのである。

兄弟を訴える者

人々に祈りを怠るようにさせ、聖書の研究もなおざりにするようにさせておけば、だれでも彼の攻撃に打ち負

かされてしまうことを、彼はよく知っている。そのため、彼は、あらゆる策略をめぐらして、人心を夢中にさせるものを考案する。神を信じると言いながら、真理の研究を続けないで、自分と意見の合わない人々の人格の欠点とか信仰上の誤りとかを指摘することを自分の義務であるかのように思っている人々が、いつもいるものである。こうした人々は、サタンの右腕ともいうべきである。兄弟を訴える者たちは、決して少なくはない。神が働いておられ、神のしもべたちが真心から神をあがめているとき、彼らも休みなく活動している。彼らは、真理を愛し真理に従っている者の言行を、全くそうでないかのように誤り伝え、どんなに熱心でまじめな、自己犠牲的なキリストのしもべたちをも、欺かれた者であるとか、人を欺く者であるとかいうのである。どんなに誠実で高い行為の動機も、真実を曲げて非難し、未経験な者の心に疑惑の念を起こさせる。彼らは、あらゆる策を用いて、純潔で正しい者を、不潔で欺瞞的な者であると思わせる。

しかし、彼らについてだれも欺かれる必要はない。彼らが、だれの子らであって、だれの模範に従い、だれの業をしているかは、すぐにわかるのである。「あなたがたは、その実によつて彼らを見わけるであらう」(マタイ七ノ一六)。彼らの行為は、毒舌をもって「兄弟らを訴える者」であるサタンの態度と似ている(黙示録一二ノ一〇)。

大欺瞞者サタンは、魂をわなに落ち込ませるために、あらゆる種類の誤りを伝えるように多くの手下をもっている。すなわち、滅びに陥れようとしている人々のそれぞれの好みや能力に適した種々の異端を用意している。サタンは、教会の中に不まじめで悔い改めていない分子を入りこませて、疑惑と不信の念を助長させ、神の働きの進展を見たいと望み自らもともに進歩したいと望む者たちのじゃまをする。神と神のみ言葉に対する真の信仰

はないのに、真理のいくつかの原則に同意し、クリスチャンとして通用している人が多い。こうして彼らは、彼らの誤りを聖書の教理として人々に伝えるのである。

偽教師たち

人が何を信じて、それはさほど重要なことではないという態度は、サタンが最も成功を収めている欺瞞の一つである。人が真理を愛して、受け入れるとき、真理はそれを受け入れた人の魂を清めることをサタンは知っている。そのために、彼は絶えず偽教理、作り話、別の福音などを真理の代わりにしようとしている。神のしもべたちは、最初から偽りの教師たちと戦ってきた。それは彼らが悪徳の人々であるというだけではなく、魂を危険に陥れる偽りを説く人々であったからである。エリヤ、エレミヤ、パウロなどは、断固としてはばかるところなく、神のみ言葉から人々を引き離す者たちと戦ったのである。これら真理の擁護者たちは、厳正な信仰を軽視する自由主義に賛成しなかった。

聖書についてあいまいな、変わった解釈をしたり、またキリスト教界において、宗教的信仰に関して多くの矛盾した説があったりすることは、人心を混乱させて真理を見分けられないようにするための大敵サタンのしわざである。キリスト教会内にある不和、分裂は、自分の氣に入った理論を裏づけるために聖書を歪曲するという一般的な風習のせいであることが非常に多い。神のみこころを知ろうとして謙遜に注意深く聖書を研究しないで、何か変わった独創的なものを発見しようとする者が多い。

誤った教理や非キリスト教的習慣を支持するために、聖書の前後関係を考えずに一節の半分だけを引き離して引用する人々がいるが、その残りの半分を見れば、全く反対の意味になることもある。彼らは、自分の肉の欲をほしいままにするために、へびのような狡猾さで、曲解された無関係ないくつかの聖句のかげに、自分の立場を守るのである。このようにして、神のみ言葉を故意に曲解する者が多い他方、聖書の型や象徴について想像をたくましくする者もある。そのような人々は、聖書が聖書自らの解釈をしているその証言も無視して、思いのままに解釈を下し、自分たちの臆測を聖書の教えであるかのように説くのである。

聖書を学ぶ精神

聖書の研究は、祈りの精神に満たされ、謙遜に教えを聞く精神で行なわれないならば、難解な聖句はもちろん、やさしいところでも、その意味を取り違えて曲解してしまふ。法王教の指導者たちは、彼らの目的に最も役立つ聖句を選び、彼ら自身に都合のよい解釈をして人々に教える。一方彼らは、人々が聖書を研究して、尊い真理を自分で理解する特権をゆるさない。しかし、聖書全体は、書かれているそのまま人々に与えられなければならない聖書の教えが、このようにはなはだしく曲解されるくらいならば、聖書の教えを全然人々に与えないほうがましである。

聖書は、創造主のみこころを知りたいと願うすべての者を導くために与えられたものである。神は人々に預言の確かな言葉をお与えになった。天使だけでなく、キリストご自身さえおいでになって、ダニエルとヨハネに、

やがて起こるべき事柄についてお知らせになった。われわれの救いに関する重要な事柄は、神秘につつまれたままにしておかれなかった。それは、まじめに真理を求める者を惑わせ誤らせるようには示されていない。預言者ハバククは、神の言われたことを次のように記した。「この幻を書き、これを…明らかにし、走りながらも、これを読みうるようにせよ」(ハバクク書二ノ二)。祈りの精神をもって聖書を学ぶすべての者に、神のみ言葉は明らかに示され、真に誠実な者はだれでも、真理の光にすることができ。『光は正しい人のために現れ…』(詩篇九七ノ一一)。教会員が隠れた宝を捜すように真理を熱心に探究しないならば、どの教会も聖潔に進むことはできない。

人類の敵がその目的を達成するために着々と働き続けているのに、人々は「寛大」という叫びによって、サタンの策略に目をくらまされている。サタンが、聖書に代えて人間の思想を置くことに成功するとき、神の律法は廃され、教会は、自由であることを主張しながら、罪に縛られているのである。

科学と啓示

多くの者にとって、科学の研究はわざわざいとなっている。神は、科学と技術方面の種々な発見によって世界に輝かしい光が注がれるのをお許しになった。しかし、どんなに偉大な頭脳の持ち主であっても、その研究が神のみ言葉によって導かれないならば、科学と啓示の関係を探究するのに困難を感じるのである。

物質的および霊的な面における人間の知識は、部分的で、不完全なものである。だから多くの者は、その科学

的見解を、聖書に述べられていることと一致させることができないのである。単なる学説や推測を科学的事実として受け入れる者が多い。そして彼らは、神のみ言葉が、いわゆる「偽りの『知識』」によってためされなければならないと考える(テモテ第一・六ノ二〇)。創造主とそのみ業は、彼らの理解を越えたものである。ところが彼らはそれを自然の法則によって説明できないために、聖書の歴史は信頼できないと考える。旧新約聖書の記録が信頼に値するものであることを疑う者は、さらに一歩進んで、神の存在に関して疑惑を抱き、無限の力を自然界のせいにしてしまう。彼らは錨を捨ててしまった以上、無信仰という暗礁にのり上げてしまうよりほかはないのである。

このようにして、信仰から離れ、悪魔に欺かれる者が多い人間は、その創造主よりも賢くなろうと努めてきた。人間の哲学は、永遠に啓示されることのない神秘を探り出して説明しようと試みてきた。もし人々が、神がご自身とその御目的に関して人間にあらわされたことだけを探り、理解するならば、彼らは主の栄光と威光と権力とを知るとともに、自分自身の小さなことを認め、自分たちと自分たちの子らのために啓示されたことに満足するであらう。

神が啓示しておられないことや、われわれが理解するよう計画してはおられないことを、人が探り、推測をたぐましくするようにすることは、サタンの欺瞞中の傑作である。ルシファーが天上の地位を失ったのも、こうしたことからであった。彼は、神の御目的の秘密がすべて自分に示されなかったことに不満を抱き、自分に与えられていた高い地位の職務に関して示されたことなどは全く顧みなかった。彼は、部下の天使たちにも同じ不満の念を抱かせて、墮落させてしまった。今度は、人の心にも同じ精神を吹き込んで、神の直接のご命令を無視させ

ようとするのである。

真理の偽物

聖書の明らかで率直な真理を受け入れたくない人たちは、自分の良心を鎮静するのに都合のよい作り話を絶えず求めるようになる。霊的でなく、へりくだって自己を犠牲にする必要のないような教理であればあるだけ、ますます一般からの受けはよいのである。こうした人たちは、自分の肉欲をほしいままにするために、その知的能力を低下させているのである。彼らは自分が知者だと思いあがって、砕けた心をもって聖書を探ることをせず、また神の導きを熱心に祈り求めもしないので、欺瞞に対する防備は何もない。サタンは、彼らの心の欲求にいつでも応じ、真理の代わりに偽物をつかませる。法王制が人心を支配した秘けつは、ここにあった。そして、真理には苦難の十字架があるからといってこれを拒否することによって、新教徒もまた同じ道を踏んでいる。世俗と歩調を合わせるために、便宜的な都合主義をとって神のみ言葉の研究を怠る者はみな、宗教的真理の代わりにいまわしい異端を信じてしまうのである。故意に真理を拒む者は、ついには、あらゆる種類の誤りを受け入れるようになる。ある種の欺瞞は嫌悪する人が、他の欺瞞は簡単に受け入れるのである。使徒パウロは、「自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれな」い種類の人々について次のように言っている。「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである」(テサロニケ第二・二ノ一〇―一二)。このような警告は、われわれがどのような真理を受け入れるかを

十分注意する必要があることを示している。

大欺瞞者サタンの働きの中で最も成功しているものの一つは、心靈術(降神術)の欺瞞的な教えと偽りの奇跡である。彼は、光の天使を装って、人が全く予期していないところに網を張っている。もし人々が、神の書を理解できるようにと熱心に祈りながらみ言葉を研究しさえすれば、彼らは暗黒の中に放置されて偽りの教理を信じるようなことはない。しかし真理を拒否するとき、彼らは惑わしのえじきになるのである。

キリストの神性

もう一つの危険な誤りは、キリストの神性を否定する教理である。すなわち、キリストはこの世においでになる前には存在されなかったという主張である。この説は、聖書を信じると表明する多くの者によって信じられている。しかしこれは、救い主が、ご自分と天父との関係について、またご自分の神性と先在について、明言されたことと全く相反するものである。これは、聖書を不当に曲解しなければ受け入れられない説である。これは、贖いの業についての人間の観念を低下させるだけでなく、聖書が神の啓示であるという信仰を危くするものである。このことによってこの説はいっそう危険なものとなり、これに対抗することはますます困難になる。キリストの神性に関して靈感によって書かれた聖書のかかしを拒むならば、その点についていくら議論してもむだである。なぜなら、どんな決定的な議論も、彼らを説得することはできないからである。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきである

から、彼はそれを理解することができない」(コリント第一・二ノ一四)。このような誤った考えを抱いている者は、キリストのご品性とその働き、あるいは人類の贖罪という大計画を、真に理解することはできない。

種々の欺瞞

さらにまた、巧妙で有害な誤りは、サタンとは、個性をもった者として存在しているのではなくて、聖書の中に彼の名が用いられているのは、ただ人間の邪悪な思いや欲望をあらわしたものにすぎないという説である。

キリストの再臨とは人が死ぬときに来られることであると、一般の講壇から広く説かれているが、これは、キリストが天の雲に乗って来られることから人の心をそらす策略である。「見よ、へやの中にいる」とサタンは長い間言い続けてきた(マタイ二四ノ二三―二六)。そして多くの者が、こうした欺瞞を受け入れて滅びに陥ったのである。

また、この世の知恵は、祈りは無用であると教える。祈りに応答などはないと、科学者たちは主張する。そんなことは、自然の法則に反することであって、奇跡である、そして奇跡などはないというのである。宇宙は一定の法則に支配されていて、神ご自身、そうした法則に反することは何事もなさらないというのである。このようにして、神はご自分の法則に縛られていて、その法則を自由に支配することがおできにならないかのようには言っている。このような教えは、聖書の証言に反している。キリストとその弟子たちによって、奇跡が行なわれなかったであろうか。その同じあわれみ深い救い主が、今日も生きておられて、ご在世のころと同様に信仰の祈りに喜

んで耳を傾けてくださるのである。自然が超自然と協力するのである。われわれがこのようにして求めなければ与えられないものが、信仰の祈りにこたえて、われわれにさづけられることが、神のご計画の一部である。

キリスト教会の中にある誤った教理や奇怪な考え方は数えきれないほどである。神のみ言葉によって建てられた道標の一つを動かすことによって生じる有害な結果は、計り知れないものがある。あえてこうしたことをする人々の中で、真理を一つだけ拒むにとどまるという例はほとんどない。大多数の者は真理の原則を次々に覆していき、ついには、事実上無神論者になってしまうのである。

懷疑主義をもたらすもの

俗受けのする神学の誤りが、多くの者を懷疑論者にしてしまった。これらの人々は、そのようなことがなければ、聖書を信じていた人々なのである。人は自分の抱いている正義感、慈悲、博愛の精神などを踏みにじるような教理は、受け入れることができない。しかも、それが聖書の教えであると説かれるために、聖書を神のみ言葉として受け入れようとしないのである。

これこそ、サタンが達成しようとしている目的である。サタンは何よりも、神と神のみ言葉に対する信頼感を失わせようと望んでいる。サタンは懷疑主義者の大軍の首領であって、人々を欺いて自分の味方になろうと全力を尽くしている。疑うことが流行になっている。聖書が、その著者であられる神と同様に、罪を責め、人々を罪に定めるので、多くの者は、神のみ言葉を不信の念をもって見る。聖書の要求に服従しようとしなない者は、

その権威を覆そうとはかる。彼らが聖書を読み、説教を聞くのは、聖書や説教の中に欠点を見つけようとするためである。自らを義とするために、または、果たすべき義務を怠った言いわけのために、無神論者になる者も少なくない。高慢と怠慢から懐疑的になる者もいる。彼らは安逸を好むために、努力と克己を要する何か価値のある働きを達成することによって抜kindでようとはしない。そこで、聖書を批評することによって、すぐれた知恵の持ち主であるという名声を得たいと思うのである。天からの知恵によって光が与えられなければ、限りある人間にはわからないことが多い。そこに彼らは、批評の機会を見いだす。不信、懐疑、無神論の側に立つことが、何か名誉でもあるかのように思っている者が多い。彼らは、いかにも率直をよそおっているが、実は、自負心高慢心に駆られているのである。他の人の頭を悩ますような聖句を見いだすことに興味を感じている者が多い。初めはただの議論好きから、反対の側に立って批評したり理屈を言ったりする者もある。彼らはこのようにして捕獲者の網にかかってしまうことを知らない。彼らは、すでに公然と不信を表明した以上、あくまでもその立場を守らなければならないと考える。こうして、彼らは不信仰な者と一致し、自分から天国の門を閉ざしてしまうのである。

十分な証拠

神は、み言葉の中に、み言葉が神からのものであるという証拠を十分にお与えになった。われわれの贖いに関する大真理は、はっきりと示されている。心から求めるすべての者に約束されている聖霊の助けによって、だれ

でも自分で理解することができるのである。神は、人が信仰をおくことのできる固い基礎をお与えになっている。それにしても、限りある人間の知力は、無限の神のご計画と御目的とを十分に悟ることはできない。われわれは、神の深いことを窮め尽くすことはできない。神がご自身の威光をおおっておられる幕を、僭越にも引き上げようとしてはならない。使徒はこう言っている。「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は、そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ一ノ三三)。われわれは、限らない愛とあわれみが無限の力と結合していることを認識できる程度には、神が人間を救われる方法や神の行動の動機について理解することができ。天の父は、すべてのことを知恵と義とによって行なわれるのであるから、われわれは、不満に思ったり、不信を抱いたりしないで、うやうやしく服従すべきである。神は、われわれが知ってよいことだったら、何でもご自分の目的を示してくださいさるであらう。それ以上のことは、全能のみ手と、愛に満ちたみこころにおまかせしなければならぬ。

疑いの口実

神は、われわれが信ずるに足る十分な証拠をお与えになっているが、一方また不信に対する口実を全部取り除かれるわけではない。疑おうと思うなら、その余地はいくらでもある。そして、すべての反論が一掃されて疑う余地がなくなるまで神の言葉を受け入れず従わないというなら、決して光にくることはできないのである。

神への不信は、新生を経験していない神に逆らう心の当然の結果である。しかし、信仰は、聖霊によって与

えられるものであり、それをたいせつに育てるときにのみ栄えるものである。だれも固い決意をもって努力するの でなければ、強い信仰を持つことはできない。不信は、助長すれば深まっていく。そして人々が、彼らの信仰を支えるために神がお与えになった証拠に思いをめぐらさずに、疑惑を抱き、とがめだてをするならば、彼らの疑惑はますます深まっていくのである。

神の約束を疑い、神の恵みの確証を信じない者は、神のみ名を汚しているのである。そして彼らは、人々をキリストに引きつけるのではなくて、人々をキリストから離反させがちである。彼らは、広々と黒い枝を広げて、他の植物の上に射す日光をさえぎり、その冷たい影の中で彼らをしておれて枯死させるところの、実を結ばぬ木のよう なものである。このような人々の一生の働きは、彼らに不利な証言を立て続けることであらう。彼らは、必ず収穫をもたらすところの、疑惑と懷疑の種をまいているのである。

疑惑からの解放

疑惑から解放されることを心から願う者の取るべき道は、一つしかない。わからないことに反問してつぶやくのをやめて、すでに自分たちの上に輝いている光に注意を向けるならば、さらに大きな光に浴することができ る。すでに明らかにされた義務をすべて行なうがよい。そうすれば、現在疑問に思っていることも理解し、行なうことが できるようになる。

サタンは、全く真理としか思えないような偽物を示すことによって、真理が要求する克己と犠牲を好まず、欺

かれることをいとわない者たちを、欺くことができる。ところが、どんな犠牲を払っても真理を知りたいと心から願っている者を、たとえ一人といえどもサタンは自己の権力下におくことはできない。キリストは、真理であり、「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」と言われている光であられる(ヨハネ一ノ九)。真理のみ霊が、人をすべての真理に導くためにつかわされたのである。そして、神のみ子の權威によって次のように宣言されている。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。」「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、…この教えが…わかるであろう」(マタイ七ノ七、ヨハネ七ノ一七)。

キリストに従う者たちは、サタンとサタンの部下たちが、彼らに対して何を企てているかをほとんど知っていない。しかし、天にいます神は、これらの策略を覆して、ご自分の深遠なご計画を完成される。神は、ご自分の民が火のような試練に会うことをお許しになるが、それは、彼らの苦しみを見て喜ばれるためではなくて、この試練を経ることが、彼らの最後の勝利のために必要であるからである。神はご自分の栄光のために、彼らを誘惑から守ることがおできにならないというのは、彼らがどんな悪のそそのかしにも耐えられるようにすることこそ、試練の目的だからである。

神の民が、心からへりくだり、悔い改めた心をもって、彼らの罪を告白して捨て去り、信仰によって神のお約束を求めるならば、どのような悪人も悪天使も、神のお働きを妨げたり、神のご臨在をさえぎったりすることはできない。すべての誘惑、すべての反対の勢力は、公然とくるものであろうと、隠れたものであろうと、必ず撃退することができる。「これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」と「万軍の主は仰せられる」のである(ゼカリヤ書四ノ六)。

主の守りの実例

「主の目は義人たちに注がれ、主の耳は彼らの祈にかたむく。…そこで、もしあなたがたが善に熱心であれば、だれが、あなたがたに危害を加えようか」(ペテロ第一・三ノ一二、一三)。バラムが、莫大な報酬の約束に誘われて、イスラエルに不利な魔術を行ない、主に犠牲をささげて神の民にのろいをかけようとしたときに、神の霊は、彼が言おうとしていた災いを言うことを許さなかった。そして、バラムは、次のように言わなければならなかった。「神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。」「わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終りのようでありたい。」犠牲が再びささげられたとき、この神を敬わない預言者は宣言した。「祝福せよとの命をわたしはつけた、すでに神が祝福されたものを、わたしは変えることができない。だれもヤコブのうちに災のあるのを見ない、またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。彼らの神、主が共にいまし、王をたたえる声がその中に聞える。」「ヤコブには魔術がなく、イスラエルには占いが無い。神がそのなすところを時に応じてヤコブに告げ、イスラエルに示されるからだ。」それでも三たび祭壇が設けられて、バラムはもう一度、のろいを言おうと試みた。しかし神の霊は、預言者の、自らは望まなくちびるを通して、神の選民の繁栄を告げ、その敵の愚かさと思意を譴責したのである。「あなたを祝福する者は祝福され、あなたをのろう者はのろわれるであろう」(民数記二三ノ八、一〇、二〇、二一、二三、二四ノ九)。

この時、イスラエルの人々は、神に忠誠であった。そして、彼らが神の律法に服従しているかぎり、地上や陰府のどんな力も、彼らに打ち勝つことはできなかった。しかし、バラムは、神の民に対して宣言することを許されなかったのろいを、彼らを罪に誘惑することによって、ついに彼らの上にもたらすことができた。彼らが神の戒めを破り、神から離反していったときに、彼らは、破壊者サタンの圧迫を受けるままに放置されたのである。

勝利の秘けつ

サタンは、キリストのうちに住んでいるどんなに弱い魂でさえも、暗黒の軍勢よりはるかに強力であることをよく知っている。彼は、もし自分が公然とその正体を現わしたりすれば、すぐに撃退されてしまうことをよく知っている。そこで、彼は、このような十字架の戦士たちをその堅固な要塞からさそい出すとともに、伏兵を設けておいて、自分の陣地に入ってくる者をすべて滅ぼそうと待ちかまえている。へりくだった心で神によりたのみ、神のすべての戒めに服従する者だけが安全なのである。

祈りを怠っては、一日、一時間たりとも安全ではない。特にわれわれは神のみ言葉を理解する知恵を祈り求めなければならない。聖書の中に、サタンの策略が示されている。またそれに対抗する手段も教えられている。サタンは巧みに聖書を引用し、彼自身の解釈をほどこして、われわれをつまづかせようとする。われわれは、謙遜な態度で聖書を学び、どんな場合にも神に依存していることを忘れてはならない。こうして常にサタンの策略に注意する一方、たえず、「わたしたちを試みに会わせないで…下さい」と信仰をもって祈らなければならない。

第三章

人は死んだらどうなるか

最初の大欺瞞

人間の歴史の最初から、サタンは人類を欺こうとする働きを始めた。天で反逆を起こしたサタンは、この世界の住民を、神の政府に反抗する彼の戦いに参加させようと望んだ。アダムとエバは、神の律法に服従して、完全に幸福な生活を送っていた。ところがそのことは、神の律法は圧制的であるとか、神の被造物の幸福に反するものであるとか言って、サタンが天で主張してきたことに対して、たえず不利な証言となっていた。そればかりではなく、この罪のない二人のために備えられた美しいホームをながめて、サタンはしっと心をかきたてられた。彼は人間を墮落させようと決心した。彼らを神から引き離して、自分の権力下におき、この地球を手に入れて、ここに至高者なる神に反対する王国を建設しようとした。

アダムとエバには、この危険な敵について警告が与えられていたから、サタンがその本性そのままの姿を現わしたなら、たちまち撃退されてしまったであろう。だが、彼は効果的に目的を達成するために、真意を隠して秘密に働いた。当時魅惑的な姿をしていたへびを媒介者に用いて、サタンは、「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」とエバに話しかけた(創世記三ノ一)。エバがこの誘惑者と言葉をかわしさえしなかったら、彼女は安全であっただろう。だが彼女は、サタンにかかわり合ったために、彼の策略に落ちてしまった。今でも多くの者が打ち負かされるのは、このようにしてである。彼らは、神のご要求について疑いを抱き、議論する。彼らは、神のご命令に従わないで人間の説を受け入れるが、それは、偽装されたサタンの策略にすぎない。

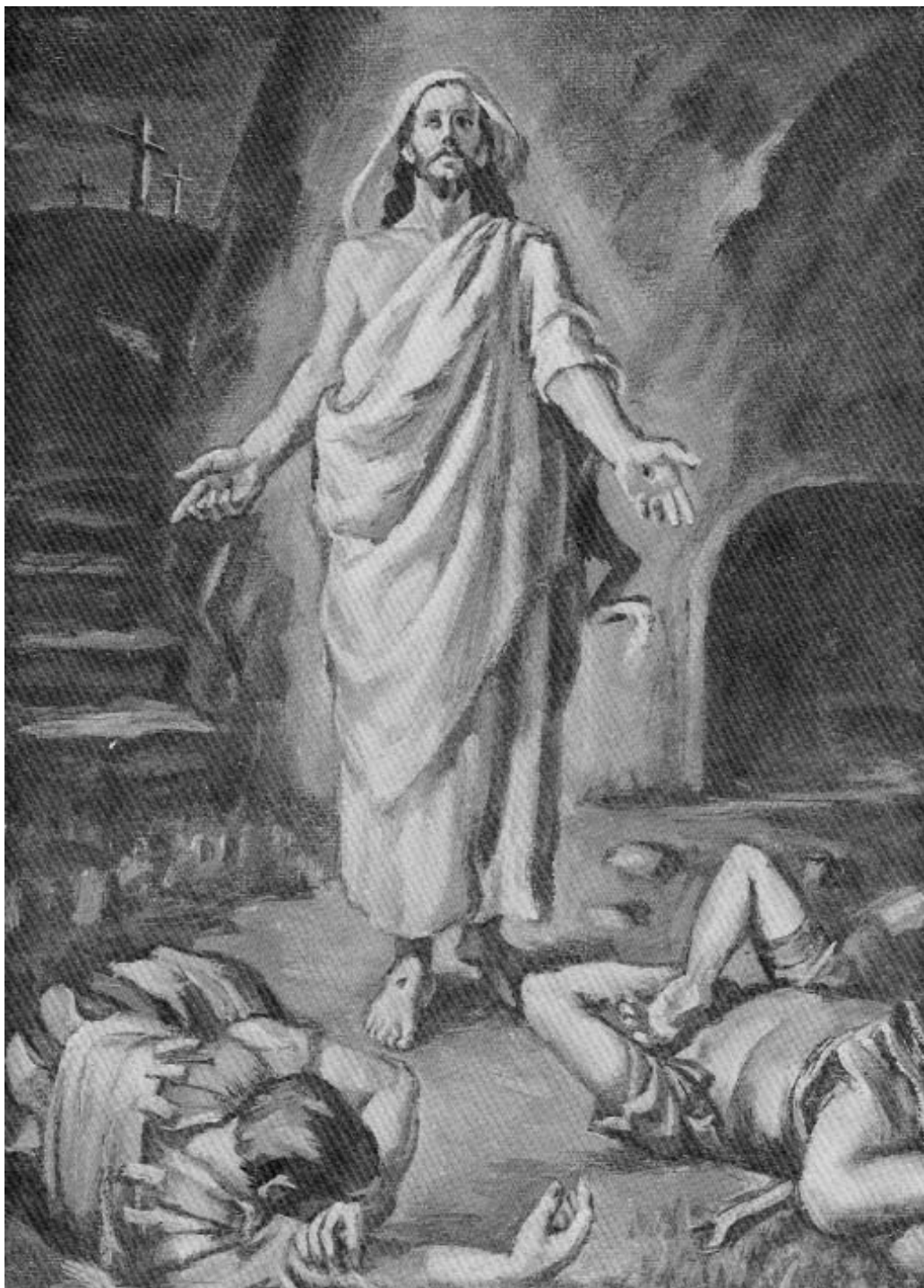
「女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました。』へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のようになり善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです』」(同三ノ二―五)。あなたがたは神のようになって、これまでよりもっとすばらしい知恵をもち、これまでよりもっと高い身分になることができるだろうと、サタンは言明した。エバは誘惑に負けた。そしてエバに感化されて、アダムも罪に陥った。神の言葉はそのまま信じるべきでないというへびの言葉を、彼らは受け入れた。彼らは、創造主を信じないで、神が彼らの自由を束縛しておられるものと考え、神の律法を犯すことによって、大きな知恵と高い地位を得ようとしたのである。しかしアダムは、罪を犯した後、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」という言葉の意味をどのよ

うに悟ったであろうか。それは、サタンが彼に信じさせようとしていたように、もっと高い身分に導き入れられるということであつたろうか。そうだとすれば、罪を犯すことによつて大きな利益が得られ、サタンは、人類の恩人になつたわけである。しかしアダムは、神のみ言葉がそういう意味ではなかつたことを知った。罪の刑罰として人間はその取られたところの土へもどらなければならないと、神は宣告された。「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」(同三ノ一九)。「あなたがたの目が開け」というサタンの言葉は、次のような意味においてのみ真実であつた。すなわち、アダムとエバは、神にそむいたあとで、目が開かれて、自分たちの愚かさを悟った。彼らは悪を知り、戒めを犯した苦い結果を味わつたのであつた。

失われた永遠の生命

エデンの中央にいのちの木が生えていて、その実には、生命を永続させる力があつた。もしアダムが神に従つていたなら、この木に自由に近づくことができ、永遠に生きたのである。しかし罪を犯したときに、彼は、いのちの木の実を食べることができなくなり、死ぬべきものとなつた。「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」との神の宣告は、生命が完全に断たれることを示している。

服従することを条件として人間に約束された不死は、戒めにそむいたために失われた。アダムは、自分が持つていないものを子孫に伝えることはできなかった。もし神が、み子の犠牲によつて、不死を与えてくださらなかったら、墮落した人類に生きる望みはなかつたのである。「すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり



キリストは、死のかせを断ち切って、番兵たちが見張っていた墓から出てこられたとき、「耐え忍んで善を行」なうすべての者に対して、永遠の生命の確証をお与えになった。

込んだのである」が、キリストは、「福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである」(ローマ五ノ一二、テモテ第二・一ノ一〇)。しかも不死はキリストによってのみ獲得することができるのである。「御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがない」とイエスは言われた(ヨハネ三ノ三六)。だれでも条件に応じさえすれば、この貴重な祝福を手に入れることができる。「耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものとを求める人に、永遠のいのちが与えられ」るのである(ローマ二ノ七)。

アダムに向かって、服従することなしに生命を約束したのは、大欺瞞者サタンだけであつた。そして、エデンの園でへびがエバに言った「あなたは決して死ぬことはないでしょう」という言葉は、靈魂の不滅について語られた最初の説教であつた。しかも、サタンの権威だけに基づくこの宣言が、キリスト教界の講壇からくり返して叫ばれ、そして、われわれの祖先が受け入れたように、人類の大部分は、簡単にそれを受け入れているのである。

「罪を犯す魂は死ぬ」という神の宣言が、罪を犯す魂は死なないで永遠に生きるという意味に解されている(エゼキエル書一八ノ二〇)。サタンの言葉は軽々しく信じながら、神のみ言葉はなかなか信じようとしない人々の不思議な迷妄には、驚かすにはいられないのである。

もし人間が、墮落後もいのちの木に近づくことが許されたとすれば、人間は永遠に生きることになり、こうして罪は永遠に続いたであろう。しかし、ケルビムと炎のつるぎが、「命の木の道」を守っていたので、アダムの家族の者はだれひとり、そのさくを越えて、いのちを与える実を食べることができなかった(創世記三ノ二四)。だから永遠に生きる罪人はいないのである。

サタンの魔手

しかしサタンは、人類の墮落後、部下の天使たちに命じて、人間は生まれながらに不死であると信じこませるように努力させた。まずこうしたまちがった考えを受け入れさせておいて、罪人は永遠の不幸の中に生きなければならぬものであると思い込ませるのである。そして今度は、暗黒の君は、その部下を使って、神は執念深い暴君であるかのようにみせかけ、神のみこころを喜ばせない者はすべて地獄に投げ込まれ、永遠に神の怒りを受けねばならないのだと断言し、またこのように彼らが永遠の炎の中で、口に言い表わせないほどの苦しみにもだえているのに、創造主は彼らをながめて満足なさるのだと断言する。

このようにしてサタンは、自分自身の性質を、人類の創造主であり恵み深い主であられる神の性質であるかのように思わせる。残酷さはサタンのものである。神は愛である。最初の反逆者によって罪が生じるまでは、神の創造されたものは、すべて純潔で清く美しかった。人間を罪に誘惑し、できれば滅ぼしてしまおうとする敵はサタン自身である。そして犠牲者を確実に手に入れてしまうと、自分が生じさせた滅びに狂喜する。彼はもし許されるなら、全人類をその網の中に捕えるであろう。もし神の力が介入しなければ、アダムの子らは一人も逃れることはできないであろう。

創造主に対する信頼感をゆるがせ、神の統治の賢明さと神の律法の正当さを疑わせて、われわれの祖先に打ち勝ったサタンは、今日も同じようにして、人間を打ち負かそうとしている。サタンとその部下たちは、自分た

ちの悪意と反逆を正当化するために、神を自分たち以上に悪いおかたであるかのように言う。大欺瞞者サタンは、自分の恐ろしい残酷さを天父になすりつけて、このような不正な統治者に従おうとしなかったために天から追放されたことは非常に不当な扱いであったと、見せかけようとしている。彼は、主の厳格な命令の下に課せられる束縛と対照的に、自分の寛大な支配下で持つことのできる自由を世の人々の前に示す。こうして彼は、人々の心が神に忠誠を尽くさないように誘惑することに成功する。

恐るべき永遠責め苦説

悪人が死ぬと永遠の焦熱地獄において火と硫黄をもって苦しめられるという教理や、この短い地上の生涯において犯した罪のために、神が生きておられるかぎり責め苦を受けるという教理は、愛とあわれみの感情や正義感から見て、実にいまわしいかぎりである。それにもかかわらずこの教理は広く教えられて、今なお、多くのキリスト教会の信条の中に含まれている。博学なある神学博士は、次のように言った。「地獄の責め苦の光景は、永遠に聖徒たちの幸福を増進するのである。同じ性質を持ち、同じ環境のもとに生まれた他の者たちが、こうした悲惨な状態に陥っているにもかかわらず、自分たちは特別な恵みにあずかっていることを自覚するとき、彼らは自分たちがどんなに幸福であるかを感じるのである。」他の者は、また次のように言った。「滅亡の命令が、怒りの器たちの上に永遠に執行され、その苦しみの煙は、あわれみの器たちの目の前で永遠に立ちのぼる。あわれみの器たちは、こうした悲惨な者たちの運命に陥ることを免れて、アーメン、ハレルヤ！主を賛美せよ！というのである。」

神の言葉のどこに、そのような教えが見いだされるであろうか。贖われて天にある者たちは、あらゆるあわれみと同情の念を失い、普通の人間の感情さえ持たなくなるのであろうか。彼らは、禁欲主義者のように無関心になり、未開人のように残酷になるのであろうか。いや、そうではない。こうしたことは、神の書の教えではない。ここに引用したような意見を表明する人々は、学識があり、まじめな人々であらうが、しかし、サタンの詭弁にまどわされているのである。サタンは、聖書の強烈な表現を彼らに曲解させ、その言葉を、創造主ではなくて、彼自身の恨みと悪意で彩るのである。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。…あなたはどのようにして死んでよからうか」(エゼキエル書三三ノ一)。

もし仮に、神が絶え間ない責め苦を見て喜びとし、地獄の炎の中に閉じ込められている者たちの苦しみの叫びや悲鳴やのろいの声を楽しみとされるとしたところで、それはいったい神にとってなんの益になるであろうか。このような恐ろしい叫びが、無限の愛の神の耳に音楽となるであろうか。悪人が永遠の責め苦を受けることは、神が罪を、宇宙の平和と秩序を乱す悪として憎悪されることを示すものであると、主張されている。ああ、これはなんとという冒流であろう。罪に対する神の憎悪が、それを永続させる理由であるかのように言われている。これらの神学者の教えによるならば、あわれみを受ける望みもなく永遠の責め苦に会うことは、その哀れな苦悩者たちを狂気に陥れ、そして彼らが怒り狂ってのろいと冒流の言葉を吐くとき、彼らは自分たちの罪の量を永遠に増し加えているのである。しかし、このようにして永遠にわたって罪を増し加えていっても、神の栄光は決して高揚されるものではない。

永遠の責め苦という邪説が及ぼした害悪は、とうてい人間の知力でははかり知ることができない。愛と恵みに満ち、あわれみに富んだ聖書の宗教が、迷信によって暗くされ、恐怖であわわれている。サタンが、神の品性をどんなに誤った色彩で彩ってきたかを考えるとき、人々が恵み深い創造主を恐れ、憎みさえするのも、不思議ではないのである。教会の説教壇から説かれて、今日全世界に広がっている神に関する恐ろしい見解は、幾千、いや幾百万の人々を、懷疑論者や無神論者にしたのである。

この永遠責め苦説は、バビロンがすべての国民に飲ませる憎むべき酒といわれている偽りの教理の一つである（黙示録一四ノ八、一七ノ二参照）。キリストの牧師たちが、この邪説を受け入れて、説教壇から語ることとは、ほんとうに不思議である。彼らはこれを、偽りの安息日と同様に、ローマから受け継いだのである。確かに、これは、偉大で善良な人々によって教えられてきた。しかし彼らには、この問題について、われわれに与えられたような光が与えられてはいなかったのである。彼らは、その時代に輝いた光にだけ責任があった。そしてわれわれは、われわれの時代に輝く光に責任がある。もしわれわれが、神の言葉のあかしを離れ、先祖たちが教えたものであるからという理由で偽りの教理を受け入れるならば、われわれは、バビロンにくだされた罪の宣告を受ける。われわれはその憎むべき酒を飲んでいることになるのである。

普遍救済説の欺瞞

永遠の責め苦の教理を嫌悪する多くの人々は、これと反対の誤りに追い込まれる。聖書に神は愛とあわれみに

満ちたおかたとして示されているので、被造物を永遠の焦熱地獄に投げ込むとは信じることができないのである。しかし、魂はもとと不死であると信じられているので、全人類については救われると結論するほかはないのである。聖書に恐ろしいことが記されていても、それは単に人を服従させるためのおどしであって、文字どおりに実現はしないと思っている人が多い。こうして、罪人は利己的な快楽を楽しみ、神の律法を無視しても、ついには神の恵みにあずかることができるということになる。神の恵みにつけ込んだこのような教理は、神の正義を無視し、肉の心を喜ばせ、大胆に罪を犯させるようになる。

万人は救われると信じる人々が、魂を破滅に陥れるこの教理を支持するために、聖書をどのように曲解するかを示すためには、彼ら自身が言っていることを引用すれば十分であろう。事故のために即死したところの、神を信じていなかった一青年の葬式において、普遍救済論者(ユニバーサリスト)の牧師は、ダビデに関する次の聖句を引用した。「彼は、アムノンが死んだのを見て、アムノンに関しては気持ちが悪く落ち着いた」(サムエル記下三ノ三九英語訳)。

説教者は次のように言った。「わたしは、罪のうちにこの世を去る人々、酩酊状態のまま死ぬ人、その着物に罪の赤いしみを残したままで死ぬ人、または、この青年のように、信仰を告白せず、宗教生活の経験を持たないで死ぬ人の運命について、よく質問を受ける。われわれは聖書でもって満足している。聖書の解答が、恐ろしい問題に解決を与える。アムノンは、非常に罪深かった。彼は悔い改めなかった。そして、酒に酔い、酩酊状態のまま殺された。ダビデは、神の預言者であった。彼は、アムノンが来世において、幸福になるか不幸になるかを知っていたにちがいない。彼の心境についてなんと言われているであろうか。『王は心に、アブサロムに会うこ

とを、せつに望んだ。彼はアムノンが死んだのを見て、アムノンに関しては気持ちが落ち着いたからである。』

この言葉から、どんな結論が得られるであろうか。ダビデは永遠の苦しみを信じていなかったのではなからうか。われわれはそう考える。そして、最後には普遍的な純潔と平和が来るという、さらに喜ばしくさらに高尚で慈愛にあふれた仮説を支持するところの、輝かしい論証をここに発見するのである。彼は、自分の息子が死んだのを見て、気持ちが落ち着いた。それは、なぜであるか。それは、彼が予言的眼をもって、輝かしい将来をなぐめ、息子がすべての誘惑から遠く引き離され、束縛から解放されて、罪の汚れから清められ、そして、十分に清めと光を与えられた後で、昇天して、天の喜びにあずかっている靈魂の群れに入れられるのを見ることができたからである。彼の唯一の慰めば、彼の愛する息子が、現在の罪と苦悩の状態から取り去られて、聖靈の高貴ないぶきが彼の暗くなった心にそそがれるところに行き、彼の心が天の知恵と永遠の愛の喜びに対して開かれて、こうして、清い性質を与えられて、天の嗣業の休息と交わりに入ることであつた。

こう考えるときに、天国の救いは、人間がこの地上でなし得ることや、今心を変化させること、あるいは、今何を信じ、どんな信仰を告白するかなどによらないと、われわれが信じていることも、理解してもらえるであろう。』
 こうして、キリストの牧師と称している人が、エデンでへびが言った「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。」「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」という偽りをくり返している。彼は、極悪の罪人たち、すなわち、人を殺し、盗み、姦淫を行なう人々が、死後、永遠の祝福にあずかる準備をすることができるといのである。

この聖書の曲解者は、何を根拠にして、こういう結論に達するのであろうか。それは、神の摂理に対するダビ

デの服従をあらわしている一つの文章からである。「王は心に、アブサロムに会うことを、せつに望んだ。彼はアムノンが死んだのを見て、アムノンに関しては気持ちが悪く落ち着いたからである。」彼の激しい悲哀は、時がたつにつれて、やわらげられ、その思いは、死んだ息子から、生きている息子に、すなわち、自分の犯罪の当然の罰を恐れて逃亡した息子に向けられたのであった。ところが、これが、近親相姦の罪を犯し、酒に酔ったアムノンが、死んだ時に直ちに幸福な住居に移され、そこで清められて、罪のない天使たちとの交わりに入る準備をするということの、証拠だというのである。これは、まことに、肉の心を満足させるのに都合のよい快い作り話である。これは、サタン自身が作り出した教義であって、効果的にサタンの働きをしている。こういう教えがあるのであるから、罪悪が満ちても驚くにはあたらないのである。

誤った聖書解釈

このひとりの偽教師の行なったことは、他の多くの人々のしていることの一例である。多くの場合、聖書本来の解釈とは全く正反対の意味となるような数語を、文脈を無視して聖書から切り離す。そして、このようにして切り離された聖句が曲解されて、神の言葉に基づかない教理の証拠に用いられる。酒に酔ったアムノンが、天国にいる証拠として引用された証言は、酒に酔う者は神の国をつぐことではないという、明確で否定することのできない聖書の言葉に全く相反する推論にすぎない(コリント第一・六ノ一の参照)。このようにして、疑う人々、信じていない人々、懐疑論者たちは、真理を偽りにしてしまうのである。そして、多くの人々が、かれらの詭弁に欺か

れて、肉の生活に安んじ、惰眠をむさぼっている。

もしだれでも、死ねばすぐその魂が天に行くのなら、生きているよりは、死んだほうが望ましく思われることであろう。こうしたことを信じた結果、自分の生命を断つたものも多いのである。困難や悩みや失望に陥った場合、もろい生命の糸を断ち切って、永遠の世界の幸福へと舞いあがるのが、いかにもやさしいことのように思われるのである。

神の律法を犯す者は必ず罰を受けるということは、神がみ言葉の中にはつきりと証拠を与えておられる。神は恵み深いおかたであるから、罪人を罰するようなことはなさらないと思ひ込んでいる者は、ただカルバリーの十字架をながめて見るとよい。汚れない神のみ子の死が、「罪の支払う報酬は死である」ことと、神の律法を犯せばそれに相当する報いがあることとの、証拠である。罪のないキリストが、人のために罪となられた。罪を負い、天父の顔をかくされて見ることができず、ついに、キリストの心臓は破裂し、その生命は碎かれたのである。こうした犠牲は、すべて、罪人が贖われるために払われたのである。他のどんな方法によっても、人は罪の刑罰から救われることはできない。このような価を払って備えられた贖いにあずかることを拒否する者は、犯した罪の刑罰を自分の身に負わなければならない。

普遍救済論者(ユニバーサリスト)が、幸福な聖天使として天国に入れている、不信仰の者や悔い改めない人について、聖書はさらになんと教えているかを考えてみよう。

「かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう」(黙示録二二ノ六)。この約束は、かわく者にだけ与えられている。命の水の必要を感じ、他のすべてのものを失ってもそれを求める者だけが、満たされる

のである。「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであらう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる」(同二二ノ七)。ここにも、条件が明示されている。すべてのものを受け継ぐためには、罪に抵抗して勝利しなければならぬのである。

主は、預言者イザヤによって、こう言われる。「正しい人に言え、彼らはさいわいであると。彼らはその行いの実を食べるからである。」「悪しき者はわざわざいだ、彼は災をうける。その手のなした事が彼に報いられるからである」(イザヤ書三ノ一〇、一一)。また、「罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に恐れをいだく者には幸福があることを、わたしは知っている。しかし罪人には幸福がない」と賢者は言っている(伝道の書八ノ一二、一三)。そしてパウロも、次のように証言している。罪人は、「神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。」「神は、おののに、そのわざにしたがって報いられる。」「悪を行うすべての人には、…患難と苦悩とが与えられ」(ローマ二ノ五、六、九)。

「すべて不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち、偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことができない」(エペソ五ノ五)。「すべての人と相和し、また、自らきよくなるように努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」(ヘブル二ノ一四)。「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとあつて都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである。犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拜む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている」(黙示録二二ノ一四、一五)。

人は自ら運命を定める

神は、神の品性と神が罪を処理される方法とを、人間に宣言された。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず」(出エジプト記三四ノ六、七)。「主は…：悪しき者をことごとく滅ぼされます。」「罪を犯す者どもは共に滅ぼされ、悪しき者の子孫は断たれる」(詩篇一四五ノ二〇、三七ノ三八)。神の政府の権力と権威とが、反逆を鎮圧するために用いられる。しかし、あらゆる応報・処罰の執行は、恵み深く忍耐強い、慈悲に富んだおかたとしての神の品性と完全に調和するのである。

神は、どんな人の意志または判断をも強制なさらない。神は、奴隸的服従をお喜びにならない。神は、神のみに造られたものたちが、愛するにふさわしいおかたとして神を愛するよう望まれる。神は、彼らが、神の知恵と正義と慈愛とをよく悟った上で、神に従うことを望まれる。そして、神のこうした性質について正しい理解を持つものはみな、神の特性に感嘆して神に引きつけられ、神を愛するようになるのである。

救い主が教え、模範を示された、思いやりとあわれみと愛の原則は、神のみこころと品性の写しである。キリストは、ご自分は天父から受けたもののほかは何も教えないと宣言された。神の政府の原則は、「あなたの敵を愛せ」という救い主の教えと完全に調和している。神は悪人を処罰されるが、それは宇宙の幸福のためであり、刑罰が下される本人たちの幸福のためでさえあるのである。神は、神の政府の律法と神の品性の正しさに調和

させることができるなら、彼らを幸福にしたいと望まれる。神は彼らを、ご自分の愛のしるしで取り巻き、神の律法の知識を彼らに与え、あわれみの招きを発して彼らを追われる。しかし、彼らは、神の愛を軽んじ、神の律法を無効にし、神のあわれみを拒むのである。彼らは、絶えず神の賜物を受けながら、与え主である神のみ名を汚す。彼らは、神が彼らの罪を憎まれることを知って、神を憎むのである。神は、彼らの強情を長く忍ばれる。しかし、ついに、彼らの運命が決まる決定的な時が来る。その時、神は、このような反逆者たちを、ご自分の側に縛りつけられるであろうか。彼らに、神のみこころを行なうように強制されるであろうか。

サタンを指導者とし、その力に支配されてきた者は、神の前に出る用意がない。高慢、欺瞞、放蕩、残酷が、彼らの性質になってしまった。彼らは、天国に入って、この地上で軽べつし憎んでいた人々と、永遠に住むことができるであろうか。真理は、偽りを言う人には決して好まれない。柔和は、自尊心や誇りを満足させない。純潔は、腐敗した人には受け入れられない。無我の愛は、利己的な者には、魅力あるものと思われない。この地上の利己的利益に全く心を奪われている者に、天は、どんな楽しみを与えることができるであろうか。

神の正義とあわれみ

一生神に反逆していた者が、仮に急に天国に移されて、そこにいつもみなぎっている高尚な清い完全な状態を目撃したでしょう。どの人の心も愛に満たされ、どの顔も喜びに輝き、神と小羊をほめたたえる美しい音楽が聞こえ、み座に座しておられるおかたの顔からは、贖われた者たちの上に絶えず光が照り輝いている。神に対して

憎しみを抱き、真理と聖潔を憎んでいた者たちが、ここで、天の群れに加わって賛美の歌を歌うことができるであろうか。果たして彼らは、神と小羊の栄光に耐え得るであろうか。いや、それはできないのである。彼らには、天国のために準備をするように幾年もの恵みの期間が与えられていた。にもかかわらず、彼らは純潔を愛するよう心訓練をしなかった。彼らは、天国の言語を学ばなかったので、今となってはもうおそすぎるのである。神に反逆した生活が、彼らを天にふさわしくない者にしてしまった。天の純潔と聖潔と平和とは、彼らにとっては責め苦となるであろう。神の栄光は、焼き尽くす火となるであろう。彼らはその清い場所から逃れたいと願うであろう。彼らを贖うために死なれたおかたの顔を避けるために、滅亡を歓迎するであろう。悪人の運命は、彼ら自身の選択によってきまるのである。彼らが天から除外されるのは、彼らが自ら進んでそうするのであり、神の正義とあわれみによるのである。

大いなる日の炎は、ノアの洪水の水のように、悪人たちは直すことができないという、神の裁断を宣言する。彼らには、神の権威に服従する気持ちがない。彼らの意志は反逆に用いられてきた。そのために、死に臨んで、彼らの思想の流れを反対の方向にひき、背反から服従へ、憎しみから愛へと変えるには、もはやおそ過ぎるのである。

神は、殺人者カインの生命を助けることによって、罪人を生かしてかってきまな罪の生活を続けさせる結果がどうなるかという実例を、世界に示された。カインの教えと模範の影響によって、彼の子孫の大群衆は罪に誘われ、ついに「人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかり」になった。「時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」(創世記六ノ五、一一)。

神は、世界をあわれんで、ノアの時代の悪い住民たちを一掃された。神は、あわれみのうちに、ソドムの墮落した住民たちを滅ぼされた。悪を行なう人々は、サタンの欺瞞の力によって、共鳴と賞賛を勝ちえ、こうして常に他の人々を反逆に引き入れている。カインの時代、ノアの時代、そして、アブラハムとロトの時代においてそうであった。われわれの時代においても同様である。神が、神の恵みを拒否する人々を最終的に滅ぼされるのは、宇宙に対するあわれみからである。

永遠の生命か、永遠の滅びか

「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」(ローマ六ノ二三)。義人の嗣業は生命であるが、悪人が受けるものは死である。モーセは、イスラエルに次のように宣言した。「見よ、わたしは、きょう、命とさいわい、および死と災をあなたの前においた」(申命記三〇ノ一五)。この聖句の中で言われている死は、アダムに宣告された死ではない。なぜなら、全人類が彼の罪の報いを受けているからである。永遠の生命と対照されているのは、「第二の死」である。

アダムの罪のために、死は全人類に及んだ。だれでも同じように墓に下って行く。そして、救いの計画が設けられたことによって、すべての者が、墓からよみがえらせられるのである。「正しい者も正しくない者も、やがてよみがえる。」「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」(使徒行伝二四ノ一五、コリント第一・一五ノ二二)。しかし、よみがえらせられる二種類の人

人は、はっきりと区別されている。「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」(ヨハネ五ノ二八、二九)。復活に「あずかるにふさわしい」者たちは、「さいわいな者であり、また聖なる者である」。「この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない」(黙示録二〇ノ六)。しかし、悔い改めと信仰によって許しを受けなかった人々は、罪の刑罰すなわち、「罪の支払う報酬」を受けなければならない。彼らは、「そのしわざに応じて」長さと激しさの異なる刑罰を受けるが、ついには、第二の死に終わる。罪のうちにある罪人を救うことは、神の正義とあわれみからいって不可能なために、神は罪人からその存在を剥奪される。彼は罪のゆえに、生きる権利を喪失し、生きるにふさわしくないことを証明したのである。靈感を受けた筆者は言っている。「悪しき者はただしばらくで、うせ去る。あなたは彼の所をつぶさに尋ねても彼はいない。」また別の筆者は宣言する。彼らは「かつてなかったようになる」(詩篇三七ノ一〇、オバデヤ書一六)。彼らは、辱めを受けて、希望のない永遠の滅びに沈むのである。

こうして、罪と罪の結果であるあらゆる災いと破滅が終わりを告げる。詩篇記者は、「あなたは、…悪しき者を滅ぼし、永久に彼らの名を消し去られました。敵は絶えはてて、とこしえに滅び」と言っている(詩篇九五、六)。黙示録の中で、ヨハネは、永遠の世界を予見し、不調和な音が一つもない全宇宙の賛美の歌を聞いている。天地のすべての被造物が、神に栄光を帰していた(黙示録五ノ一三参照)。その時には、永遠の刑罰を受けて苦しみながら神を活す失われた魂などいないのである。地獄の哀れな魂の叫びが、救われた者の歌に混じることなどないのである。

死後の状態

死者に意識があるという教理は、靈魂不滅という根本的な誤りに基づくものである。そしてこの教理は、永遠の責め苦という教えと同様、聖書の教えに反するものであり、理性の命じるところにも、人間の慈悲の心にも、相反するものである。一般に信じられているところによれば、贖われて天にある者たちは、地上で起きるすべてのことを、そして特に、彼らがあとに残してきた友人たちの生活を、よく知っているというのである。しかし、死者が、生きている人々の悩みを知り、自分の愛する者たちの罪を目撃し、彼らが人生のあらゆる悲哀、失望、苦悩に耐えるのを見るのが、どうして幸福の源となり得ようか。地上の友人たちの上をさまよう者に、天国の喜びがどれだけ味わえようか。また、息が絶えたとすぐに、悔い改めなかった者の魂は地獄の炎の中に投げ込まれるという考えは、なんと嫌悪すべきものであろうか。自分たちの友人が、不用意のまま墓にくぐり、永遠の苦悩に陥るのを見る人々は、どんなに激しい苦しみを味わうことであらうか。このような悲惨なことを考えて、気が狂ったものも多いのである。

こうしたことについて、聖書はなんと言っているであらうか。ダビデは、人間が死んだならば、意識はないと言明している。「その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる」(詩篇一四六ノ四)。「ソロモンも同じ証言をしている。『生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない。』」その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にか

かわることがない。」「あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである」(伝道の書九ノ五、六、一〇)。

ヒゼキヤの祈りに答えて、彼の生命が十五年延ばされたとき、感謝にあふれた王は、神の大いなるあわれみに対して賛美の言葉をささげた。彼は、この歌の中で、彼の大きな喜びの理由を挙げている。「陰府は、あなたに感謝することはできない。死はあなたをさんびすることはできない。墓にくだる者は、あなたのまことを望むことはできない。ただ生ける者、生ける者のみ、きょう、わたしがするように、あなたに感謝する」(イザヤ書三八ノ一八、一九)。一般にゆきわたっている神学は、死んだ義人は天国の喜びにあずかり、朽ちることのない舌で神を賛美していると言うのである。しかし、ヒゼキヤは死にあたって、そのような輝かしい期待を持つことはできなかった。彼の言葉と詩篇記者の証言は一致している。「死においては、あなたを覚えるものはなく、陰府においては、だれがあなたをほめたたえることができましょうか。」「死んだ者も、音なき所に下る者も、主をほめたたえることはない」(詩篇六ノ五、一一五ノ一七)。

ペテロは、ペンテコステの日に、ダビデについて、「彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に残っている。」「ダビデが天に上ったのではない」と声明した(使徒行伝二ノ二九、三四)。ダビデが復活の時まで墓の中にとどまっているという事実は、義人は死んだ時に天に行くのではないということを証明している。復活を経ることによつてはじめて、そしてキリストの復活の事実の功績によつて、ダビデは、ついに神の右に座することができるのである。

パウロも言っている。「もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう。もしキリ

ストがよみがえらなかつたとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになる。そうだとすると、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのである」(コリント第一・一五ノ一六―一八)。もしも、四千年にわたって、義人が死ぬと直接天国に行っていたとするならば、パウロはどうして、もし復活がないならば「キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまった」ということができただけであろうか。もしも、義人が死ぬとすぐに天国に行っただけであれば、復活は必要ないはずである。

復活信仰の重要性

殉教者ティンダルは、死者の状態について次のように言明した。「わたしは、彼らがすでにキリストのような、あるいは、神に選ばれた天使たちのような、完全な栄光に入っているとは思っていないことを、はっきり申し上げる。わたしは信仰の上から、そうは思わないのである。なぜならば、もしそうであるとすると、肉体の復活を説くことはおどであると思われなければならないのである」。

死ねば不死の祝福にあずかるという希望のために、聖書の復活の教理が一般に軽視されるようになったということは、否定できない事実である。アダム・クラーク博士は、この傾向について、次のように言った。「復活の教義は、**現代**よりは初期のキリスト者たちの間で、はるかに重要視されていたように思われる。これはどうしてであろうか。使徒たちは絶えずそれを力説し、それによって、熱心、従順、快活であるようにと、信者たちを激励していた。それなのに、今日の彼らの後継者たちは、そのことをほとんど言わない。使徒たちが説教したこと

を信者たちは信じた。われわれが説教することを、われわれの聴衆は信じるのである。福音の教義の中で、これほど強調されているものはない。しかるに、現代の説教のやり方の中で、これほど軽々しく扱われている教理は、ほかにないのである。」^二

このような状態が続いて、ついに、復活の輝かしい真理はほとんど隠され、キリスト教世界から見失われてしまった。こうして、ある指導的な宗教的著作家は、テサロニケ第一・四ノ一三―一八のパウロの言葉を注解して、次のように言うのである。「主の再臨という疑わしい教理の代わりに、義人は祝福された不死が与えられるという教理が、実際にわれわれに慰めを与える。われわれが死ぬときに主が来られるのである。われわれはそれを待ち望み、見守っていなければならない。死者は、すでに栄光に入っている。彼らは、審判と祝福を受けるためにラッパが鳴るのを待たないのである。」

しかし、イエスは、弟子たちのもとを去るにあたって、彼らがすぐに自分のところに来るであろうとは言われなかった。「あなたがたのために、場所を用意しに行く。」「そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」と彼は言われた(ヨハネ一四ノ二、三)。パウロはさらに次のように言っている。「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。」「そして、彼は、「これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」とつけ加えている(テサロニケ第一・四ノ一六―一八)。こうした慰めの言葉と、前に引用した普遍救済論者の牧師の言葉とは、なんと大きな相違があること

であろう。後者は、死者がどんなに罪深くあっても、地上で息を引き取った時天使たちの間に迎え入れられたと言って、友を失って悲しむ人々を慰めた。しかし、パウロは、兄弟たちに、来たるべき主の再臨を示し、その時に、墓の束縛が解かれて、「キリストにあつて死んだ人々」が永遠の生命によみがえると言っている。

審判はいつ行なわれるか

だれでも、祝福された者の住居に入り得る前に、調査され、その品性と行為が、神の前で吟味されねばならない。すべての者は、天の書物に記されたことに従つてさばかれ、その行為に従つて報いを受ける。この審判は、死ぬ時に行なわれるのではない。パウロの次の言葉に注意したい。「神は、義をもつてこの世界をさばくためにその日を定め、お選びになつたかたによつてそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」(使徒行伝一七ノ三一)。使徒パウロは、ここで、ある一定の時——その当時にあつては、まだ将来のことであつたが——が、この世の審判の時として定められていることを、はっきりと述べた。

ユダは、その同じ時のことについて、次のように言っている。「主は、自分たちの地位を守るうとはせず、そのあるべき所を捨て去つた御使たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。」そしてまた、彼はエノクの言葉を引用している。「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためだ」ある(ユダ六、一四、一五)。また、ヨハネは言っている。

「死んでいた者が、…御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれた。…死人は…この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた」(黙示録二〇ノ一二)。

しかし、もし死者がすでに天国の祝福にあずかっているのであれば、あるいは地獄の炎に苦しめられているのであれば、将来の審判は何のために必要なのであろうか。これらの重大な点に関する神の言葉の教えは、あいまいでもなければ矛盾してもいない。それは普通の人の頭で理解できるのである。率直な心の持ち主であれば、こうした一般の説に、知恵と正当性を認めることができるであらうか。義人は、長期間にわたって神のみ前に住みながら、審判の時に調査を受けて、そのあとで、「宜いかな、善かつ忠なる僕、…汝の主人の歡喜に**入れ**」(文語訳)と賞賛されるのであろうか。悪人は、刑罰の場から引き出されて、全地の審判主から、「のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいつてしまえ」という宣告を受けるのであろうか(マタイ二五ノ一二、四一)。ああ、なんというあざけり、神の知恵と正義に対するなんと恥ずべき非難であらう。

死は眠りである

靈魂不滅説は、ローマが異教から借りてきて、キリスト教の中に織り込んだ偽りの教理の一つである。マルチン・ルターは、これを「ローマ法王の教書というはきだめの一部をなす、奇怪な作り話」であると言っている。^三伝道の書の中にある「死者は何事をも知らない」というソロモンの言葉に注を加えて、ルターはこう言っている。

「これは、死者には感覚がないというもう一つの証拠である。義務もなければ、科学も、知識も、知恵もないとソロモンは言っている。死者は全く何も感じないで眠っていると、ソロモンは判断している。死者は、日も年も数えることなく横たわっている。しかし目がさめる時には、ほんの一瞬眠ったか眠らなかったか、というほどにしか思わないであろう。」^四

死ねば、義人は天に行き、悪人は罰せられるというようなことは、聖書のどこにも書いてない。父祖たちや預言者たちは、そのような確証を残さなかった。キリストと弟子たちは、そのような暗示は何も与えなかった。死人は、すぐに天に行くものではないと、聖書に明らかに教えられている。彼らは復活まで眠っていると記されている(テサロニケ第一・四ノ一四、ヨブ記一四ノ一〇―一二参照)。銀のひもが切れ、金の皿が碎ける時に、人の思いはなくなるのである(伝道の書一二ノ六参照)。墓に下る者は、何も言わない。日の下に行なわれることは何事も知らない(ヨブ記一四ノ二一参照)。疲れた義人たちにとって、それは幸福な休息である。時は、長かろうと短かろうと、彼らにとってはほんの一瞬間にすぎない。彼らは眠っているのである。そして、神のラッパによって呼び起こされて、輝く不死が与えられるのである。「ラッパが響いて、死人は朽ちない者によりがえられ、…この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。『死は勝利にのまれてしまった』(コリント第一・一五ノ五二―五五)。深い眠りから目ざめた時に、彼らは、考えることをやめたところから考え始める。最後の感覚は死の苦痛であった。最後の思いは、自分は死の力に屈するのだ、ということであった。しかし、彼らが、墓から起きあがる時に、彼らの最初の喜ばしい思いは、「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」という勝利

の註ひをうけつゝわづらひぬ(同 一五ノ五五)。

注

- I William Tyndale, Preface to New Testament (ed. 1534). Reprinted in “British Reformers–Tindal, Firth, Barnes,” p.349.
- II “Commentary” remarks on 1 Corinthians 15, par.3.
- III E. Petavel, “The Problem of Immortality,” p.255.
- 同 Martin Luther “Exposition of Solomon’s Books Called Ecclesiastes,” p.152.

第三四章

心霊術の正体

死者の霊とは何か

聖書に示されている聖天使たちの奉仕は、キリストに従うすべての者にとって、最も大きな慰めとなる貴重な真理である。しかし、この点に関する聖書の教えは、一般の神学の誤りによって不明瞭にされ、曲解されてきた。最初は異教の哲学からの借り物で、大背教の暗黒の間にキリスト教の信仰の中に混入した靈魂不滅の教えが、聖書にはつきり教えられている「死者は何事をも知らない」という真理に、取って代わった。「仕える霊であって、救いを受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされた」のは、死んだ者の霊であると、多くの人々は信じるようになった。しかも、人間界に死が入る前から天使たちは存在し、人間の歴史と関係があつたという聖書のあかしがあるにもかかわらず、人々はそう信じているのである。

死んでも人には意識があるという教え、特に、死んだ者の霊が生きている者に仕えるためにもどってくるとい

う信仰は、近代心霊術（降神術）への道を備えた。もし死んだ者が、神と聖天使たちとの前に出ることを許され、また彼らが前に持っていたものよりはるかに優れた知識を持つ特権が与えられるなら、彼らは生きている者を啓発し教えるために、地上に帰って来ないはずがないのではないか。一般の神学者たちが教えるように、もし死んだ者の霊が地上の友人たちの回りをさまよっているなら、彼らはその友人たちと連絡を取り、悪事を戒め、あるいは悲しみを慰めないはずがないのではないか。死んでも人には意識があると信ずる者は、栄化した霊によって伝えられる天来の光として彼らに与えられるものを、どうして拒むことができようか。ここに、神聖なものともなされている経路（チャンネル）があつて、サタンはこの経路を通じて目的を達成するために働いているのである。サタンの命令を行なう墮落天使たちが、霊界からの使者として現われる。生きている者が死んだ者と連絡できるようにすると公言しながら、悪の君は、生きている者の精神にその魅惑的な感化力を働かすのである。

サタンは人々の前に、彼らの死んだ友人たちの姿をあらわす力を持っている。その偽者は完全である。見なれた表情や言葉や声の調子などが、信じられないほどの正確さをもつて再現される。多くの者は、自分たちの愛する者が天の無上の幸福を味わっていると信じて慰められる。そして危険を少しも感じないで、「惑わす霊と悪霊の教え」に耳を傾けるのである。

心霊術の正体

死んだ者が実際に自分たちと交わるためにもどつて来ると人々が信じるようになると、サタンは、備えない

まま墓にくだった者たちを出現させる。彼らは、自分たちは天では幸福であり、高い地位さえ占めていると公言する。そしてこのようにして、正しい者と悪い者との間に違いはないという誤謬が広く教えられる。霊界から来たと称する者たちは、時には注意や警告を語って、それがそのとおりになることがある。そこで信頼を得ると、彼らは聖書の信仰を直接侵害するような教えを持ち出す。地上にある友人たちの幸福に対する深い関心を装いながら、彼らは最も危険な誤謬をそれとなくほめかす。彼らが幾つかの真理を語り、また時には未来のできごとを預言することができるといふ事実から、彼らの言葉には信びよう性があるように見える。そして彼らの偽りの教えは、あたかも聖書の最も神聖な真理であるかのように、大衆によってたやすく承認され、盲目的に信じられる。神の律法は退けられ、恵みのみ霊は軽べつされ、契約の血は清くないものとみなされる。霊たちはキリストの神性を否定し、創造主さえ自分たちと同じ水準に置く。このように新しい変装の下に、大反逆者サタンは、天において始まり、地上において六千年近く続いている、神に対する彼の戦いを、依然として続けるのである。

多くの者は、心霊現象を、全く霊媒の欺きやからくりであると説明しようと努める。しかし、ごまかしをほんものと信じさせた場合がたびたびあったことは事実だが、一方超自然的な力の著しい現われもまたあったのである。近代心霊術はコツコツたたく不思議な音(ラッピング)から始まったのであるが、その音は人間のごまかしや欺きによるのではなく、悪天使たちの直接の働きであった。彼らはこのようにして、魂を滅ぼすのに最も効果的な惑わしの一つを持ち込んだのである。多くの者は、心霊術は単なる人間のごまかしであるという信念によってわなにかかる。というのは、超自然的と思わないではいられないような現象に直面した場合、彼らは欺かれ、それを神の偉大な力として承認するようになってしまふからである。

こうした人たちは、サタンとその代理者たちによって行なわれる不思議なことについての、聖書のあかしを見落としているのである。パロの魔術師たちが神のみ業のまねをすることができたのは、サタンの助けによってであった。パウロは、キリストの再臨の前には同じようなサタンの力の現われがあるであろうと証言している。主の来臨に先だって、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わし」を行なう「サタンの働き」がある(テサロニケ第二・二ノ九、一〇)。また使徒ヨハネは、終わりの時代に現われる、奇跡を行なう権力を描写して、「また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わした」と述べている(黙示録一三ノ一三、一四)。ここに預言されているのは単なる詐欺ではない。サタンの代理者たちが人の目をごまかして行なうようなことによつてではなく、実際に彼らが行なう力をもっているその奇跡によつて、人々は欺かれるのである。

欺瞞の張本人

長い間その熟達した能力を欺瞞の働きに注いできた暗黒の君は、あらゆる階層あらゆる状況の人々に、彼の誘惑を巧妙に当てはめる。彼は、教養のある上品な人々に向かつては、心霊術をいっそう洗練された知的なものとして示す。こうして彼は、多くの人々を自分のわなに引き込むことに成功する。心霊術が与える知恵は、使徒ヤコブが「上から下ってきたものではなくて、地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なもの」と述べたものである(ヤコブ三ノ一五)。しかし大欺瞞者サタンは、隠すことが最もよく彼の目的にかなうときには、このことを隠

すのである。荒野の試みのとき、キリストの前に天の使いの輝きを装って現われることができたサタンは、人々の前に光の天使として最も魅惑的な様子をもって来る。彼は高尚なテーマを示すことによって理性に訴える。また彼は、うっとりさせるような光景をもって空想力を楽しませる。また愛と慈悲とを雄弁に描いて愛情を呼び起こす。彼は人々の空想を高く飛躍させ、人々が自分たちの知恵に大きな誇りを持つように導き、そしてついには心の中で永遠なるおかたを軽べつするようにさせる。世の救い主を非常に高い山に連れて行き、そのおかたの前に地上のすべての国々とその栄華を示すことができたこの力ある者は、神の力によって守られていないすべての者の感覚を誤らせるような方法で、人々に誘惑を仕掛けるのである。

サタンは、エデンでエバを欺いたように、へつらったり、禁じられた知識への欲望をかき立てたり、自己を高める野心を起こさせたりして、今も人々を欺くのである。彼が墮落したのは、こうした悪を心に抱いたためであった。そして、彼は、これらによつて、人類を破滅させようとしている。「あなたがた(は)……神のように善悪を知る者となる」と彼は言った(創世記三ノ五)。心霊術は、「人間は進歩する生物である。人間はその誕生の時から、永遠に向かい神に向かって進歩するように運命づけられている」と教える。また、「心を判断する者は、各人の心それ自身であつて、他の何者でもない。」「その判断は正しい。なぜならば、それは自己の判断だからである。……主座は、あなたの内にある」とも言う。ある心霊術の教師は、彼のうちに「霊的意識」が起きたときに、「同胞よ、すべての者は、墮落しない半神半人であつた」と言った。また他の者は、「正しく完全な人間は、だれでもキリストである」と言っている。

こうしてサタンは、崇敬の真の対象である無限の神の義と完全、また、人間の到達すべき真の標準である神の

律法の完全な義の代わりに、罪深く誤りやすい人間自身を、崇敬の唯一の対象とし、判断の唯一の規準、品性の標準とした。これは、進歩ではなくて、退歩である。

ながめることによって変化することとは、知的方面においても靈的方面においても一つの法則である。心は、いつも考えていることに次第に順応するものである。それは、日ごろから愛し尊敬しているものに、同化していくのである。人は、自分が立てた純潔、善良、または真理の標準よりも高きに達することは決してない。もし自分が最高の理想であれば、それ以上の高尚なものに到達することは決してできない。いや、かえって常に下へ下へと落ちていくのである。ただ神の恵みだけが、人間を高める力を持っている。人間は、そのままにしておけば、必然的に墮落していくのである。

人間を破滅させるもの

心靈術は、放縱で快楽を愛好し、肉欲的な人々には、教養があつて知的な人々に対するほど巧妙に偽装しなくともよい。彼らは、その低劣な形態の中に、彼らの好みに合ったものを見つける。サタンは、人間の性質のあらゆる弱さの徴候をよく調べ、それぞれが犯しやすい罪に注目し、悪の傾向を満足させる機会に欠けることのないように注意を払う。サタンは人々を、それ自身は正当であるものに過度に陥らせ、不節制によって、彼らの肉体的、精神的、道德的能力を低下させる。彼は、人々に情欲をほしいままにさせ、こうして人間の性質全体を獸的なものにして、これまでに幾千の人々を破滅させ、また今も破滅に陥れつつあるのである。そして彼は、彼の働

きを完成させるために、霊たちを通して、「真の知識は、人間をしてすべての律法を超越したものとする」、「存在するものは、すべて正しい」、「神は、罪に定めることはない」、そして、「犯した罪は**すべて**無罪である」、と言うのである。このようにして、欲望が最高の律法であって、自由は放縦であり、人間はただ自分に対する責任しかない、人々が考えるようになれば、至るところに腐敗と墮落がはびこっても不思議ではないのである。多くの者は、肉の心のおもむくままに自由な行動をすることを許す教えを、熱心に受け入れるのである。彼らは、肉の欲をほしいままにし、心と魂の能力は、動物的な傾向に従属するものとなる。そしてサタンは、キリストの弟子であると称する幾千の人々を彼の網の中に捕えて勝ち誇るのである。

しかし、だれも心霊術の偽りの主張に欺かれる必要はない。神は、わなを見つけることができるのに十分な光を、世の人々に与えておられる。すでに示したように、心霊術のいちばん根底にある教えは、聖書の最も明瞭な言葉に相反するものである。聖書には、死者は何事も知らない、彼らの思いは滅びた、彼らは日の下に行なわれるどんなことにもかわりがない、彼らは地上にいる愛する者たちの喜びや悲しみを知ることはないと、はっきり述べられている。

さらに神は、いわゆる死者の霊との交通と称するものを、すべてはつきりと禁じておられる。ヘブル人の時代にも、今日の心霊術者と同様に、死者と交通すると主張するある種の人々がいた。しかし、他の世界から来たとわれている「□よせの霊」が、聖書には「悪鬼の霊」と断言されている（民数記二五ノ一―三、詩篇一〇六ノ二八、コリント第一・一〇ノ二〇、黙示録一六ノ一四を比較せよ）。□よせの霊を呼ぶことは神が忌みきらわれるものと明言され、死の刑罰をもって厳しく禁じられていた（レビ記一九ノ三一、二〇ノ二七参照）。□よせという

名称そのものは、今日では軽べつされている。人が悪霊と交わることができるという主張は、暗黒時代の作り話と考えられている。しかし心霊術は、幾十万、いや幾百万の信者を持ち、科学者たちの仲間にも入り込み、諸教会に侵入し、議会の好意を得、王室にまでも侵入している。この巨大な欺瞞は、昔罪とされ、禁じられていた口よせが、新しく変装して復活したものにすぎないのである。

悪霊の本性

もし心霊術の真の性質についてほかの証拠がないとしても、霊というものが義と罪とを区別せず、キリストの最も気高く純潔な使徒たちとサタンの最も墮落したしもべたちとを区別することをしないということだけで、キリスト者たちにとっては十分であろう。どんな卑劣な人間であっても、天にいて非常にあがめられているということを示して、サタンは世の人々に向かって次のように言うのである。「あなたがたがどんなに悪くても、かまわない。神と聖書を信じようと信じまいと問題ではない。あなたがたが好むように生活しなさい。天はあなたがたの家なのだ。」心霊術者たちは、事実上次のように宣言しているのである。「すべて悪を行うものは主の目に良く見え、かつ彼に喜ばれる。また、さばきを行う神はどこにあるか」(マラキ書二ノ二七)。神のみ言葉には、「わざわざいなるかな、彼らは悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい、暗きを光とし、光を暗しとし」と言われている(イザヤ書五ノ二〇)。

使徒たちの姿を装った偽りの霊は、使徒たちが地上にいる時聖霊のさしずのままに書いたものと矛盾すること

を教える。彼らは聖書が神から出たものであることを否定し、こうしてキリスト者の望みの土台を破壊し、天への道を照らす光を消し去る。サタンは、聖書は単なる作り話であるとか、少なくとも人類の初期にはふさわしい書であつたが、今日では軽く見過ごすか、すたれたものとして捨ててしまつてよい本だと、世の人々に信じさせている。そして彼は神のみ言葉の代わりに、心靈現象を持ち出す。ここに完全にサタンの支配下にある経路がある。そして彼はこの方法によつて、自分の思うままに世の人々に信じさせることができる。サタンとその従者たちをさばく書を、彼は自分の思いのままに陰に隠す。彼は世の救い主を、ただの人間にしてしまう。ちょうど、イエスの墓の番をしていたローマの番兵たちが、イエスの復活を否認するよう祭司や長老たちから教え込まれて、偽りの報告を言い広めたように、心靈術の信者たちは、われわれの救い主イエスの生涯にはなんの奇跡もなかったかのように見せかけようとする。こうして、イエスを後方に押しつけて、自分たち自身の奇跡に注意を引き、それがキリストの業よりもはるかに優れていると宣言するのである。

心靈術の変貌

心靈術はたしかに今ではその外形を変え、不都合な点を隠して、キリスト教の装いをとっている。しかしその主張は、長年にわたつて、講壇や出版物を通して公表され、その中に眞の性質が表わされてきた。これらの教えは、否定することも隠すこともできない。

心靈術は現在の形においてさえ、以前よりも容認すべき性質のものではないどころか、実際にはもっと巧妙な欺

瞞であるためにいつそう危険である。それは以前にはキリストと聖書を非難していたが、今はこの両者を受け入れると公言している。しかし、生まれ変わっていない心を喜ばすような方法で聖書が解釈され、他方、聖書の厳粛で重大な数々の真理が力ないものとされている。愛は神の第一のご性質としてくり返し説明されてはいるが、善と悪をほとんど区別しない弱々しい感傷主義に堕している。神の正義、罪に対する神の非難、神の聖なる律法の諸要求は、すべて無視されている。人々は十誠は死文であると考えるように教えられる。喜ばせ魅惑するような作り話が人々の感情をとらえ、聖書を自分たちの信仰の基盤とするのを拒否させようとする。以前と同じにキリストは実際には拒まれているのであるが、サタンは人々を盲目にしてその惑わしが見分けられないようにしているのである。

心霊術の欺瞞的な力と、その影響を受けることの危険性を、正しく認めている者はほとんどいない。多くの者は、単に好奇心を満足させるために心霊術に手を出す。彼らはそれをほんとうに信じているのではない。かえって霊の支配に服することを思うと恐怖で満たされる。しかし彼らは、禁じられた地に危険を顧みないで入っていく。そして強大な破壊者が、彼らの意志に反して彼らの上にその力を働かすのである。彼らが一度でもその心をサタンの命令に従わせる気になると、サタンは彼らをとりこにする。サタンの魅惑的な魔力を、自分の力で断ち切ることは不可能である。信仰の熱心な祈りに答えて与えられる神の力だけが、これらの捕えられた魂を解放できるのである。

悪霊との戦い

罪深い性質をほしいままにしたり、知っている罪を故意に抱いている者はみな、サタンの誘惑を招く。彼らは

自分を神から、また神のみ使いの守護から引き離している。悪魔が彼らを惑わすときに、彼らは、守ってくれるものもなく、容易にそのえじきとなる。このようにしてサタンの力に身をゆだねる者は、自分たちの道がどこで終わるかを悟らないのである。彼らを征服してしまうと、誘惑者サタンは、ほかの者を滅びにおびきよせる手先として彼らを用いる。

預言者イザヤはこう言っている。「もし人なんじらにつげて巫女および魔術者のさえずるがごとく細語がごとき者にもとめよといわば、民はおのれの神にもとむべきにあらずや。いかで活者のために死者にもとむることを為んといえ。ただ律法と証詞とを求むべし、彼らの言うところこの言にかなわすば晨光あらじ」(イザヤ書八ノ一九、二〇文語訳)。もし人々が、人間の性質や死人の状態について聖書の中に明らかに述べられている真理を喜んで受け入れていたら、心霊術の主張や現象の中に、力としるしと偽りの不思議とを伴ったサタンの働きを認めるであろう。しかし多くの人々は、肉の思いに都合のよい自由を放棄したり、愛好している罪を捨てたりするよりはむしろ、光に目を閉じ、警告も顧みないで突き進んでいく。するとサタンは、彼らの回りにわなを仕掛け、彼らを捕えてしまうのである。彼らが「自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった」から、「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送」られるのである(テサロニケ第二・二ノ一〇、一一)。

心霊術の教えに反対する者は、ただ人間だけではなくサタンと悪天使たちを攻撃しているのである。彼らは、もろもろの支配と、権威と、天上にいる悪の霊との戦いに入っただのである。サタンは、天の使いの力によって撃退されないかぎり、一歩も退却しようとはしない。神の民は、救い主がなさったように、「……と書いてある」という言葉をもってサタンに対抗することができる。サタンは今もキリストの時と同様に聖書を引用できるので、

自分の惑わしを支持するために、聖書の教えを悪用するであろう。この危険な時に立つとする者は、聖書のあかしを自分で理解しなければならない。

全世界に臨む欺瞞

多くの者は、愛する肉親や友人の姿をしてもっとも危険な異端の説を唱える悪霊たちに直面するのである。これらの来訪者たちは、われわれの最も感じやすい同情に訴え、自分の主張を支持するために奇跡を行なう。われわれは、死んだ者は何事をも知らない、このように現われる者は悪鬼の霊である、という聖書の真理によって彼らに抵抗する用意がなければならない。

今われわれの前には、「地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時」がある（黙示録三ノ一〇）。神のみ言葉の上に信仰を堅く打ち立てていない者はみな、欺かれて敗北する。サタンは人の子らを支配するために「あらゆる不義の惑わしを行い、」彼の惑わしは絶えず増大する。しかしサタンは、ただ人々がその誘惑に自分から負けるときだけその相手を獲得することができる。真理の知識を熱心に求め、服従によって魂を清めるために励み、こうしてその戦いに備えて自分にできるところを行なっている者は、真理の神が確かな保護者であられることを見いだす。「忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも…あなたを防ぎ守ろう」と救い主は約束しておられる（同）。主は、ご自分に頼る魂が一人でもサタンに打ち負かされるままにしておくくらいなら、ご自分の民を守るために天からすべての天使を遣わしたいと思っておられる。

預言者イザヤは、神のさばきの時に自分は安全であると考えさせるような恐ろしい惑わしが悪人たちに臨むことについて、次のように描写している。「われわれは死と契約をなし、陰府と協定を結んだ。みなぎりあふれる災の過ぎる時にも、それはわれわれに來ない。われわれはうそを避け所となし、偽りをもって身をかくしたからである」(イザヤ書二八ノ一五)。ここに描写されている種類の人々の中には、かたくなな悔い改めない心を持ち、罪人に刑罰はないと信じて自分を慰めている者たちが含まれている。すなわち彼らは、人間はどんなに墮落しようという問題ではなく、すべて天にあげられ、神の使いのようになるのだと信じているのである。特に、死と契約をなし、陰府と協定を結んだ者とは、天が悩みの時に義人のために守りとして与えた真理を捨て、サタンが代わりに提供した偽りの避け所、すなわち心靈術の惑わしの主張を受け入れる者のことである。

現代人の盲目

現代人の盲目は、言い表わしようのないほど驚くべきものである。幾千の人々が神のみ言葉を、信じる価値がないものとして拒み、サタンの惑わしを非常な確信をもって受け入れる。懷疑主義者や嘲笑家たちは、預言者たちと使徒たちの信仰を強く主張する者の頑固さを攻撃する。そして、キリストと救いの計画について、また真理を拒む者の上に臨む刑罰について、聖書に厳肅に宣言されていることを、公然と嘲笑して気をまぎらわす。彼らは、神のご要求を認めてその律法の要求に従うような、狭く弱く迷信的な精神を大いにあわれんでいるかのような態度を取る。彼らは実際、あたかも死と契約をなし、陰府と協定を結んだかのように、すなわち、あたかも自

分たちと神の刑罰との間に、通ることも突き抜けることもできない壁を打ち立ててしまったかのように、大いなる確信を示す。彼らの恐怖を引き起こすことができるものは何もない。彼らは、完全に誘惑者に屈服し、それと緊密に結合し、その精神をすっかり吹き込まれているので、誘惑者のわなを断ち切る力も気力もない。

サタンは世界を惑わす最後の努力をなすために、長い間準備してきた。彼の働きの基礎は、エデンにおいてエバに与えた保証——「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」という言葉におかれている(創世記三ノ四、五)。サタンは、心霊術の発展の中に、その惑わしの傑作のための道を少しずつ備えてきた。彼はまだ自分の陰謀を完成してはいない。それは最後の残りの時に達成されるのである。預言者はこう言っている。「また見ると、…かえるのような三つの汚れた霊が出て来た。これらは、しるしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼らを召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするためであつた」(黙示録一六ノ一三、一四)。み言葉を信じる信仰によって、神の力に守られている者を除いて、全世界は、この惑わしの隊列の中にまきこまれる。人々は致命的な安心感へと急速に誘い込まれているので、神の怒りが降下して初めて目をさますのである。

主なる神は言われる。『わたしは公平を、測りなわとし、正義を、下げ振りとする。ひようは偽りの避け所を滅ぼし、水は隠れ場を押し倒す。』その時あなたが死とたてた契約は取り消され、陰府と結んだ協定は行われぬ。みなぎりあふれる災の過ぎるとき、あなたがたはこれによって打ち倒される」(イザヤ書二八ノ一七、一八)。

第三十五章

良心の自由の危機

カトリックは変わったか

今日ローマ・カトリック教は、プロテスタントから、過去の時代よりもはるかに好感をもってみられている。カトリック主義が優勢ではなくて、カトリック教会が勢力を得るために融和的な態度をとっている国々においては、改革主義の教会を法王教から区別する教理に対して、ますます関心が薄らいできている。結局われわれは、主要な点では今まで考えられてきたほど広く隔たつてはいない、われわれの側のわずかな譲歩によってローマとのより良い理解がもたらされるであろう、という意見が有力になってきている。高い犠牲を払って贖った良心の自由に、プロテスタントが高い価値を置いた時代があった。彼らは子供たちに法王教をきらうように教え、ローマと一致しようとすることは神に対して不忠実であると主張した。しかし今日表明される意見は、なんととはなは

だしく異なっていることであろう。

法王教の擁護者たちは、この教会が中傷されてきたと言い、プロテスタント側はこの主張を認める傾向がある。多くの者は、無知と暗黒の時代に教会の統治の特徴であった憎むべき行為や不合理をもって、今日の教会をさばくのは正しくない、と主張する。彼らは法王制の恐ろしい残酷な行為を、野蛮な時代の結果であると弁解し、近代文明の影響がこの教会の考えを変えたと弁護する。

これらの人々は、この高慢な権力によって八百年の間無謬説が唱えられたことを忘れてしまったのである。この主張は捨てられるどころか、十九世紀に入って、以前にもまして積極的に主張されたのである。ローマ教会は、「教会はこれまで決して誤ったことはなかった、また聖書によれば、これからも決して誤りを犯すことはないのである」と主張しているのだから、過去にそのやりかたを支配していた主義をどうして放棄することがあるだろうか。

良心の自由とローマ・カトリック

カトリック教会は無謬の主張を決してやめないであろう。この教会は、その教義に反対する者を迫害するために行なったすべてのことを、正しいと主張する。とすれば、機会があつたら同じ行為をくり返すのではなからうか。現在諸国家の政府によって課せられている数々の拘束が取り除かれ、ローマが以前の権力を取りもどすとき、たちまち圧制と迫害が復活するであろう。

ある有名な著述家は、良心の自由に関する法王政治の態度について、またその政策の成功が特にアメリカ合衆国を脅かす危険について、次のように語っている。

「アメリカ合衆国におけるローマ・カトリック教を恐れることは、頑迷である、あるいは幼稚であると見なしがちな者が多い。このような者は、ローマ・カトリックの性格と態度の中にわれわれの自由な制度に敵するものがあることを全然見ていないか、それとも、この教会の発展の中に不吉なものをなんら見いだしていないかである。そこでまず、米政府の基本的な原則のうちのいくつかを、カトリック教会の原則と比較してみたい。

アメリカ合衆国の憲法は、**良心の自由**を保証している。これ以上貴重で根本的なものはない。法王ピオ九世は、一八五四年八月一五日の回勅の中で『良心の自由を擁護するという不合理で誤った教理あるいはたわごととは、きわめて有害な誤謬、すなわち、国家にとってほかの何よりも恐れねばならない病毒である』と言った。同じ法王は、一八六四年一二月八日の回勅の中で、『良心の自由と、宗教上の礼拝の自由を主張する者』また『教会は暴力を用いてはならないと主張するすべての者』をのろった。

米国におけるローマの穏やかな態度は、心の変化を意味するのではない。この教会は自分が無力であるところでは寛大である。オコンナー司教は、『カトリックの世界に危険を及ぼすことなく反対政策を実施できるようになるまで、信教の自由をがまんしているにすぎない』と言っている。…セントルイスの大司教は、かつて次のように語った。『異端や不信仰は犯罪である。だから、たとえばイタリアやスペインのように、すべての人がカトリック教徒であって、カトリック教がその国の法律の不可欠の一部となっているキリスト教国においては、こうしたことは他の犯罪と同様に処罰される』。

カトリック教会のすべての枢機卿、大司教、司教が、法王に対して、忠誠の宣誓を行なうが、その中に次のような言葉がある。『われわれの上記の主(法王)、またはその後継者に対する異端者、分離者、反逆者たちは、私が全力をあげて迫害し阻止する』。^二

法王制の本質

ローマ・カトリック教会の中に真のキリスト者たちがいることは事実である。この教会の幾千の者は、自分たちに与えられている最善の光に従って神に仕えている。彼らは、神の言葉を手に入れることが許されていない。だから彼らは、真理に気がつかないのである。彼らは、生きた、心からの奉仕と、単なる形式や儀式のくり返しとの間の、著しい相違に気づいたことがなかった。うわべだけの、満たされない信仰の中で教育されたこれらの人々を、神はやさしいあわれみをもってごらんになる。神は、彼らをとりまいていて濃い暗黒に光が射し込むようにされる。神がイエスのうちにある真理を彼らに示されるので、やがて多くの者が神の民とともに立つのである。

しかし一つの制度としてのローマ・カトリックは、この教会の歴史上のどの時代においてもそうであったように、今日でもキリストの福音と調和するものではない。プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。そうではない、彼らは時のしるしを見分けるはずである。ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる

る手段を用いている。カトリック教は至るところに地歩を占めつつある。プロテスタント諸国において、カトリックの教会や礼拝堂が数をましているのを見られよ。米国において、カトリック教の大学や神学校が人気を集め、プロテスタントに広く後援されているのを見られよ。英国における儀式主義の発展や、カトリック教会へ入るために新教から脱落する者が多いことを見られよ。こうした事柄は、福音の純粋な原則を尊ぶすべての者が憂慮しなければならないことである。

プロテスタントは法王制によけいな手出しをし、後援してきた。彼らは、法王教徒自身が見て驚き、理解しかねるような妥協と譲歩をしてきた。人々は法王制の真の性格、またこの教会が支配権を得たとき心配される危険に対して目を閉じている。政治的また宗教的自由に対するこの最も危険な敵の進出に反対するように、人々は目ざめる必要がある。

カトリックの欺瞞的魅力

多くのプロテスタントは、カトリックの宗教は魅力がなく、その礼拝は退屈で、無意味な儀式のくり返しであると思っている。この点彼らはまちがっている。ローマ・カトリック教は、偽りに基づいているとはいえ、粗野で見苦しい欺瞞ではない。カトリック教会の礼拝は、きわめて印象的な儀式である。その豪華で荘厳な儀式は、人々の感覚を魅了し、理性と良心の声を沈黙させるのである。目は魅せられる。壮麗な教会堂、堂々たる行列、金色の祭壇、宝石をちりばめた聖遺物の箱、えりぬきの絵画、そして、精巧な彫刻などが、美を愛する心を魅了

する。耳もまた恍惚とさせられる。その音楽は絶妙無比である。オルガンの豊かな音色が、聖歌隊の多くの歌声と相和して、大聖堂の高い円天井と円柱の立ち並ぶ通廊に響き渡り、人々の心に畏敬と尊崇の念を起こさずにはいないのである。

こうした外見上の壮麗さと虚飾と儀式は、罪に悩む魂の渴望を満たすように見せかけるものにすぎず、内面の腐敗を示すものである。キリストの宗教は、人々の受けをよくするためのそういった呼びものを必要としない。真のキリスト教は、十字架から輝く光に照らされて、実に純潔で美しく見えるので、その真価を高めるためのなんの外面的装飾も必要ではないのである。神が価値を認められるのは、聖潔の美であり、柔和でおだやかな精神の美である。

すぐれた文体は、必ずしも純粹で高尚な思想を示すものではない。芸術上の高尚な観念、微妙に洗練された趣味は、現世的で肉欲的な心の中にもよくある。これらはしばしばサタンに用いられて、人々に、魂の必要を忘れさせ、将来と永遠の生命を見失わせ、無限の援助者であられる神から離れさせ、現世のためだけに生きるようにさせるのである。

形式的な宗教は、生まれ変わらない心にとって魅力がある。カトリック教会の礼拝の虚飾や儀式は、魅惑的な力を持っており、それによって多くの者が欺かれる。そして彼らはローマ教会をほんとうの天の門と見るようになる。その足を真理の土台の上に堅く置いて、その心を神のみ霊によって新たにする者でなければ、法王制の影響に耐えることはできない。キリストについての経験的知識を持っていない幾千の者は、力のない形だけの敬虔さを受け入れるようになる。そのような宗教こそ大衆が望むところのものなのである。

「神の代理者」

カトリック教会は罪を許す権威があると主張しているために、信者たちは罪を犯してもかまわないと思うようになる。また、それなしには教会の許しは与えられないという告解の儀式は、悪を承認するのにも役立っている。墮落した人間の前にひざまずき、心の中の隠れた思想や思いを打ち明けて告白する者は、自分の人格を汚し、その魂のあらゆる気高い性質を墮落させているのである。人間は、自分の生活の罪を司祭——誤りがあり、罪深く、死すべき者で、しばしば酒と放蕩のために腐敗した人間——に告白することによって、品性の標準は低下し、彼はそのため汚されるのである。神に関する彼の観念は、墮落した人間の姿に下落する。なぜなら、司祭が神の代理として立つからである。人間が人間に行なうこの下劣な告白は、世界を汚して最後の破滅に陥れている罪惡の多くが流れ出た秘密の泉である。しかし、放縱を愛する者にとっては、心を神に開くよりは、同じ人間に告白するほうが好ましいのである。人間の性質として、罪を捨てるよりは苦行をするほうが、好みに合うのである。肉の欲を十字架につけるよりは、麻布といらくさと皮膚をすりむく鎖によって肉体を苦しめるほうが、やさしいのである。肉の心は、キリストのくびきに服すよりはむしろ、重いくびきであつても自分から進んで負おうとするのである。

ローマ教会とキリスト初臨当時のユダヤ教会の間には、著しい類似点がある。ユダヤ人は、神の律法のすべての戒めをひそかに踏みにじっていないながら、外面的にはその戒めを厳格に守り、それに苛酷な要求と言い伝えを付け加えて、服従することを苦痛とし重苦しいものとしていた。ユダヤ人たちが律法をあがめると公言したように、カトリック教徒も、十字架をあがめると主張している。彼らは、キリストの苦惱の象徴を高める一方において、

それが表わしているところの主を、その生活において拒否しているのである。

カトリック教徒は、その教会、祭壇、衣服に十字架をつける。至るところに、十字架のしるしが見られる。至るところで、それは、外面的に崇敬され、高められている。しかし、キリストの教えは、多くの無意味な伝説、偽りの解釈、厳格な規則の下に埋もれている。頑迷なユダヤ人に関する救い主の言葉は、ローマ・カトリック教会の指導者たちに、いっそう大きな迫力をもって当てはまる。「また、重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない」(マタイ二三ノ四)。良心的な人々が、怒った神の復讐に絶えずおののいているにもかかわらず、教会の高位にある者たちの多くは、ぜいたくな暮らしをして、享樂をほしいままにしているのである。

聖画像や聖遺物の崇敬、聖徒たちへの祈り、また法王崇拜は、人々の心を神と神のみ子から引き離すサタンの策略である。サタンは、人々を滅ぼしてしまうために、救いを見いだすことのできる唯一のおかたから彼らの関心をそらすと努めている。彼は、「すべて重荷を負って苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と言われたおかたに代わることができる何かの対象物に、人々を向かわせるのである(マタイ一一ノ二八)。

迫害の歴史

サタンは、神のご品性、罪の性質、また大争闘において問題となっている真の論争点について、誤解させよう

とたえず努力している。サタンの詭弁によって神の律法に対する義務は弱められ、人々は罪を犯すことをなんとも思わなくなる。同時にサタンは、人々が愛をもって神を見るより、恐れと憎しみをもちて見るようにと、神に關して誤った考えを抱かせようとする。サタンは自分自身の固有の品性である残酷さを創造主におしつける。それは宗教組織に織り込まれ、礼拝の様式の中に表現されている。このようにして人々の心は盲目にされ、サタンは、神と戦うために彼らを自分の手先として獲得する。神の属性についての誤った考え方によって、異教の国民は、神の恩恵を得るためには人間の犠牲が必要であると信じるようになった。そしてさまざまな形の偶像礼拝のもとに、恐るべき残酷な行為が行なわれてきた。

ローマ・カトリック教会は、異教とキリスト教との形式を結合したものであり、異教と同じに神のご品性をまちがって伝え、異教におとらないほど残酷でいまわしい慣習を用いてきた。ローマ法王の至上権時代には、教会の教理に対する同意を強制するために拷問の道具があつた。教会の主張に譲歩しない者のためには火刑柱があつた。審判においてはつきりさせられるまでは決してわからないほどの規模の虐殺があつた。教会の高僧たちは、彼らの主人であるサタンの下で、その犠牲者に死を与えることなく最大の苦痛を与える方法を発明しようと苦心した。多くの場合、恐ろしい拷問は、人間の耐久力の限界までくり返された。そして犠牲者は力がつき果てて、死を快い解放として喜んで迎えるのであつた。

これがローマ教会の反対者たちの運命であつた。また教会の信者に対しては、考えられるかぎりのあらゆる悲痛な形において、むち打ちや飢餓や身体の苦行などによる訓練をした。ざんげ者は、天の神の恩恵を得るために自然の法則を犯すことによって、神の律法を犯していた。彼らは、神が人間の地上の生涯を祝福し喜ばせるために作ら

れたきずなを、断ち切るように教えられた。自然な愛情を抑圧し、同胞に対するあらゆる同情の思いと心情を、神に敵するものとしておさえつけようとむなしい努力をして一生を送った無数の犠牲者が、墓地に横たわっている。神のことを聞いたことのない人々の間ではなく、キリスト教世界の中心とその全域において、幾百年の長きにわたってあらわされたサタンの徹底的残酷さを知ろうと思えば、ローマ・カトリック教会の歴史を見さえすればよいのである。この巨大な欺瞞の組織を通して、悪の君サタンは、神の栄えを汚し、人間を悲惨に陥れる彼の計画を成し遂げる。そして、サタンが姿を変えて、教会の指導者たちによって自分の目的を達成するのを見るときに、われわれは、彼がなぜ聖書を非常にきらうかという理由を、よく理解できるのである。もし聖書を読むならば、神の慈悲と愛とがよく理解される。神はこのような重荷を何一つ人間に負わせられないことがわかる。神がお求めになるものは、砕けた悔いた心、へりくだって服従する精神だけである。

キリストなしのキリスト教

キリストは、天にふさわしくなるために男も女も修道院の中に閉じ込めるといような手本は、ご自分の一生をとあして一つもお与えになっではない。キリストは、愛と同情が抑制されなければならないとは決してお教えにならなかった。救い主の心は愛にあふれていた。人は道德的完全さに近づくにつれて、その感覚は鋭くなり、罪をいっそう鋭く感ずるようになり、苦しむ者に対する同情がますます深くなる。法王はキリストの代理者であると主張しているが、彼の品性はわれらの救い主のご品性とどのようにくらべることができるであろうか。天の

王としての尊敬を自分に示さないからといって、キリストが人々を牢獄や拷問台に渡されたということがあっただろうか。ご自分を受け入れない者を死に定めるみ声が聞かれただろうか。主がサマリヤの村で人々に侮辱を受けられたとき、使徒ヨハネは怒りに満たされて、「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまおうように、天から火をよび求めましょうか」とたずねた。イエスはこの弟子をあわれみをもってごらんになり、「人の子は、人の命を滅ぼすために来たのでなく、救うために来たのだ」と言われて、彼の粗暴な精神を戒められた(ルカ九ノ五四、五六英語訳参照)。キリストによってあらわされた精神と、その自称代理者の精神との間には、なんという違いがあることだろう。

現在ローマ教会は、その恐ろしい残虐行為の記録を弁解しながら隠し、世界にもっともらしい顔を見せている。この教会はキリストのような衣を装っている。しかし教会は変わっていない。過去に存在した法王制のあらゆる原則は、今日も保持されている。最も暗い時代に案出された数々の教理は、今もなお支持されている。だれも欺かれてはならない。今日プロテスタントが尊敬しようとしている法王制は、宗教改革の時代に世界を支配していたのと同じものである。その時神の民は、自分の生命の危険をおかして、この教会の悪を暴露するために立ち上がったのであった。教会は、かつて王たちや諸侯たちの上に君臨し、神の大権を主張した時と同じ誇りと尊大不遜な心を持っている。今日もこの教会の精神は、かつて人間の自由を押しつぶし、いと高き者の聖徒たちを殺した時と同じに残酷であり、専横である。

法王制はまさしく、預言の中でこのようになると言われているとおりのもので、すなわち終末時代の背教である(テサロニケ第二・二ノ三、四参照)。自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教

会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している。「異端者もしくは異端の嫌疑ある者との誓約は守ってはならない」と教会は明言している。^三 千年にわたるその記録が、聖徒の血によって書かれているこの権力が、今日キリストの教会の一部として承認されてよいであろうか。

プロテスタントの変質

カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たつてはいないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないではない。そこには変化があつたのである。しかしその変化は、法王制の中にあつたのではない。なるほどカトリック教は、今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまつたからである。

プロテスタント諸教会は世の関心を求めたために、誤つた愛がその目を見えなくした。彼らはどんな悪の中にも善いものがあると信ずることは正しいことである、と思い込んでいる。だからその必然的な結果として、ついにはすべての善いものの中に悪なるものを信ずるようになるのである。かつて聖徒たちに伝えられた信仰を守つて立つとしない、彼らは今や、いわばローマに対して無情な意見を抱いていたことを陳謝し、自分たちがかたくなであつたことに対して許しを求めているのである。

大多数の者は、法王制に対して好意をもっていない人たちでさえ、この教会の権力と影響からくる危険をほと

んど理解していない。多くの者は、中世をおおっていた知的道德的暗黒は、法王制の教義、迷信、压制を広げるのに役立ったが、現代のすべれた知性や、知識の普及、また宗教問題に関する自由の増大は、不寛容や専制政治の復興を押しとどめている、と主張する。この文明の時代にそのような事態が存在するというような考え方は、嘲笑される。知的、道德的、宗教的な大きな光がこの時代に輝いているということは事実である。神の聖なるみ言葉が開かれて、天よりの光が世界を照らしてきた。しかし、いっそう大きな光が与えられれば与えられるほど、それを曲解し、拒む者の暗黒はますますひどくなるということを忘れてはならない。

祈りをもって聖書を研究するとき、プロテスタントは法王制の本性を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる。しかし多くの者は、自分では賢いと思っているために、真理に導かれるために謙遜に神を求めることの必要を感じていない。彼らは自分たちの進歩を誇っているが、聖書も神の力も知らない。彼らは自分たちの良心を沈黙させる何かの手段がどうしてもほしいので、最も靈的ではないもの、最も自尊心を傷つけないものを求める。彼らが願うものは、神を覚える方法として通用して、その実は神を忘れる方法である。法王制はこれらすべての欲求によくかかっている。それはほとんど全世界を包含する二種類の人々——自分の功績によって救われようとする者と、罪の中にあって救われようとする者——のために用意されている。ここにその権力の秘けつがある。

知的大暗黒の時代は法王制の成功に都合がよかったように見られてきた。しかし大いなる知的進歩の時代もその成功にとつて同じく都合がよいことが、実際に示されるであろう。神のみ言葉もなく、真理の知識もなかった過去の時代には、人々の目は欺かれ、幾千の者は、自分たちの足もとに張られた網が見えないでわなに捕えられた。今の時代には、「偽りの知識」である人間的思索のはなやかな光に目をくらまされている人が多い。彼らは

網に気づかず、目隠しされたようにたやすくそれに入り込んでしまう。神は、人間の知的能力がその造り主からの賜物とみなされ、真理と義の奉仕に用いられるよう計画なさった。しかし、人々が高慢と野望を抱き、神のみ言葉よりも自分自身の説を高めるとき、知識は無知よりも大きな害を与え得るのである。こうして、聖書の信仰の基礎を覆す現代の偽りの知識は、知識の抑圧が暗黒時代に法王制拡大強化の道を開くのに成功したように、人の喜び形式をもった法王制が受け入れられる道を備えることに成功するのである。

アメリカにおける宗教界の傾向

教会の制度と慣習に対して国家の支持を得るために目下米国で進行している運動において、プロテスタントはカトリック教徒の例にならっている。いやそればかりか、彼らは法王制が旧世界において失った至上権を、プロテスタント・アメリカにおいて再び得るための戸を開いているのである。そしてこの運動にもっと重大な意義を与えるものは、そこに企図されている主要な目的が日曜日遵守——ローマ法王制に始まり、この教会がその権威のしるしとして主張する慣習——の強制であるという事実である。プロテスタント諸教会にゆきわたり、法王制がかつて行なった日曜日尊重の働きと同じことをするようプロテスタント教会を導いているものは、法王制の精神、すなわち、世俗的習慣への一致の精神、神の戒めよりも人間の言い伝えを尊重する精神である。

もし読者が、まもなく起ころうとしている戦いにおいて用いられる手段を理解したければ、過去の時代に同じ目的のためにローマが用いた手段の記録をたどるだけでよい。法王制とプロテスタントが合同して、彼らの教義を拒む

者をどのように扱うかを知りたいならば、ローマが安息日とその擁護者たちに対して表わした精神を見ればよい。世俗の権力に支持された勅令、宗教会議、教会礼典などによって、異教の祭日がキリスト教界に高い地位を獲得していった。日曜日遵守を強いる最初の法令は、コンスタンティヌスによって制定された法律であった(紀元三二一年・付録参照)。この法令は、町の住民には「この尊ぶべき太陽の日」に休むことを要求したが、農民には農業に従事することを許した。実質的には異教の法令であったけれども、それは皇帝がキリスト教を名目上受け入れた後、皇帝によって施行されたのである。

勅令は神の権威に十分に代わり得るものとならなかったで、王侯の寵遇を求めた司教で、コンスタンティヌスの特別な友人であり、追従者であったエウセビウスは、キリストが安息日を日曜日に移されたという主張を持ち出した。この新しい教理を証明するのに、聖書のあかしは一つも示されなかった。エウセビウス自身も無意識のうちにその誤りを認め、この変更の真の創始者を指摘している。「安息日になすべき義務はどんなことでもすべて、われわれが主の日に移した」と彼は言っている^四。しかし、根拠がないにもかかわらず、日曜日についての議論は、人々に主の安息日を大胆にふみにじらせた。世の尊敬を受けたいと願う者はすべて、この俗受けのする祭日を受け入れた。

日曜休業令とその影響

法王制が確立されるにつれて、日曜日尊重の運動が続けられた。一時は、人々は教会に出席しないときには畑

仕事に従事し、第七日は依然として安息日とみなされていた。しかし、変更は着々と成し遂げられた。聖職にある者は、日曜日にはどんな民事紛争の判決をすることも禁じられた。その後まもなく、どんな階級の者でも、すべての人は、自由人は罰金、奴隷は打ち打ちの刑罰をもって、通常の労働をやめさせられた。後に、金持ちはその財産の半分の没収をもって罰せられることが命令された。そしてついには、なお強情ならば、彼らを奴隷にするという法令がでた。下層階級の人々は、一生の間追放の刑罰を受けるのであった。

奇跡も利用された。いろいろの不思議な話の一つとして、ある農夫が日曜日に畑を耕そうとして、鉄片ですきをみがいていたら、その鉄片が彼の手にしっかりとくっついたので、二年の間彼は「ひどい痛みと恥」をこらえて、それを身につけていたということが伝えられた。^五

のちに法王は、教区司祭に、日曜日を犯す者たちを訓戒し、彼らが自分自身や隣人の上に大きな災害を招くことがないように教会へ行って祈りをささげるよう勧めることを命じた。教会会議は、日曜日に働いていた者たちが雷に打たれたから、この日は安息日に違いない、という論法を持ち出した。これは、その後も広く用いられ、新教徒さえ採用したものである。高位聖職者たちは、「この日を彼らがなざりにすることを、神がどんなに嫌悪されるか明らかである」と言った。さらに、司祭や聖職者たち、王侯や貴族たち、そしてすべての忠実な人々は、「この日の栄誉を回復し、キリスト教のために、今後ますます熱心に遵守するよう、彼らの全力をあげて、努力し配慮すること」が要請された。^六

会議の決議に基づく布告では不十分なことがわかったと、教会は、人心に恐怖を与えて日曜日に労働をやめるように強制する法令を發布するよう、政府当局に懇請した。ローマで開かれた宗教会議においては、従来のすべて

の決定について、さらに大きな強制力と厳格さが再確認された。それらはまた教会法の中に加えられ、ほとんど全キリスト教国にわたって政府当局によって施行された。^七

偽造文書による権威づけ

日曜日遵守に関して聖書上の権威がないことはなお、少なからぬ困惑を引き起こした。人々は、太陽の日をあがめるために「七日目はあなたの神、主の安息である」という神の明白な宣言を退ける自分たちの教師の権威に、疑問を抱いた。聖書の証言がないのを補うために、ほかの工夫が必要となった。十二世紀の終わりごろ英国の教会を訪れたある熱心な日曜日擁護者は、真理の忠実な証人たちの抵抗を受けた。そしてその働きはほとんど効果がなかったのだ。彼はしばらくその国を離れ、自分の教えを強要するなんらかの手段を考案した。彼がもどってきたとき、その欠陥は補われ、その後の働きに大きな成功をおさめた。彼は、神ご自身からのものであると称する一巻の巻き物を持ってきた。それには日曜日遵守に必要な命令が書かれていて、それに服従しない者を恐れさせるような恐ろしい脅しが付け加えられていた。この貴重な文書——それが支持する制度と同様悪質な偽物——は、天から降下したもので、エルサレムのゴルゴタの聖シメオン寺院の祭壇の上で発見されたものであると言われた。しかし実際は、ローマにある法王の宮殿が、それを生んだ出所である。教会の勢力と繁栄を進展させるための詐欺や偽造行為は、どの時代においても、法王制によって合法とみなされてきたのである。

この巻き物は、土曜日の午後三時から日曜日の日の出まで、労働を禁じていた。そして、その権威は、多くの

奇跡によって確証されたと言われていた。定められた時間が過ぎても働いていた人は、体がまひしたと言い伝えられた。粉屋が穀物をひこうとしたところ、粉の代わりに血が吹き出し、水は勢いよく流れているにもかかわらず、水車は動かないのであった。また、生パンをオーブンに入れた婦人は、オーブンは非常に熱かったにもかかわらず、それを出してみたら生であった。また、別の婦人は、生パンを焼くために三時に用意したが、それを月曜日までとっておくことにしたところ、次の日、それが神の力によって、パンの形にこねられ焼かれているのを見つけた。土曜日の午後三時以後にパンを焼いた人は、翌朝パンをさいたところ、そこから血が流れ出た。このような途方もない迷信的な作りごとによって、日曜日の擁護者たちは、その神聖さを確立しようとしたのであった。^ハ

英国におけると同様に、スコットランドにおいても、昔からの安息日の一部を日曜日と結合することによって、日曜日をもっと尊ぶことを確立した。しかし、聖く守るべき時間は、いろいろと異なっていた。スコットランド王の勅令は、「土曜日は、正午から神聖なものとする」ことを宣言し、その時間から月曜日の朝までは、だれも世俗の仕事に従事してはならなかった。^九

しかし、日曜日の神聖を確立するためにあらゆる努力をしているにもかかわらず、カトリックの聖職者たちは、安息日の神聖な権威と、それに取って代わった制度が人間から出たものであることを、公然と認めた。十六世紀に、法王庁会議は次のように明白に宣言した。「すべてのキリスト者は、第七日が神によって聖別され、ユダヤ人のみならず、神を礼拝するように見せかけるすべての者によって受け入れられ、守られてきたことを覚えねばならない。しかし、われわれキリスト者は、彼らの安息日を主の日に変えたのである。」^{一〇}神の律法に不正な変更を加えていた者たちは、自分たちの行為の性質を知らなかったのではなかった。彼らは故意に自らを神の上に置

いたのである。

暗黒時代の歴史

自分たちと一致しないものに対するローマ教会の方針についての著しい例は、そのある者たちが安息日遵守者であったフルド派(フルデンセス)への長期間にわたる残忍な迫害の中にみられた。ほかにも第四条の戒めに対する忠誠のゆえに、同様な方法で苦しみを受けた者たちがあった。エチオピアとアビシニアの教会の歴史は特に意義がある。暗黒時代の暗やみの中で、中央アフリカのキリスト者たちは世界から見落とされ忘れられて、幾世紀にもわたって自分たちの信仰を実践する自由を享受した。しかし、ついにローマ教会が彼らの存在を知り、まもなくアビシニアの皇帝はだまされて法王をキリストの代理者として承認した。続いてその他の譲歩が行なわれた。最もきびしい刑罰の下に、安息日の遵守を禁ずる法令が發布された。^二しかし、まもなく法王の暴政は非常に耐えがたいくびきとなったので、アビシニア人は自分たちの首からそれを断ち切る決心をした。恐ろしい戦いの後、ローマ教徒たちは国外に追放され、昔からの信仰が回復された。教会は自分たちの自由を喜んだ。そしてローマの惑わしと狂信と専制権力に関して学んだ教訓を決して忘れなかった。彼らはその孤立した地域で、他のキリスト教国に知られないでいることに満足していた。

アフリカの教会は、カトリック教会が完全に背信する前に守っていたように、安息日を守っていた。彼らは、神の戒めに従って七日目を守っていたが、教会の習慣に従って、日曜日に仕事をするのを避けていた。ローマ

は、至上権を獲得するに及んで、神の安息日をふみにじって教会自身の日を高めた。しかし、アフリカの諸教会は、千年近くの間隠されていて、この背信に加わらなかった。ローマの権力下に陥ってから、彼らは、真の安息日を捨てて偽りの安息日を高めるよう強制された。しかし彼らは、独立を回復するや否や、第四条の戒めの服従に立ちかえった(付録参照)。

過去のこうした記録は、真の安息日とその擁護者たちに対するローマ教会の敵意と、この教会が作りあげた制度に尊敬を払わせるために教会が用いた数々の手段を、はっきりあらわしている。神のみ言葉には、ローマ・カトリックとプロテスタントが日曜日を高めるために協力するとき、これらの光景がくり返されるということが教えられている。

「死ぬほどの傷」がなおる

黙示録一三章の預言には、小羊のような角をもつ獣によって象徴された権力が、「地と地に住む人々」に、法王権——そこでは「ひょうくに似て」いる獣によって象徴されている——を礼拝させるということが、はっきり述べられている。二つの角を持つその獣は、また「獣の像を造ることを、地に住む人々に」語る。さらにそれは、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも」すべての人々に、獣のしるしを受けるように命じる(黙示録一三ノ一一―一六)。米国が小羊のような角をもつ獣によって象徴された権力であることと、ローマ教会が自分の至上権を特に承認するものであると主張する日曜日遵守を米国が強制す

る時に、この預言が成就するということとは、すでに明らかにされた。しかし、法王制に忠順の意を表わすのは米国だけではない。かつてローマ教会の支配を承認した国々におけるローマ教会の影響力は、なお破壊されずに強く残っている。そして預言にはその権力の回復が予告されている。「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで全地の人々は驚きおそれて、その獣に従った(同二三ノ三)。死ぬほどの傷を受けたとは、一七九八年の法王権の失墜をさしている。この後、「その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従った」と預言者は言う。パウロは「不法の者」が再臨の時まで存続するということをはっきり述べている(テサロニケ第二・二ノ三―八参照)。時の終わりに至るまで、彼はその惑わしの働きを続けるのである。また黙示録記者は法王権に関して、「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名……をしるされていない者はみな、この獣を拜むであろう」と述べている(黙示録一三ノ八)。旧大陸においても新大陸においても、ローマ教会の権威だけに基づいている日曜日制度をあがめることによって、人々は法王制に忠順の意を表明するのである。

十九世紀の半ば以来、米国の預言研究者たちは、このあかしを世に発表してきた。今日起こっている数々のできごとの中に、その預言の成就に向かつての急速な進展が見られる。神からの命令に代えてそこを補うために奇跡を捏造した法王教の指導者たちと同じに、プロテスタントの教師たちも、日曜日遵守には神の権威があると主張するが、やはり同じように、聖書上の証拠に欠けている。日曜安息日の違反に対して人々に神のさばきが臨むという主張がくり返されるであろう。すでにそうした主張が始まっている。そして日曜日遵守を強制する運動は確実に勢力を得てきている。

ローマ教会の将来

ローマ教会の抜け目なさや狡猾さには驚くべきものがある。この教会は、何が起るかを讀みとることができ。法王教は、プロテスタント教会が偽りの安息日を承認して忠順を表わしていることや、過去に法王教自身を用いたのと同じ手段で、プロテスタント教会がそれを強制する準備をしていることを見て、時機を待っている。真理の光を拒む者たちが、ローマ教会が起こした一つの制度をあがめるために、この無謬を自称する権力の助けを求める時が来るであろう。ローマ教会がこの働きにおいて、すぐプロテスタント教会に助けの手をさしのべるであろうことは、想像にかたくない。教会に服従しない者をどう取り扱うべきかを、法王教の指導者たち以上によく知っている者はいないであろう。

ローマ・カトリック教会は全世界にわたって根を張り、法王庁の支配下にあつてその利害に役立つよう計画されている一大組織を形成している。全世界のあらゆる国において、聖餐にあずかる幾千万の者たちは、法王に対する忠誠を堅く保つように教えられている。国籍や政府がどうであろうと、彼らは教会の権威をほかのいっさいのものの上にあるものとみなさなければならない。彼らは国家に忠誠を誓うかもしれないが、その背後には、ローマに対する服従の誓約があつて、教会の利益に反する場合には、国家に対するどんな誓いも破ってもよいことになっている。

歴史は、教会がたくみに根気よく国事に入り込む努力を続け、一度足場を得てしまうと、王侯や人民を破滅さ

せてでも教会自身の目的を進めることを証明している。一二〇四年に、法王インノセント三世は、アラゴン王ペドロ二世にむりやり次のような異常な誓約を強制した。「わたくしアラゴン王ペドロは、わが主なる法王インノセント及びその正統なる後継者並びにローマ教会に対して、絶えず忠実かつ従順であること、また、カトリックの信仰を擁護し、異端に墮落した者を迫害して、法王に対するわが国の服従を保つことを、ここに明言し、約束する。」^二このことは、「法王が皇帝を廃することは合法である」、「法王は不正な統治者の臣下には、その王に対する忠誠を免ずることができない」、という法王権に関する主張と一致している。^三（付録をも参照）

さし迫った危険

また、ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない。グレゴリー七世やインノセント三世の主義は、今なおローマ・カトリック教の主義である。そして教会がもしひとたび権力を持つならば、過去の場合と同じ勢力をもって、その主義を行動に移すであろう。プロテスタントが日曜日をあがめる運動において、ローマ教会の助けを受け入れようと企てるとき、彼らは自分たちのしていることがわからないのである。プロテスタントが自分たちの目的の達成に夢中になっている間に、ローマ教会は、その権力を再び確立して、失われた至上権を回復することをねらっているのである。教会が国家の権力を用いたり、支配したりするような、また宗教上の制度が国家の法律によって強制されるような、すなわち、教会と国家の権威が良心を支配するような、そのような原則が米国にひとたび確立されるならば、この国におけるローマ教会の勝

利は確実なものとなる。

神のみ言葉はこのさし迫った危険について警告を与えてきた。これが顧みられないならば、プロテスタントの世界は、ローマ教会の目的が実際に何であったかを知ったときには、もはや手遅れになってそのわなを逃れることができないであろう。ローマ教会は黙々としてその勢力をのばしつつある。その教えは議会に、教会に、また人々の心に影響を及ぼしている。法王制は堂々たる大建造物を築き上げているが、その奥まった部屋では昔の迫害がくり返されるであろう。自分が手を下す時が来たら自分自身の目的を押し進めるために、教会は、ひそかに、そしてあやしまれないように、勢力をのばしつつある。この教会が何よりも望むものは、有利な立場である。そしてこれはすでに教会に与えられつつある。われわれはローマ教会の真の目的が何であるかをまもなく見、かつ感じるであろう。神のみ言葉を信じ、それに従う者はだれでも、そのことによって非難と迫害を受けるであろう。

注

- 一 John L. von Mosheim, "Institutes of Ecclesiastical History," book 3, century 11, part 2, chapter 2, section 9, note 17.
- 二 Josiah Strong, "Our Country," ch. 5, pars. 2—4.
- 三 Lefant, vol. 1, p.516.
- 四 Robert Cox, "Sabbath Laws and Sabbath Duties," p.538.
- 五 Francis West "Historical and Practical Discourse on the Lord's Day," p.174.
- 六 Thomas Morer, "Discourse in Six Dialogues on the Name, Notion, and Observation of the Lord's Day," p.271.

- 七 Heylyn “History of the Sabbath” pt.2, ch. 5, sec. 7 を参照。
- 八 Roger de Hoveden, “Annals,” vol.2, pp.528—530 を参照。
- 九 Morel, pp.290, 291.
- 一〇 Ibid., pp.281, 282.
- 一一 Michael Geddes “Church History of Ethiopia” pp.311, 312 を参照。
- 一二 John Dowling, “The History of Romanism,” b.5, ch.6, sec.55.
- 一三 Mosheim, b.3, cent.11, pt.2, ch.2, sec.9, note17.

第三十六章

差し迫った戦い

サタンの目的は何か

天における大争闘のその最初から、神の律法を覆すことがサタンの目的であつた。彼が創造主に対する反逆を始めたのは、この目的を達成するためであつた。そしてサタンは、天から追放されたけれども、この地上で同じ戦いを続けてきた。人を欺き、それによって神の律法を犯すようにさせることこそ、サタンが着々と追い求めてきた目的である。このことは、律法全体を廃することによって成し遂げられても、あるいはまた、戒めの一つを拒むことによって成し遂げられても、最終的な結果は同じである。「その一つの点」でも犯す者は、律法全体に対する軽べつをあらわすのであり、その影響と手本は罪に味方するものであつて、「全体を犯したことになる」のである(ヤコブ二ノ一〇)。

神の戒めを軽べつするために、サタンは聖書の教えを曲解し、そうすることによって、聖書を信ずると告白する幾千もの人たちの信仰に誤謬を混ぜてきた。真理と誤謬の最後の争闘は、長い間続いてきた神の律法に関する論争の最後の戦いにほかならない。われわれは今や、この戦い、すなわち、人のおきてと主の戒めとの間の、また、聖書の宗教と作り話や言い伝えの宗教との間の、戦いに入っているのである。

この戦いにおいて真理と正義に対抗して結束する勢力が、今活発に働いている。苦難と血の大きな犠牲を払ってわれわれに伝えられてきた聖なる神のみ言葉は、ほとんど尊重されていない。聖書はどんな人の手にも入るが、それを真に人生の道しるべとして受け入れる人は少ない。不信仰は単に世の中ばかりでなく、教会内にも驚くほど広くゆきわたっている。多くの人は、キリスト教信仰の支柱そのものになっている教理を否定するようにさえなっている。靈感を受けた記者たちによって書かれている、創造の偉大な事実、人類の堕落、贖い、神の律法の永遠性などの大真理が、自称キリスト教界の大部分の人たちによって、全体的に、あるいは部分的に受け入れられなくなっている。知恵と自主性を誇る幾千もの人々が、聖書に絶対的信頼を置くことを弱さの証拠と考え、聖書の揚げ足を取ったり、最も重要な真理を抽象化したり言い抜けたりすることを、優れた才能や学識の証拠だと思っている。神の律法が変更されたとか廃されたとかいうことを、信者たちに教えている牧師や、学生たちに教えている教授、教師が多い。そして、律法の要求がなお有効であり、字義通りに従わなければならないものであるとみなす人々は、嘲笑と侮べつにしか値しないと思われる。

人々は真理を否定することによって、その著者であられる神を否定している。彼らは神の律法を踏みつけることによって、律法の制定者であられる神の権威を否定している。偽りの教理や理論という偶像を刻むことは、木

や石の偶像を刻むのと同じに容易である。サタンは、神の属性を誤り伝えることによって、人々に神についての誤った品性を想像させるのである。多くの人々にとって、主の代わりに哲学的偶像が王位を占めている。一方、み言葉の中に、キリストの中に、そして創造のみ業の中に啓示されている生ける神を礼拝する人は、少数にすぎない。幾千もの人々は、自然を神格化していながら、自然の神を否定している。形こそ違うが、偶像崇拜は、今日のキリスト教界にも、古代イスラエルのエリヤの時代にあつたのと同じように存在している。自ら賢人と称する多くの人々、哲学者、詩人、政治家、ジャーナリストたちの神、洗練された上流社会、多くの大学、はては幾つかの神学校などの神も、フェニキヤの太陽神バアルとほとんど変わるところがない。

統治に不可欠なもの

キリスト教界で受け入れられている誤謬ほど、天の神の権威に打撃を与えるものはなく、また、神の律法はもはや人間を拘束しないという、急速に力を増しつつある近代的教理ほど、理性の命令に真つ向から反しており、結果の有害なものはない。どの国もみな法律があつて、これを尊重しこれに服従することが要求される。法律がなければ政府は存在することができない。天地の創造主に、自ら造られた被造物を治める律法がないなどということ、想像できるであろうか。国を統治し、市民の権利を擁護する法律に、従う義務がないとか、法律は人民の自由を制限するからそれに従う必要はないなどと、かりに著名な牧師たちが、公然と教えるとしたらどうだろう。このような人たちはいつまで講壇に立つことを許されるだろうか。しかし州や国家の法律を無視する

ことは、あらゆる政府の基礎であるこれらの聖なる戒めをふみにじるよりも重い罪科であろうか。

国々がその法律を廃し、人民の好きかつてにさせるということはあり得ないが、まして、宇宙の支配者なる神が、その戒めを無効にし、不義な者を罪に定め従う者を義とする規準なしにこの世を放置されるなどということは、考えられないことである。神の律法を無にした結果を知りたいだろうか。その実験は試みられた。フランスにおいて、無神論が支配的な勢力となった時に演じられた光景は、恐るべきものであった。神が課せられた拘束を投げ捨てることは、最も残酷な暴君サタンの支配を受け入れることであるということが、そのとき世界に証明された。義の標準が廃されるときに、悪の君がこの地上に権力を打ち立てる道が開かれる。

神の戒めが拒絶されるところではどこでも、罪がもはやいまわしく思えなくなり、義は慕わしいものではなくなる。神の統治に服従することを拒む者は、自らを治めるのに全く不適当な者となる。彼らの有害な教えを通して、不従順の精神が、もともと支配されることを喜ばない子供や青年たちの心に植え付けられ、無法で放縱な社会が生じる。多くの人々は、神のご要求に従う人たちの信心深さを嘲笑しながら、サタンの惑わしを熱心に受け入れる。彼らは欲情をほしいままにし、かつて異教徒たちの上にさばきを招いた罪にふける。

無法がもたらすもの

人々に神の戒めを軽んじるように教えるものは、不従順の種をまき、不従順を刈り入れる。神の律法によって課せられている拘束を全部取り去るならば、人間の法律もまもなく無視されるであろう。神は不正な慣習、貪欲、

虚偽、詐取を禁じておられるので、人々は自分たちが世俗的に繁栄する道の障害として、神の戒めをやすやすとふみにじる。しかし、これらの戒めを追い払った結果は、彼らの予期しなかったものとなるであろう。もし法律に拘束されないならば、違反を恐れる必要があらうか。財産はもはや安全ではなくなる。人々は力づくで隣人の持ち物を手に入れ、最も強い者が最も富める者になる。生命そのものが尊重されなくなる。結婚の誓約は、もはや家族を守る神聖なとりでとしての用をなさなくなる。力を持っている者が、もし望むなら、隣人の妻を腕ずくで取るようになる。第五条は第四条とともに廃される。子供たちは、親の生命を取ることと自分の墮落した心の願いを達成できるならば、そうすることを恐れなくなる。文明社会は強奪者、暗殺者の大群と化し、平和、休息、幸福は地上から消滅してしまう。

人間は神のご要求に従うことから解放されているという教えが、すでに道徳的義務の力を弱め、世に不法の水門を開いてしまった。無法、放蕩、墮落が、押し寄せる潮のように、われわれの上に流れ込んできている。家庭においてもサタンは働いている。サタンの旗は、キリスト者と称する家庭にもひるがえっている。ねたみ、中傷、偽善、不和、競争、争い、聖なる信頼に対する裏切り、肉欲の放縦がある。社会生活の土台であり骨組みである宗教的原則と教理の全体系が、ひとかたまりとなってよるめき、今にも崩壊しそうに見える。凶悪きわまる犯罪者が、投獄されたような場合でも、何かうらやまれるほどの手柄を立てたかのように、贈り物を受けたり注目を集めたりすることがしばしばある。彼らの性格と犯罪行為が、大々的に宣伝される。新聞は悪徳の詳細を報道し、こうして他の人々に、詐欺や強奪や殺人を行なうことを教え込む。そしてサタンは、自分の邪悪な計略が成功したことに狂喜するのである。悪徳の蔓延、理由のない残忍な殺傷、あらゆる種類あらゆる程度の不節制と不正行

為の恐るべき増加を見ると、神をおそれる者たちはみな目ざめて、この悪の潮流をとどめるにはどうしたらよいかを考えてみなければならぬ。

裁判所は腐敗している。支配者たちは利益と享樂を求めて行動している。不節制によって多くの人の能力がくもらされ、そのためサタンは彼らをほとんど完全に支配している。法曹界は墮落し、買収され、だまされている。飲酒、歡樂、欲情、ねたみ、あらゆる種類の不正が、為政者たちの中に現われている。「公平はうしろに退けられ、正義ははるかに立つ」(イザヤ書五九ノ一四)。

墮落の原因

ローマの主権下にゆきわたった不法と靈的暗黒は、教会が聖書を抑圧したための避けられぬ結果であつた。しかし、宗教自由の時代において福音のあかあかとした光のもとで、不信仰が広がり、神の律法が退けられ、その結果墮落が生じた原因は、どこに見いだされるであらうか。サタンは、もはや聖書を遠ざけておくことによって世界を支配することができなくなつたので、同じ目的を達成するために違つた手段に訴えている。聖書に対する信仰を破壊することは、聖書そのものを破壊するのと同様に彼の目的に役立つのである。神の律法はもはや拘束力がないという信仰を導入することによって、彼は、ちょうど戒めに全く無知である場合と同じほど効果的に人を導いて罪を犯させるのである。そしてサタンは現在も、昔の時代と同様に、教会を通して自分の計画を進めようと働いている。今日の宗教団体は、聖書の中に明白に示されている俗受けのしない真理に耳を傾けようとし

ない。そしてその真理と対抗するために、懐疑論の種を広くまくことになった解釈と立場を採用した。彼らは、人間は本来不死であって死後も意識があるというカトリック教の誤謬に固執して、心霊術の惑わしに対する唯一の防備を拒んできた。永遠に苦しめられるという教えは、多くの人々に、聖書に対する信仰を失わせた。そしてまた、第四条の要求が人々に示されるとき、第七日安息日の遵守が命じられていることがわかる。すると一般の多くの教師たちは、あまり守りたくない義務から逃れる唯一の道として、神の律法はもはや拘束力を持っていないと宣言する。このようにして彼らは、律法も安息日もともに捨て去るのである。安息日の改革の運動が広がるにつれて、第四条の要求を無効にするため神の律法を退けることが、ほとんど世界的になる。宗教界の指導者たちの教えは、不信仰への道、心霊術への道、そして神の律法に対する軽べつへの道を開いてきた。だから、今日のキリスト教界に存在する不法の恐るべき責任は、これらの指導者たちにあるのである。

二大誤謬と三重の結合

ところがこの階層の人たちは、急速に広がっている墮落は、主としていわゆる「キリスト教的安息日」を汚すことにその原因があるのだから、日曜日遵守を強制することが社会道徳を大いに向上させるであろうと主張する。この主張が特に強調されるのは、真の安息日の教理が最も広く宣べ伝えられてきたアメリカにおいてである。アメリカにおいては、最も目だった重要な道徳的改革の一つである禁酒禁煙運動が、しばしば日曜日遵守運動と結びつけられる。日曜日遵守運動の主張者たちは、自分たちは社会の最高の利益を促進するためにほねおっている

と称し、彼らとの協力を拒む者は、禁酒禁煙運動と改革の敵であると非難される。しかし、誤謬を助長する運動が、それ自体は善である働きと結合しているからといって、その誤謬を支持してよいということにはならない。われわれは、健全な食物にまぜることによって毒を隠すことはできても、それが毒であることには変わりないのである。それどころか、毒と気づかれないために、それだけいっそう危険なものとなる。虚偽を、それをもっともらしく見えるようにさせるに足るだけの真理と結合させることが、サタンの策略の一つである。日曜日遵守運動の指導者たちは、人々が必要としている改革を提唱し、聖書と調和している諸原則を提唱するかもしれない。しかし、その中に、神の律法に矛盾する要求が含まれているかぎり、主のしもべたちは彼らと手をつなぐことはできない。彼らが神の戒めを捨てて人間の戒めを置いたことは、どんな理由によっても正当化できないのである。

サタンは、靈魂不滅と日曜日の神聖化という二つの重大な誤りを通して、人々を彼の欺瞞のもとに引き入れる。前者は心靈術の基礎を置き、後者はローマとの親交のきずなを作り出す。合衆国の新教徒は、率先して、心靈術と手を結ぶために淵を越えて手を差しのべる。彼らはまた、ローマの権力と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この三重の結合による勢力下に、アメリカはローマの例にならって良心の権利をふみにじるのである。心靈術が現代の名ばかりのキリスト教をますますそっくりまねるようになるにつれて、それは人々をだまし、わなにかけるのに、いっそう大きな力を持つようになる。サタン自身も、近代的な形態に応じて姿を変える。彼は光の天使を装って現われる。心靈術を通して奇跡が行なわれ、病人はいやされ、否定することのできない多くの不思議なことが行なわれる。そして悪霊が聖書に対する信仰を告白し、教会の諸制度に敬意をあらわすので、そつした霊の働きは神の力の現われとして受け入れられる。

現在は自称キリスト者と不敬虔な人たちとの間の区別がほとんどわからない。教会員は世の人々が愛するものを愛し、すぐに彼らといっしょになるので、サタンはこの人たちを一体として結合させ、すべての人を心霊術の味方に引き入れることによって、自分の立場を強化しようと決意している。カトリック教徒は、奇跡を真の教会の一つの確証として誇っているので、不思議なことを行なうこの力に容易にだまされる。また新教徒も、真理の**たて**を投げ捨ててしまったので、同じように惑わされるであろう。旧教徒、新教徒、それに世俗の人たちもみな同じように、力のない形だけの敬虔を受け入れるであろう。そして彼らはこの合同の中に、全世界を改心させるための一大運動と、長く待ち望んでいた福千年期の先触れを認めるのである。

破滅への道

サタンは心霊術を通して人々の病気をいやし、もっと高尚な新しい信仰を提供すると称して、人類の恩人のように見せかける。だが同時に彼は破壊者として働く。彼の誘惑は多くの人々を破滅に導く。不節制が理性を王座から追い出し、肉欲の放縱、争い、流血が続く。サタンは戦争を喜ぶ。なぜなら戦争は、魂の最悪の激情をかきたて、悪と流血に染まった犠牲者たちを永遠に葬り去ってしまうからである。国々が互いに戦争を起こすように煽動するのがサタンの目的である。なぜなら、そうすることによって人々の心を、神の日に立つ備えの働きからそらすことができるからである。

サタンはまた、備えのできていない魂を自分の収穫として取り入れるために、自然力を通して働く。彼は自

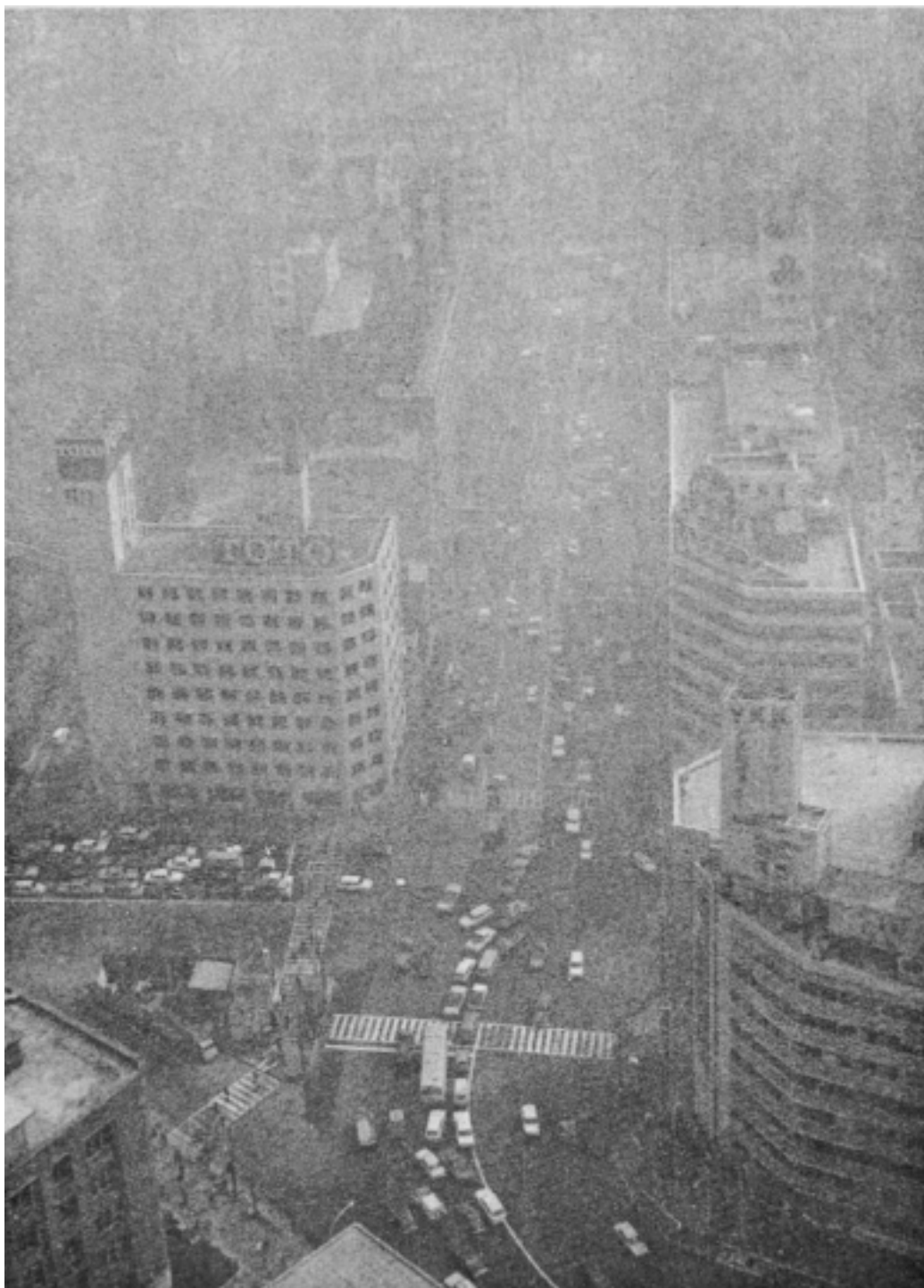
然の実験室の秘密を研究してきたので、神が許される範囲内で自然を支配するため全力を用いる。彼がヨブを試みることを許されたとき、どんなに速やかに、家畜の群れやしもべたちや家や子供たちが取り去られ、またたく間に事件があいついで起こったことだろう。被造物を保護し、破壊者の力から守られるのは神である。しかし、キリスト教界が主の律法をないがしろにしてきたため、主は、なすと仰せになったことをそのとおりなさるであろう。すなわち、主は地上から祝福を取り去り、神の律法に反逆している者たち、また人にそうするように教えたり強制したりしている者たちから、保護のみ手を取り除かれるであろう。サタンは、神が特に保護されないすべての者に対する支配力を持っている。彼は、自分のたくらみを押し進めるために、ある者たちには恩恵と繁栄を与える。そして、他の者たちには災いをもたらして、人々に、彼らを悩ませているのは神だと信じさせようとする。

サタンは人々に対し、あらゆる病気をいやすことのできる偉大な医師のようにみせかけながら、他方では病気や災害を生じさせ、ついには人口の多い都市が破滅して荒廃する。彼は今も活動している。海や陸における事故や災害、大火災、激しい突風、すさまじい降雹、あらし、洪水、たつまき、津波、地震など、あらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている。彼は取り入れまぎわの収穫を全滅させ、ききんと困窮を引き起こす。彼は空気を恐るべき病毒で汚染させ、幾千人もの人が悪疫で死ぬ。これらのできごとはますますひんぱんになり、悲惨なものになる。破滅は人間にも、動物にもおよび。「地は悲しみ、衰え、……天も地と共にしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ」（イザヤ書二四ノ四、五）。

忠実な者が非難される

しかもこの大欺瞞者サタンは、神に仕える者たちがこれらの災害を引き起こしているのだと、人々に説く。天の神の不興を引き起こしてきた人たちは、すべての災いを、神の戒めに服従することによって絶えず違反者たちへの譴責となっている人たちのせいにする。日曜安息日を犯すことは神を怒らせることであり、この罪が災害をもたらすのであって、それは日曜日遵守がきびしく実施されねばやまない、と宣言される。また、第四条の要求を主張して日曜日尊重を傷つける者は民を悩ます者であって、神の恩寵とこの世における繁栄とを妨げている、と宣言される。このようにして、昔神のしもべに向けられた非難が、同じようにもつともらしい理由のもとにくり返される。「アハブはエリヤを見たとき、彼に言った、『イスラエルを悩ます者よ、あなたはここにいますか。』彼は答えた、『わたしはイスラエルを悩ますものではありません。あなたと、あなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです』（列王紀上一八ノ一七、一八）。民衆の怒りは偽りの非難によってかきたえられるので、彼らは神の使者たちに対して、背信のイスラエルがエリヤに対してとったのと同じような態度をとるであろう。

心霊術を通して現わされる奇跡の力は、人間に従うよりは神に従うことを選ぶ人たちに不利な影響を与える。いろいろな霊からの伝達は、神は日曜日を拒絶する者たちにそのまちがいを悟らせるために自分たちを送られたのだと宣言し、国家の法律は神の律法と同様に遵守しなければならないと断言する。霊たちはまた、世の中が非



サタンは病気や災害を生じさせ、ついには人口の多い都市が没落して荒廃する。彼は空気を恐るべき病毒で污染させ、幾千もの人が悪疫で死ぬ。破滅は人間にも動物にも及ぶ。

第36章 差し迫った戦い



あらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている。国々が互いに戦争を起こすように彼は煽動する。事故や災害、あらし、洪水、たつまき、津波、地震、ききん……これらのできごとはますますひんぱんになり、悲慘なものになる。

常に悪くなつたことを嘆き、道徳的に墮落している状態は日曜日の冒瀆に原因があるという宗教家たちの証言を支持する。彼らのあかしを信じようとしないうべての者に対して、ますます激しい怒りが引き起こされる。

サタンが神の民との最後の争闘に用いる手段は、天において大争闘を開始した時に用いたものと同じである。彼は神の統治の安定を推進しようとしているのだと公言しながら、一方においてはこれを転覆するためにひそかにあらゆる努力を傾けた。そして自分が達成しようとするのよう努力している働きを、忠実な天使たちのせいにした。同じような欺瞞の手段が、ローマ教会の歴史の特徴であつた。天の神の代理者として行動していると公言しながら、自らを神の上に置き、神の律法を変えようと望んだ。ローマの支配下にあつて、福音に対して忠誠であつたために死刑にされた人たちは、悪を行なう者と宣言され、サタンの味方とののしられた。そして彼らに非難を浴びせ、人々にも彼ら自身にも最悪の犯罪人と思わせるために、あらゆる手段がとられた。今も同じである。サタンは、神の戒めを守る者たちを滅ぼそうとする一方では、この人たちが律法の違反者として、また神を汚し世にさばきを招く者として非難されるように計る。

教会と国家の一致

神は決して意志や良心を強制されない。しかし、他の方法で誘惑できない者を自分の自由にしようとするサタンの常套手段は、残酷な強制である。サタンは、脅迫と強制によって良心を支配し、自分に服従させようと努める。それを実現するためには、宗教と政治の当局を通じて働き、神の律法に反抗して人間の法律を強制するよう働きかける。

聖書の安息日をあがめる者は、法と秩序の敵であり、社会の道徳的抑制を破り、無政府と墮落とを引き起こし、神のさばきを地上に招く者であるといつて攻撃される。彼らの良心的な信念は、強情、頑迷、権威に対する侮べつであると言告される。彼らは政府に対して忠誠を尽くさないといつて告発される。神の律法への義務を否定する牧師たちは、国家の権威に服従する義務は神によって定められたものであると講壇から主張する。立法府や裁判所においては、神の戒めを守る者たちについて虚偽の訴えがなされ、有罪の宣告がくだされる。彼らの言葉は誤つて解釈され、彼らの動機は最も悪質なものに作りあげられる。

プロテスタントの諸教会が、神の律法を擁護している明白な聖書の論拠を退けると、彼らは、聖書によって覆すことのできないような信仰を持った人々を、沈黙させたいと望むであろう。彼らは目をおおつて事実を見ようとしないが、実は、彼らはほとんどのキリスト教界が行なっていることつまり法王教の安息日の要求を認めることを、良心的に拒否する人々を、迫害するようになる道を選びつつあるのである。

教会と国家の高官たちは、すべての階級の人々に日曜日を尊重させるために、結束して買収や説得や強制を行なうであろう。神の権威の欠如は、圧制的な法令によつて補われる。政治的腐敗は、正義を愛し真理を尊ぶ思いを破壊しつつある。そして自由の国アメリカにおいてさえ、為政者や議員たちは民衆の歓心を買うために、日曜日を遵守を強制する法律を求める大衆の要求に屈服する。非常に大きな犠牲を払つて得られた良心の自由は、もはや尊重されなくなる。まもなく起ころうとしている争闘において、われわれは預言者の言葉の成就を見るのである。「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行つた」(黙示録一一ノ一七)。

第三十七章

ただ一つの防壁——聖書

聖書に対するサタンの攻撃

「ただ律法と証詞とを求めべし、彼らの言つところこの言にかなわずば晨光あらじ」(イザヤ書八ノ二〇文語訳)。神の民には、偽りの教師の感化と暗黒の霊の欺瞞的な力に対する防壁として、聖書がさし示されている。サタンは、人が聖書の知識を得るのを妨げるためにはあらゆる手段を用いる。なぜなら聖書の明白な言葉は彼の欺瞞を暴露するからである。神の働きが復興されるたびに悪の君は奮起していつそう激しく働く。彼は今やキリストとその信徒たちに対する最後の闘争に最大の努力を傾けている。まもなく最後の大きいなる欺瞞がわれわれの前に展開されようとしている。反キリストがわれわれの目の前で驚くべき業を行なうのである。偽物があまりにも本物によく似ているために、聖書による以外には両者の見分けは不可能である。すべての言説や奇跡は、聖書の

あかしによって吟味されなければならない。

神の戒めのすべてに従おうと努力する者は、反対と嘲笑に会うであろう。彼らは神のうちにあるときにのみ立つことができる。彼らは目の前にある試練に耐えるためには、み言葉の中に示されている神のみこころを理解しなければならない。彼らは、神のご品性、統治、御目的について正しい理解を持ち、それに従って行動するときのみ、神をあがめることができる。聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、だれも最後の犬争闘に耐え抜くことはできない。わたしは人に従うより神に従うべきかという鋭い質問が、一人一人に臨むであろう。その決定の時は今日の前に迫っている。われわれの足は、変わることにない神のみ言葉という岩の上に、しっかりと立っているだろうか。われわれは、神の戒めとイエスを信じる信仰をとりとして、堅く立つ用意ができていだろうか。

救い主は十字架におかかりになる前に、弟子たちに、ご自分が殺され、墓からよみがえられることを説明された。そして天使たちがその場にいて、主のみ言葉を頭と心に深く印象づけた。しかし、弟子たちは、この世においてローマのくびきから解放されることを期待していたので、彼らの望みの中心である主が不名誉な死を受けられなければならないという思いに耐えられなかった。彼らが覚えていなければならなかったみ言葉は、その心から消えさり、試練の時がやって来たときには備えができていなかった。イエスの死は、まるで主がなんの予告もしておられなかったかのように、彼らの望みを徹底的に打ち砕いたのであった。キリストのみ言葉によって弟子たちに将来がはっきり示されていたように、われわれにも将来のことが預言の中にはっきり示されている。恩恵期間の終わりに関係のあるできごとと、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている。しかし多く

の人々は、全然啓示を受けなかったかのように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとかがっているので、彼らは悩みの時に備えができていない。

すべての教理の基準

非常に重大であるために、中空を飛ぶ聖天使たちによって宣べ伝えられたと表現されているほど重要な警告を、神が人々にお送りになる時、神は理性を持つ者がすべてこのメッセージに耳を傾けるように求めておられる。獣とその像を拜むことに対して宣告されている恐るべきさばき(黙示録一四ノ九——参照)について知るとき、だれでもみな、獣の印とは何か、それを受けないようにするにはどうすればよいかということを学ぶために、熱心に預言を研究するようになるはずである。しかし大部分の人々は、真理を聞くことから耳をそらし、作り話へと向かってしまう。使徒パウロは終末の時代を予見して、「人々が健全な教に耐えられなくな」と言明した(テモテ第二・四ノ三)。その時がちょうど到来している。多くの人々は聖書の真理を好まない。なぜなら真理は、深い、世を愛する心の欲望を、妨げるからである。そしてサタンは、彼らの好む偽りを提供するのである。

しかし神はこの地上に、聖書、そしてただ聖書だけをすべての教理の基準、すべての改革の基礎として保持する一つの民を、お持ちになるであろう。学識者の意見、科学の推論、教会会議の定めた信条や決議(これらは、教会の数が多くてその主張も違うように、おびただしい数にのぼって内容も千差万別である)、大衆の声、——こ

これらのうちの一つであれ全部であれ、それをもって信仰上の事柄に関する賛否の根拠と見なしてはならない。どんな教理や戒めでも、それを受け入れる前に、「主はこう言われる」という明日な事実をその裏づけとして要求すべきである。

サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうするときに、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである。

キリストがいのちのみ言葉を語りにこられた時、一般の人々は喜んでそれを聞いた。そして多くの者が、祭司や役人たちでさえ、主の言われることを信じた。しかし、祭司長と民の有力者たちは、キリストの教えを非難し否認することを決心していた。彼らは、キリストに対する言いがかりを見つけようとする努力がごとく失敗し、キリストの言葉に伴う神の力と知恵の感化を感じないではいられなかったにもかかわらず、なお自分自身の偏見の中に閉じこもった。彼らは、キリストの弟子にならないではいられなくなることをおそれて、キリストがメシヤであることの最も明白な証拠を退けた。これらイエスの反对者たちは、人々が子供の時から尊敬するように教えられ、彼らの権威には絶対に従うように習慣づけられていた、その者たちであった。人々は、「なぜわれわれの役人たちや学者たちはイエスを信じないのだろうか。もしこの人がキリストであるなら、こうした敬虔な人たちがこの人を受け入れないことがあるか」と問うた。ユダヤ民族に彼らの贖い主を拒否させたのは、このような教師たちの影響であった。

これらの祭司や役人たちを動かした精神は、今日もなお、深い敬虔を表明する多くの人々に見られる。彼らは、

今の時代のための特別な真理について、聖書のあかしを調べることを拒んでいる。彼らは自分たちが多数であることや、富や、人気を指摘し、真理の擁護者に対しては、世からかけ離れた信仰を持つ少数、貧困、不人気な者として、軽べつの目で見るのである。

自分で調べよ

キリストは、学者やパリサイ人たちがほしのままにした、権力の不当な掌握が、ユダヤ人の離散をもって終わるのではないことを予見された。キリストは、人間の権威があがめられて良心を支配し、それが各時代の教会にとつて恐るべき災いになることを、預言の眼をもってごらんになった。そして学者やパリサイ人に対して向けられた彼の恐るべき非難や、盲目的な指導者に追従しないようにとの民たちに対する彼の警告は、後の時代に対する訓戒として記録に残された。

ローマ教会は聖書を解釈する権利を、聖職者のものとして保留している。神の言葉は、聖職者だけが説明することができるといふ理由のもとに、一般の人々には与えられていない。宗教改革によつて聖書は万人のものとなったが、ローマが主張したのと全く同じ原則が、プロテスタント諸教会の多くの人々が自分で聖書を探究するのを妨げている。彼らは、**教会によつて解釈されたもの**として聖書の教えを受け入れるように教えられる。そのために、どんなに聖書の中にはっきり示されていても、自分たちの信条に反するものや、自分たちの教会によつて確立されている教えに反するものは、あえて受け入れようとしなない人々が何千といふのである。

聖書には偽教師に対する警告が満ちているにもかかわらず、多くの人たちはこのようにしてすぐに自分たちの魂を牧師に預けてしまう。今日、信仰を告白する幾千の人たちは、牧師からそう教えられたということ以外には、自分の信じる信仰の要点について理由を説明することができない。彼らは救い主の教えにほとんど注意を払わず、牧師たちの言葉に全面的な信頼を置いている。しかし、牧師は絶対に誤りを犯さない者であろうか。われわれは、彼らが光を掲げる者であるということを、神のみ言葉によつて知らないかぎり、自分の魂を彼らの指導にゆだねることがどうしてできようか。世の踏みならされた道から踏み出す精神的な勇気が欠けているため、多くの人々は学識者の道に従い、自ら調べるのに無精であるため、絶望的なまでに誤謬の鎖につながれている。彼らは、今の時代のための真理が聖書の中に明白に示されていることを認め、み言葉に伴う聖霊の力を感じていながら、牧師たちに反対されるままに光にそむいてしまう。理性と良心では確信していながら、これらの欺かれた人たちは、あえて牧師と違った考え方をしようとしなくて、自分自身の判断と、自分たちの永遠の利益を、他人の不信仰や誇りや偏見の犠牲にしてしまうのである。

正しい道標のもとに

サタンが人間の影響力を通してとりこを縛りつけようと働く方法は、たくさんある。サタンは、愛情という絹ひもで、多くの人々をキリストの十字架の反対者たちに結びつけることによって、彼らを自分の側に確保する。この愛着が親子の間であろうと、夫婦の間であろうと、社交的なものでであろうと、結果は同じである。真理の反

対者たちが良心を支配しようと影響力を及ぼすので、彼らの支配下に捕えられている魂は、義務に関する自分自身の確信に従うだけの勇氣や独立心をもっていない。

真理と神の栄光とは、切り離すことができない。われわれは、手近に聖書を持っていながら、誤った見解をもって神をあがめることはできない。多くの人々は、生活さえ正しければ、何を信じているかは問題ではないと主張する。しかし生活は信仰によって形造られる。光と真理が手近にありながら、それを聞き、それを見る特権を利用するのを怠るなら、われわれは事実上それを拒絶し、光よりもやみを選んでいることになる。

「人が見て自分で正しいとする道があり、その終りはついに死にいたる道となるものがある」(箴言一六ノ二五)。神のみこころを知るあらゆる機会がある時に、知らないということは誤謬や罪の言いわけにならない。人は旅をしていて、それぞれの行く先を示す道標のある別れ道にさしかかる。もし彼が道標を無視して、自分に正しいと見える道を選ぶなら、彼がどんなにまじめであっても、自分がまちがった道を歩いていることにおそらく気づくであろう。

神は、われわれが神の教えに通じ、神が求めておられることを自分で知ることができるようにと、み言葉をわれわれにお与えになっている。律法学者がイエスのところに来て、「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」と尋ねた。救い主は聖書を引用しながら、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」と言われた。知らなかったということは、若い者にも年寄りにも言いわけにはならないし、また神の律法を犯した当然の刑罰から免れさせるものでもない。なぜなら彼らは、律法とその原則、その要求について忠実に書いているものを、手に持っているからである。正しい意図があつたというだけでは足りない。人は自分が正しいと思うことや

牧師が正しいと言うことをするだけでは不十分である。自分の魂の救いにかかわる問題である以上、人は自分で聖書を探究しなければならない。彼の確信がどんなに強くても、牧師は何が真理かを知っているといくら彼が信頼していても、それは彼の土台とはならない。彼は天への旅路におけるすべての道標を示す地図を持っているのであるから、何事も臆測によるべきではない。

聖書の学びかた

聖書から真理を学び、その光に歩み、そして他人にも自分の模範に従うように励ますことは、すべて理性のある者の第一にして最高の義務である。われわれは日々熱心に聖書を研究し、すべての思想を熟考し、聖句と聖句を対照すべきである。われわれは神の前で自分で答えるのであるから、神の助けによって自分で自分の考えを定めなければならない。

聖書の中に最も明白に示されている真理が、学者たちによって疑いと暗黒に包まれてきた。彼らは、偉大な知恵を持っているように見せかけながら、聖書にはそこに用いられている言葉に現われていない神秘的で霊的な隠れた意味があると教える。これらの人々は偽教師である。イエスが「あなたがた……は、聖書も神の力も知らないからではないか」と言われたのは、こういう種類の人々に向かつてであった(マルコ二二ノ二四)。聖書の言葉は、象徴や比喩が用いられていないかぎり、その明瞭な意味に従って解釈されるべきである。キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが……わかるであろう」と約束され

た(ヨハネ七ノ一七)。もし人々が、聖書をその書いてあるとおりを受け取りさえすれば、もし人々を誤らせ、その心を混乱させるような偽教師がいなければ、現在誤謬の中に迷っている幾千もの人々をキリストの囲いの中に導き、天使たちを喜ばせるような働きが成し遂げられるであろう。

われわれは聖書の研究に知能の全力を注ぎ、人間として及ぶかぎり、神の深い事柄を悟るために理解力を働かせねばならない。しかし幼な子のような従順と服従が、学ぶ者の真の精神であることを忘れてはならない。聖書の難解なところは、哲学上の問題を把握するのに用いるのと同じ方法では決して解決されない。多くの人々が科学の領域に入るときに抱いているような、自分を頼みとする心をもって聖書の研究にたずさわるべきではなく、祈りのうちに神により頼む思いと、みこころを知りたいというまじめな願いをもってなすべきである。「わたしは有る」という偉大なお方から知識を得るために、謙遜ですなおな精神をもってみもとに行かねばならない。そうでないと、悪天使たちはわれわれが真理から感銘を受けないように、われわれの頭をくもらせ、心をかたくなにする。

聖書の中で、学者たちが不可解であると断言し、また重要でないものとして見のがしている多くの部分は、キリストの学校で教えられた者にとつては慰めと教訓に満ちている。多くの神学者が神のみ言葉について明快な理解を持っていない一つの理由は、彼らが自分の実行したくない真理に対しては目を閉じてしまうからである。聖書の真理に対する理解は、研究に払われる知力によるよりは、むしろ誠実な意図と、義を熱心に追い求める心とにかかっているのである。

み言葉をたくわえよ

聖書は祈りなしに研究すべきではない。聖霊だけが、理解しやすい事柄の重要性を感じさせ、あるいは理解の困難なものを曲解しないように守る。われわれがみ言葉の美しさに心をひかれ、その警告に戒められ、み約束によつて活気づけられ、力づけられるように、心を備えさせて神のみ言葉を理解させるのが、天使たちの働きである。われわれは詩篇記者の「わたしの目を開いて、あなたのおきてのうちのくすしき事を見させてください」という訴えを、自分のものとしなければならない(詩篇一一九ノ一八)。試みがしばしば抵抗できないもののように見えるのは、祈りと聖書研究を怠っているために、試みられている者が神のみ約束をすぐに思いだすことができず、聖書という武器をもってサタンに対抗することができないからである。しかし天使たちは、神の事柄を喜んで学ぼうとする人々のまわりにおいて、緊急の場合には必要な真理を思い起こさせる。こうして、「敵が洪水のよつに押し寄せるときに、主の霊はそれに向かつて旗をあげられる」(イザヤ書五九ノ一九英語訳)。

イエスは、「助け主、すなわち、父がわたしの名によつてつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであらう」と弟子たちに約束された(ヨハネ一四ノ二六)。しかし、危機の時に、神のみ霊がわれわれにキリストの教えを思い起こさせてくださるためには、それをあらかじめ心の中にたくわえておかねばならない。ダビデは「わたしはあなたにむかつて罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」と言った(詩篇一一九ノ一一)。

懷疑論のわな

自分の永遠の利益を重んずる者はみな、懷疑論の侵入に対して警戒しなければならない。真理の柱そのものが攻撃されるであろう。現代の不信仰の風刺や詭弁——狡猾で有害な教え——が届かないところに身を置くことは、不可能である。サタンはその誘惑をあらゆる階級に適合させる。彼は、無学の者には冗談と嘲笑をもって攻撃し、教育ある者には科学的な反対論や哲学的な推論をもって対抗するが、どちらも聖書に対する不信と軽べつ心をかきたてようとねらっている。経験の浅い青年でさえ、あえてキリスト教の根本原理に関して懷疑をほのめかす。しかもこうした青年の不信仰は、それ自体は浅薄なものであっても、影響力をもっている。多くの者はこのようにして父祖たちの信仰をあざわらい、恵みのみ霊を侮るように導かれる。神の誉れとなり世の祝福となると思われた多くの人々の生涯が、不信仰の汚れた空気を吸うことによつてそこなわれてきた。人間の理性による傲慢な結論に頼つて、自分たちは神の知恵の助けなしに聖なる神秘を説明し、真理に到達できると思う者はみな、サタンのわなにかかるのである。

世界の運命

われわれは世界歴史の最も厳粛な時代に生存している。地上のおびただしい数の人々の運命が、決定されよう

としている。われわれ自身の将来の幸福も、他の魂の救いも、今われわれが歩いている道にかかっている。われわれは真理のみ霊によって導かれる必要がある。キリストに従う者はみな、「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」と熱心にたずねるべきである。われわれは祈りと断食をもって主の前にへりくだり、主のみ言葉について、特にさばきの光景について瞑想する必要がある。われわれは今、神のことについて、深い、生きた経験を求めなければならない。一刻もむだにはできない。われわれの周囲には重大な事件が起こっており、われわれはサタンの魔法の働いている場にいるのである。神の見張り人たちよ、眠ってはいけない。敵は近くに忍び込んでいて、あなたが気をゆるめて眠気を催すならば、いつでも飛びかかってえじきにしようと待ち構えている。

多くの者は、神の前における自分の真の姿について欺かれている。彼らは自分たちは悪事を行なっていないと喜んでいるが、神が彼らに要求され、しかも彼らが実行することを怠った、善にして高潔な行為のことを数えるのを忘れている。彼らは神の園の木であるだけでは十分ではない。彼らは実を結ぶことによって神のご期待に答えなければならない。自分を力づけてくれる神の恵みを通してなすことができたはずの善行をしなかった責任を、神は問われる。彼らは地をふさぐものとして天の書に記録される。しかし、この種の人の場合も、全く絶望的というわけではない。神の恵みを軽視し、神の恵みを悪用したこれらの人々に、忍耐深い愛の神のみ心は、『眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう。』そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、…今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである」と訴えておられる(エペソ五ノ一四―一六)。

試みの時が来ると、神のみ言葉を自分の人生の尺度としてきた人たちが、はっきりわかるであろう。夏には常

緑樹とほかの木々との間に著しい違いがないが、冬のこがらしが吹く時になると、常緑樹は変わらないが、ほかの木々は葉が落ちて裸になる。そのように、現在は心に偽りのある信者と真のキリスト者との見分けがつかないが、しかしその違いが明らかになる日が、今まさにわれわれに臨もうとしている。反対が起こり、頑迷と偏狭が再び吹きまくり、迫害の火が燃やされるときに、二心の偽善者たちは動揺して信仰を放棄するであろう。しかし真のキリスト者は岩のように堅く立ち、繁栄の日よりも信仰が強くなり、望みはいっそう明るくなるであろう。

詩篇記者は、次のように言っている。「わたしはあなたのあかしを深く思う。」「わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました。それゆえ、わたしは偽りのすべての道を憎みます」(詩篇一一九ノ九、一〇四)。

「知恵を求めて得る人、悟りを得る人はさいわいである。」「彼は水のほとりに植えた木のように、その根を川にのばし、暑さにあっても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ」(箴言三ノ一二、エレミヤ書一七ノ八)。

第三十八章

世界への最後の警告

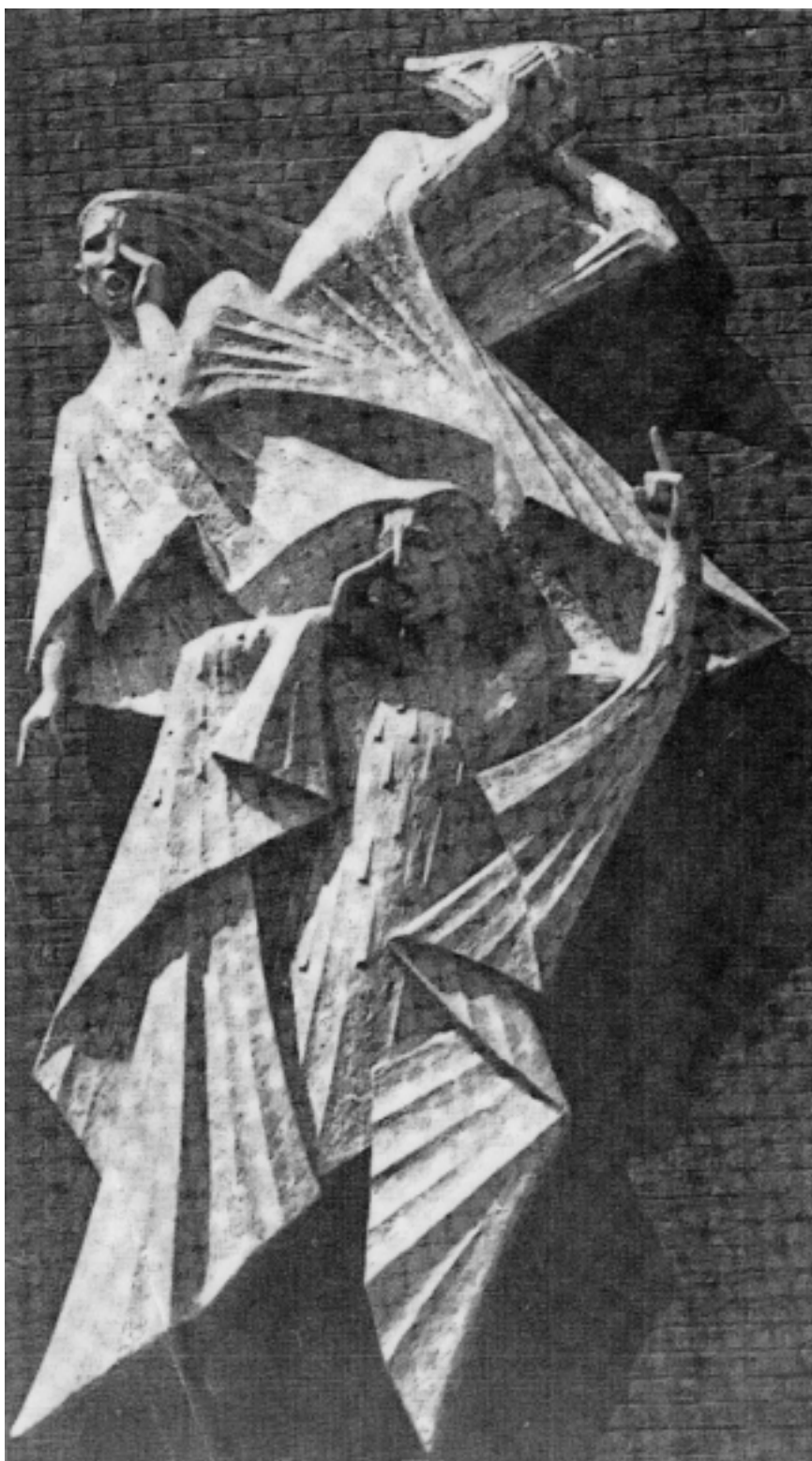
最後のメッセージ

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった。』『わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』」（黙示録一八ノ一、二、四）。

この聖句は、黙示録一四章（八節）の第二天使によってなされたバビロンは倒れたという宣言が、くり返して

行なわれる時を指し示すものであり、それとともに、この使命が一八四四年の夏最初に宣言されて以来、バビロンを構成する諸団体に入り込んできた腐敗について述べている。ここに、宗教界の恐るべき状態が描かれている。真理を拒否することに、人々の心はますます暗く、ますますかたくなになり、ついには不信にこりかたまってしまふ。彼らは、神がお与えになった警告を無視して、十誡の戒めの一つをふみにじりつづけ、ついには、それをきよく守る人々を迫害するようになるのである。キリストは、彼の言葉と彼の民とに浴びせられた侮辱によって、無視されている。心霊術の教えが教会に受け入れられるに従って、肉の心の抑制が取り除かれ、信仰の表明は、最も卑しい不正を隠すためのおおいとなるであろう。霊の現われを信じることは、惑わす霊と悪霊の教えに対して扉を開くことになり、こうして、悪天使の影響が教会内に及んでくる。

この預言に示されたときのバビロンについて、「彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる」と宣言されている(黙示録一八ノ五)。バビロンはその罪のます目を満たし、破滅するばかりになっている。しかし神は、まだバビロンの中に自分の民を持っておられる。そして、神の刑罰が下る前に、これらの忠実な人々を呼び出して、彼らがその罪にあずからず、「その災害に巻き込まれないように」しなければならぬのである。そこで、この天使——天から下って来、栄光をもって地を照らし、力強い声でバビロンの罪を知らせる天使——によって象徴されているところの運動が起こる。この天使のメッセージと関連して、「わたしの民よ。彼女から離れ去れ」という呼びかけが聞かれる。これらの布告は、第三天使の使命とともに、地上の住民に与えられる最後の警告なのである。



黙示録一四章に出てくる三人の天使の彫刻。黙示録においてこれらの天使が告知することは現代の世界にとって重要な意味をもっている。

安息日が論争点

世界は、恐ろしい結果をもたらす問題に直面しようとしている。地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって戦い、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に」、偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう命じるのである(黙示録一二ノ一六)。これに従わない者はすべて、法律上の刑罰を受ける。そして、ついには、彼らは死刑に値する者であると宣告される。他方、創造主の安息日を守ることを命じる神の律法は、それに対する服従を要求し、その戒めを犯すすべての者に神の怒りを警告する。

こうして問題点が明らかに示されるとともに、だれでも神の律法をふみにじって人間の法令に従うものは、獣の刻印を受ける。彼は、神の代わりに服従することを選んでその権力に対する忠誠のしるしを受けるのである。天よりの警告は次のとおりである。「ああよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲」む(黙示録一四ノ九、一〇)。

しかし、真理が人の心と良心に明らかに示され、そしてそれが拒否された上でなければ、だれひとりとして神の怒りを受けることはない。現代に対する特別の真理を聞く機会がこれまでになかった者が、大ぜいいる。第四条の戒めに従うべきことの真の意味が、まだ彼らに示されていない。すべての人の心を見ぬき、あらゆる動機を探られるおかたは、真理を知りたいと願っている者をだれ一人として、争闘の論点について欺かれるままにしてはおかれない。法令は、盲目的に人々に強制されることはない。すべての者は、賢明な決断を下すに十分なだけ

の光が与えられるのである。

安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後の試練が人々を襲うとき、神に仕える者と神に仕えない者の区別が明らかになる。第四条の戒めに反して、国家の法律に従って偽りの安息日を守ることは、神に敵対する権力に忠誠を尽くすという表明であり、一方、神の戒めに従って真の安息日を守ることは、創造主に対する忠誠の証拠である。一方は、地上の権力に服従するしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである。

これまで、第三天使の使命の真理を伝えた者は、単に人騒がせな者としか思われないことがよくあった。米国において宗教的不寛容が勢いを増し、教会と国家が結束して、神の戒めを守る者を迫害する、という彼らの予告は、なんの根拠もないばかげたことであると評されてきた。この国は宗教自由の擁護者であったのだから、これ以外の何ものにもなり得ない、と確信をもって宣言されてきた。しかし、日曜日遵守を強制する問題が広く論じられるとき、長い間疑われ信じられなかった事件が近づいてくるのがわかり、第三天使の使命は、今までになかったような結果をもたらすことであろう。

現代のエリヤたち

神は、どの時代においても、世俗と教会の罪を責めるために、ご自分のしもべたちを遣わされた。しかし人々は、自分たちに対し耳ざわりのよいことが語られることを望み、純粹な、ありのままの真理は受け入れないので

ある。多くの改革者たちは、その仕事を始めたときに、教会と国家の罪を非難するのに、きわめて慎重を期した。彼らは、真のキリスト者の生活の模範を示すことによって、人々を聖書の教理に引きもどそうとした。しかし、神の霊がエリヤに臨み、悪王と背信の民を譴責させられたのと同じように、彼らにも神の霊が与えられた。彼らは、聖書の明白な言葉、すなわち、これまで伝えることを躊躇していた教理を、伝えずにはおれなくなった。彼らは、真理と、魂をおびやかす危険とを、熱心に宣言せずにはおれなくなった。彼らは、その結果がどうなるかと、主が彼らに与えられたその言葉を語った。そして、人々はその警告を聞かなければならなかった。

第三天使の使命も、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえなくなる。バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心靈術の侵入、法王権のひそかではあるが急速な発展などが、みな暴露される。これらの厳粛な警告によって、人々は動かされる。こうした言葉を聞いたことのない者が、幾千となく耳を傾ける。バビロンとは、その誤りと罪のため、また、天からの真理を拒んだために倒れた教会である、ということを知り、彼らは驚くのである。人々が、彼らのかつての教師たちのところへ行つて、これらのことは真実であるかと、熱心に尋ねるときに、牧師たちは、作り話を語り、耳ざわりのよいことを予言し、彼らの恐怖と目ざめた良心をしずめようとする。しかし、多くの人々は、単なる人間の権威に満足せず、はっきりした「主はこう言われる」という言葉を要求するので、一般教会の牧師たちは、昔のパリサイ人のように、自分たちの権威が疑われたことを怒って、そのメッセージはサ

タンから出たものであると非難し、罪を愛する群衆を煽動して、その宣布者たちをあざけり、迫害するのである。

ふるいの時

争闘が新しい分野に及び、ふみにじられた神の律法に人々の心が向けられるとき、サタンは騒ぎ出す。使命に伴う力は、それに反抗する人々を怒らせるだけである。牧師たちは、その光が彼らの群れの上に輝かないようにと、ほとんど超人的な力で、それをさえぎろうとする。彼らは、あらゆる手段に訴えて、これらの重大な問題に關する討論を圧迫しようとする。教会は、政權の強大な権力に訴える。そして、この働きにおいて、カトリックとプロテスタントは提携する。日曜休業運動が、ますます大胆に、ますます断固として推進されるにつれて、戒めを守る人々に対して法令が發布される。彼らは、罰金や投獄をもって脅かされる。そして、ある者は有力な地位によって、また他の者は報賞や便宜の提供によって、信仰を放棄するよう勧誘される。しかし彼らは、断固として、「われわれが誤っていることを神の言葉によって示してほしい」と答えるのである。これは、同様の状況の下でルターが行なったのと同じ訴えである。法廷に呼び出された者たちは、真理の力強い弁明をする。そして、それを聞く者の中には、神のすべての戒めを守るという立場をとるように導かれる者が出てくる。こうして、他の方法ではこれらの真理を知ることができない幾千という人々の前に、光がもたらされるのである。

神の言葉に良心的に従うことは、反逆と見なされる。サタンに目をくらまされた親は、信仰を持つ子供を残酷無情に扱う。主人や女主人は、戒めを守るしもべを虐げる。愛情は、冷ややかになる。子供たちは勸当されて、

家から追い出される。パウロの言葉は、文字通り成就する。「キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」(テモテ第二・三ノ一二)。真理の擁護者たちが、日曜安息日を尊ぶことを拒むとき、投獄される者もあれば、追放される者もあり、また奴隷として扱われる者もいる。人間的に考えて、今そうしたことはありえないように思われる。しかし、神の霊の抑制が人々から除かれ、彼らが神の戒めを憎むサタンの支配下に陥るとき、異様な事態が展開するのである。神に対する恐れと愛が取り除かれるとき、人の心は、はなはだ残酷になりうるのである。

あらしが迫つて来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっていく。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般向けのする側を選ぶのである。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き迷わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる。安息日遵守者が法廷に呼び出されて、信仰について答えるときに、これらの背教者たちは、サタンの最も強力な手先となって、彼らの中傷し非難する。そして、偽りの報告やあてこすりによつて、彼らに対する権力者たちの怒りをかき立てる。

神の民の経験

この迫害の時に、主のしもべたちの信仰が試みられる。彼らは、神と神の言葉だけに頼つて、忠実に警告を発

してきた。神の霊が彼らの心を動かして、彼らに語らせたのである。彼らは、聖なる熱意と神の強い力に刺激されて、主が彼らに与えられた言葉を人々に語るこの結果などは少しも考えに入れずに、彼らの義務の遂行に取りかかった。彼らは、現世の利益を考えたり、名声や生命を保とうとしたりはしなかった。しかし、反対と非難のあらしが彼らに襲いかかるとき、ある者は、驚きのあまり、「もしわれわれの言葉の結果を予知していたら、われわれは黙っていたであろう」と叫ぶであろう。彼らは困難に取り囲まれる。サタンは激しい誘惑をもって彼らを攻撃する。彼らが手がけた仕事は、とうてい彼らの能力では成し遂げられないように思われる。彼らは滅亡に脅かされる。彼らを活気づけた熱は去った。しかし彼らは引き返すことができない。その時彼らは、自分たちの全くの無力さを悟り、全能者のもとに逃れて力を求める。彼らは、自分たちが語った言葉が、自分たちの言葉ではなくて、警告せよと命じられた主のものであったことを思い出す。神が彼らの心に真理を入れられた。そして彼らは、それを宣べ伝えざるをえなかったのである。

過去の時代の神の人々は、この同じ試練に会った。ウィクリフ、フス、ルター、ティンダル、バクスター、ウエスレーたちは、すべての教理は聖書によって吟味されるべきで、聖書が認めないものはすべて拒否すると宣言した。迫害はこれらの人々に対して、情け容赦なく猛威をふるった。しかし彼らは、真理を伝えることをやめなかった。教会史上の各時代は、その時代の神の民の必要に応じた特別な真理の展開によってそれぞれ特徴づけられている。新しい真理はみな、憎悪と圧迫を押しきって進んだ。真理の光を受けた人々は、誘惑と試練に会った。主は、危急の場合には、人々に特別な真理をお与えになる。いったいだれが、それを布告することを拒むことができるか。主はご自分のしもべたちに、最後のあわれみの招きを世に提示するよう命じられる。彼らは、黙っ

ていることができない。もし黙っていれば、彼らの魂が危機に瀕するのである。キリストの使者たちは、結果には関係しない。彼らは自分たちの義務を遂行して、結果は神にゆだねなければならない。

大争闘の激化

反対がますます激しくなるにつれて、神のしもべたちは再び困惑する。というのは、彼らには、自分たちが危機をもたらしただように思われるからである。しかし、良心と神の言葉は、彼らの道が正しいことを保証してくれる。そして、試練は続いて、彼らにはそれに耐える力が与えられる。争いは、いよいよ切迫し激化する。しかし彼らの信仰と勇氣は、危機とともに高揚する。彼らのあかしはこうである。「われわれは、世の歡心を買っために聖なる律法を分かち、ある部分を重要であるとし、他の部分を重要でないとして、神の言葉に手を入れるようなことはしない。われわれが仕える主は、われわれを救うことがおできになる。キリストは地上の諸權力を征服された。だからわれわれは、すでに征服された世界を恐れることがあろうか。」

さまざまな形の迫害は、サタンが存在し、キリスト教が生きた力を持っているかぎり存続する原則の、展開である。暗黒の軍勢の反対を受けることなしに、神に仕えることができる者はいない。悪天使たちは、彼の影響によって彼らの手から獲物が奪われることを恐れて、彼を攻撃する。彼の模範によって譴責を受けた悪人たちは、今悪天使たちと力を合わせて、魅力的な誘惑をもって彼を神から引き離そうとする。それでも成功しなければ、今度は強制的な力を用いて良心に強いるのである。

しかし、天の聖所において、イエスが人間の仲保者としておられるかぎり、聖霊の抑制力が支配者と国民に及んでいるのである。それは今なお、ある程度国家の法律を支配している。このような法律がなかったならば、世界の状態は現在よりはるかに悪化していたことであろう。この世の支配者の多くは、サタンの有力な手下であるが、神もまた国家の指導者たちの中に、ご自分の代表者を持っておられる。敵はそのしもべたちを動かして、神の働きをなはだしく阻止するような法案を提出するが、主を恐れる政治家たちは、聖天使に動かされて、このような提案に断固として反対する。こうして、数名の者が、悪の強力な潮流を阻止するのである。真理の敵たちの反対は、第三天使の使命がその働きを遂行するために、抑制される。最後の警告が発せられるとき、それは、今主の働きの器になっているこれらの有力者たちの注意をひく。そして、彼らの中のある者は、それを受け入れ、神の民とともに立って、悩みの時を通過するのである。

後の雨と大いなる叫び

第三天使の使命の宣布に協力する天使は、その栄光で全地を照らすのである。ここに、全世界的で比類のない力を持った働きが予告されている。一八四〇年から四四年に至る再臨運動は、神の力の輝かしいあらわれであった。第一天使の使命は、世界の各伝道地に伝えられた。そしてある国々においては、十六世紀の宗教改革以来どの国にもなかったような大いなる宗教的関心が引き起こされた。しかし、第三天使の最後の警告下における大運動は、これをはるかに超えるものとなるのである。

その働きは、ペンテコステの日の働きに似ている。福音の開始にあたって、貴重な種を発芽させるために、聖霊が注がれて「前の雨」が与えられたように、その終わりにおいて、収穫を实らせるために、「後の雨」が与えられるのである。「この故にわれらエホバをしるべし、切にエホバを知ることを求むべし。エホバはあしたの光のごとく必ずあらわれいで、雨のごとくわれらにのぞみ、後の雨のごとく地をうるおしたもう」（ホセア書六ノ三・文語訳）。「シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び樂しめ。主はあなたがたを義とするために秋の雨「前の雨」——英語訳。以下同じ」を賜い、またあなたがたのために豊かに雨を降らせ、前のように、秋の雨「前の雨」と春の雨「後の雨」とを降らせられる」（ヨエル書二ノ一二三）。「神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。」「そのとき、主の名を呼び求める者は、みな救われるであろう」（使徒行伝二ノ一七、二一）。

福音の大なる働きは、その開始を示した神の力のあらわれより劣るもので終わることではない。福音の開始にあたって秋の雨（前の雨）となつて成就した預言は、その終局において、春の雨（後の雨）となつて再び成就するのである。これが、使徒ペテロが待望した「慰め（原文では refreshing（活気づけ、回復の意）の時」である。彼は次のように言った。「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、……イエスを、神がつかわして下さるためである」（使徒行伝三ノ一九、二〇）。

神のしもべたちは、きよい献身の喜びに顔を輝かせ、天からの使命を伝えるために、ここかしこ奔走する。全世界の幾千の声によって、警告が発せられる。奇跡が行なわれ、病人はいやされ、しるしと不思議が信じる者

に伴う。サタンもまた、偽りの不思議を行ない、人々の前で天から火を降らすことさえする（黙示録一三ノ一三参照）。こうして、地上の住民は、立場を明らかにしなければならなくなる。

使命は、議論によるよりも、神の霊の深い感動によって伝えられる。論拠はすでに示された。種はまかれた。そして今、それが生えて、実を結ぶのである。伝道者によって配布された文書は、その感化を及ぼした。しかし、感動を受けた人々の多くは、真理を十分に理解して、それに服従することを、妨げられていた。けれども、今、光は至るところにゆきわたり、真理は明らかにされ、神の忠実な子供たちは、彼らを束縛していたかせを絶ち切るのである。家族関係、教会関係は、もはや彼らを止める力がない。真理は他の何物よりも尊いのである。諸勢力が力を結集して真理に反対するにもかかわらず、多くの者が主の側に立つのである。



天変地異が襲い、すべてがくずれ去る時がこよとしてゐる。しかし神に信頼する者は、どんな激変のただ中にあつても、何ひとつ恐れる必要はない。

第三九章

大いなる悩みの時

恩恵期間の終わり

「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国がはじまってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」(ダニエル書一二ノ一)。

第三天使の使命が閉じられると、もはや地の罪深い住民のためのあわれみの嘆願はなされない。神の民はその働きを成し遂げたのである。彼らは「後の雨」と「主のみ前から」来る「慰め」を受けて、自分たちの前にある試みの時に対する準備ができた。天使たちは、天をあちらこちらへと急ぎまわっている。一人の天使が地から戻ってきて、自分の働きが終わったことを告げる。すなわち、最後の試みが世界に臨み、神の戒めに忠実であるこ

とを示した者はみな、「生ける神の印」を受けたのである。その時イエスは天の聖所でのとりなしをやめられる。イエスはご自分の手をあげて、大声で「事はすでに成った」と仰せになる。そして、イエスが「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」と厳肅に宣言されると、天使の全軍はその冠をめぐ（黙示録二二ノ一）。どの人の判決も、生か死かに決まった。キリストはご自分の民のために贖いをなさり、彼らの罪を消し去られた。キリストの民の数は満たされ、「国と主権と全天下の国々の権威」とは、今まさに救いを相続する者に与えられようとしており、イエスは王の王、主の主として統治されるのである。

イエスが聖所を去られると、暗黒が地の住民をおおう。その恐ろしい時に、義人は仲保者なしに聖なる神の前に生きなければならない。悪人の上に置かれていた抑制が取り除かれ、サタンは最後まで悔い改めない者を完全に支配する。神の忍耐は終わった。世は神のあわれみを拒み、その愛をさげすみ、その律法をふみにじってきた。悪人は恩恵期間の限界を越えた。頑強に拒まれてきた神のみ霊は、ついに取り去られた。彼らは神の恵みの守りを失って、悪魔に対する防備が全くない。その時サタンは、地の住民を大いなる最後の悩みに投げ入れる。神の天使たちが人間の激情の激しい風を抑えるのをやめると、争いの諸要素がごとく解き放たれる。全世界は、昔のエルサレムを襲ったものよりもっと恐ろしい破滅に巻き込まれる。

ただ一人の天使が、エジプト人の長子をみな殺しにして、国じゅうを嘆きで満たした。ダビデが民を数えて、神にそむいたとき、ひとりの天使が恐ろしい破滅を引き起こして、彼の罪を罰した。神がお命じになるときに聖天使たちによって行使されるのと同じ破壊力が、神のお許しになるとときには悪天使たちによっても行使される。

勢力はすでにこのついでに、あらゆるところに荒廃を広げようと、神の許しを待つばかりである。

憎悪と迫害

神の律法を尊ぶ者は、世に災いをもたらす者として非難されてきた。そして彼らは、地球を災いで満たしているところの、恐ろしい自然の猛威と人間どうしの争いと流血の原因とみなされる。最後の警告に伴う力が、悪人たちを激怒させた。彼らの怒りはメッセージを受け入れたすべての人に向かって燃え上がり、サタンは憎悪と迫害の精神をいっそう強くあおり立てる。

神のご臨在が最終的にユダヤ国民から取り去られた時、祭司と民はそれを知らなかった。サタンの支配下にあつて、最も恐ろしい悪意に満ちた激情に支配されながら、彼らはなお自分たちが神に選ばれた者であると考えていた。神殿の奉仕は続けられ、犠牲は汚れた祭壇にささげられていた。神の愛されたみ子の血を流すという罪を犯し、そのしもべたちや使徒たちを殺そうとする民に、神の祝福が毎日求められていた。同じように、聖所での、取り消すことのできない判決が発表され、世界の運命が永遠に定まっても、地上の住民はそれを知らないである。宗教の形式は、神のみ霊が最終的に取り去られてしまった民によって続けられる。そして、悪の君が自分の悪だくみを成し遂げるために彼らに吹き込む悪魔的な熱心さは、神に対する熱心さと似ているであろう。

安息日がキリスト教世界全体の特別な論争点となり、宗教と政治の当局者が結束して日曜日遵守を強要するとき、少数の者は、世間の要求に屈することを断固として拒むために、全世界ののろいの的となる。教会の制度と

国家の法律に反対の立場をとる少数者は許すべからざる者であり、全世界が混乱と無法の状態に陥るよりも、彼らが苦しみを受けるほうがよいと主張される。同じ議論が千八百年前（注・著者の執筆当時から）に、「民の役人たち」によってキリストに対してなされた。陰險な力やパは、「ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようになるのがわたしたちにとって得だ」と言った（ヨハネ一ノ五〇）。この議論は決定的なものに思われ、ついに、第四条の戒めにある安息日を聖とする者に対して法令が発せられ、彼らは最も重い刑罰に相当する者として非難される。そして人々は、一定期間ののちには彼らを殺してもよい自由が与えられる。旧世界の力トリック教と新世界の背教的新教とは、神の戒めの全部を尊ぶ者たちに対して、同じような手段をとるであろう。そのとき神の民は、ヤコブの悩みの時として預言者によって描かれている悩みと苦しみの場合に投げ入れられる。「主はこう仰せられる、われわれはおののきの声を聞いた。恐れがあり、平安はない。…なぜ、どの人の顔色も青く変っているのか。悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である。しかし彼はそれから救い出される」（エレミヤ書三〇ノ五―七）。

ヤコブの悩みの時

エサウの手からの救出を熱心に祈り求めたヤコブの苦悶の夜（創世記三二ノ二四―三〇参照）は、悩みの時の神の民の経験をあらわしている。ヤコブは、エサウに与えられることになっていた父の祝福を欺瞞によって得たために、兄の恐ろしい脅迫におびえて、命からがら逃げ出したのであった。彼は、長年の流浪の生活のあとで、

神の命令によって、妻子と家畜を連れて故郷へと出発した。国境についたとき、彼は、エサウが勇士の一隊を率いて近づいているという知らせを受けて、恐怖に満たされた。エサウが復讐の念に燃えていることは、疑う余地がなかった。ヤコブの一族は、武装も防備もないので、今にも暴力と虐殺の無力な犠牲になるかと思われた。ヤコブは不安と恐怖に襲われた上に、重苦しい自責の念にかられた。というのは、このような危険をもたらしたのは、彼自身の罪であつたからである。彼の唯一の希望は、神のあわれみにすぎることであつた。彼の唯一の防備は、祈りでなければならなかつた。しかもなお、彼は、兄に対して行なつた罪惡の償いのためと、切迫した危険を避けるために、自分としてできることはすべてなしたのである。そのように、キリスト者も、悩みの時に近くにつれて、人々の前で自分たちの立場を明らかにし、偏見を取り去り、そして良心の自由を脅かす危険を避けるために、全力を尽くさなければならない。

ヤコブは、家族の者が彼の苦悩を見ないように、彼らを送り出してから、一人残つて神に懇願した。彼は自分の罪を告白し、彼に対する神のあわれみを感謝するとともに、深くへりくだつた心で、彼の先祖に与えられた契約と、ベテルにおける夜の幻の中で、また流浪の地において、彼に与えられた約束とが、行なわれることを嘆願した。彼の生涯の危機がやってきていた。すべてが危うくなつた。暗黒と孤独の中で、彼は祈りつづけ、神の前に身を低くしつづけた。突然、一つの手が彼の肩におかれた。彼は、敵が彼の生命をねらっているのだと考える。そして、必死になつて敵と闘う。夜が明けようとする時、この見知らぬ人は超人的な力をあらわす。彼が触れると、頑強なヤコブはまひしたようになる。そしてヤコブは力を失つて倒れ、この不思議な敵の首にすがつて、涙ながらに懇願する。ヤコブは、今、自分が闘っていたおかたが、契約の天使であられることを知る。彼は体の自

由を失い、激しい痛みを感じながらも、彼の願いを放棄しない。彼は自分の罪のために、長い間悩み、自責の念にかられ、苦しみに耐えてきた。今彼は、それが許されたという確証を得なければならぬ。天からの来訪者は、今にも立ち去ろうとするように見える。しかしヤコブは、彼にすがって、祝福を求める。天使は、「夜が明けからわたしを去らせてください」と言うが、ヤコブは、「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」と叫ぶのである。なんという確信、なんという堅忍不拔の精神が、ここにあらわされていることであろう。もしもこれが、高慢で僭越な要求であつたならば、ヤコブは直ちに滅ぼされたことであろう。しかし彼の要求は、自分の弱さと無価値なことを告白しながらも、契約を果たされる神のあわれみに信頼する者の確信であつた。

「彼は天の使と争つて勝つた(ホセア書一一ノ四)」。この罪深く、誤りを犯した人間は、へりくだりと悔い改めと自己放棄とによつて、天の君と闘つて勝つたのである。彼はそのふるえる手で、神の約束をしっかりとつかんだ。そのとき、無限の愛のおかたは、罪人の願いを退けることがおできにならなかつた。彼の勝利の証拠、そして彼の模範にならう他の人々への励ましの証拠として、彼の名が、彼の罪を思い起こさせるものから、彼の勝利を記念するものへと変えられた。そして、ヤコブが神と争つて勝つたということは、彼が人にも勝つという保証であつた。彼はもはや兄の怒りに直面することを恐れなかつた。なぜなら、主が彼の防御だからであつた。

恐るべき苦悩

サタンは神の天使たちの前でヤコブを訴え、彼は罪を犯したのであるから自分には彼を滅ぼす権利があると主

張して、エサウに働きかけて彼のほうへと向かわせていた。そして、ヤコブの長い苦闘の夜の間、サタンは、彼に自分の罪を思い起こさせて、失望に陥れ、彼が神にすがっているその手を引き離そうとした。ヤコブはほとんど絶望しそうになった。しかし彼は、天からの助けがなければ自分は滅びるしかないことを知っていた。彼は、自分の大きな罪を心から悔い改め、神のあわれみをこい求めた。彼はその目的をすてようとはせず、しっかりと天の使いを捉え、苦悶の叫びをあげて熱烈に懇願し、ついに勝利したのであった。

サタンは、エサウを動かしてヤコブに立ち向かわせたように、悩みの時に、悪人たちを煽動して神の民を滅ぼそうとする。そして彼は、ヤコブを訴えたように、神の民に対する非難を申し立てる。彼は、世界を自分の手中にあるものと考えている。しかし神の戒めを守る小さな群れが、彼の主権に反抗しているのである。もし彼が、彼らを地上から一掃することができたら、彼の勝利は完全なものとなる。彼は、天使が彼らを守っているのを見て、彼らの罪が許されたことを推測するが、彼らの調査が天の聖所において決定されたことは知らない。サタンは、自分が彼らを誘惑して犯させた罪を正確に知っている。そして彼は、それらを神の前に大きく誇張して示し、この人々は自分と同様に神の恵みから当然除外されるべきであると主張する。主が、彼らの罪を許しながら、サタンとその使いたちを滅ぼすことは、正当ではないと彼は宣言するのである。サタンは彼らを、自分のえじきであると主張し、滅ぼすために自分の手に与えられるべきであると要求する。

サタンが、神の民をその罪のゆえに責めるときに、主はサタンが、彼らを極限まで試みることを許される。神に対する彼らの信頼、彼らの信仰と堅実さとが、激しく試みられる。彼らは、過去をふりかえると、望みを失ってしまう。なぜなら、その全生涯の中に、よいところをほとんど見ることでできないからである。彼らは、自分

たちの弱さと無価値とを十分に自覚している。サタンは、彼らの状態は絶望的で、彼らの汚れたしみは洗い去ることができないと思わせて、彼らを恐怖に陥れようとする。サタンは、彼らの信仰をくじいて、彼らを彼の誘惑に負けさせ、神に対する忠誠を放棄させようと望むのである。

神の民は、彼らを滅ぼそうとする敵に取り囲まれるが、しかし彼らの味わう苦悩は、真理のために受ける迫害を恐れてのものではない。彼らは、自分たちがすべての罪を悔い改めているかどうか、また、自分たちの中の何かのあやまちによって、「全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう」という救い主の約束の成就を妨げるのではないか、ということ恐れるのである（黙示録三ノ一〇）。もし彼らが、許しの確証を持つことができないならば、拷問も死をもいとわないであろう。しかし万一、許しに値しない者であることがわかって、自分自身の品性の欠陥のゆえに生命を失うようなことがあれば、それは神の聖なるみ名を辱しめることになってしまう。

彼らは、至るところに反逆の陰謀を聞き、暴動が活発に起きるのを見る。そして彼らの心の中には、この大いなる背教が終わるように、そして悪人たちのよこしまが終わるようにという、強烈な願望と熱望が起こる。しかし、彼らが、反逆の活動をとどめるよう神に祈っていないながらも、自分自身には悪の大きな潮流に抵抗する力も押し返す力もないことを感じて、激しい自責の念にかられる。もし彼らが、彼らの全能力を常にキリストの奉仕に用いていたならば、そして力から力へと進んでいたならば、サタンの勢力はこれほど優勢な力をもって襲ってはこないだろうと、彼らは感じるのである。

金は火で練られる

彼らは、彼らの多くの罪をこれまで悔い改めたことを指し示して、神の前で彼らの心を悩まし、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」という救い主の約束をこい求める（イザヤ書二七ノ五）。彼らの信仰は、祈りが直ちに答えられないからと言って、なくなってしまうわれない。激しい不安、恐怖、苦悩に苦しみながらも、彼らは祈り求めることをやめない。彼らは、ヤコブが天使をつかまえたように、神の力を捕える。そして、「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」と彼らは心の中で叫ぶのである。

もしヤコブが、欺瞞によって長子の特権を得た罪をあらかじめ悔い改めていなかったならば、神は、彼の祈りを聞き、あわれみ深く彼の生命を保つことを、なさらなかったであろう。そのように、悩みの時においても、神の民は、恐怖と苦悩にさいなまれているとき、まだ告白していない罪を思い出すならば、彼らは圧倒されてしまうことであろう。絶望が彼らの信仰を断ち切り、彼らは神に救いを求める確信が持てなくなることであろう。しかし、彼らは、自分たちが無価値なことを深く感じてはいるが、告白すべき罪を隠してはいない。彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは、罪を思い出すことができない。

神は人生の小さなことにおける不忠実を見のがされると、サタンは多くの者に思い込ませている。しかし、主は、ご自分が、悪を是認することも大目に見ることもなさらないかたであることを、ヤコブの取り扱いにおいて

示された。罪の言いわけをしたり、隠したりして、それを告白せず、許されないまま、天の書に残しておく者は、みなサタンに負けてしまうのである。□でりつぱなことを言い、栄誉ある地位にあればあるほど、その人々の行動は、神の目には嘆かわしいものであり、大いなる敵サタンの勝利はいっそう確実なのである。神の日のための準備を遅らせる者は、悩みの時やそれ以後においては、準備することができない。こうした人々は、すべて絶望である。

なんの準備もせずに、最後の恐るべき争闘に当面するこれらの自称キリスト者たちは、絶望して、激しい苦悶の叫びをあげて彼らの罪を告白する。そして悪人たちは、彼らの苦悶をながめて勝ち誇るのである。このような告白は、エサウやユダの告白と同じ性質のものである。これをなすものは、罪そのものではなくて、罪の**結果**を悲しむのである。彼らは真の悔い改めをしておらず、悪に対する嫌悪感がない。彼らは刑罰を恐れて罪を認めるのである。そして、昔のパ□のように、刑罰が取り除かれるとまた天に反抗するのである。

ヤコブの生涯はまた、欺かれ、試みられ、罪に陥れられても、真に悔い改めて神に立ちかえった者を、神は見捨てられないという保証でもある。サタンはこのような人々を滅ぼそうとするが、神は天使を遣わして、危機の時に彼らを慰め、保護されるのである。サタンの攻撃は、激しく、断固たるもので、彼の欺瞞は恐るべきものである。しかし、主の目はご自分の民に向けられ、その耳は彼らの叫びを聞かれる。彼らの苦悩は大きく、炉の火は彼らを焼き尽くすように思われる。しかし、金を吹き分ける者であられる神は、彼らを火で練った金として取り出される。この最も激しい試練の時にあける、神のその子供たちに対する愛は、彼らの最も輝かしい繁栄の時と同じように、強く、やさしいのである。しかし、彼らは、火の炉に投げ入れられる必要がある。キリストの姿

が完全に反映されるように、彼らの世俗的なところが焼きつくされねばならない。

われわれに必要なもの

われわれの前にある苦悩と苦悶の時は、疲労と遅延と飢えに耐えることのできる信仰、すなわち、激しく試みられても落胆しない信仰を要求する。その時に備えるために、すべての者に恩恵期間が与えられている。ヤコブは、断固として屈しなかったために勝利した。彼の勝利は、しきりに願い求める祈りに力があるということの実証である。彼のように神の約束をしっかりとつかみ、彼のように熱心で忍耐強い者はみな、彼が勝利したように勝利するのである。自分をすて、神の前で心を悩まし、神の祝福を求めて熱心に祈り続けようとする者は、それを受けることができない。祈りによる神との格闘——このことを知っている人がなんと少ないことである。熱烈な願いをもって、心から神によりすがり、全力を注ぎ出す人がなんと少ないことである。嘆願者の上に、言葉では表現することのできない絶望の波が押し寄せるときに、確固不動の信仰をもって神の約束にすぎる者が、なんと少ないことであろう。

今、少しか信仰を働かせていない者は、サタンの欺瞞の力と良心を強制する法令の下に屈してしまふ危険が多分にある。そして、たとい彼らが試練に耐え得ても、常に神に信頼する習慣を養ってこなかったために、悩みの時には、さらに大きな苦難と苦悩に陥ることであろう。彼らは、自分たちが学ぶことを怠っていた信仰の教訓を、恐るべき失望のもとにあつて学ばなければなくなる。

われわれは今、神の約束を試すことによって、神をよく知らなければならぬ。天使は心からの熱心な祈りをすべて記録している。われわれは、神との交わりを怠るよりも、利己的な満足を求めることをやめるべきである。神の是認の下にある最低の貧困、最大の自己犠牲は、是認のない富、栄誉、安楽、友情にまさっている。われわれは、時間をかけて祈らなければならない。もしわれわれが世俗のことに心を奪われているならば、主は、金、家屋、肥えた土地などの偶像を、われわれから取り去ることによって、われわれに時間をお与えになるかもしれない。

もし青年が、神の祝福を求めることができる道のほかには、どんな道に入ることをも拒むならば、罪に誘われることはない。世界に最後の厳粛な警告を伝える使命者たちが、冷淡で無気力で怠惰な態度でなくて、ヤコブのように、熱烈に、信仰をもって神の祝福を祈り求めるならば、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」と言うことのできる多くの場所を見いだすであろう（創世記三二ノ三〇）。天は彼らを、神と人との勝つ力をもった王子たちとみなすのである。

準備するのは今

「かつてなかったほどの悩みの時」が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験——今われわれが持つておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験——が必要なのである。現実の困難というものは、予想したほどではないということがしばしばある。しかし、われわれの前にある危機の場合

は、そうではない。どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには、とうてい及ばない。この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。「主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである」(エゼキエル書一四ノ二〇)。

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあつて完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と宣言された(ヨハネ一四ノ三〇)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。

われわれが、キリストの贖罪の血を信じることによって、罪を捨て去らなければならないのは、現世においてである。われわれの尊い救い主は、われわれが彼と結合して、われわれの弱さを彼の力に、われわれの無知を彼の知恵に、われわれの無価値さを彼の功績に結びつけるよう招いておられる。神の摂理は、われわれがイエスの柔和と謙遜を学ぶ学校である。主はわれわれの前に、われわれが選ぶ安易で楽しく思われる道ではなくて、人生の真の目的を、常に置かれる。われわれの品性を天の型に形造るために神が用いられる手段に、われわれは協力しなければならぬ。このことを怠ったり、遅らせたりする者は、必ず魂を最も恐ろしい危険にさらすことにな

るのである。

最後を飾る大欺瞞

使徒ヨハネは幻の中で、大きな声が天でこう叫ぶのを聞いた。「地と海よ、おまえたちはわざわざいである。悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」(黙示録一二ノ一二)。天の声にこう叫ばせる光景は、実に恐ろしいものである。サタンの怒りは、彼の時が短くなるにつれて増し加わり、欺瞞と破壊の働きは、悩みの時に最高潮に達する。

まもなく、超自然的な恐ろしい光景が、奇跡を働く悪鬼たちの力のしるしとして天に現われるであろう。悪霊たちは地の王たちのところと全世界とに出て行って、彼らを欺瞞の中に閉じ込め、天の統治に対するサタンの最後の闘争に加わるようになり立てる。これらの手先によつて、為政者も国民も一様に欺かれる。自分はキリストであると称する者たちが現われ、世の贖い主のものである称号と礼拝とを要求する。彼らは不思議ないやしの奇跡を行ない、聖書のおかしとは相反する啓示を天から受けたと公言する。

欺瞞の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであろう。教会は、救い主の来臨を教会の望みの完成として期待していると長い間公言してきた。今や大欺瞞者は、キリストがおいでになったように見せかける。地上のあちろちらで、サタンは、黙示録の中でヨハネが述べている神のみ子についての描写に似た、まばゆく輝く威厳ある者として人々の中に現われる(黙示録一ノ二三―一五参照)。彼をとりまいている栄光は、

これまで人間の目が見たどんなものも及ばない「キリストがこられた、キリストがこられた」という勝利の叫びが、空中に鳴り響く。人々が彼をあがめてその前にひれ伏すと、彼は両手をあげて、キリストが地上にあられた時に弟子たちを祝福されたように、彼らに祝福を宣言する。彼の声は柔らかく穏やかで、しかも美しい調べに満ちている。やさしい同情のこもった調子で、彼は、救い主が語られたのと同じ祝福に満ちた天の真理を幾つか述べる。彼は人々の中の病人をいやし、それから、キリストらしくみせかけながら、安息日を日曜日に変えたことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福した日を聖とするようにと命じる。彼は、あくまでも第七日をきよく守り続ける者は、光と真理とをもって彼らに遣わされたわたしの天使たちの言うことを聞かないで、わたしの名を冒流している者だと宣言する。これは強力な、ほとんど圧倒的な惑わしである。魔術師シモンに欺かれたサマリヤ人のように、多くの人々は、小さい者から大きい者にいたるまで、これらの魔術に心を奪われて、この人こそは『大能』と呼ばれる神の力であると言う(使徒行伝八ノ一〇)。

しかし、神の民は欺かれない。このにせキリストの教えは聖書と一致していない。彼の祝福は、獣とその像を拝む者、すなわち、神のまじりけのない怒りがその上に注がれると聖書が断言しているその人々に対して、宣言されているからである。

さらに、サタンにはキリストの来臨のありさまをまねることは許されない。救い主はこの点についての惑わしに対してご自分の民に警告し、再臨のありさまをはっきりと予告された。「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起つて、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであらう。…だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。

ちようど、いならずだが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」(マタイ二四ノ二四―二七、マタイ二四ノ三一、二五ノ三一、黙示録一ノ七、テサロニケ第一・四ノ一六、一七参照)。この来臨はまねることが不可能である。それは世界じゅうに知られ、全世界の人々が目撃するのである。

危機迫る

聖書を熱心に研究し、真理の愛を受けたものだけが、世界をとりこにする強力な惑わしから守られる。聖書のあかしによって、これらの者は欺瞞者サタンの変装を見破る。すべての人に試みの時がやってくる。試みのふるいによって、ほんもののキリスト者が明らかにされる。神の民は、自分の感覺的証拠に屈しないほど、今神のみ言葉に固く立っているだろうか。こうした危機においても、彼らは聖書に、しかも聖書だけにすがりつくだろうか。サタンは、できることなら、彼らがその日に立つ備えをするのを妨げようとする。サタンは彼らの道をふさぎ、この世の宝で彼らを迷わせ、重くて疲れさせる荷を負わせて、その心をこの世の煩いでいっぱい満たし、試みの日が盗人のように彼らを襲うようにと、事を運ぶであろう。

キリスト教国のさまざまな為政者たちが、戒めを守る者たちを抑圧するために出した法令によって、政府の保護が取り除かれ、彼らが彼らの滅亡を願う者たちの手にまかされると、神の民は都市や村から逃れ、群れを作って最も荒れ果てた寂しい場所に住む。多くの者は山のとりでに避難所を見つめる。ピエモンテの谷間のキリスト者たちのように、彼らは地の高い所を隠れ家とし、岩のとりでを神に感謝する(イザヤ書三三ノ一六参照)。しか

し、あらゆる国のあらゆる階級の人々が、身分の高い者も低い者も、富んだ者も貧しい者も、黒人も白人も、大ぜいの者が最も不当で残酷なとられの身に突き落とされる。神に愛されている者たちが、疲れきった日々を送り、鎖につながれ、牢獄の格子の中に閉じ込められ、死刑の宣告を受ける。ある者は暗くいまわしい土牢の中で、餓死するままに放置されているように見える。彼らのうめきを聞く人間の耳はなく、彼らを助けようとする人間の手はない。

この試みの時に、主はご自分の民をお忘れになるだろうか。主は、洪水前の世界に刑罰がくだった時、忠実なノアをお忘れになっただろうか。平地の町を焼き尽くすために火が天からくだった時、ロトをお忘れになっただろうか。エジプトで偶像礼拝者たちに囲まれていたヨセフをお忘れになっただろうか。イゼベルがエリヤをバアルの預言者と同じ運命にすると誓って彼を脅かした時、主はエリヤをお忘れになっただろうか。牢獄の暗く陰つつな穴にあつたエレミヤをお忘れになっただろうか。火の炉の中の三人の人物を、あるいはライオンの穴の中のダニエルを、お忘れになっただろうか。

「シオンは言った、『主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた』と。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。…』」（イザヤ書四九ノ一四―一六）。万軍の主は言われた、「あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのである」（ゼカリヤ書二ノ八）。

敵が彼らを牢獄に投げ入れても、土牢の壁は彼らの魂とキリストとの交わりを断ち切ることはできない。彼らのあらゆる弱さを見、あらゆる試みを知っておられるおかたは、地上のすべての権力にまさっておられる。そし

て天使は寂しい独房に彼らを訪れ、天よりの光と平安を伝える。牢獄は宮殿のようになる。それは信仰に富む者がそこに住んでいて、パウロとシラスがピリピの獄屋の中で真夜中に祈りをささげ賛美の歌声をあげたときのように、陰うつな壁が天の光で照らされるからである。

恐るべき災い

神の民を抑圧し滅ぼそうと計る者たちの上に、神の刑罰がくだる。悪人に対して神が長い間忍耐されたので、人々は大胆に罪を犯している。しかし、彼らに刑罰がくだるのが長い間延ばされているということは、その刑罰が確実なものでないとか、恐るべきものでないという理由には決してならない。「主はベラジム山で立たれたように立ちあがり、ギベオンの谷で憤られたように憤られて、その行いをなさる。その行いは類のないものである。またそのわざをなされる。そのわざは異なったものである」(イザヤ書二八ノ二二)。あわれみ深いわれらの神にとって、罰するということは異なったわざである。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない」(エゼキエル書三三ノ一一)。主は「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく いくくしみと、まこととの豊かなる神、…恵と、とがと、罪とをゆるす者」である。しかし主は、「罰すべき者をば決してゆるさず」、「主は怒ることおそく、力強き者、主は罰すべき者を決してゆるされない者」である(出エジプト記三四ノ六、七、ナホム書一ノ三三)。主は、ふみにじられたご自分の律法の権威を、義の恐るべきわざによって擁護される。罪人を待ち受けている報復がどんなに厳しいものであるかは、主が刑罰の執行に気が進まないことから

判断することができ。主が長く忍ばれ、神の御目にその罪惡の升目が満たされるまではお打ちにならない国民も、ついにはあわれみの混じらない怒りの杯を飲むのである。

キリストが聖所における彼のとりなしをやめられるとき、獣とその像を拝み、その刻印を受ける者たちに警告された、混ぜもののない怒りが注がれる(黙示録一四ノ九、一〇参照)。神がイスラエルを救い出そうとされたときに、エジプトにくだった災いは、神の民の最後の救出の直前に世界にくだるもつと恐ろしくもつと広範囲に及ぶ刑罰と類似した性格のものであった。黙示録の記者は、その恐ろしい災いを描写して次のように言っている。

「獣の刻印を持つ人々と、その像を拝む人々とのからだに、ひどい悪性のでき物ができた。」「海は死人の血のようになつて、その中の生き物がみな死んでしまった。」「川と水の源とは」…みな血になつた。」「このような刑罰は恐ろしいものであるが、神の正義は完全に擁護されるのである。神の天使は、次のように叫ぶ。」「このようにお定めになつたあなたは、正しいかたであります。聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」(黙示録一六ノ二一六)。彼らは、神の民を死に定めることによって、彼ら自身の手で血を流したのと全く同じ罪を犯したのである。同様に、キリストは、彼の時代のユダヤ人に、アベルの時代からのすべての聖徒たちの血を流した罪があると言われた。それは、彼らが、預言者たちを殺した人と同じ精神を持ち、同じことをしようとしていたからである。

それに続く災いにおいて、「太陽は火で人々を焼くことを許された。人々は、激しい炎熱で焼かれた」(同一六ノ八、九)。預言者たちは、この恐るべき時の地上の状態を次のように描写している。「地は悲しむ。これは穀物が荒れはて…るためである。…野のすべての木はしぼんだ。それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた。」「種

は土の下に朽ち、倉は荒れ……る。……いかに家畜はうめき鳴くか。牛の群れはさまよう。彼らには牧草がないからだ。……水の流れがかれはて、火が荒野の牧草を焼き滅ぼしたからである。」「その日には宮の歌は嘆きに変り、しかばねがおびただしく、人々は無言でこれを至る所に投げ捨てる』と主なる神は言われる」(ヨエル書一ノ〇―一二、一七―二〇、アモス書八ノ三三)。

神の保護の約束

これらの災いは、全世界的なものではない。さもないと、地上の住民は全く滅ぼされてしまうであろう。しかし、それでもこれは、人類史上かつてなかった恐ろしい災いである。恩恵期間の終了する前に人々の上にくだった刑罰には、あわれみが混じっていた。キリストのとりなしの血によって、罪人はその罪にふさわしい罰を受けずにすんだのである。しかし、最後の刑罰においては、あわれみを混じえずに怒りが注がれるのである。

その日に、多くの人々は、長い間軽べつしてきた神のあわれみの保護を受けたいと願う。「主なる神は言われる、『見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、しかしこれを得ないであろう』」(アモス書八ノ一、一二)。

神の民は苦難を免れるわけではない。彼らは迫害と苦しみに会い、窮乏に耐え、食物の不足に苦しむのであるが、滅びるままにほうっておかれたりはしない。エリヤを養われた神は、ご自分の献身的な子供たちをひとりも

見捨てられない。彼らの頭の毛までも数えられるおかたが、彼らを保護し、ききんの時にあって満ち足らせられる。悪人たちが飢えと疫病のために死んでいくときに、天使は義人を守り、その必要を満たすのである。「正しく歩む者」には、次のような約束が与えられている。「そのパンは与えられ、その水は絶えることがない。」「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない」(イザヤ書三三ノ一五、一六、四一ノ一七)。

「いちじくの木は咲かず、ぶどうの木は実らず、オリブの木は産はむなくなり、田畑は食物を生ぜず、おりに羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。」しかし、主を恐れる者たちは、「主によって楽しみ、わが救いの神によって喜ぶ」(ハバクク書三ノ一七、一八)。

「主はあなたを守る者、主はあなたの右の手をおおう陰である。昼は太陽があなたを撃つことなく、夜は月があなたを撃つことはない。主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、またあなたの命を守られる。」「主はあなたをかりゅうどのわなと、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは大盾、また小盾である。あなたは夜の恐ろしい物をも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。また暗やみに歩きまわる疫病をも、真昼に荒す滅びをも恐れることはない。たとい千人はあなたのかたわらに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災はあなたに近づくことはない。あなたはただ、その目をもって見、悪しき者の報いを見るだけである。あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災はあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない」(詩篇一二一ノ五―七、九一ノ三―一〇)。

悩みの時の信仰

しかし、人間の目から見ると、神の民は、むかしの殉教者たちのように、まもなくその血をもってあかしの印を押さなければならぬように思われる。彼ら自身、主が彼らを離れて、彼らを敵の手に渡されたのではないかと恐れ始める。それは、恐ろしい苦悩の時である。彼らは、昼も夜も神に救いを叫び求める。悪人たちは勝ち誇り、あざけりの叫びをあげて、「おまえたちの信仰は、どうなったのか。もしおまえたちが神の民であるならば、神はどうしてわれわれの手から、おまえたちを助け出さないのか」と言うのである。しかし、待ち望む人は、カルバリーの十字架上で死に瀕しておられるイエスを思い出し、祭司長や司教たちがあざけり叫んで、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」と言うのを思い出すのである(マタイ二七ノ四二)。すべての者はヤコブのよつに、祈りのうちに神と格闘している。彼らの顔は、内面の苦闘をあらわしている。どの顔も青ざめている。それでも彼らは、熱烈な懇願をやめないのである。

もし人々の目が開かれて、天の幻を見ることができたならば、力強い天使の一団が、キリストの忍耐の言葉を守る者たちの回りに駐屯しているのを見るであろう。天使たちは、優しい同情の念をもって、彼らの苦悩を見つめ、彼らの祈りを聞くのである。彼らは、人々を危機から救出せよという指揮官の言葉を待っている。しかし、彼らは、もう少し待たなければならない。神の民は、杯を飲み、バプテスマを受けなければならない。彼らにと

つては非常な苦痛である遅延そのものが、彼らの懇願に対する最上の応答である。彼らが主に信頼して、主が働きになるのを待とうとするとき、彼らは、これまで彼らの宗教経験において、あまりにもわずかしかな働かせてこなかった信仰と希望と忍耐を働かせるように導かれるのである。しかしそれでも、選民のために、悩みの時は短くされる。「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださら……(ない)ことがあろうか。あなたがたに言うておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう」(ルカー八ノ七、八)。終末は、人々が予期しているよりも速く来る。麦は集められ、束にされて、神の倉におさめられる。毒麦は束ねられて、滅びの火で焼かれる。

天使による守り

天の歩哨たちは、忠実に任務に服し、警戒を続ける。戒めを守る人々を死刑にするという全般的布告は、その時日を定めているにもかかわらず、敵たちは、ある場合には法令の時期を早めて、定められた時よりも前に彼らの命を取ろうとする。しかし、すべての忠実な人々の回りに駐屯している力強い警護者たちを通り過ぎることは、だれにもできない。なかには、町や村から逃げる途中に襲われる者たちもいる。しかし、彼らに向かってあげられた剣は、折れてわらのように力なく落ちる。また他の者たちは、軍人の姿をした天使たちによって守られる。いつの時代においても、神は、聖天使たちによって、神の民を救出し解放してこられた。天使たちは、人間の事柄に活発に関与してきたのである。彼らはいなずまのように輝く衣を着て現われた。彼らは旅人の身なりをし

た人間としてやって来た。天使たちは人間の姿をとって、神の人たちに現われた。彼らは、疲労しているかのように、昼ごろかしの木の下で休んだ。彼らは、人々の家庭でもてなしを受けた。彼らは行き暮れた旅人の案内をした。彼らは、自分たちの手で、祭壇に火を点じた。彼らは牢獄の扉を開いて、主のしもべたちを自由にした。彼らは天の武具を身につけて、救い主の墓から石を転がすためにやって来た。

天使たちは、しばしば、人間の姿をとって、義人たちの集まりの中にいる。また彼らは、ソドムにやって来たように、悪人たちの集まりを訪れて、彼らの行為を記録し、彼らが神の忍耐の限界を越えたかどうかを決定するのである。主はあわれみを喜ばれる。それゆえに、真心から主に仕えるわずかの者のために、災害を抑制し、多くの人々の平穏な生活を引き延ばしておられるのである。神にそむく罪人たちは、自分たちがあざけり圧迫している少数の忠実な人々のおかげで、自分たちは生きていられるのだということに、少しも気づいてはいないのである。

この世の統治者たちは知らないでいるが、彼らの会議において、しばしば天使が演説者であった。人間の目が彼らをながめ、人間の耳が彼らの訴えを聞いた。人間のくちびるが彼らの提案に反対し、彼らの勧告をあざけた。人間の手が彼らを侮辱し乱暴を働いた。議会や法廷において、これら天の使者たちは、人類歴史に精通していることを示した。彼らは、最も有能で最も雄弁な弁護者よりも巧みに、圧迫された人々のために訴えることができたのである。彼らは、神の働きをはなはだしく遅延させ神の民を非常な苦しみに陥れるような策略を挫折させ、害悪を阻止した。危機と苦難の時に、「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」のである(詩篇三四ノ七)。

神の民は、熱烈な渴望を抱いて、来たるべき彼らの王のしるしを待望する。「今は夜のなんどきですか」と、夜回りが問われると、なんのためらいもなく「朝がきます、夜もまたきます」と答える（イザヤ書二一ノ一、一二）。山頂の雲間に光がきらめいている。やがて、主の栄光があらわれる。義の太陽がまさに輝き出ようとしている。朝と夜がともに近づいている。それは、義人には、永遠の昼の開始であり、悪人には、永遠の夜の幕があらされる。

神の民の勝利

祈りのうちに神と格闘している者たちが、神の前に嘆願していると、見えないものから彼らをさえぎっていた幕が、ほとんど除かれたように思われる。天は、永遠の日のあけぼのに輝き、「あなたがたの忠誠を保ち続けよ。援助は与えられる」と言う言葉が、天使の歌のメロディーのように耳に聞こえる。全能の勝利者であられるキリストは、ご自分の疲れた兵士たちに、永遠の栄光の冠をさし出される。そして、彼の声が、開かれた門から聞こえてくる。「見よ、わたしはあなたがたと共にいる。恐れてはならない。わたしは、あなたがたのすべての悲しみを知っている。わたしは、あなたがたの悲しみをになった。あなたがたが戦っている敵は、わたしがすでに戦った敵なのだ。わたしはあなたがたのために戦った。そして、あなたがたは、わたしの名によって、勝ち得て余りあるのである。」

尊い救い主は、われわれが助けを必要とするちょうどその時に、助けをお送りになる。天への道は、彼の足跡

によつて清められている。われわれの足を傷つけるとげは、どれも彼の足を傷つけたものである。われわれが負わせられる十字架は、すべて、われわれに先だつて彼が負われたものである。主は、魂に平和をもたらしための準備として、争闘が臨むことを許されるのである。悩みの時は、神の民にとって恐ろしい試練である。しかしそれは、すべての忠実な信者にとつて、上を見上げ、主をとりまく約束のにじを信仰によつて見る時である。

「主にあがなわれた者は、歌うたいつつ、シオンに帰つてきて、そのこうべに、とこしえの喜びをいただき、彼らは喜びと楽しみとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。『わたしこそあなたを慰める者だ。あなたは何者なれば、死ぬべき人を恐れ、草のようになるべき人の子を恐れるのか。…あなたの造り主、主を忘れて、なぜ、しえたげる者が滅ぼそうと備えをするとき、その憤りのゆえに常にひねもす恐れるのか。しえたげる者の憤りはどこにあるか。身をかがめている捕われ人は、すみやかに解かれて、死ぬことなく、穴にくだることなく、その食物はつきることがない。わたしは海をふるわせ、その波をなりどよめかすあなたの神、主である。その名を万軍の主という。わたしはわが言葉をあなたの口におき、わが手の陰にあなたを隠した』」（イザヤ書五一ノ一一―一六）。

「それゆえ、苦しめる者、酒にではなく酔っている者よ、これを聞け。あなたの主、おのが民の訴えを弁護されるあなたの神、主はこう言われる、『見よ、わたしはよるめかす杯をあなたの手から取り除き、わが憤りの大杯を取り除いた。あなたは再びこれを飲むことはない。わたしはこれをあなたを悩ます者の手におく。彼らはさきにあなたにおかつて言った、「身をかがめよ、われわれは越えていこう」と。そしてあなたはその背を地のよつにし、ちまたのよつにして、彼らの越えていくにまかせた』」（同五一ノ二二―二三）。

神の目は、各時代を見通して、地上の勢力の総攻撃が起こるとき神の民が直面しなければならない危機に注が

れる。彼らは、捕われた流浪の民のように、飢えや暴力によって死ぬのではないかと恐れる。しかし、イスラエル人の前で紅海を分けられた聖なる神は、その大いなる力をあらわして、彼らを捕われの身からもどされるのである。「万軍の主は言われる、彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ」(マラキ書三ノ一七)。この時、キリストの忠実な証人たちの血が流されたとしても、それは、殉教者の血のように神のために収穫をもたらすためにまれる種とはならないのである。彼らの忠誠は、他の人々に真理を悟らせるあかしとはならない。なぜなら、強情な心は、寄せてくるあわれみの波を拒み続けて、それらが二度とかえって来ないようにしてしまっただからである。今義人が、むざむざ敵のえじきになるならば、それは暗黒の君の勝利になってしまう。そこで詩篇記者は「主(は)悩みの日に、その仮屋のうちにわたしを潜ませ、その幕屋の奥にわたしを隠(される)」と言っている(詩篇二七ノ五)。キリストも言われた。「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる」(イザヤ書二六ノ二〇、二一)。彼が来られるのを忍耐して待つ者たち、その名がいのちの書に記されている者たちの救出は、実に輝かしいものとなる。

第四〇章

神の民の救出

約束のにじ

人間の法律による保護が、神の律法を尊ぶ者たちから取り去られると、彼らを滅ぼそうとする運動が、あちこの国で、いつせいに起こる。法令に定められた時が近づくにつれて、人々は、この憎い教派を根こそぎにしようとなくらぬ。一夜のうちに決定的な打撃を与えて、異議と非難の声を、全く沈黙させようということが決定される。

神の民は、独房の中にいる者たちもあれば、森林や山々の寂しい隠れ家にいる者たちもあるが、なおも神の保護を求めて祈っている。一方、いたるところで、武装した集団が悪天使の軍勢にかりたてられて殺害の準備をしている。絶体絶命の今こそ、イスラエルの神が、ご自分の選民を救うために手を下されるのである。主は言われ

る。「あなたがたは、聖なる祭を守る夜のように歌をうたう。また……主の山にきたり、イスラエルの岩なる主にまみえる時のように心に喜ぶ。主はその威厳ある声を聞かせ、激しい怒りと、焼きつくす火の炎と、豪雨と、暴風と、ひょうとをもつてその腕の下ることを示される」(イザヤ書三〇ノ二九、三〇)。

かちどきや、あざけりや、のろいの声をあげながら、悪人たちの群れが、今にもそのえじきに飛びかかろうとするそのとき、見よ、夜の暗黒以上の深いやみが、地をおおうのである。続いて、神のみ座からの栄光に輝くにじが天にかかり、祈っているどの群れをも取り囲むように見える。怒り狂った群衆が、急に引き止められる。彼らのあざ笑いの叫びが消える。なんのために殺気だっていたのかも忘れられる。彼らは、恐ろしい予感におのきながら神の契約の象徴を見つめ、その圧倒的な輝きから隠れたいと願う。

神の民には、「上を見なさい」というはっきりした音楽のような声が聞こえてくる。彼らが目を天に向けると、約束のにじが見える。大空をおおっていた黒い、怒ったような雲が裂けて、彼らは、ステパノのようにじっと天を見つめて、神の栄光と、人の子がそのみ座にすわっておられるのを見る。イエスのこうごうしいお姿の中に、十字架の恥を忍ばれた時の傷跡を、彼らは認める。そして、主が天父と聖天使たちの前で、「あなたがたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」と願われるのを、主のくちびるから聞くのである(ヨハネ一七ノ二四)。「きよく、傷なく、汚れない者たちがやってくる。彼らは、わたしの忍耐のことばを守った。彼らは、天使たちとともに歩くことができる」と言われる音楽のような勝利に満ちたみ声が、再び聞こえてくる。すると、信仰を固く保ってきた者たちの青ざめふるえていたくちびるが、勝利の叫びをあげる。

大地震と特別な復活

神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。太陽がその力強い光を放って現われる。しるしと不思議とがあとからあとから現われる。悪人たちはこの光景を、恐れと驚きとをもってながめる。一方義人たちは、自分たちの救いの前兆を厳粛な喜びで迎える。自然界の万物は、それぞれの軌道からはずれたように見える。川の流れは止まる。黒い厚い雲が現われて、互いに衝突する。この怒ったような天の真ん中に、一か所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があつて、そこから神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、「事はすでに成った」と告げるのである(黙示録一六ノ一七)。

その声が天と地とを震動させる。大地震が起こる。「それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であつた」(同一六ノ一八)。大空は、開いたり、閉じたりするように見える。神のみ座からの栄光が、ひらめき渡るように見える。山々は、風にゆらぐ葦のように揺れ、ゴツゴツした岩があたり一面に飛び散る。嵐が近づいているようになり声がする。海は荒れ狂っている。強風のかん高い音が、破壊行為に従事している悪鬼らの声のように聞こえる。全地は海の波のように隆起し揺れ動く。地の表面は砕け散る。地の基そのものが崩れつつあるように見える。山脈は沈下していく。人々の住んでいる島々が消えていく。罪惡に満ちてソドムのようになってしまった海港は、怒った水にのまれてしまう。神は大いなるバビロンを思い起こし、「これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられ」る。「一タラントの重さほど」の大きな電が、破壊

の働きをしている(同一六ノ一九、二一)。おごり高ぶっていた地上の諸都市が低くされる。世の偉大な人たちが、自分たちに栄光を帰するために巨額の富を費やして建てた堂々たる宮殿が、彼らの目の前で崩れ去る。牢獄の壁は砕けて落ち、信仰のためにつながれていた神の民が解放される。

墓が開かれる。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。」(ダニエル書一二ノ一二)。第三天使の使命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう」(ダニエル書一二ノ一二)。第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現われ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。「彼を刺しとおした者たち」(黙示録一ノ七)、キリストの死の苦しみをあざ笑った者たち、そして、キリストの真理とその民に対して最も激しく反対した者たちは、栄光をまとわれたキリストをながめるために、また、忠実で従順な者たちに与えられる誉れを見るために、よみがえらせられる。

最後の日の人々の運命

重苦しい雲がなお空をおおっている。しかし、時おり太陽がすきまから現われ、それが主の報復の目のようである。恐ろしいいなずまが天からひらめき、地球を一面の炎で包むように見える。恐ろしい雷鳴を圧して、神秘的なおそるべき声が、悪人たちの運命を宣告する。この時語られる言葉は、すべての者に理解されるわけではないが、偽教師たちには、それがはっきり理解される。ついさっきまでは、向こう見ずで、高慢で、反抗的で、神の戒めを守る民を残酷にあしらって勝ち誇っていた者たちが、今はもうあわてふためき、恐れおののいている。

彼らの泣き叫ぶ声は、自然界の物音を越えて聞こえてくる。悪鬼たちは、キリストの神性を認めて、キリストの力の前に震えあがり、一方人々は、あわれみをこい求めて、目も当てられないような恐怖のうちにはいつくばる。

昔の預言者たちは、神の日の聖なる幻を見て言った。「あなたがたは泣き叫べ。主の日が近づき、滅びが全能者から来るからだ」(イザヤ書一三ノ六)。「あなたは岩の間にはいり、ちりの中にかくれて、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避けよ。その日には目をあげて高ぶる者は低くせられ、おごる人はかがめられ、主のみ高くあげられる。これは、万軍の主の一日があつて、すべて誇る者と高ぶる者、すべておのれを高くする者と得意な者との臨むからである。」「その日、人々は拝むためにみずから造ったしろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」(イザヤ書二ノ一〇—一二、二〇、二一二)。

雲の切れ目から、暗黒とは対照的に、四倍も輝きを増した一つの星が光る。この星は、忠実な者には、望みと喜びとを語るが、神の律法を犯した者たちには、きびしさと怒りとを語る。キリストのためにすべてを犠牲にした者たちは、主の仮屋の奥に隠されているかのように、今は安全である。すでに彼らは試みられ、世界と真理を軽べつする人々との前で、自分たちのために死なれたおかたに対する忠誠心を証明したのである。死に直面してもなお忠誠心を固く保ち続けた者たちの上に、驚くべき変化が起きた。彼らは、悪鬼と化した人々の暗黒と恐怖の圧制から、突然救い出された。さっきまで青ざめ、不安に閉ざされて、やつれはてていた彼らの顔が、今は驚嘆と信仰と愛に輝いている。彼らの声は、勝利の歌となつてあがる。「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。たと

いその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによって山は震え動くとも、われらは恐れない」(詩篇四六ノ一―三)。

十誠が全地に示される

このような聖なる信頼の言葉が神のもとにのぼって行く間に、雲は退き、両側の暗い怒ったような大空とは対照的に、言うに言われぬ栄光に輝く星空が見えてくる。天の都の栄光が、開かれた門から流れ出る。そのとき、折りたたんだ二枚の石の板を持った手が、空中に現われる。「天は神の義をあらわす、神はみずから、さばきぬしだからである」と預言者は言っている(詩篇五〇ノ六)。シナイ山から雷鳴と炎の中で、人生の指針として宣言された神の義であるあの聖なる律法が、今やさばきの規準として人々に示される。その手が石の板を開くと、火のペンでしるされたかと思われる十誠の言葉が見える。その言葉は、はつきり書かれていて、だれでも読むことができる。記憶が呼びさまされ、すべての人の心から迷信と異端の暗黒が払いのけられて、簡単に理解しやすく、権威に満ちた神の十の言葉が、地上の全住民の前に示される。

神の聖なる要求をふみにじってきた者たちの恐怖と失望とは、描写することができない。主は彼らに神の律法をお与えになった。彼らは、自分たちの品性をそれと比較して、まだ悔い改めて改革する機会のあるうちに、自分たちの欠点を知ることができたはずであった。しかし、世の支持を受けたいために、彼らは律法の教えを捨て去り、またほかの者にも、それを犯すように教えたのである。彼らは、神の民が安息日を活すように強制してきた。今と

なつては、彼らは自ら軽べつした律法によって罪に定められるのである。彼らは、もはや弁解の余地はないことを、恐ろしいまでにはつきりと知る。彼らは、自分たちが仕え礼拝する対象を自ら選んだのである。「その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と仕えない者との區別を知るようになる」(マラキ書三ノ一八)。

神の律法の反对者たちは、牧師からいちばん小さい者にいたるまで、真理と義務について新たな考えを抱く。彼らは第四条の安息日が生ける神の印であることを知るが、しかしもう遅い。彼らは偽の安息日の眞の性質を知り、自分たちがこれまで砂の土台の上に築いていたことを知るが、もう遅いのである。彼らは、自分たちが神と戦っていたことに気づく。牧師たちは人々を、天国の門へ導くと公言しながら、滅びに導いていたのである。聖職にある者の責任がどんなに恐ろしいものであるか、また彼らの不忠実の結果がどんなに恐るべきものであるかは、最後のさばきの日まで知ることができない。たった一人の魂の損失でも、われわれがそれを正しく評価できるのは、永遠においてのみである。悪いしもべよ、わたしから離れ去れと神から言われる者の運命は、実に恐ろしいものである。

イエスの来臨

天から神のみ声が聞こえて、イエスのこられる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の民に伝えられる。どんな雷鳴も及ばぬとどろきをもって、神のみ言葉が地上になりひびく。神のイスラエルは、耳を傾け、目を上方に注いで立っている。彼らの顔は神の栄光に照らされて、シナイ山から帰ってきたときのモーセの顔のように輝い

ている。悪人たちは、彼らを見つめることができない。神の安息日をきよく守ることによって神をあがめてきた者たちに、祝福が宣言されると、勝利の力強い叫びが起こる。

まもなく、東のほうに、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒雲が現われる。それは、救い主を囲んでいる雲で、遠くからは、暗黒に包まれているように見える。神の民は、これが人の子のしるしであることを知っている。彼らは、厳粛な沈黙のうちに、その雲が地上に近づくのを見つめる。それは次第に明るさと輝かしさを増し、ついには大きな白い雲となって、下のほうには焼き尽くす火のような栄光が輝き、上のほうには契約のじがかかっている。イエスは、偉大な勝利者としておいでになる。今度は、恥辱と苦悩の苦い杯を飲む「悲しみの人」ではなくて、天地の勝利者として、生きている者と死んだ者とをさばくためにこられる。「忠実で真実な者」「義によってさばき、また戦うかたである。」そして「天の軍勢が」彼に従う（黙示録一九ノ一一、一四）。数えることができないほどの聖天使の群れが、天の聖歌を歌いながら付き従う。大空は、「万の幾万倍、千の幾千倍」もの、輝く天使たちで満たされたように見える。この光景は、人間のどんな筆によっても描くことができない。その輝かしさは、どんな人間の頭でも十分に想像することはできない。「その栄光は天をおおい、そのさんびは地に満ちた。その輝きは光のようである」（ハバクク書三ノ三、四）。生きている雲が、さらに近づく、すべての目は、いのちの君をながめる。いまはその聖なる頭を傷つけるいばらの冠はなく、その聖なる額には栄光の冠がある。そのみ顔は、真昼の太陽よりもまぶしく輝く。「その着物にも、そのもにも、『王の王、主の主』という名がしるされていた」（黙示録一九ノ一六）。

イエスを前にして、「どの人の顔色も青く変っている。」神の恵みを拒んだ者に、永遠の絶望の恐怖がおそって

くる。「心は消え、ひざは震え、…すべての顔は色を失った」(エレミヤ書三〇ノ六、ナホム書二ノ一〇)。義人たちは、震えながら、「だれが立つことができようか」と叫ぶ。天使たちの歌はやみ、恐ろしい沈黙のひとときがくる。すると、「わたしの恵みはあなたに対して十分である」というイエスのみ声が聞こえる。義人たちの顔は輝き、どの人の心も喜びに満たされる。そして、天使たちは、前よりも調子を高めて歌い始め、ますます地上へと近づいてくる。

王の王は、燃える炎に包まれて、雲に乗って降りて来られる。天は巻物が巻かれるように消えていき、地は、王の王の前に震え、すべての山と島とは、その場所から移されてしまふ。「われらの神は来て、もだされない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりには、はげしい暴風がある。神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばれる」(詩篇五〇ノ三、四)。

「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隸、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかつて言った、『さあ、われわれをおあって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒り』とから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だが、その前に立つことができようか」(黙示録六ノ一五―一七)。

「御怒りの大いなる日」

あざけり笑う声はやんだ。偽りのくちびるは沈黙させられた。「騒々しい声と血まみれの衣」で相戦う戦いの

騒ぎ、武器の鳴り響く音は静まる（イザヤ書九ノ五英語訳）。今聞こえてくるのは、祈りと嘆きと悲しみの声だけである。少し前まであざけり笑っていた者たちが、「御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だが、その前に立つことができようか」と叫ぶ。悪人たちは、自分たちが軽べつし拒否してきたおかたの顔を見るよりは、山の岩石の下に葬られることを願う。

死者の耳にも通るそのみ声を、彼らは知っている。その優しい訴えのみ声は、どんなにたびたび、彼らに悔い改めを呼びかけたことだろう。そのみ声は、友人や兄弟、そして贖い主の、心を打つ訴えのうちに、幾度聞かれたことだろう。その恵みを拒否した者にとって、「あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。

…あなたはどつして死んでよかろうか」と長い間訴えてきたみ声ほど非難に満ち、心を責めるものはない（エゼキエル書三三ノ一）。ああ、むしろ、それが見知らぬ人の声であればよいだろうに。「わたしは呼んだが、あなたがたは聞くことを拒み、手を伸べたが、顧みる者はなく、かえって、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、わたしの戒めを受けなかった」とイエスは言われる（箴言一ノ二四、二五）。その声は、彼らが消し去ってしまいたいと思う記憶——警告をあざけり、招きを拒み、特権を軽んじた記憶——を呼び起こす。

そこには、キリストが十字架の辱しめを受けられた時に、かれをあざけた者たちもいる。大祭司から神に誓って答えを要求された時に、苦難のうちにあられた主が、「あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」と厳粛に宣言された言葉を思い起こして、彼らは身震いする（マタイ二六ノ六四）。彼らは、今、栄光のうちにあられる人の子をながめているが、これから、人の子が力ある者の右に座られるのを見るのである。

悪人たちの回想と後悔

わたしは神の子であるとのキリストの宣言をあざけた者たちは、今は何も言えない。そこには、イエスの王の称号をあざけて、あざ笑う兵士たちに命じてイエスに冠をかぶらせたヘロデもいる。不敬な手で紫の衣を着せ、その尊い額にいばらの冠をかぶらせ、なんの抵抗もなさらないみ手に偽の笏を持たせ、嘲笑しながら礼拝のまねをして神を汚した、その当人たちがいる。いのちの君を打ち、つばをはきかけた者たちは、今、キリストの射るような視線から顔をそむけ、そのご臨在の圧倒的な栄光から逃げようとする。イエスの手と足に釘を打った者たちや、その脇腹を刺した兵士は、恐怖と後悔とに打ち震えてその傷跡を見る。

祭司たち、為政者たちは、恐ろしいばかりにはつきりと、カルバリーのできごとを思い起こす。悪魔のように勝ち誇った気持ちで、頭を振りながら「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい」と叫んだことを思い出して、彼らは震えあがる(マタイ二七ノ四二、四三)。

彼らは、主人のぶどう園の実を納めることを拒んで、主人のしもべたちを辱しめ、主人の子を殺した農夫たちについての救い主のたとえ話を、はつきり思い起こす。彼らは、また、ぶどう園の主人は「悪人どもを皆殺しに」するであろうと、彼ら自身が言い放った宣告を思い出す。これらの不忠実な人々の罪と刑罰の中に、祭司や長老たちは、自分たちの歩んだ道と、自分たちの受けるべき運命とを認める。そして今や、彼らの断末魔の苦悩の叫

びがあがる。「十字架につけよ、十字架につけよ」とエルサレムの町じゅうに響いた叫びよりも、さらに大きな声で、「かれは神のみ子だ！かれは真のメシヤだ！」という恐ろしい、絶望的な嘆きの声があがる。彼らは王の王のみ前から逃げようとする。自然界の変動のためにできた地のほら穴の奥深くに隠れようとするが、おだである。だれでも真理を拒む者の一生には、いつかは、良心がめざめ、偽善的な生活をふりかえって苦しみ、魂がとりかえしのつかない後悔に悩まされる時がある。けれども、そうしたことは、「恐慌が、あらしのように…臨み、「災が、つむじ風のように臨」おその日の激しい後悔とは、とうていくらべられない(箴言一ノ二七)。キリストとキリストの忠実な民とを殺そうとした人々は、今、その人たちの上に栄光が宿っているのを見る。彼らは、自分たちが恐怖に襲われている最中に、聖徒たちが喜ばしい声で、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と叫ぶのを聞く(イザヤ書二五ノ九)。

聖徒たちの復活

地がよるめき、いなずまがひらめき、雷がとどろく真ただ中で、神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こす。イエスは義人たちの墓をぐらんになり、それから両手を天のほうへ上げて、「目ざめよ、目ざめよ、目ざめよ。ちりの中に眠る者たちよ、起きよ」と呼ばれる。地の全面にわたって、死者はその声を聞き、聞く者は生きる。そして、全地に、あらゆる国民、部族、国語、民族からなる大群の足音が鳴り響く。「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」と叫びながら、彼らは死の獄屋から、不

死の栄光をまつて現われる(コリント第一・一五ノ五五)。そして、生きていた聖徒たちとよみがえった聖徒たちとはともに声をあわせて、勝利の長い喜びの叫びをあげる。

どの人もみな、墓に入った時と同じ身長で墓から現われる。よみがえった群衆の中に立っているアダムは、背が高く堂々たる容姿で、神のみ子より少し低いだけである。彼は後世の人々とは、著しい対照を示している。この点からでも、人類の大きな退化がわかる。しかし、どの人もみな、永遠の若さの新鮮さと活力にあふれてよみがえる。世の初めに、人は、品性だけでなく、容貌や姿も神のみかたちにかたどって創造された。罪のために神のかたちはそこなわれ、ほとんど消えてしまったが、キリストは、その失われたものを回復するためにこられた。キリストは、わたしたちの卑しい体を造り変えて、ご自身の栄光の体に似たものとしてくださる。一度罪に汚されてしまった美を失い、死ぬべき、朽ち果てるべきものとなった体が、完全な、美しい、不死のものとなる。すべての傷や醜さは、墓の中に残される。贖われた者は、長い間失われていたエデンのいのちの木に再び近づくことを許され、最初の栄光に輝く人類の完全な背丈に「成長する」のである(マラキ書四ノ二英語訳)。罪ののろいの最後の痕跡が取り除かれ、キリストに忠実に仕える者たちは、知的にも、霊的にも、身体的にも、主の完全な姿を反映して、「われらの神、主のつるわしさ」を着て現われる。ああ、なんというすばらしい贖いであろう。これこそ長い間、語り、熱望し、熱心な期待をもって瞑想してきたが、しかし決して十分には理解できなかったことであつた。

生きている義人たちは、「またたく間に、一瞬にして」変えられる。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒たちとともに、空中において主に会うために引き上げられる。

天使たちは、「天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集める。」小さい子供たちは、天使たちに抱かれてきて、母親の腕に返される。長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌をうたいながら、ともに神の都へと上っていく。

神の都への行進

雲の車の両側には翼があつて、その下には、生きた輪がある。そして車が上に進むにつれて、輪は「聖なるかな」と叫び、翼も、動きながら「聖なるかな」と叫ぶ。そして、付き従う天使たちは、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主なる全能の神」と叫ぶ。車が、新エルサレムに向かって進むにつれて、贖われた者たちは「ハレルヤ！」と叫ぶ。

神の都に入る前に、救い主は、ご自分に従う者たちに、勝利の象徴を与え、王族のしるしを授けてくださる。輝く行列は、主なるイエスのまわりに四角形をつくる。イエスのお姿は、聖徒たちや天使たちよりも高く堂々としており、その顔からは、慈悲深い愛の輝きが、彼らの上にあふれ出ている。数えきれないほどの、あがなわれた者たちの視線は、すべてイエスの上にそそがれ、「顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」おかたの栄光を、すべての目がながめる。勝利者の頭には、イエスご自身が右の手で、栄光の冠をかぶらせてくださる。すべての者のために、その人の「新しい名」と「主に聖なる者」ということが刻まれた冠がある(黙示録二ノ一七)。すべての者の手には、勝利者のしゅろの枝と輝く立琴とが授けられる。そし

て、指揮する天使たちが合図の音をかき鳴らすと、すべての者の手はたくみに立琴をかなで、すばらしい音楽の美しい調べがわき起こる。すべての者の心は、言葉に言いあらわすことのできない感激に心がふるえ、すべての声は、「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように」と感謝の賛美をささげる（黙示録一ノ五、六）。

贖われた群衆の前には、聖都がある。イエスは、真珠の門を広くあけられる。そして、真理を守ってきた諸国の民がその中へ入る。そこに彼らは、神のパラダイス、すなわちアダムが罪を犯す前のふるさつを見る。その時、人間の耳が今まで聞いたどんな音楽よりも豊かな美しいあの声が、「あなたがたのたばかりは終わった。」「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されているみ国を受けつぎなさい」と言われる。

キリストの祈りの成就

ここで、「あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」と弟子たちのために祈られた救い主の祈りが成就する。キリストは、ご自分の血によって贖われた者たちを、「その栄光のまゝに傷なき者として、喜びのうちに」父の前に示し（ユダ二四節）、「わたしはここにいます。そして、あなたがわたしに下さった子供たちもおります。」「あなたがわたしに下さったものを、わたしは守りました」と言われ

る。ああ、なんという驚嘆すべき贖いの愛であろう。無限なるおかたであられる天父が、贖われた者たちをごらんになって、罪による不調和が消え、罪のろいが除かれ、人性が再び神性と調和して、そこに神のみかたちをあらわになる時の、その喜びはどんなであろう。

ことばに言い表わすことのできない愛をもって、イエスは忠実な者たちを主の喜びに迎え入れてくださる。救い主の喜びは、ご自身の苦悩と屈辱とによって救われた魂を、栄光のみ国において見ることである。そして、贖われた者たちは、この祝福された人々の中に、自分たちの祈りや働きや愛のこもった犠牲によってキリストに導かれた人々があるのを見て、主の喜びにともにあずかる者となる。彼らが大きいなる白いみ座のまわりに集まって、自分がキリストに導いた人たちを見、そして、その導かれた人たちがまたほかの者を導き、その人たちがさらにほかの人たちを導いて、すべての者が休息の港に入れられたことを見ると、彼らは言うに言われぬ歓喜に心が満たされ、自分たちの冠をイエスの足もとに投げ出して、永遠に尽きることのない年月にわたってイエスを賛美するのである。

回復されたアダムの主権

贖われた人々が、神の都に迎え入れられるときに、喜ばしい賛美の叫びが空に響きわたる。今、二人のアダムが会おうとしているのである。神のみ子は、立って手を広げ、人類の祖先を抱こうとしておられる。神のみ子が、この人を創造された。その彼が創造主に罪を犯した。そして、彼の罪のために、救い主の体に十字架の傷が負わ

されたのである。アダムは、残酷な釘のあとを見て、主の胸にはよりかからず、恥じいって主の足もとにひれ伏し、「ほふられた小羊こそは……さんびを受けるにふさわしい」と叫ぶのである。救い主は、やさしく彼を抱き起こして、彼が長い間追放されていたエデンの故郷をもう一度見るようにとお命じになる。

エデンを追放されてからの、アダムの地上の生涯は、悲しみに満ちたものであった。木の葉が落ち、犠牲の動物がさげられるのを見、自然の美が傷つけられ、人間の純潔が汚されるのを見るたびに、彼は自分の罪をまざまざと思い出した。彼は、罪悪がふえひろがるのを目撃し、警告の声をあげると、それに答えて、罪の起こりは彼自身のせいであるとののしられて、恐ろしい良心の呵責に悩まされた。彼は千年近くの間、身を低くして、罪の刑罰を耐え忍んだ。彼は、心から自分の罪を悔い改めて、約束された救い主の功績に信頼し、復活の希望をもって死んだ。神のみ子は、人間の失敗と墮落とを贖われた。そして今、贖罪の働きによって、アダムに最初的主権が返されたのである。

彼は、喜びのあまり我を忘れて、かつて自分の楽しみであつた木々、まだ罪を犯さず喜びに満ちていた時に、自分で実を集めたその木々をながめる。彼は、自分の手で整えたぶどうの木、かつて愛し育てた花々を見る。彼の心は、この光景が現実であることを悟る。これが回復されたエデンであること、彼が追放された時よりももっと美しくなったエデンであることを彼は悟るのである。救い主は、彼を命の木に導き、その輝く実をとって、アダムに食べるようお命じになる。彼は回りを見渡す。そして、贖われた彼の家族の大群集が、神のパラダイスに立っているのを見る。その時、彼は、自分の輝く冠をイエスの足もとに投げ出して、彼の胸によりすがり、贖い主を抱きしめるのである。彼は黄金の立琴をかなでる。そして天の丸天井に、「ほふられ、よみがえられた小羊

第 40 章 神の民の救出



「獣とその像とその名の数字とにうち勝った」すべての者が、神の御座の前のガラスの海の上に集められる。

は、さんびを受けるにふさわしい」という勝利の歌がこだまする。アダムの家族は、その旋律に合わせて声をあげ、彼らの冠を救い主の足もとに投げ出し、崇敬の念をもって彼の前にひざまずくのである。

アダムが墮落したときに涙を流し、イエスが復活後、み名を信じるすべての者のために墓を開いて、天に昇られたときに喜んだ天使たちが、この再会を目撃する。今彼らは、贖罪の働きの完成を目撃し、賛美の歌に彼らの声を合わせるのである。

モーセと小羊の歌

み座の前の、水晶のように透きとおった海、あの、火のまじったガラスの海——神の栄光でまばゆく輝いているところの、——の上に、「獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が」集まっている。シオンの山の小羊とともに、人々の間から贖われた彼ら、すなわち、十四万四千が、「神の立琴を手にして」立つのである。また、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のような、「琴をひく人が立琴をひく音」のようなものが聞こえる。そして、彼らは、み座の前で新しい歌をうたう。この歌は、十四万四千以外のものは、だれも学ぶことができない。それは、モーセと小羊の歌、すなわち、救いの歌である。十四万四千のほかは、だれもその歌を学ぶことができない。なぜなら、それは彼らの体験——他どの群れもしたことのない体験——の歌だからである。「小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。」彼らは、地上から、生きている者の間から、天に移された者たちで、「神と小羊とにささげられる初穂」とみなされる（黙示録一五ノ二、三、一四ノ一―五）。「彼らは大きな患難をとあ

ってきた人たちであつて、国が始まって以来かつてなかったほどの悩みの時を通ってきた。彼らは、ヤコブの悩みの時の苦しみに耐えた。彼らは、神の最後の刑罰がくだる中を、仲保者なしで立った。しかし彼らは、「その衣を小羊の血で洗い、それを白くした」ために、救われた。「彼らの口には偽りがなく、彼らは」神の前に、「傷のない者であつた。」「それだから彼らは、神の御座の前にあり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張つて共に住まわれるであろう。」彼らは、地上が飢饉と疫病で荒廃し、太陽が激しい熱で人々を焼くのを目撃した。そして、彼ら自身も、苦しみ、飢えかわいたのであつた。しかし、「彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となつて、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとして下さるであろう」(黙示録七ノ一四—一七)。

賛美の合唱

各時代において、救い主の選びを受けた人々は、試練の学校で教育され、訓練された。彼らは、地上ではせまい道を歩んだ。彼らは苦難の炉で清められた。彼らは、イエスのために、反対、憎悪、中傷に耐えた。彼らは、激しい争闘の中でイエスに従つた。彼らは、自己犠牲に耐え、苦い失望をも経験した。彼らは、自分自身の悲痛な経験によつて、罪の邪悪さを知り、その力、そのとが、その悲惨を知つた。そして彼らは、罪を嫌悪する。彼らは、自分たちが罪から救い出されるために払われた無限の犠牲を悟るときに、おのずから心はへりくだり、墮

落したことはない者たちには味わうことのできない感謝と賛美に、心が満たされるのである。彼らは、多く許されたゆえに、多く愛するのである。彼らは、キリストの苦難にともにあずかったことによって、彼の栄光にもともにあずかるにふさわしい者とされるのである。

神の相続人たちは、屋根裏、あばらや、牢獄、刑場、山々、砂漠、地のほら穴、海の洞窟などから出て来た。

彼らは、この地上では、「無一物になり、悩まされ、苦しめられた。」幾百万という人々が、サタンの欺瞞的主張に服することを断固として拒んだために、汚名を着せられて墓にくだっていった。彼らは、人間の法廷において、最悪の犯罪人であると宣告された。しかし今、「神はみずから、さばきめし…である」(詩篇五〇ノ六)。今、地上の判決はくつがえされる。神は、「その民のはずかしめを…除かれる」(イザヤ書二五ノ八)。「彼らは『聖なる民、主にあがなわれた者』となえられ」る。主は「灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与え」られる(同六二ノ一二、六一ノ三)。彼らは、もはや、弱く、苦しめられ、追い散らされ、圧迫される人々ではない。これから、彼らはいつまでも主とともにいるのである。彼らは、地上のどんな栄誉ある人も着たことのない美しい衣を着て、み座の前に立つ。彼らは、地上のどんな王もかぶったことのない輝かしい王冠をかぶる。痛みとなげきの時は、永遠に過ぎ去った。栄光の王が、すべての者の顔から涙をぬぐいとってください。悲しみの原因はすべて取り去られた。彼らは、しゅろの枝を振りかざしながら、美しく澄んで調和のとれた賛美の歌を歌い出す。すべての者が、その調べに和して歌い、賛美の歌は、天の丸天井に満ちあふれるのである。「救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる。」天の住民はみな、この賛美の言葉に答える。「アアメン、さんび、栄光、知恵、感謝、ほまれ、力、勢いが、世々限りなく、われらの神にあ

るように、アアメン」(黙示録七ノ一〇、一二)。

永遠のテーマ

この世においては、われわれは、贖いという驚嘆すべきテーマについてほんの初歩のことしか理解できない。辱しめと栄光、いのちと死、公平とあわれみとが、十字架において出会ったことを、われわれの有限な理解力でどんなに熱心に探り調べてみても、そしてわれわれの知力のかぎりを尽くしてみても、われわれはその意味を十分につかむことはできない。贖いの愛の長さ、広さ、深さ、高さは、かすかにしか理解されない。贖いの計画は、贖われた者たちが、見られているように見、知られているように知る時においてさえ、十分には理解されない。そして、永遠にわたって、新しい真理がたえず示されて、心は驚きと喜びに満たされるのである。地上の嘆き、痛み、誘惑は終わり、その原因は除かれても、神の民は、自分たちの救いのためにどんな価が払われたかということについて、はつきりした理解を持ち続けるのである。

キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるおかた、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるおかた、そのおかたが、墮落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を

破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられないことがない。諸世界の創造者、すべての運命の決定者が、人類に対する愛から、ご自分の栄光を捨てて、ご自分を卑しくされたことは、いつまでも宇宙の驚嘆と称賛的となる。救われた諸国民が、贖い主を見て、そのみ顔に天父の永遠の栄光が輝いているのをながめるとき、また、永遠から永遠にいたるイエスのみ座をながめ、イエスのみ国には終わりがないことを知るとき、彼らはどっと歓喜の歌声をあげて、「ほふられた小羊、ご自身の尊い血によって、わたしたちを神に贖って下さったおかたは、賛美を受けるにふさわしい、賛美を受けるにふさわしい」と叫ぶのである。

十字架の奥義は、他のすべての奥義を説明する。カルバリーから流れ出る光に照らして見るとき、われわれのうちに恐怖と畏敬の念を満たした神の属性は、美しい、人を引きつけるものに見える。あわれみ、やさしげ、父としての愛情が、聖潔、公平、力と入りまじって見える。われわれは、高くかかげられた神のみ座の威光をながめる一方では、神のご品性の恵み深いあわれみを見て、「われらの父よ」というあの永遠に続く称号の意味を、いままでになく理解するのである。

限らない知恵を持つておられる神は、われわれの救いのためには、み子の死よりほかに方法を考え出すことがおできにならなかった。この犠牲に対する報いは、きよく幸福で不死の身となって贖われた者たちを、地に住まわせるという喜びである。救い主が悪の権力と戦われた結果は、贖われた者たちに与えられる喜びであり、永遠にわたって神にみ栄えを帰することである。魂にはこのように大きな価値があるので、天父は、払われた価に満足される。そして、キリストご自身も、その大きな犠牲の実をござらんになって満足されるのである。

第四章

千年期と地上の荒廃

神の怒りの降下

「彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。…彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で『わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』と言っている。それゆえ、さまざまな災害が、死と悲しみとききんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼かれてしまう。彼女をさばく主なる神は、力強いかなのである。彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、…彼女のために胸を打って泣き悲しみ、…『ああ、わざわざいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわざいだ。おまえに対するさばき

は、一瞬にしてきた』（黙示録二八ノ五——一〇）。

「彼女の極度のぜいたくによつて富を得た」地上の商人たちは、「彼女の苦しみに恐れをいだいて遠くに立ち、泣き悲しんで言う、『ああ、わざわざいだ、麻布と紫布と緋布をまとい、金や宝石や真珠で身を飾っていた大いなる都は、わざわざいだ。これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまふとは』（黙示録一八ノ三、一五——一七）。

これが、神の怒りの日に、バビロンにくだる刑罰である。バビロンの悪は満ちた。その時は来た。滅亡の時は熟した。

神のみ声が神の民を捕われの身からかえされるときに、人生の大きな争闘においてすべてを失った人々に、恐るべき覚醒が起こる。恵みの期間が続いていたとき、彼らは、サタンの欺瞞に目をくらまされ、自分たちの罪の行為を正当化していた。金持ちは自分たちは貧しい人々に優越していると誇っていた。しかし彼らは、神の律法を犯してその富を得たのであった。彼らは、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、正義を行ない、あわれみを愛することを、怠っていた。彼らは、自分を高めることを、そして人々の尊敬を受けることを求めていた。ところが今、彼らは、彼らを偉大にしていたすべてのものをはぎ取られて、何も持たず、なんの防備もないのであった。彼らは、自分たちが創造主よりも好んだ偶像が破壊されるのを見て、恐れおののく。彼らは、地上の富と快樂のためにその魂を売り渡してしまい、神に対して富もうとしなかった。そのために、彼らの生涯は失敗であった。彼らの快樂は、今、苦いものとなり、彼らの財宝は朽ちる。一生かかって得たものが、一瞬のうちに吹き払われる。金持ちは、自分たちの豪壮な邸宅が破壊され、金銀が四散するのを見て悲しむ。しかし、彼らの悲しみは、自分たちが偶像とともに滅びるという恐怖のために、沈黙にかわる。

悪人たちは、無念の思いに満たされる。それは、彼らが神と同胞とを無視した罪深さのためではなく、神が彼らに勝利されたためである。彼らは、結果がこうした状態であることを悲しむ、しかし、彼らは、その罪惡を悔いるのではない。彼らは、できれば勝利を収めようとして、ありとあらゆる手段を講じるのである。

世の人々は、彼らが嘲笑、愚弄し、撲滅しようとしたその当人たちが、疫病、嵐、地震にも耐えてなんの害も受けないのを見る。神の律法を犯す者には焼きつくす火であられるかたが、神の民にとっては安全な隠れ場なのである。

真相が明らかになる日

人々の歡心を得るために真理を犠牲にした牧師は、今、自分の教えがどんな性質のもので、どんな影響を及ぼしたかを見る。彼が講壇に立ったときも、道を歩いたときも、人生のさまざまな場合に人々と交わったときも、全能の神の目が彼とともにあったことが明らかになる。人々を偽りの避難所に休ませるように導いたすべての心の思い、書いたすべての文字、語ったすべての言葉、すべての行動は、種まきであった。そして今、哀れな失われた魂にとりかこまれて、彼はその収穫を見るのである。

「彼らは手輕に、わたしの民の傷をいやし、平安がないのに、『平安、平安』と言っている。」「あなたがたは偽りをもって正しい者の心を悩ました。わたしはこれを悩まさなかった。またあなたがたは悪人が、その命を救うために、その悪しき道から離れようとする時、それをしないように勧める」と主は言われる(エレミヤ書八ノ一

一、エゼキエル書一三ノ二二。

「わが牧場の羊を滅ぼし散らす牧者はわざわざいである。…見よ、わたしはあなたがたの悪しき行いによってあなたがたに報いる。」「牧者よ、嘆き叫べ、群れのかしらたちよ、灰の中にまらるべ。あなたがたのほふられる日、散らされる日が来たからだ。…牧者には、のがれ場なく、群れのかしらたちは逃げる所がない」（エレミヤ書二三ノ一、二、二五ノ三四、三五）。

牧師たちと人々は、自分たちが神との正しい関係を持つてこなかったことを悟る。彼らは、自分たちが、すべて公正で義である律法の創始者に反逆してきたことを知る。神の戒めを破棄したことが、無数の罪惡、不和、憎惡、不正の原因となり、ついに地上は一大戦場、腐敗の巣くつとなった。これが、真理を拒み、誤りを信じることを選んだ者の目に写る光景である。神に従わず、忠誠を保たなかった人々が、永遠に失ったもの、すなわち永遠の生命に対して感じる渴望は、言葉では表現することができない。世からその才能と雄弁をもてはやされて崇拜された人々は、今、そうしたものの真相を見る。彼らは、罪によつて何を失ったかを悟る。そして彼らは、自分たちが軽べつし、あざ笑っていた忠実な人々の足もとにひれ伏して、彼らが神に愛されていたことを認める。

人々は、今まで自分たちが欺かれていたことを知る。彼らは、破滅に陥つたことを互いに責め合う。しかし彼らはみな一致して、最も激しい非難を牧師たちに浴びせる。不忠実な牧師たちは、耳ざわりのよいことを言ってきた。彼らは、聴衆に、神の律法を無視させ、律法を聖く守る人々を迫害させた。今、これらの教師たちは、絶望して、自分たちの欺瞞行為を世の前に告白する。群衆は激しい怒りに燃える。「われわれは失われてしまった！われわれの滅びの原因はあなたがただ」と彼らは叫ぶ。そして彼らは、偽りの教師たちにつめ寄る。かつて彼ら

を最も賞賛していたその人々が、最も恐ろしいのろいの言葉を浴びせるのである。かつて彼らに栄冠を与えたその手が、彼らを滅ぼすためにあげられる。神の民を滅ぼすために用いられることになっていた剣が、今、その敵を滅ぼすために用いられる。至るところに、争闘と流血が起こる。

争闘と流血

「叫びは地の果にまで響きわたる。主が国々と争い、すべての肉なる者をさばき、悪人をつるぎに渡すからである」(エゼキヤ書二五ノ三二)。大争闘は、六千年にわたって続いてきた。神のみ子と天使たちは、人類に警告し、啓発し、そして救いをもたらすために、悪魔の力と闘ってきた。今や、すべての者が決定を下した。すなわち、悪人は、神に反抗するサタンの戦いに、完全に加担した。神が、ふみにじられたご自分の律法の権威を擁護される時が来たのである。今や争闘は、サタンとの争闘だけでなく、人間との争闘ともなる。「主が国々と争い」「悪人をつるぎに渡すからである。」

「その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々」に、救いのしるしがつけられた。今や、エゼキエルの幻の中で、その手に滅ぼす武器を持った人々に命令が与えられたように、死の天使が出て行く。「老若男女をことごとく殺せ。しかし身にしるしのある者には触れるな。まずわたしの聖所から始めよ。」「そこで、彼らは宮の前にいた老人から始めた」と預言者は言っている(エゼキエル書九ノ一―六)。滅びの働きは、人の霊的保護者と称してきた人々から始められる。偽りの夜回りがまず第一に倒れる。あわれんだり助けたりす

る者はない。老若男女がみな滅ぼされる。

「主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない」(イザヤ書二六ノ二二)。「エルサレムを攻撃したもろの民を、主は災をもって撃たれる。すなわち彼らはなお足で立っているうちに、その肉は腐れ、目はその穴の中で腐れ、舌はその口の中で腐れる。その日には、主は彼らを大いにあわてさせられるので、彼らはおのおのその隣り人を捕え、手をあげてその隣り人を攻める」(ゼカリヤ書一四ノ一二、一三)。自分たち自身の激しい怒りによる争いと、神の、あわれみを混じえない怒りの恐るべき降下によって、地の悪しき住民たちは、聖職者も為政者も民衆も、金持ちも貧乏人も、地位の高い者も低い者も、倒れてしまふ。「その日、主に殺される人々は、地のこの果から、かの果に及ぶ。彼らは悲しまれず、集められず、また葬られずに、地のおもてに糞土となる」(エレミヤ書二五ノ三三)。

地上の荒廃とサタンの幽閉

キリストがこられる時、悪人は、全地の表面から一掃される。すなわち、主イエスの口の息によって殺され、来臨の輝きによって滅ぼされる。キリストはご自分の民を神の都へ連れて行かれ、地には住民がいなくなる。「見よ、主はこの地をおなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。」「地は全くおなしくされ、全くなすめられる。主がこの言葉を告げられたからである。」「これは彼らが律法にそむき、定め

を犯し、とこしえの契約を破ったからだ。それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれ」る(イザヤ書二四ノ一、三、五、六)。

全地は荒涼たる荒野のように見える。地震によって破壊された都市や村落の廃墟、根こそぎにされた木々、海から投げ出されたり、地中から引き裂かれたごつごつした岩石が、地の表面にちらばっている。一方、広いほら穴は、山々がその基から裂けてしまった跡を示している。

ここで、贖罪の日の最後の厳粛な務めに予表されていた事件が起こる。至聖所における務めが完了して、イスラエルの罪が、罪祭の血によって聖所から除かれたときに、アザゼルの山羊が生きたまま主の前に連れて来られた。そして、大祭司は、会衆の前で、「イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白し」た(レビ記一六ノ二一)。それと同様に、天の聖所における贖罪の働きが完了したときに、神と天使たちと贖われた人々の群れとの前で、神の民の罪が、サタンの上におかれるのである。彼が神の民に犯させたすべての罪惡の責任が、彼にあることが宣言される。アザゼルの山羊が、人里離れた地に送り出されたように、サタンは、住む者もない荒涼たる荒野と化した地上に追放される。

黙示録の記者は、サタンが追放されることと、地が混乱した荒廃状態になることを預言し、この状態が一千年続くことを宣言している。主の再臨の光景と悪人の滅亡について述べたあとで、預言には、続いてこう言われている。「またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入り口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないよ

うにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた」(黙示録二〇ノ一一三)。

「底知れぬ所」という言葉が、混乱と暗黒の状態にある地球を象徴していることは、ほかの聖句によって明らかである。地球の「はじめ」の状態について、聖書には、「地は形なく、おなしく、やみが淵のおもてにあり」と言われている(創世記一ノ二「ここで」淵」と訳されている言葉は、黙示録二〇ノ一一三で「底知れぬ所」と訳されている言葉と同じである)。預言には、地が、少なくとも部分的に、この状態にもどるということが教えられている。

預言者エレミヤは、神の大いなる日を待ち望んでこう宣言している。「わたしは地を見たが、それは形がなく、またおなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもあらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた」(エレミヤ書四ノ二二—二六)。

ここが、サタンと悪天使たちが、千年の間住むところとなる。サタンは、地球に制限されているから、他世界に近づいて、決して墮落したことのない者たちを試み悩ますことはできない。こういう意味で、サタンはつながれるのである。彼が働きかけることのできる者が、だれもいなくなってしまうのである。幾世紀にもわたって彼のただ一つの楽しみであった欺瞞と破壊の行為が、全くできなくなるのである。

千 年 期

預言者イザヤは、サタンが減びるときを予見して、次のように叫んでいる。「黎明の子、明けの明星よ、あな

たは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう。』しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる。あなたを見る者はつくづくあなたを見、あなたに目をとめて言う、『この人は地を震わせ、国々を動かし、世界を荒野のようにし、その都市をこわし、**捕えた者をその家に解き帰さなかった者であるのか**』（イザヤ書一四ノ一二―一七）。

サタンの反逆の働きは、六千年の間、「地を震わせ」た。彼は、「世界を荒野のようにし、その都市をこわし」た。彼は、「捕えた者をその家に解き帰さなかった。」六千年の間、神の民は、彼の牢獄に入れられてきた。そして彼は、彼らを永久に捕えておこうとした。しかし、キリストは、彼の鎖を断ち切って、補われている人々を解放されたのである。

今となつては、悪人たちでさえ、サタンの力の及ばないところにおかれている。サタンは悪天使たちとだけ取り残され、罪がもたらしたのろいの結果を悟る。「もろもろの国の王たちは皆尊いさまで、自分の墓に眠る。しかしあなたは忌みきらわれる月足らぬ子のように、墓のそとに捨てられ、……あなたは自分の国を滅ぼし、自分の民を殺したために、彼らと共に葬られることはない」（イザヤ書一四ノ一八―二〇）。

千年の間、サタンは、荒れ果てた地上をさまよい歩いて、自分が神の律法に反逆した結果をながめる。この間のサタンの苦しみは非常なものである。サタンは、墮落して以来、たえず働き続けて、反省するひまがなかった。ところが今は、力を奪われ、最初に天の政府に反逆して以来自分がどんな事をしてきたかを熟考させられる。そして彼は、恐ろしい将来を思つてふるえおののく。その時には彼は、自分が行なったすべての悪のために苦しま

ねばならず、また、自分が他の者に犯させた罪に対して罰を受けねばならないのである。

悪人の審判

第一と第二の復活の間の千年間に、悪人の審判が行なわれる。使徒パウロは、この審判を、再臨に続いて起こる事件として指し示す。「だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう」(コリント第一・四ノ五)。ダニエルは、日の老いたる者がきて、「いと高き者の聖徒のために審判をおこなった」と言っている(ダニエル書七ノ一二)。この時義人は、王、また祭司として支配する。ヨハネは、黙示録の中で次のように言っている。「また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。」「彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する」(黙示録二〇ノ四、六)。パウロが、「聖徒は世をさばく」と予見したのは、この時のことを指しているのである(コリント第一・六ノ二)。彼らはキリストと共に悪人を審き、その行為を法規の書すなわち聖書と照らし合わせ、それぞれのなしたわざに従って、すべての者に判決を下す。その時、悪人は、それぞれのわざに応じて、受けねばならない苦しみが定められる。そして、それが、死の書の彼らの名のところに記録される。

サタンと悪天使たちも、キリストとその民によってさばかれる。パウロは、「あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をさえさばく者である」と言っている(同六ノ三)また、ユダは、「主は、自分たちの地位を守

ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた」と言っている（ユダ六）。

千年の終わりに第二の復活がある。その時に、悪人はよみがえらせられる。そして、「記された審判」の執行を受けるために、神の前に現われる。こうして、黙示録の記者は、義人の復活を描写したあとで「それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかつた」と言っている（黙示録二〇ノ五）。そしてイザヤは、悪人について、「彼らは囚人が土ろうの中に集められるように集められて、獄屋の中に閉ざされ、**多くの日を経て後、罰せられる**」と宣言しているのである（イザヤ書二四ノ二二）。

第四章

大争闘の終結

新エルサレムの降下と悪人たちの復活

千年期の終わりに、キリストは再び地上に帰ってこられる。主は贖われた大群衆を伴い、天使たちを従えてこられる。彼は、恐るべき威光をもっておくだりになる時、死んだ悪人たちに、さばきの執行を受けるためによみがえるよう命じられる。彼らは、海の砂のように、無数の大群となつて現われる。第一の復活の時によりがえらせられた人たちと比較して、なんとという相違であろう。義人たちは朽ちることのない若さと美しさを着せられていた。ところがこの悪人たちは病氣と死の跡を帯びている。

この大群衆のすべての眼が、神のみの栄光にそそがれる。悪人たちはいつせいに、「主のみ名によってこられるおかたに、祝福あれ」と叫ぶ。このような言葉は、イエスに対する愛から出るのではない。彼らは真理の力

に迫られて、この言葉をしぶしぶ口から出すのである。悪人たちは、墓に下った時と同じに、キリストに対する憎悪と反逆精神をもって現われてくる。彼らは、過去の生涯の欠点を除くための新しい恩恵期間を与えられるのではない。たとえ与えられても、なんの益もないであろう。罪の一生は、彼らの心をやわらげなかった。たとえば第二の恩恵期間が与えられたとしても、第一の恩恵期間の場合と同じように、神のご要求を回避し、神に対する反逆を引き起こすだけであろう。

キリストはオリブ山におくだりになる。そこはキリストが復活後昇天された場所であり、また天使たちが、主の再臨について約束をくりかえしたところである。預言者はこう言っている。「あなたがたの神、主はこられる、もろもろの聖者と共にこられる。」「その日には彼の足が、東の方エルサレムの前にあるオリブ山の上に立つ。そしてオリブ山は、非常に広い一つの谷によって、東から西に二つに裂け、」「主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる」(ゼカリヤ書一四ノ五、四、九)。新エルサレムが、目もくらむばかりに光り輝いて天からくだり、きよめられて受け入れ準備の整った場所に落ち着くと、キリストは、ご自分の民や天使たちとともに、その聖なる都にお入りになる。

最後の戦いの準備

今やサタンは、主権をめざして最後の大きいなる戦いの準備をする。力を奪われ、欺瞞の働きができないようにされていた間は、悪の君は、はじめな、意気消沈したありさまであった。しかし今、悪人たちがよみがえり、し

かもその大群が自分の味方であることを知って、彼は望みをとりもどし、大争闘に負けてはならないと決心する。彼は、滅びる者たちの全軍を自分の旗下に集め、彼らを通して自分の計画を遂行しようとする。悪人たちはサタンのとりこである。キリストを拒んだことによって、彼らは反逆の指導者の支配を受け入れたのである。彼らは簡単にサタンのそのかしを受け入れ、その命令に従う。しかもサタンは、昔と変わらないで、自分がサタンであるとは認めない。彼は、自分がこの世界の正当な君であるのに無法にもその継承権を奪われたのだと主張する。彼はその欺いた部下に対して、自分が贖い主であると主張し、彼らを墓からよみがえらせたのは自分の力であって、自分は残酷な暴政から彼らを救い出そうとしているのだと言う。キリストのお姿が見えなくなると、サタンはこれらの主張を裏書きするために不思議な業を行なう。彼は、弱い者を強くし、すべての者に彼自身の精神と力を吹き込む。サタンは、彼らを指揮して聖徒たちの陣営を襲い、神の都を占領しようと提案する。彼は悪魔らしい大満悦をもって、死からよみがえらされた無数の大群衆を指さし、その指導者として、聖都を破壊し王座と王国を奪還することが十分できると宣言する。

この大群の中には、ノアの洪水前に生存していた長寿の種族がいる。それはりっぱな体格と偉大な知能をもった人たちで、墮落天使の支配に身をゆだねて、あらゆる技量と知識を自分自身を高めるためにだけ用いてきた人たちである。それはまた、すばらしい芸術の作品によって、世の人々からその天才を偶像視されながら、その残酷さと邪悪な発明が地上を汚し、神のみかたちを汚したため、神によって地から一掃された人たちである。そこには、諸国を征服した王侯や將軍たち、戦場においてかつて敗れたことのない勇士たち、近づいただけで諸国を戦慄させた高慢で野心満々たる戦士たちがいる。死によっても彼らは変化を経験しなかった。彼らが墓から出て

来たとき、彼らの考えはその停止していたところから動き始める。彼らは、彼らが倒れた時に彼らを支配していたのと同じ征服欲によって行動する。

サタンは悪天使たちと相談し、それからさらに王侯、征服者、有力者たちと相談する。彼らは、味方の勢力と数をながめて、これにくらべれば聖都の中の軍勢は少数だから打ち負かすことができると断言する。彼らは新エルサレムの富と栄光を手に入れようと計画をたてる。全員は直ちに戦闘準備を開始する。熟練した技術者たちは兵器の製作にとりかかる。作戦成功で有名な軍事指導者たちは、好戦的な群衆を指揮していくつも軍団に分ける。ついに進軍命令が出され、無数の大軍が行進を開始する。これは地上のどんな征服者によっても召集されたことのない大軍であり、この地上で戦争が始まって以来各時代の軍勢を合わせてもなお比較することのできないほどの大軍である。最も強力な戦士であるサタンは自ら先頭の軍を率い、悪天使たちもこの最後の戦いに勢力を集中する。王侯や将軍がサタンにつづき、群衆は大軍団となって従い、各軍団にはそれぞれ指揮官が任命されている。密集した部隊は、軍隊らしく秩序整然として、破壊されてでこぼこになっている地上を神の都に向かって進軍する。イエスのご命令によって新エルサレムの門は閉じられ、サタンの大軍は都を包囲して、突撃の態勢をとる。

キリストの戴冠式

今、キリストは、再び敵から見えるところに姿を現わされる。聖都の上はるか高く、光り輝く純金の基の上にみ座がある。そのみ座の上に神のみ子が座し、そのまわりを神のみ国の民がかこんでいる。キリストの力と威光

は、言葉や文字で描写することができない。永遠にいます父なる神の栄光が、み子をおおっている。その臨在の輝きは聖都に満ち、門の外にあふれ、さらにまた全地にあふれている。

み座のいちばん近くには、かつてサタンの業に熱心であったが、火の中からの燃えさしのように取り出されて、深い熱心な信仰をもって救い主に従ってきた者たちがいる。その次には、虚偽と不信仰のただ中であってキリスト者の品性を完成した者たち、キリスト教界が神の律法は無効であると宣言した時にも律法を尊重した人たち、さらに、各時代にわたり、信仰のために殉教した無数の人たちがいる。そしてその向こうには、「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に」立っている(黙示録七ノ九)。彼らの戦いは終わり、彼らの勝利は獲得された。彼らは走るべき行程を走り、ほうびをもらった。彼らの手にあるしゅろの葉は勝利の象徴であり、白い衣は、今は彼らのものとなっているキリストの汚れなき義を示している。

贖われた者たちは、「救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる」と賛美の歌声をあげるが、それは大空に反響をくりかえす(黙示録七ノ一〇)。天使とセラピムとは声を合わせて賛美する。贖われた者たちは、サタンの力と悪意を見たとき、キリストの力以外のどんなものも彼らを勝利者にすることはできなかったことを、これまでになかったほど知った。輝く大群衆の中には、だれひとり、自分自身の力と善行で勝利したかのように救いを自分の手柄にする者はいない。自分のしたことや苦しんだことについては一言もふれないで、どの歌の主旨もどの賛美の基調音も、「救いはわれらの神と、小羊のものである」というのである。

天と地の全住民が集合している前で、神のみ子の最終的な戴冠式が行なわれる。そして今や、王の王なるイエ

スは、最高の威厳と力をもつて、神の政府に反逆した者に宣告をくだし、神の律法を犯し、またその民を迫害した者たちにさばきを執行される。このことについて神の預言者はこう言っている。「また見てみると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあつた。天も地も御顔の前から逃げ去つて、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であつた。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた」(黙示録二〇ノ一、一二)。

恐るべきパノラマ

記録の書が開かれ、イエスの目が悪人たちの上にそがれるやいなや、彼らはこれまでに犯した罪の一つ一つを意識する。彼らは、自分たちがどこで純潔と聖潔の道から足をふみはずしたか、高慢と反逆のためにどんなに神から離れてその律法を犯したかということを悟る。罪にふけることによって誘惑をますます魅力的にしたこと、祝福を悪用したこと、神の使者たちを軽べつしたこと、警告を拒んだこと、神の恩恵を、頑固な悔い改めない心で拒絶したこと——すべてのことが、ちょうど火の文字で書かれているかのように現わされる。

み座の上に十字架が現わされる。そしてちょうどパノラマの光景のように、アダムの誘惑と墮落の場面、救いの大いなる計画における一步一步が、次々に示される。救い主がいやしい身分に生まれられたこと、質素で従順なその幼年時代、ヨルダン川でのバプテスマ、断食と荒野の試み、天の最も尊い祝福を人々に示されたその公生

涯、愛と恵みの行為に満ちた日々、寂しい山の中での夜通しの祈り、恵みの行為に対してしつと憎悪と悪意とによる陰謀をもって報いられたこと、全世界の罪の重荷におしつぶされそうなゲッセマネにおける恐るべき神秘的な苦悩、残忍な暴徒の手に売り渡されたこと、あの恐怖の夜の恐ろしい諸事件、すなわちいちばん愛された弟子たちにも捨てられ、無抵抗の囚人として、荒々しくエルサレムの通りを引き立てられて行ったこと、神のみ子がアンナスの前で手柄顔に見せ物にされ、大祭司の邸宅とピラトの法廷で審問を受け、卑怯で残酷なヘロデの前で嘲笑され、侮辱され、拷問を受け、ついには死罪の宣告を受けられたこと、——こうしたすべてのことが、ありありと描き出される。

そして今、動揺する群衆の前に、最後の光景が現わされる。すなわち、苦難を耐え忍ばれる主が、カルバリへの道をたどって行かれる姿、天の大君が十字架につけられ、高慢な祭司たちや嘲笑している暴徒たちが、息もたえだえの神のみ子の苦悩をあざけている光景、超自然的な暗黒、世の救い主が息を引き取られた瞬間に、地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いたことなど、そうした最後の光景が示されるのである。

救われた者と滅びる者

恐るべき光景が、起こったとおりそのまま示される。サタンとその悪天使及びその民たちは、自分たちのしわざであるその光景から顔をそむける力はない。一人一人が、自分の演じた役割を思い出す。イスラエルの王イエスを殺そうとして、ベツレヘムの罪なき幼児たちを殺させたヘロデ、バプテスマのヨハネの血について責めを

負うべき卑劣なヘロデヤ、優柔不断で無節操なピラト、嘲弄している兵士たち、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と叫んだ、祭司たちや役人たちや狂気のようになった群衆——こうした人々はみな、自分たちの罪がどんなに凶悪なものであったかを見る。彼らは、太陽よりも強い光を放つ主の顔の威光からかくれようとするがむだである。一方贖われた者たちは、その冠を救い主の足もとに投げ、「主はわれらのために死なれた」と叫ぶ。

贖われた群衆の中には、雄々しいパウロや熱心なペテロ、愛し愛されたヨハネなどキリストの使徒たちや、真実な心の持ち主であったその兄弟たちがおり、彼らとともに大ぜいの殉教者たちがいる。一方城壁の外には、あらゆる恥ずべきもの忌むべきものとともに、かつて彼らを迫害し、投獄し、殺した者たちがいる。かつて聖徒たちを責めさいなみ、彼らの極度の苦悶を見て悪魔のような喜びを味わった残忍非道なネロもいて、自分がかつて迫害した人々が高められ、歓喜するありさまを見る。またネロの母もそこにいて、自分自身の行為の結果を見、自分の悪い品性がそのまま息子に遺伝したこと、また自分の感化と手本によって激情がますますひどくなり、世を戦慄させるような犯罪の実を結んだことを知る。

そこにはまた、キリストの大使であると公言しながら、神の民の良心を支配しようとして、拷問台や土牢や火刑柱を使用した法王教の司祭や高僧たちがいる。神よりも自分を高くし、僭越にもいと高きおかたの律法を変更しようとした、高慢な法王たちもいる。こうした偽りの教会指導者たちは、神に対して申し開きをしなければならぬが、できることならそれを免れたいと願う。彼らは全知全能の神が、ご自分の律法を非常に大事になさるおかたであり、また罰すべき者を決しておゆるしにならないかたであることを悟るが、もう手遅れである。今彼

らは、キリストが苦難のうちにあるご自分の民と利害を一つになさったことを知り、また、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」との主ご自身のみ言葉の力を身を感じるのである（マタイ二五ノ四〇）。

全世界の悪人たちは、天の政府に対する大反逆という罪名のもとに神の法廷に告訴される。彼らを弁護する者もなければ、言いわけの余地もない。こうして永遠の死の宣告が彼らに下される。

罪の価は高尚な独立や永遠の生命ではなくて、奴隷状態、滅亡、死であることが、今すべての人に明らかになる。悪人たちは、自分たちの反逆の生涯によって何を失ったかを見る。彼らは、永遠の重い栄光をあふれるばかりに提供されたときにはそれを軽べつしたが、今はそれがなんと望ましいものにみえることだろう。失われた魂は、「これはみなわたしのものになったかもしれないのに、わたしは自分でそれを遠ざけてしまった。ああ、とんでもない迷いだった。わたしは平和と幸福と名誉を、不幸と不名誉と絶望とにとりかえてしまった」と叫ぶ。どの人も自分が天から除外されることが正しいことを認める。彼らは自らの生活によって、「この人（イエス）が王になるのをわれわれは望んでいない」と宣言したのであった。

魅せられたかのように、悪人たちは神のみ子の戴冠式をながめた。彼らは、神のみ子がそのみ手に、自分たちが今まで軽べつし違反してきた神の律法の板を持っておられるのを見る。また、救われた者たちがいっせいに驚嘆と喜びと賛美の声をあげるのを見る。そしてその歌声の波が城外の群衆にまで押し寄せると、全部の者が異口同音に「全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」と絶叫し、ひれ伏していのちの君を拝するのである（黙示録一五ノ三）。

サタンの正体の暴露

サタンはキリストの栄光と威厳とを見てまひしたようになる。かつては守護のケルブであった彼は、自分ごとから落ちたかを思い出す。光り輝くセラフ、「黎明の子、明けの明星」が、なんと変わり、なんと墮落したことであろう。かつては尊敬されていた会議から、彼は永遠に除外されてしまったのである。彼は、今は別の天使が神の栄光をおおって天父のそばに立っているのを見る。彼は、背が高く威厳に満ちた容姿の一人の天使がキリストの頭に冠をのせるのを見、この天使の高い地位に自分が立つはずであったことを知る。

サタンが罪を抱かず純潔であったときのふるさと、神に対してつばやき、キリストをねたむようになるまでは彼のものであった平和と満足が、サタンの記憶によみがえる。非難、反逆、天使たちの同情と支持を得るための欺瞞、神がゆるしをお与えになることができた時に、あくまでも心をかたくなにして、もとの状態に立ちかえる努力をしなかったこと、すべてがまざまざと目の前に浮かぶ。彼は、自分が人々の中でした働きとその結果——人と人との間の敵意、生命の恐るべき破壊、諸王国の興亡、王位の転覆、暴動と闘争と革命の連続——を思い起こす。彼はまた、自分が絶えずキリストのみ業に反対し、人類をますます墮落させようと努めてきたことを思い出す。彼は、自分のどんな悪らつな計略も、イエスに信頼をおく者たちを滅ぼす力がなかったことを知る。サタンは、その労苦の実である自分の王国を見ると、ただ失敗と破滅だけを見る。彼は群衆に、神の都はやすやすと奪取することができると信じさせてきた。しかし彼は、それが偽りであることを知っている。大争闘の進展に

つれて、サタンは何度も敗北し、降参させられた。彼は永遠なる神の力と威厳とを、身にしみて知っているのである。

この大反逆者のねらいは常に、自分を正当化して、反逆の責任が神の統治にあることを証明することであった。この目的のために、サタンはその絶大な知力を注いできた。彼は慎重に、組織的に行動し、長い間にわたって進展してきた大争闘について、自分の立場からの説明を驚くほど巧みに行なうて、多くの人々に信じさせてきた。幾千年にわたり、この陰謀のかしらは、偽りを真理にみせかけてきた。しかし、反逆がついに打ち破られ、サタンの経歴と品性が明るみに出される時が、今きた。大欺瞞者サタンが、キリストを王位から退け、神の民を滅ぼし、神の都を占領しようと、最後の努力をすることにおいて、彼の正体が完全に暴露された。サタンと協力してきた者たちも、彼の働きが全く失敗したことを知る。キリストに従う者たちと忠実な天使たちは、神の統治に対するサタンの陰謀の全容を見る。サタンは全宇宙の憎悪の的となる。

大争闘の最終的結論

サタンは、自分から進んで反逆したことによって、自分が天に適しない者になったことを知る。彼は神と戦うために自分の能力を訓練してきた。彼にとっては、天の純潔と平和と調和とはこの上ない苦痛となるであろう。神のあわれみと正義に対するサタンの非難は、今こそ沈黙させられた。彼が主に浴びせようと努めてきた非難は、全部彼自身に向けられる。そして今、サタンはひれふして、自分の上にくだった判決が正しいことを認める。

「主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありませんか。あなただけが聖なるかたであり、あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」（黙示録一五ノ四）。長年にわたって争われてきた真理と誤謬のすべての問題が、今明らかにされた。反逆の結果、すなわち神の律法を廃することの結果が、すべての知的被造物の目の前で明らかになった。神の統治と対照的なサタンの支配が行なわれた結果が、全宇宙の前に公開された。サタン自身の行為が、彼を罪に定めたのである。神の知恵と正義といつくしみとが、完全に擁護される。大争闘における神のすべての処置は、ご自分の民の永遠の幸福のために、そして神の創造されたすべての世界の幸福のために行なわれたものであることが明らかになる。「主よ、あなたのすべてのみわざはあなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめまつるでしょう」（詩篇一四五ノ一〇）。罪の歴史は、神が創造されたすべての者の幸福が神の律法の存在と結びついていることを、永遠にわたってあかしする。大争闘のいっさいの事実が明らかになると、全宇宙は、忠誠な者も反逆者も、異口同音に、「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」と言明する。

人類のために天父とみ子によって払われた大犠牲が、全宇宙の前に明らかにされた。今こそキリストがご自分の正当な地位を占め、すべての支配、権威、また唱えられるあらゆる名にまさってあがめられる時が来た。キリストが恥をもちとわないで十字架に耐えられたのは、ご自分の前に置かれた喜びのため、すなわち、多くの子らを栄えに入らせるためであった。その悲しみと恥は想像できないほど大きかったが、しかし喜びと栄光はそれよりも大きいのである。キリストは、贖われた者たちがご自分のみかたちに回復され、そのおのの心に神の完全なお姿を宿し、その顔に王なる神のみかたちを反映するのを見られる。主は、ご自分の魂の苦しみの結果が、

彼らの上に現われているのをごらんになって満足される。そして主は、義人の群れにも悪人の群れにも聞こえる声で、「見よ、わたしの血をもって贖ったものを。わたしが彼らのために苦難を受け、彼らのために死んだのは、永遠に彼らをわたしの前におらせるためである」と主は宣言される。そして、み座の周囲の白い衣をまとった者たちが「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」と賛美する歌声があがる(黙示録五ノ一二)。

刑罰と滅びの時

サタンは、神の正義を認めて、キリストの主権の前にひれふさずにはいらなかったにもかかわらず、彼の品性はもとのままである。反逆の精神は、奔流のように、再び爆発する。狂気の思いに満たされて、彼は大争闘に負けまいと決心する。天の王に対して最後の必死の戦いをする時が来た。彼は部下たちの真ん中にとび込んで行って、自分自身の怒りを彼らに吹き込み、直ちに戦いに奮起させようとする。しかし、サタンが反逆におびき入れた無数の群衆の中で、サタンの主権を承認する者はひとりもない。サタンの権力は終わりを告げたのである。悪人たちは、サタンを奮起させたのと同じ神に対する憎悪の念に燃えているが、しかし自分たちの立場が絶望的であることと、主に勝つことができないことを知っている。彼らの怒りはサタンと、サタンの欺瞞の手先であった者たちに向けられる。彼らは悪鬼のような怒りに満たされて、彼らにとびかかる。

主はこう言われる、「あなたは自分を神のように賢いと思っているゆえ、見よ、わたしは、もろもろの国民の

最も恐れている異邦人をあなたに攻めこさせる。彼らはつるぎを抜いて、あなたが知恵をもって得た麗しいものに向かい、あなたの輝きを汚し、あなたを穴に投げ入れる。」「このゆえに、おおうことをなすところのケルブよ、われ……火の石の間より汝を滅ぼし去るべし……われ汝を地になげうち汝を王たちの前に置きて観物とならしおべし……汝を見る者の目の前にて汝を地に灰となさん……汝は人のおそれとなり、限りなくうせはてん」(エゼキエル書二八ノ六―八、一六―一九文語訳)。

「すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、血にまみれた衣とは、火の燃えくさとなって焼かれる。」「主はすべての国にむかつて怒り、そのすべての軍勢にむかつて憤り、彼らをことごとく滅ぼし、彼らをわたして、ほふらせられた。」「主は悪しき者の上に炭火と硫黄とを降らせられる。燃える風は彼らがその杯にうくべきものである」(イザヤ書九ノ五、三四ノ二、詩篇一一ノ六)。火が天の神のみもとからくだる。地はくずれる。地の深いところに隠されていた武器が引き出される。焼き尽くす炎が、地のすべての裂け目から吹き出す。岩石そのものが火になる。「炉のように燃える日」が来たのである。「天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされる」(マラキ書四ノ一、ペテロ第二・三ノ一〇)。地の表面は、ちょうど溶けたかたまり、巨大な沸騰する火の池のように見える。それは神を敬わない者たちの、刑罰と滅びの時である。「主はあだをかえす日をもち、シオンの訴えのために報いられる年をもたれる」(イザヤ書三四ノ八)。

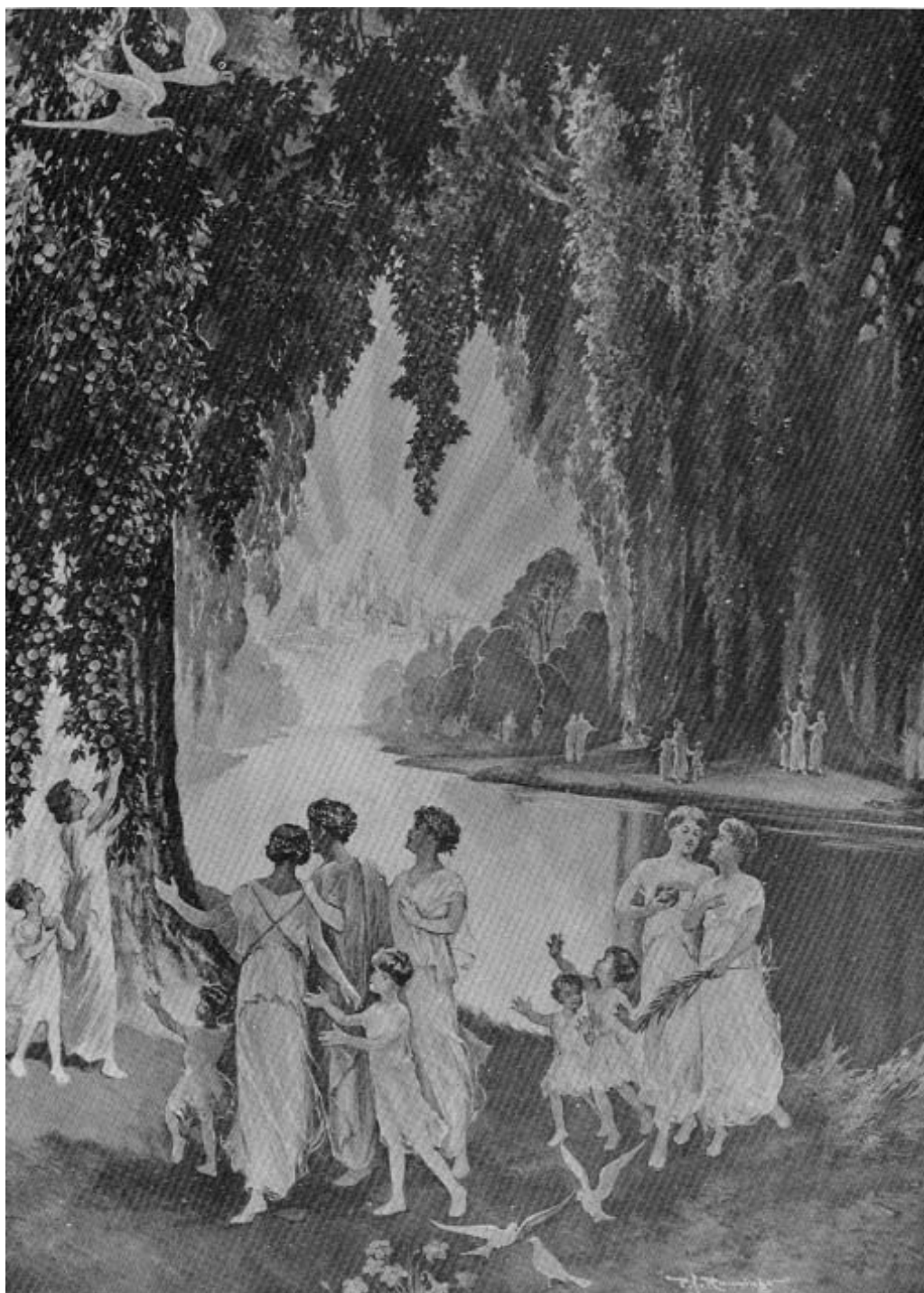
悪人はこの地上で報いを受ける。「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。……その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」(マラキ書四ノ一)。一瞬のうちに滅ぼされる者もあり、多くの日の間苦しむ者もある。みな「彼らの行いにしたがって」罰せられる。義人の罪はサタンに移されたので、サタンは

自分自身の反逆の罪だけでなく、神の民に犯させたすべての罪のために苦しむ。彼の受ける刑罰は、彼がだました者たちの刑罰よりずっと重い。サタンの欺きによって墮落した者たちがすべて滅びたのちも、彼はまだ生き残って苦しみを受ける。きよめの火によって、悪人たちは根も枝もついに滅ぼされた。サタンが根であり、サタンに従う者たちが枝である。律法の刑罰は全部くだり、正義の要求は果たされた。天と地はこれを見て、主の義を宣言する。

サタンの破壊の働きは、永久に終わりを告げた。六千年の間、彼は自分の意志を実行し、地を災いで満たし、全宇宙を悲しませてきた。被造物全体が共にうめき、共に産みの苦しみをしてきた。今や神の被造物は、サタンの存在と誘惑から永久に解放された。「全地はやすみを得、穏やかになり、ことごとく声をあげて歌う」（イザヤ書一四ノ七）。賛美と勝利の歌が、忠誠な全宇宙からわき起こる。「大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなもの」が、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、主なる支配者であられる」というのが聞こえる（黙示録一九ノ六）。

地は滅亡の火をもって包まれたが、義人は聖都の中に安全にいた。第一の復活にあずかった者たちには、第二の死はなんの力もない。神は悪人たちにとっては焼き尽くす火であるが、神の民にとっては日であり、盾である（黙示録二〇ノ六、詩篇八四ノ一一参照）。

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまうた」（黙示録二一ノ一）。悪人たちを焼き尽くす火が地をきよめる。あらゆる災いの跡は一掃される。地獄の火が永遠に燃え続けて、贖われた者たちの前に罪のおそるべき結果をいつまでも示す、などというようなことはないのである。



聖書では、救われた者たちの嗣業が新しい地とよばれている。そこには、水晶のように輝く川が常に流れ、そのそばには樹々がそびえて、贖われた者たちの上に影を投げかける。

ただ一つのしるし

思い出させるものがただ一つある。われわれの救い主は、永遠に十字架の傷跡をとどめられるのである。主の傷ついたみ頭に、その脇腹に、その手と足に、罪の残酷なしわざの唯一の跡がある。預言者ハバククは栄光のキリストを見て、「その光は彼の手〔脇腹——英語訳〕からほとばしる。かしこにその力を隠す」と言っている（ハバクク書三ノ四）。人類を神に和らげる真紅の血潮がほとばしり出た、主の突き通された脇腹——そこに救い主の栄光があり、そこに主の力が隠れている。主は贖いの犠牲によつて、「救いを施す力ある」おかたとなられたので、神のあわれみをあなどった者たちに対しては、強い態度でさばきを執行されたのである。救い主の屈辱のしるしこそは、救い主の最高の榮譽である。カルバリーの傷跡は永遠にわたつて、主への賛美を示し、主の力を宣言する。

「羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、以前の主権はあなたに帰ってくる」（ミカ書四ノ八）。炎の剣によつてアダムとエバがエデンからしめ出されて以来、聖徒たちが待ちこがれていたところの、「神につける者が全くあがなわれ」る時がきた（エペソーノ一四）。もともと人にその王国として与えられたのに、サタンの手に売り渡され、長い間強力な敵に占領されてきた地が、大いなる贖いの計画によつて再びもどされたのである。罪によつて失われたいっさいのものは回復された。「天を創造された主、すなわち神であつてまた地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた主はこう言われる」（イザヤ書四五ノ一八）。地上が贖われた者たちの永遠のすみかとなる時、地を創造された時の神の最初の目的が達成される。「正し

いは国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」(詩篇三七ノ二九)。

永遠の家郷

未来の嗣業をあまりにも物質的なものに思わせはしないかとの恐れから、それをわれわれのすまいとして見るようにと教えられている真理そのものを霊的なものにしてしまう人が多い。キリストは弟子たちに、わたしはあなたのために父の家に住むところを備えに行くのだとはつきり言われた。神のみ言葉の教えを受け入れる者は、天のすまいについて全く無知ではない。しかもなお、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」のである(コリント第一・二ノ九)。人間の言葉では、義人の受ける報いを十分に描写することはできない。それは見るものだけがわかるであろう。限りある人知では、神のパラダイスの栄光を理解することができない。

聖書の中では、救われた者の嗣業が「ふるさと」と呼ばれている(ヘブル一ノ四―一六参照)。そこでは天の大牧者イエスが、ご自分の群れを生ける水の源に連れて行ってくださる。いのちの木は月ごととその実を結び、その葉は万民のために用いられる。水晶のように透きとおった川が永遠に流れ、そのそばにはゆれ動く木々が、主に贖われた者たちのために備えられた道の上に影を投じている。広々とひろがった平野の果ては、美しい丘となつて盛りあがり、神の山々が高くそびえ立っている。この平和な平原に、また生ける流れのほとりに、久しい年月の間旅人であり寄留者であつた神の民が、そのすまいを見いだすのである。

「わが民は平和の家にあり、安らかなすみかにあり、静かな休み所にある。」「暴虐は、もはやあなたの地に聞かれず、荒廃と滅亡は、もはやあなたの境のうちに聞かれず、あなたはその城壁を『救』となえ、その門を『誉』となえる。」「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作つて、その実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない……わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである」(イザヤ書三二ノ一八、六〇ノ一八、六五ノ二一、二二)。

そこにおいて、「荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、」「いとすぎは、いばらに代つて生え、ミルトスの木は、おどろに代つて生える」(イザヤ書三五ノ一、五五ノ一三)。「おおかみは小羊と共にやどり、ひようは子やぎと共に伏し、……小さいわらべに導かれ、」「彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない」と神は言われる(イザヤ書一一ノ六、九)。

天のふんいきの中では、苦痛は存在することができない。もはや涙はなく、葬式の行列も喪章もない。「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである」(黙示録二二ノ四)。「そこに住む者のうちには、『わたしは病氣だ』と言う者はなく、そこに住む民はその罪がゆるされる」(イザヤ書三三ノ二四)。

新しい天と新しい地

そこには栄化された新しい地の首都、新エルサレムがある。それは「王の手にある麗しい冠」「あなたの神の

手にある王の冠」である（イザヤ書六二ノ三）。「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。」「諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る」（黙示録二一ノ一、二四）。「わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ」と主は言われる（イザヤ書六五ノ一九）。「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共にすみ、人は神の民となり、神自ら人と共にいま」す（黙示録二一ノ三）。

神の都には「夜は、もはやない。」休みの必要な者や、休みをほしいと思う者はだれもない。神のみこころを行ない、そのみを賛美するのに、疲れることがない。いつも朝のすがすがしさを感じ、それは決して尽きることはない。「あかりも太陽の光も、いらぬ。主なる神が彼らを照」らされるからである（黙示録二一ノ五）。太陽の光線の代わりに、目にまぶしくない光が与えられるが、その明るさは今の真昼の輝きよりもはるかにまざっている。神と小羊の栄光は、衰えることのない光をもって神の都に満ちあふれる。贖われた者たちは、太陽のない、しかもとこしえの昼の光の中を歩むのである。

「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである」（黙示録二一ノ二二）。神の民は天父とみ子とに自由に交わる特権がある。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている」（コリント第一・一三ノ一二）。われわれは神のみ姿が、自然界のみ業と人間に対する神の取り扱いとに反映しているのを、ちょうど鏡の中に見るように見ている。しかしその時には、中間にうすぐらい幕をはさまずに、顔と顔を合わせて神を見る。われわれは神のみ前に立ち、そのみ顔の栄光を見るのである。そこでは贖われた者たちは、「完全に知られているように、完全に知る」のである。神ご自身が魂にうつつけられた愛と同情とは、そこで最も真実な、最も美しいものとして発揮される。聖者たちとのきよい交わり、聖な

る天使たち、及びその衣を小羊の血で洗って白くした各時代の忠実な者たちとの、おつまじい社会生活、「天地の大家族」を一つに結びつける聖なるきずな——こうしたものが、贖われた者たちの幸福となる（エペソ三ノ一五英語訳）。

そこでは、不死の者たちが、創造力の驚異、贖いの愛の奥義を、永遠に尽きない喜びをもって研究する。人を誘惑して神を忘れさせるような、残酷で欺瞞的な敵はもういない。すべての才能が発達し、すべての能力が増大する。知識を獲得するのに、頭脳を疲れさせたり、精力を使いきってしまったりするようなことはない。そこではどんな大きな企画も実行され、どんな遠大な抱負も達成され、どんな大望も実現される。そしてそれでもなお、越えるべき新しい高いところ、感嘆すべき新しい驚異、理解すべき新しい真理、頭と心と体の能力を呼び起こす新たな対象が現われてくる。

宇宙のすべての宝は、贖われた神の民が研究するために開放される。死ぬべき人間という拘束をつけないで、彼らは、はるかに遠い他世界——人間の悲惨な光景を見て悲しみに身を震わせ、一人の魂が救われた知らせに歓喜の歌をひびかせた他世界——へ、疲れも覚えず飛行する。言葉では言い尽くすことのできない喜びをもって、地上の子らは、他世界の住民たちの喜びと知恵にあずかる。世々にわたって神のみ手の業を熟視して得られた知識と悟りの宝に、彼らは共にあずかる。くもりのない目をもって、彼らは創造の栄光を見つめる。すなわち、もろもろの太陽や星や天体が、おのおのその定められた軌道を通って、神のみ座の周囲を運行しているのを見るのである。最も小さなものから最も大きなものに至るまで、すべてのものの上に、創造主のみ名が書きしるされ、すべてのものの中に神の力の富が示されている。

神は愛である

永遠の年月が経過するにつれて、神とキリストについてますます豊かですますます輝かしい啓示がもたらされる。知識が進歩していくように、愛と尊敬と幸福も増していく。人々は神について学べば学ぶほど、ますます神の品性に感嘆するようになる。イエスが彼らの前に、贖いの富と、サタンとの大争闘における驚くべき功績とを示しになると、贖われた者たちの心はいっそう熱烈な献身の念に燃え立ち、いよいよ喜びに満たされて黄金の立琴をかき鳴らし、万の幾万倍、千の幾千倍の声が一つになり、賛美の一大コーラスとなって盛りあがる。

「また、わたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言つ声を聞いた、『御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように』」(黙示録五ノ一二)。

大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ一つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたおかたから、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる。

付 録

一四ページ「預言的年代」

ターニエル書八章九章の、預言的期間に関連のある歴史的、年代的 facts は、紀元前四五七年がこの期間の終わりのなると計算せらるゝことの証明を得るべし、多数の預言的記述はみなその期を指し示すものなり。下記のものを参照せよ。

Stanley Leathes, "Old Testament Prophecy," lectures 10, 11 (Warburton Lectures for 1876-1858) ; W. Goode, "Fulfilled Prophecy," sermon 10, including Note A (Warburton Lectures for 1854-1858); A. Thom, "Chronology of Prophecy," pp. 26-106 (London ed., 1848); Sir Isaac Newton, "Observations upon the Prophecies of Daniel, and the Apocalypse of St. John," ch. 10 (London ed., 1733, pp. 128-143); Uriah Smith, "Thoughts on Daniel and the Revelation," part 1, ch. 8, 9. On the date of the crucifixion, see Wm. Hales, "Analysis of Chronology," Vol. I, pp. 94-101, Vol. III, pp. 164-258 (2nd

London ed., 1830).

一四ページ「オスマン帝国の没落」

一八四〇年八月にオスマン帝国が没落せることの預言の詳細については、次のものを参照。

J. Litch, "The Probability of the Second Coming of Christ about A. D. 1843" (published in June, 1838); J. Litch, "An Address to the Clergy" (published in the spring of 1840 ; a second edition, with historical data in support of the accuracy of former calculations of the prophetic period extending to the fall of the Ottoman empire, was published in 1841); the *Advent Shield and Review*, Vol. I (1844), No. 1, article 2, pp. 56, 57, 59-61 ; J. N. Loughborough, "The Great Advent Movement," pp. 129-132 (1905 ed.) ; J. Litch, article in *Signs of the times, and Expositor of Prophecy*, Aug. 1, 1840. See also article in *Signs of the Times, and Expositor of Prophecy*, Feb. 1, 1841.

三ページ「人々に聖書を

読ませないようにしたこと」

自国語の聖書を一般信徒間に配布することに対して、ローマ・カトリック教会の態度については、『カトリック・エンスaikロペディア』の「聖書」の項、および、次のものを参照。

G. P. Fisher, "The Reformation" ch. 15, par. 16 (1873 ed., pp. 530-532); J. Cardinal Gibbons, "The Faith of Our Fathers" ch. 8 (49th ed., 1897, pp. 98-117); J. Dowling, "History of Romanism," b. 7, ch. 2, sec. 14, and b. 9, ch. 3, sec. 24-27 (1871 ed., pp. 491-496, 621-625); L. F. Bungener, "History of the Council of Trent" pp. 101-110 (2nd Edinburgh ed., 1853, tr. by D. D. Scott); G. H. Putnam, "Books and Their Makers during the Middle Ages," Vol. I, part 2, ch. 2, par. 49, 54-56.

ヤニページ「昇天衣」

再臨信徒たちが、昇天して「空中で主に会」うための服を

作ったという話は、この運動を辱しめようとした人々の作ったものであった。この話は盛んに伝えられたので、信じた人も多かった。しかしよく調べてみると、それがうそであることがわかった。長年にわたって、そのようなことが実際にあったという証拠を提出する者には、多額の賞金が与えられることになっていたが、証拠は出てこなかった。救い主の出現を心から望んでいた人々は、そのような場合に自分たちで作ることのできる衣服が必要であると考えるほど、聖書の教えについて無知ではなかった。聖徒たちが主を迎えるために必要な唯一の衣服は、キリストの義なのである。黙示録一九ノ八を参照。

一〇五ページ「預言の年代学」

ニューヨーク市立大学のヘブル語および東洋文学の教授、ジョージ・ブッシュ博士は、ミラー氏に宛てた手紙（「アドベント・ヘラルド・アンド・サインズ・オブ・ザ・タイムズ・リポーター」ボストン、一八四四年、三月六日及び一三日号に掲載）の中で、ミラー氏の預言の時の計算に関して重大な承認を行なった。ブッシュ氏は次のように書いた。

「あなたが、預言の年代の研究に多くの時間と関心をささ

げ、預言的大期間の開始と終結の時を決定するために、大いに労されたことに對し、あなたとあなたの同志になんの異議も唱えるものではありません。もしこれらの期間が、実際に聖霊によつて預言書の中に与えられたものであるとすれば、それは疑いもなく**研究しなければならぬもの**であり、そしておそらく、ついには十分に理解されるはずのものでありましよう。そして、敬虔な念をもつてこれをなそうと努める人々を僭越な愚行呼ばわりすることは、だれにもできません。…**一日**を預言的に**一年**と解釈することは、最も健全な聖書解釈の支持するところであると共に、ミード、アイザック・ニコートン卿、カービー、スコット、キースなど著名な人々や、その他多数の人々の裏付けがあることだと私は考えます。これらの人々はずつと前に、この点については実質的にあなたと同じ結論に達しています。彼らはみな、ダニエルとヨハネが述べた主要期間が、**世界のほぼこの時代**に実際に終了するという点で一致しています。ですから、これらの卓越した神学者たちと同一の見解を有するあなたを異端と呼ぶことは、理解に苦しむところです。」「この研究分野におけるあなたの結論は、真理と義務の重要な点に影響を及ぼすほどかけ離れたものであるとは私には思われません。」「あなたの誤りは、

年代ではなくて、他の方面にあるのではないでしょうか。」「この大期間が終了するに当たつて起こるはずの**事件の性質**について、あなたは全くまちがつておられる。これがあなたの解釈の誤りの主なものです。」「

一五四ページ「三重の使命」

黙示録一四ノ六、七は、第一天使の使命の宣布を予告している。それから預言者は、「また、ほかの第二の御使が、続いてきて言つた、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた…』。ほかの第三の御使が彼らに続いてきて」と続けている。ここで「続いてきて」と訳されている言葉は、この聖句のような構文においては、「共に行く」の意味である。リデルとスコットは、この言葉を、「**ついて行く**、彼に**従い**あるいは**共に行く**」と訳している。ロビンソンは、「**従う**、**共に行く**、**だれかと一緒に行く**」と言っている。これは、マルコ五ノ二四に用いられているのと同じ言葉である。「そこで、イエスは彼と一緒に出かけられた。大ぜいの群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行つた。」この言葉はまた、贖われた十四万四千人について用いられ、「小羊の行く所へは、どこへでもついて行く」と言われている(黙示録一四ノ四)。以上二か所に

おいて、言おうとしていることが、共に行く、一緒に行く、
といふことだといふことは明らかである。そのように、「コ
リント第一・一〇ノ四において、イスラエルの人々は「彼らに
ついてきた霊の岩から飲んだ」と記されている言葉も、同じ
ギリシア語の訳であって、欄外には、「彼らと共に来た」と
なっている。このようなわけで、黙示録一四ノ八、九は、第
二、第三の天使が、時間的に第一天使に続いてきたというた
けでなくて、第一天使と一緒に行ったのだということがわか
る。三つの使命とは、三重の使命が一つあることにほかなら
ない。そして、起る順序において、三つであるといふに過
ぎない。しかし、起るつてからは、共に進んで行くのである、
不可分のものなのである。

一六ハページ「ローマの司教の首位権」

ローマの司教が首位権を握るに至った主な事情については
次のものを参照。

Mosheim's "Ecclesiastical History," cent. 2, part
2, ch. 4, sec. 9-11. See also G. P. Fisher, "History of
the Christian Church," period 2, ch. 2, par. 11-17
(1890 ed., pp. 56-58); Gieseler, "Ecclesiastical History," period 1,

div. 3, ch. 4, sec. 66, par. 3, including note 8 (N. Y. ed., 1836, tr.
by F. Cunningham); J.N. Andrews, "History of the Sabbath," pp.
276-279 (3d ed., rev.).

三三三ページ「コンスタンティヌス帝の勅令」

これについては上巻の付録を参照のこと。

三三三ページ「コンスタントの教会」

コンスタントの教会、聖書的な安息日遵守については次の
ものを参照。

Dean A. P. Stanley, "Lectures on the History of
the Eastern Church," lecture 1, par. 15 (N. Y. ed.,
1862, pp. 96, 97) Michael Geddes, "Church History
of Ethiopia" pp. 87, 88, 311, 312; Gibbon, "Decline
and Fall of the Roman Empire," ch. 47, par. 37-39;
Samuel Gobat, "Journal of Three Years' Residence
in Abyssinia," pp. 55-58, 83, 93, 97, 98 (N. Y. ed.,
1850); A. H. Lewis, "A Critical History of the Sab-
bath and the Sunday in the Christian Church" pp.
208-215 (2d ed., rev.).

三四〇ページ「ビルデブランドの命令」

上巻の付録を参照のこと。

: 3, 33.....下 69
: 9, 21, 22 参.....上 29
: 15.....下 31
: 15, 16.....上 12
: 22.....上 341
: 23—26.....下 269
: 24—27.....下 400
: 29.....下 22
: 29参.....上 27
: 30, 27.....下 7
: 30, 31.....上 26
: 31.....下 7
: 31参.....下 400
: 32参.....下 55
: 33.....下 23
: 33英.....上 27
: 35.....上 13
: 36.....下 69
: 39.....下 28, 225
: 42, 46.....下 69
25: 5—7.....下 105
: 21, 41.....下 301
: 31.....下 7
: 31参.....下 400
: 31, 32.....上 387, 下 40
: 31—34.....下 8
: 40.....上 80, 下 454
26: 64.....下 421
27: 25.....上 20
: 42.....下 406
: 42, 43.....下 422
28: 3, 4.....下 252
: 20.....下 44

マルコによる福音書

1: 14, 15.....下 14
: 15.....下 38
2: 28.....下 168
5: 9.....下 255
7: 26—30参.....下 257
9: 17—27.....下 257
12: 24.....下 365
13: 1.....上 11
: 24.....上 393
: 24—26.....上 391
: 24—26参.....上 27
: 33.....下 225
: 35.....上 27
: 35, 36.....下 226
: 37.....上 53
16: 15.....下 44

ルカによる福音書

1: 32, 33.....下 129
2: 14.....上 40, 404
: 25.....上 27
: 25, 32.....上 404
4: 8.....上 45
: 18.....下 14
: 18参.....上 5
: 25参.....下 9
: 33—36.....下 257

: 36.....下 257
6: 26.....上 169
9: 54, 56英参.....下 328
10: 20.....下 212
11: 13.....下 207
12: 36.....下 143
13: 7.....上 15
18: 7, 8.....下 407
19: 40.....下 113
: 41.....上 2
: 42—44.....上 1
: 44.....上 406
20: 35, 36.....下 214
21: 16, 17.....上 50
: 20, 21.....上 18
: 20, 21参.....上 12
: 25.....上 391
: 28, 30, 31.....上 397
: 34, 36.....上 398
22: 24.....下 42
: 30参.....下 143
24: 27.....下 42
: 32参.....下 43
: 52, 53.....下 30

ヨハネによる福音書

1: 9.....上 333, 下 274
: 51参.....上 4
3: 14, 15.....上 76
: 16.....下 130
: 19.....上 339
: 20.....下 183
: 36.....下 281
5: 28, 29.....下 295
: 29.....下 214
: 40.....上 7
7: 16.....上 306
: 17.....下 274, 365
8: 12.....上 401, 下 205
: 29.....下 197
11: 48.....上 14
: 50.....下 388
12: 35.....上 401
14: 1—3.....上 387
: 2, 3.....下 299
: 3.....下 29
: 14.....下 207
: 26.....下 367
: 30.....下 397
15: 10.....下 197
: 19, 20.....上 169
: 20.....上 41
: 22.....上 197

16: 13.....下 197
: 24.....下 207
: 26, 27.....下 129
17: 17.....下 197
: 19参.....下 197
: 24.....下 239, 413
18: 36.....上 382
20: 13.....下 110
28: 16—19文.....下 459

使徒行伝

1: 11.....上 388, 下 29
2: 17, 21.....下 382
: 29, 34.....下 297
: 47.....下 80
3: 19参.....下 218
: 19, 20.....下 382
: 20.....下 218
: 21.....上 388
4: 12.....上 77
: 32, 31.....下 80
8: 4.....上 275
: 4, 5.....下 15
: 10.....下 399
: 20.....上 149
10: 38.....上 5, 下 14
13: 47.....上 404
17: 3.....下 113
: 31.....下 300
22: 21.....下 15
24: 15.....下 294
: 25.....上 197
26: 5.....上 267
: 28.....上 197

ローマ人への手紙

1: 17.....上 145
2: 5, 6, 9.....下 290
: 7.....下 281
: 12—16.....下 154
3: 20.....下 195
: 31.....下 195
5: 12.....下 281
6: 2.....下 195
: 23.....下 294
7: 12.....下 194
8: 1.....下 208
: 4.....下 196
: 7.....下 194
: 32.....下 207
: 34.....下 44
: 38, 39, 37.....下 44
11: 33.....下 272
12: 1.....下 202
13: 10.....下 194
14: 23.....下 154
15: 4.....下 10
: 16.....下 197

コリント人への

第一の手紙

1: 27, 25.....上 291
2: 9.....下 462
: 14.....下 268
3: 10, 11参.....上 53
4: 5.....下 313, 444
5: 7.....下 105
6: 2.....下 444
: 3.....下 444
: 10参.....下 288

: 19, 20.....下 204
10: 20.....下 310
13: 12.....下 465
15: 16—18.....下 298
: 20.....下 106
: 22.....下 294
: 23.....下 106
: 23参.....下 55
: 50.....下 8
: 51—53.....下 7
: 52—55.....下 302
: 55.....下 302, 423
: 57.....下 198

コリント人への

第二の手紙

4: 4.....下 247
: 17.....下 185
5: 19.....下 129, 240
6: 17, 18.....下 205
7: 1.....下 203
: 9—11.....下 189
11: 2.....下 82
12: 2—4 参.....下 199
: 9.....下 223
13: 8.....上 112

ガラテヤ人への手紙

1: 8 参.....上 306
5: 22, 23.....下 203

エペソ人への手紙

1: 14.....下 461
2: 20—22.....下 128
3: 8.....下 199
: 15英.....下 466
: 16—19.....下 207
4: 3—5.....下 80
5: 5.....下 290
: 14—16.....下 369
: 27.....下 141, 217
6: 7 参.....上 53
: 11.....下 250
: 12.....下 249

ピリピ人への手紙

1: 12.....上 275
2: 12, 13.....下 197
3: 13, 14.....下 198
: 21.....下 106
4: 3.....下 212
: 4.....下 208

コロサイ人への手紙

1: 9—11.....下 206
: 16.....下 229

テサロニケ人への

第一の手紙

4: 3.....下 197

: 15.....下 316
: 17, 18.....下 317
: 21.....下 402
30: 11文.....上 16
: 29, 30.....下 413
32: 17.....上 354
: 18.....下 464
33: 15, 16.....下 405
: 16参.....下 400
: 24.....下 464
34: 2.....下 459
: 8.....下 459
35: 1.....下 464
: 2.....上 388
37: 23.....上 367
38: 18, 19.....下 297
40: 5.....上 388
: 8.....上 368
: 25, 26.....下 155
41: 17.....下 405
42: 16.....下 39
: 21英.....下 193
43: 25.....下 216
45: 18.....下 155, 461
46: 9, 10.....下 36
48: 18, 22.....上 364
49: 14—16.....下 401
: 15.....上 19
51: 3.....上 388
: 7, 8.....下 185
: 11—16.....下 410
: 21—23.....下 410
53: 4.....下 129
: 7.....上 2
54: 17.....上 368
55: 8, 9.....下 36
: 13.....下 464
56: 1, 2, 6, 7.....下 174
: 8.....下 175
58: 1.....下 184
: 1, 2.....下 176
: 12—14.....下 176
: 13.....下 168
59: 14.....下 348
: 19英.....下 367
60: 18.....下 464
61: 3.....下 432
: 11.....上 388
62: 3.....下 465
: 4, 5.....上 388
: 12.....下 432
65: 6, 7.....下 313
: 19.....下 465
: 21, 22.....下 464
66: 5.....下 71

エレミヤ書
2: 13.....下 209
3: 14.....下 82
: 20.....下 83
4: 19, 20.....上 399
: 23—26.....下 442

6: 16.....下 209
8: 11.....下 437
9: 1, 13, 17参 ..上 6
16: 21.....上 367
17: 8.....下 370
: 21—25参.....上 4
23: 1, 2.....下 438
25: 11.....下 9
: 31.....下 439
: 33.....下 440
: 34, 35.....下 438
26: 18.....上 24
30: 5—7.....下 388
: 6.....下 420
31: 34.....下 217
50: 20.....下 217

哀 歌
4: 10.....上 19

エゼキエル書
1: 14.....下 252
2: 7.....下 184
3: 7.....下 184
4: 6.....下 10
9: 1—6.....下 439
12: 21—25, 27, 28下 98
13: 22.....下 437
14: 20.....下 397
16: 8.....下 83
: 13—15, 32.....下 83
: 14, 15.....下 85
18: 20.....下 281
: 24.....下 215
20: 20.....下 156
28: 6.....下 230
: 6—8.....下 459
: 12—15.....下 230
: 17.....下 230
: 18, 19.....下 242
33: 7—9.....下 185
: 8, 9.....下 19
: 11.....下 284, 402, 421

ダニエル書
4: 13—16.....下 9
5: 27.....下 226
7: 3.....下 159
: 9, 10.....下 210
: 10参.....下 126, 252
: 13.....下 140
: 13, 14.....下 211
: 14.....下 143
: 15.....下 159
: 22.....下 444
: 25.....上 46, 49, 下 166
7: 27.....下 40
8: 14.....下 119
: 27, 16.....下 11
9: 18, 15, 20.....下 199
: 22, 23.....下 11
: 24—27.....下 9, 11

: 25参.....上 401
10: 8.....下 199
: 11.....下 199
12: 1.....下 212, 385
: 2.....下 415
: 4.....下 50, 55

ホセア書
2: 19.....下 82
4: 6, 1, 2.....上 58
6: 3文.....下 382
8: 2, 1.....上 398
12: 4.....下 390
13: 9英.....上 24
14: 1.....上 24

ヨエル書
1: 10—12.....下 404
: 17—20.....下 404
2: 1, 15—17, 12, 13.....
.....上 400
: 11.....上 398
: 23.....下 382
: 26.....下 44
: 31.....上 396

アモス書
3: 7.....下 10
5: 20.....上 398
8: 3.....下 404
: 11, 12.....下 404

オバデヤ書
16.....下 295

ミ カ 書
3: 9—11.....上 13
: 10.....上 14
: 12.....上 14
4: 8.....下 216, 461
5: 12参.....上 401
7: 8, 9.....下 39

ナホム書
1: 3.....下 402
: 9文.....下 242
2: 10.....下 420

ハバクク書
1: 13.....上 398
2: 1—4.....下 96
: 2.....下 265
3: 3, 4.....下 419
: 3, 4, 6, 8, 10, 11, 13.....
.....上 387
: 4.....下 461
: 17, 18.....下 405

ゼパニヤ書
1: 12.....上 399
: 15, 16.....上 399
: 18, 13.....上 399

ハガイ書
2: 3.....上 10
: 9, 7.....上 9

ゼカリヤ書
2: 8.....下 401
3: 2.....下 217
4: 6.....上 291, 下 274
6: 12, 13.....下 128
9: 9.....下 113
14: 12, 13.....下 440
: 15, 4, 9.....下 447

マラキ書
2: 17.....下 311
3: 1.....下 140
: 2, 3.....下 140
: 4.....下 141
: 5.....下 142
: 16.....下 212
: 17.....下 411
: 18.....下 418
4: 1.....下 242, 459
: 2英.....下 424

マタイによる福音書
4: 19.....上 207
5: 17, 18.....下 193
: 17—19.....下 168
: 18.....下 152
: 18英.....下 152
7: 2.....上 17
: 7.....下 274
: 16.....下 191, 262
8: 11.....下 143
10: 5, 6.....下 15
: 18—20.....上 127
: 23.....上 240
: 32, 33.....下 216
: 33.....上 186
: 34.....上 40, 147
11: 5参.....上 5
: 28.....上 5, 77, 下 325
: 29, 30.....下 223
12: 22.....下 257
: 36, 37.....下 313
13: 30.....下 6
: 38—41.....下 6
18: 10.....下 253
20: 27.....上 55
21: 5.....上 109
: 8—16参.....下 65
: 9.....下 109
: 12参.....上 147
22: 11.....下 145
23: 4.....下 325
: 37.....上 7
: 38.....上 11, 下 149
24: 2.....上 11
: 3.....上 12

聖句索引

注・この索引中にある略号は次の通り。参＝参照 英＝英語訳 文＝文語訳

創世記

1 : 2下 442
: 26参下 55
2 : 1—3 参下 179
: 2, 3 参上 47
3 : 1下 278
: 2—5下 278
: 4, 5下 317
: 5下 308
: 15下 243
: 17参下 55
: 19下 279
: 24下 281
6 : 3下 9
: 5, 11下 293
7 : 4下 9
15 : 1上 92
: 13下 9
22 : 16—18上 3
28 : 12上 4
32 : 24—30 参下 388
: 30下 396
40 : 12—20下 9
41 : 28—54下 9

出エジプト記

5 : 2上 345
20 : 8—11下 153
: 10, 11下 156
25 : 8下 122
: 9, 40下 125
31 : 17下 156
32 : 33下 215
34 : 6上 4
: 6, 7
.....下 238, 291, 402

レビ記

10 : 17下 131
16 : 8下 132
: 16, 19下 132
: 17下 146
: 21下 441
: 21, 22下 134
: 22下 218
: 29—34下 106
17 : 11下 131
19 : 31 参下 310
20 : 27 参下 310

民数記

14 : 34下 10
: 43下 9
23 : 8, 10, 20, 21, 23
.....下 275
24 : 9下 275
25 : 1—3下 310

申命記

4 : 6上 289
28 : 56, 57上 20
29 : 29下 10
30 : 15下 294

サムエル記下

13 : 39 英下 286

列王紀上

17 : 1下 9
18 : 17上 115
: 17, 18下 353

列王紀下

6 : 17上 260
19 : 35下 252

歴代志上

21 : 参上 3
28 : 12, 19 参上 9

歴代志下

32 : 21下 252
36 : 15上 4
: 16上 4

エズラ記

3 : 12 参上 10
6 : 14下 14
7 : 12—26 参下 13

ネヘミヤ記

4 : 10上 53
: 14上 53
8 : 10下 208
13 : 14下 313

ヨブ記

1 : 6 参下 261
: 9, 10下 253
9 : 2上 322
11 : 7下 36
14 : 10—12 参下 302
: 21 参下 302
19 : 25—27 英上 386
38 : 6, 7 参下 179
: 7下 251
42 : 6下 199

詩篇

1 : 1—3下 209
6 : 5下 297
8 : 参下 55
: 5 英下 252
9 : 5, 6下 295
11 : 6下 459

14 : 1上 351

16 : 4上 398

19 : 7下 196

25 : 14上 401

27 : 5下 411

30 : 5下 44

34 : 7下 253, 408

37 : 10下 295

: 29下 462

: 38下 291

40 : 8下 194

46 : 1—3下 417

48 : 2上 2

50 : 2—4上 386

: 3, 4下 420

: 6下 417, 432

51 : 17下 217

53 : 5上 134

56 : 8下 313

73 : 11上 350

76 : 2上 9

78 : 68, 69上 9

80 : 8上 4

84 : 11 参下 460

90 : 2下 211

91 : 3—10下 405

95 : 6下 155

96 : 5下 155

: 11—13上 386

97 : 11下 265

100 : 3下 155

103 : 19—21下 252

106 : 28下 310

109 : 5 参上 5

111 : 7, 8上 368 下 152

112 : 4下 39

115 : 17下 297

119 : 11下 367

: 18下 367

: 45下 193

: 46上 258

: 89下 152

: 97下 196

: 99, 104下 370

: 105上 341

: 130
.....上 102, 239 下 5

: 142, 172下 194

121 : 5—7下 405

132 : 13上 3

139 : 12下 39

145 : 10下 457

145 : 20下 291

146 : 4下 296

箴言

1 : 24, 25下 421

: 27下 423

: 29, 31上 366

: 33上 364

3 : 13下 370

: 14上 401

4 : 18下 205

11 : 5上 366

14 : 34上 354

16 : 12上 354

: 25下 364

28 : 9下 155

: 13下 223

伝道の書

8 : 11上 364

: 12, 13上 366, 下 290

9 : 5, 6, 10下 297

10 : 16上 198

12 : 6 参下 302

12 : 13下 155

: 13, 14下 314

: 14下 313

雅歌

6 : 10下 141

イザヤ書

2 : 10—12, 20, 21下 416

3 : 10, 11下 290

4 : 2, 3下 217

: 3, 4 参上 26

5 : 1—4上 5

: 20下 311

6 : 3, 5下 199

8 : 16 英下 175

: 19, 20 文下 314

: 20 英下 175

: 20 文下 358

9 : 5下 459

: 5 英上 26, 下 420

11 : 6, 9下 464

: 6, 9 参下 55

13 : 6下 416

: 9上 399

: 11上 399

14 : 7下 460

: 12—17下 443

: 13, 14下 230, 242

: 18—20下 443

21 : 11, 12下 409

24 : 1, 3, 5, 6下 441

: 4, 5下 352

: 22下 445

25 : 8下 432

: 8, 9上 386

: 9下 423

26 : 19上 386

: 20, 21下 411

: 21下 440

27 : 5下 393

28 : 5上 388

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 **各時代の大争闘 (下巻)**

N D C 194/488P/22cm

転載複製を禁ず

1979年2月1日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	清野喜夫
	村上良夫
発行者	岡藤米蔵
印刷所	福音社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発行所 福音社

電話(045)921-1414 振替横浜7-599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発売所 健康と品性向上協会本部

電話(045)921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN

☆ご愛読下さいましてありがとうございます。当社出版物は直販制
です。書店には出しておりません。お問合せ、ご用命、出版目
録のご請求等は、直接発売所へお申し越し頂たく存じます。

ISBN4-89222-011-6